
【完結】MUV-LUV ALTERNATIVE 救世主になれる男

フリスタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【完結】 M U V - L U V A L T E R N A T I V E 救世主になれる男

【Nコード】

N 8 9 1 0 N

【作者名】

フリスタ

【あらすじ】

死ぬときは一瞬だからこの世界を選んだ。不良な女神さんに最強設定にしてもらったから生き延びれるとは思っけどな……。しかし、男の娘にされるとは……。

オリ主最強モノです。テンプレや原作破壊などもありますので、回れ右の人は今のうちにどうぞ。

これは『MUV・LUV ALTERNATIVE』『TE』の二
次創作になります

プロローグ（前書き）

生きて汚名を雪がん。

前作の方でお世話になった方々へ。前作はそれなりの形にするつもりです。

でももう少しだけ時間をいただきたい。

新作はマブラブ・オルタのオリ主モノ。

じっくり書いていければと思っています。

プロローグ

俺の名前は海堂カイドウ 正樹マサキ。

俺は今、俺を見ている。

トラックと電柱に挟まれて……原形を留めているのは首から下だけだ。

目の前の状況から察するに、俺は死んだみたいだ。

俺は自分が死んでも構わないと常日頃から考えていた。俺が死んで誰かが困ったとしても、世界が傾くだとか、混乱が起きるわけでもない。どっかの歯車の一つで替えは利く。

熱くなるような打ち込めるものもないし、惰性で生きている自分が嫌だった。かと言って、自分で自分を変えられるほど行動派でもなかったと思う。だからいつその事、災害に巻き込まれたりして消えてしまえたら楽だと考えていた。

実際死んでみて？ 痛えよ。でも一瞬で助かった。あんなに痛いのは耐えられそうに無い。

「なんだ。シヨックも受けてないのかい」

死んでいる俺を俺が見つめていると、一人の女がやって来た。

長く赤い髪を風になびかせながら、ジーンズにTシャツ姿というラフな格好だった。

「俺が見えるのか……俺はどうしたらいい？」

勝手な想像で、死神だとか あの時への案内役だと思っただけの言葉だった。

「へえ……アンタみたいなヤツは初めてだね。上司に聞いてたおりか……一つ一つ説明させて貰ってもいいかい？」

女の方はタバコを啜って火をつけて話し始めた。

「何かワケ有りか……頼む」

「アンタは手違いで死んだんだ。本来アンタはこれから就職活動の最終面接に行く予定だったんだけどね」

ああ、確かそうだった。まあ落ちる気がしなくてもなかった会社だが。

「予定通りの人生なら、アタシの上司の力で人生を修正されて行く中で、その就職先に合格。社内恋愛、結婚。責任ある仕事を任せられていき、アンタ自身もヤル気に満ちて行き、割とハッピーエンド的な感じでその人生を楽しめる予定だった」

「想像がつかないから別に良い。それで？俺はあの世に行くんだろ？」

「それがね、今は定員オーバー状態なんだよ。予定者リスト以外の人に死なれると困るんだ」

そうは言っても死んでしまっている俺がそこにいた。

「そこでね。再生とかは出来ないから異世界へ行ってもらう事は出来ないかね？ 特典モロモロ付けられるんだけど」

「異世界？」

「そう、アンタの事は聞いてるよ。色んなゲーム・アニメ・漫画をやったり読んだりしてきたんだろ？ 好きな世界へ行かせてやれるよ。例えば魔法の世界へ行くなら、魔力MAXとかのオプション付きでさ」

「別にもう生きたくないんだけどな」

「そんな事言ってる、自分を変えたいんだろ？ 全部知ってるから大丈夫だって」

カラカラと笑う女性だ。不思議とイラつかされる事は無い。しかしまあ随分と勝手な話だ。話をまとめると、俺は手違いで殺され、そのまま逝けるなら問題なかったのだが、あの世は定員オーバーで逝けないから、オプションを付けて異世界で過ごせということだ。

「それ以外方法は無いってことか」

「そうだね。行き先が決まらないならランダムか、アンタに合った世界をコッチで決めて送る事になるけど？」

どうやら回避不可の話らしい。

「先に聞こう。オプションって言うのはアレか？ チート的なもの

か

「ええと……ああそれで合ってるよ。チート。専門用語使われると少し分からなくなるんだ悪いね」

女の人は書類をパラパラと確認して返答してくる。

「制限はあるのか？」

「ん〜？ いきなりその世界を崩壊させるとか、消すとかは無理だけど……あくまでもアンタの能力を上げたりだとか、知識を付ける事は問題ないみたいだね。いくつでもOKだね……あ、アンタの記憶とか頭の中から情報を掻き集めて、能力に反映させるから難しく考えなくていいみたいだよ」

「じゃあいつその事熱くなれる世界に行きたいな」

「おっ やつとその気になってくれたんだね。うんうん、その顔の方が良いよ。それで、どこに行くんだい？」

「マブラブ・オルタネイティブの世界」

「ええっと……うわ、すごい世界に行きたがるね……」

俺の頭の中を確認したのか、少し引き気味かつ興味ありげに女のは声を上げた。

死ぬときは一瞬だからな。まあ生き残るように頑張るが……。

「能力とかいいか？」

「ああ何でも言つてよ」

「じゃあまず、魔装機神サイバスターを俺の専用機で使わせてもらうのと機体性能・武器攻撃力・クリティカル率・命中率・残弾数や射程距離をMAXに出来るか？ スパロボ仕様で強化パーツもチートできる限り搭載して」

「ああまた専門用語……これか……うん……うん問題ないね」

「じゃあ後、俺の体力や運動神経とかの能力もその世界では最強にしておいてくれ」

「死ぬ気ないでしょアンタ……ええと、こんなモノかな。終わりかい？」

「本当に制限が無いんだな。じゃあ、その世界の戦術機の操縦方法だとか設計も出来るようにしておいてくれないか？」

「欲望が溢れ出してゐるね。うんうん人間は素直が一番だよ。あ、そうそうアンタの顔がアンパンンみたいに使い物にならなくなったから、大元の素体から変えなきゃならないんだけど、希望はあるかい？」

鏡を取り出し俺に向けてくると、そこには ぼやける様に光る人型の姿しかなかった。

なるほど、これはコミュニケーションすら難しいな。

「何でも良いんだけど……じゃあ、渚カヲルで頼む」

「ええと、エヴァンゲリオンの子ね。うん良い感じじゃん。私が入

間なら惚れてるね。……でも少し幼くして髪を長髪にしておくね」

「何か問題があったのか？」

「いや、ほら。アタシ男の娘が好きだからさ」

……知るか。

「まあ戦闘とかに支障がなければ問題ないけど」

「さて、こんなもんかな？ 他にはあるかい？」

俺自身が最強。戦術機にも乗れるが、サイバスターがフル改造+で専用機。男の娘だが、肉体も手に入った。

「……特に問題は無いな」

「じゃあ、これはサービスね（chū?）」

「頬にキスがサービス？」

「言っただけで私って一応は女神様なのよ」

嘘付け、タバコ吸ってる女神なんて聞いた事ねーよ。

「それはアンタの先入観。まあアタシのキスは効力があるのよ」

「心を読むな。効力って？」

「これでアンタは割とモテモテよ。あ、でも白銀武の【恋愛原子核】

の効力の方が優先されるからね」

【恋愛原子核】。マブラブの主人公、シロガネタケル白銀武の固有能力だな。つまり、冥夜とかはタケルに惹かれるというわけだ。それでいい。しかし、それでもこっちに流れてくる奴もいるってことか……。

「面倒くさい事を……もう良いか？」

「ええ、何かあったら念じてくれれば聞くから」

そう言われて俺は光に包まれていく。

「アンタの名前は？」

「ああ忘れてたわ。あたしの名前はフレイヤよ。アタシー応アンタの担当だからねヨロシクね。マサキ」

プロローグ（後書き）

フレイヤと言ってもヴァルキリープロフィールの人とは別人と考え
てください。名前だけです名前だけ。

やっぱりサイバスターが好き

設定情報・随時更新予定(前書き)

アイディア随時募集

設定情報・随時更新予定

設定情報

主人公：海堂カイドウ 正樹マサキ

一応、高校卒業で就職しようとしていた設定のため、タケルちゃん達とは同い年ぐらい。というか、同い年として設定。

転生後の見た目：エヴァンゲリオンの渚カヲルだが、女神様の趣味により、少し幼くして髪はロングヘア！。原型を知っていても理解に苦しむほど別人。

能力：基本的に全て原作主人公の白銀武より少し上だが、手加減していく予定。

女神のキスによりモテモテ効果が追加されています。（タケルの恋愛原子核の効力が優先される）

専用機体：サイバスター（封印指定）

機体・武器はフル改造済み。

武器系統

【カロリックミサイル】：ミサイルだね。うん。実弾じゃないから

99発持っていて大丈夫。イナバ物置(違っ)

【サイフラッシュ】：MAP兵器。結界内にカオリック(熱素)を臨界点までため込み、サイバスターを中心に光を放射し、最大半径数十キロにおよぶ射程内の複数の標敵にダメージを与える。操者の意識により攻撃対象を選択し、敵味方の識別をすることが可能。という説明書きを見た。

【ハイファミアリア】：一度に2基、鳥のような形状の物で標的の近くまで飛んで行き、不規則に動きつつ光弾を発射する。クロとシロが憑依して飛んでいくのさ。

【デイスカッター】：剣だね。魔方陣を作る杖としても使うから、アカシックバスター・サイフラッシュの時にも使うね。ただ斬るだけじゃなく、【霞斬り】や【秘剣・乱舞の太刀】、【魔法剣エーテルちゃぶ台返し】もある。

【アカシックバスター】：デイスカッターで魔方陣を描き火の鳥を召喚し、敵に突撃させる。サイバスターも変形してサイバードって言う戦闘機形態にもなれるのだが、そのサイバード状態で火の鳥と融合して敵に体当たりもする。

【コスモノヴァ】：両腕を交差させ4つの光球を作り出し、標的にぶつけ内部から爆発させるサイバスターの最強武装。そのあまりに巨大なエネルギーは次元を歪ませあらゆるものを粉碎する。とある。チョーアブナー。5発撃ったら地球すら崩壊するんじゃないか？

……しないか、女神様が言ってたもんね。

強化パーツ：4個搭載可能

【2個搭載】

高性能電子頭脳：（移動力+2、運動性+25、武器の命中補正+20%、射程+1）

【1個搭載】

- ・ハイパージャマー：（分身して回避できる）
- ・ギガジェネレーター：（EN+200）

2010/09/22

調べて見て分かったこと。公式設定だと、戦術機は大体が18メートルぐらいの大きさを20メートルに届かないが、サイバスターは28メートルと、戦術機と比べると10メートルほど大きめ。これに関してはサイバスターの大きさが海堂正樹仕様で小さいという無理やり設定でお願いします。

2010/09/26

要望があったので、てきとーにスペック表を書いていくコーナー。チートだから「ここが違う」とか言っても無駄。気にしたら負け。と思って、のほほんとしてくれるとありがたい。今後は戦術機も多少書ければと、自分に期待。

サイバスター

MAX改造の上に更にチート成分配合！ タウリン2,000mgも配合！（嘘）

『HP』：12000 『EN』：600 『運動性』：250 『タイプ』

『装甲』：3000 『移動力』：20

・空・陸

『地形適応』：空：S 陸：S 宇：S 海：B 『修理費』：

特殊能力? : 女神ポイントにより、BETAを倒せばHP・EN共に自動回復。

特殊能力? : 戦闘機形態のサイバードに変形可能

特殊能力? : 強化パーツ【ハイパージヤマー】による【分身】が可能。

海堂正樹のスペック

格闘 : 400 射撃 : 400 技量 : 400

防御 : 400 回避 : 400 命中 : 400 SP : 400

精神コマンド

【奇跡】 : ド根性(全回復) 気合×3(気力+30) 加速(移動+3) 幸運(資金が倍増) 努力(経験値倍増) 必中(命中率100%) ひらめき(回避率100%) 魂(攻撃力3倍)

【直感】 : 命中率100%(1ターン) 回避率100%(1回)

【集中】 : 命中率と回避率が+30%(1ターン)

【気迫】 : 気力+30(戦闘行動終了まで)

【加速】 : 移動力が+3(1度、移動するまで)

【大激励】 : 自軍全体が気力+5(戦闘行動終了まで)

特殊技能

【SP自動回復】 : 毎ターンSPが10回復する

一言 : おい、女神様。ターンも何も、減らねーじゃねーか。

【ガンファイトLv.9】 : 射撃武器の攻撃力と射程が上昇する

一言 : 猫まつしぐら!

【インファイトLv.9】 : 格闘武器の攻撃力と機体の移動力が上

昇する

一言：魔法剣！ エーテルちやぶ台返し！！ ……嘘。

【天才】：命中、回避、クリティカル率に+20%

一言：チート乙

【気力限界突破】：気力最大値が170になる

一言：もつと熱くなれよーっ！！

【修理技能】：修理の回復量が1.2倍になる

一言：偉い人にはそれが分かんのです！

変更の可能性ありつす。

設定情報・随時更新予定（後書き）

感想も随時募集

01 それは疾風のごとく(前書き)

さあー本行ごうか！

01 それは疾風のごとく

Side マサキ

俺は女神様が用意していたらしい説明書を読みながらサイバスターで飛んでいた。

「ええと、機体性能が書いてあるな……」

(。。。)

(っ)ゴシゴシ

(:;。)

(っ)ゴシゴシ

(:;。)…!?

いや、確かに色々とMAXにしろとは言ったけどさ……カロリッククミサイル99発。ハイファミリア99発。コスモノヴァ5発って何だよ!? どこに隠し持ってるんだよ!?

「あ、なるほど、カロリッククミサイルは光弾仕様なのか……それならかさばらないか」

サイバスターは歴代のスパロボ系に何度か出ているが、実弾のミサイルと、光弾のミサイルがある。見た目が違うだけで、光弾でもジヤマーの影響を受けたりするが、これなら助かる。

ハイファミアに関しては異次元からも呼び出せる仕様らしく、弾数が多くても基本的に問題ないらしい。

「コスモノヴァだけ5発なんだな……。まあ十分すぎる気もするけど」

コスモノヴァは最強の必殺技だ。あの威力だから遠くに避難させても味方を巻き込んでしまいかねない。使う機会はあるのか？

「しかし、これは何だ？」

（敵を倒せば女神ポイントが溜まって、そのポイントは勝手に修復や補給に回されますので、じゃんじゃんBETAを倒して夢のグランドスラムを目指してくださいね）

「女神ポイントって何だ。あの女……。キャラ変えてんじゃねーよ」

まあつまり、このサイバスターで戦う限りは、修復や補給に悩む事はないというわけだ。何だグランドスラムって？

（ペラ）

このサイバスターは俺以外の人に触れたり、弄ろうとすると、アラームやら自爆装置が起動するらしい。自爆装置に関してはダメーなため、実際には爆発しない。それと、不可視にすることが出来るというところらしい。

「これは基地内とかに入ればいらぬ機能だな……（ペラ）……ん？ 【オ・マ・ケ】説明してなかつたけど、このページにはさつき話したこと以外の特典内容が」

（書かれている。これもチート機能が付いているけど、あくまでもオマケで考えてね。内容の説明は不要だと思うから下に表を作っておいたわ。ま、マサキなら見れば分かるでしょう）

それは今までの正式なフォント等を使ってない手書きで書かれていた。案外カワイイ字を書くものだ。俺は下にある表に目をやる。

「なるほど、精神コマンドか……」

スパロボをやった事がある人なら分かるはずだが。機体性能以外にパイロットには精神コマンドと言って、一時的に攻撃力や回避能力を上げるシステムが存在する。どうしても勝てない敵、面倒だから一掃したい時、避けれないなどに使用するコマンドだ。

付いて来たコマンドは、【奇跡】 【直感】 【集中】 【気迫】 【加速】 【大激励】

「……あの女、バカじゃねーの？」

俺が言ったのはコマンド内容に対してもそうなのだが、使用した際のポイントの減り具合だ。例えば、幸運なら40減るだとか、直感なら20減るだとか、その効果のモノによって消費されるポイント数が違う。しかし、あのフレイヤという女神さんの作成した表を見ると……。

「全部10って何だよ？ しかも、俺の精神ポイントは自動回復す

るわ400あるわ……減らねーじゃ……ん？」

（いやーわけわかんないからさ、とりあえず全部10にしておいたわ。良い事した後って気持ちいいわね。あ、一応暇なときに【すばるぼ】？ やって勉強してみるから）

とか、フレイヤのキャラなのかイラストで手を振っている2頭身の女の子の絵が描かれている。

「うん、あの女はバカだ。どの口が良い事した後がどーのこーの言っただ？ 俺死んでるじゃねーか……まああの女が殺したとは言えねーけど」

まあ使う事自体がないだろうから頭の片隅においておこう。

下には廃墟が立ち並ぶ街並みが見える。

この惨状はBETAによるモノだ。

^{ベータ}
BETAとは Beings of the Extra Terrestrial origin which is Adversary of human race の略で、人類に敵対的な地球外起源種のこと。まあ見た目からしてグロテスクな化け物集団だ。言葉は通じないし、いきなり現れては破壊殺戮の限りを尽くす。まあ奴等からしたら破壊している気も殺戮してる気もないんだろうけど……つまりそういう行動が自然と出る化け物たちだ。

「マサキ、この星には人間はいないのかニヤ？」

「さつきから廃墟ばかりニヤ　ゆっくりとは言え結構飛んでるの
ニ」

俺の脇や肩から、ファミリアの黒い猫と白い猫が声を上げる。名前はそのままで【クロ】と【シロ】だ。ファミリアっていうのは、使い魔みたいなものだ。サイバスターの兵器、【ハイファミリア】という鳥のような形状の物で標的の近くまで飛んで行き、不規則に動きつつ光弾を発射し攻撃したり、行動範囲が広いため偵察任務にも用いられる。

クロは女性的^{アニメ}、シロは男性的^{アニメ}な性格をしている。『くな』の発音がすべて『くニヤ』になる言葉遣いをする。

「いるはずなんだけど、この世界は初めてだからどこに何があるのか分からないんだよな」

ピーッピーッピーッ！

レッドアラート。敵とは限らないが、こちらに照準^{ロックオン}合わせしている者がいる。

「左ニヤ！」

「アレが戦術機かニヤ？」

「ああ、確かに戦術機だ。赤い……武御雷^{たけみかづち}。まさか月詠さんか!？」

ピッピッ！

オープン回線で音声通信が入ってくる。十中八九あの機体からのコールだろう。

『こちら帝国ス衛軍所属の月詠中尉だ。前方の未確認機。所属を答えよ。答えねば』

ビーツビーツビーツ!!

「撃つぞ？」と、再度ロックオンだけで示される。

「あー、この声は間違いなく月詠さんだ。……あれ？でもおかしくないか？そもそも何でアツチに気付かれるまでコツチが気付けなかったんだ？マツプだって機能していれば、少し遠くでも人や活きている建物に反応するだろうに。この機体ってチート機体だからこの世界のどの機体よりも高性能だろう？」

「ニヤ！？マサキ！マツプ機能をこの世界用に設定してないニヤ！」

「ああ通りで。これはお前らが忘れていたせいかな？俺がやるべきことなのか？」

「何を冷静にしているニヤ！早く返答しニヤいと撃たれるニヤ！」

「ああ、そうか……所属？……あつ」

何も無い。この世界に俺はいない事になってる。戸籍などが無いのだ。元々の主人公のタケルちゃんなら死んだことになっていたりして、最低でもこの世界の住人という事になるのだが……俺には何も

無い。

「あ、あー聞こえますか？ 所属は無いです」

『……………何だと？』

この世界、オルタネイティブの月詠さんって凄く怖いんだよね？いきなり撃たれてBADEND も有り得るのか！？せつかく来たのに、一瞬で終わりじゃ……………ねえ？

「マサキここは……………」

「逃げた方がいいんじゃないか？」

賛成。これは対応できそうに無い。

「え えーと近衛軍の方へ……………き、聞こえますか？」

『聞こえている。返答はいかに？』

「すみません。失礼します」

『何？』

キイイイイ……………

甲高いエーテルスラスタの音が操縦席に鳴り響く。いや、実際にはそれほど大きくない音だ。これは俺の心臓の音が幻聴となって甲高く大きく聞こえているのだろう。操縦桿に触れる手も汗ばんでいるのが分かる。

『む？ おいつ待て！』

「じめんなさーいつ!」

ドオツ……ン!!

まさに風のサイバスター。一瞬で音速を突破して相手の視界、レーダーを振り切る。

「……あゝ怖かった(ニヤ)」

Side out

Side 月詠真那つぐよみまな

早朝の演習の帰りに不穏な感じを受けて、部下達を先に戻らせて辺りを警戒してから戻る事にした。

「ふつ 勘も捨てたものではないな。しかし、あの機体……」

レーダーには機影が映るが、【unknown(所属不明)】との表示が出る。目視で確認しても同様だ。少し青みがかった銀色の戦術機……アレは。ん? いつまで噴射跳躍ブーストジャンプしている気だ? 推進剤の無駄だろうに……いや、

「まさか!? 飛んでいるのか?」

今更ながら気付けば高度も高すぎる。戦術機が居ていい高度ではな

い。

「馬鹿な！」

アメリカなどの新型？ 聞いた事が無い。そもそも危険を冒してまで、日本に顔見せに来る行動も理解に苦しむ。では、あの機体はなんだ？ こちらにも気付いていない？ 私は鳥か夢でも見ているのだろうか？ 私は確認も兼ねてその機体にライフルを向けて照準を合わせる。

ピッ

「こちら帝国斯衛軍所属の月詠中尉だ。前方の未確認機。所属を答えよ。答えねば」

夢とみなす……わけにもいかんか。

返答が帰ってこない。いきなり撃ち落とすわけにもいかんし……何らかの反応アクションを起こしてほしいものだ。

すると、やっと通信が帰ってきた。

『あ、あー聞こえますか？ 所属は無いです』

「……………何だと？」

子供の声だ。どういうことだこれは。しかも、回線の使い方すらも初めてと言わんばかりの自信のなさ。少し間をおいて、また返答が来た。

『え えーと近衛軍の方へ……き、聞こえますか？』

「聞こえている。返答はいかに？」

『すみません。失礼します』

「何？」

機体を注意深く見るが、特に動きは見られない。いや、機体の後部からブーストを溜めているかのような粒子が見える。

「む？ おいつ待て！」

『ごめんなさーいつ！ー！』

ドオツ……ンー！

「なっ！？」

レーダーからは一瞬で消えてしまったあの機体。あの機体は一体……。

「疲れている気はしないのだが……やはり白昼夢か？ 全くどう報告すれば……」

空を飛ぶ見たことのない所属不明の戦術機。青みがかった銀色で、パイロットはかなり若い声をしていたが、日本人である事は間違いないと思われる。その機体は0から100へ、一瞬で到達するかのように、音速を超えて視界からもレーダーからも消えていった。

Side out

Side マサキ

「どうだ？」

「大丈夫ニヤ。これで迷子にならないニヤ」

俺はマサキ・アンドーとは違う。レーダーがあれば迷わない。しかし、レーダーが無いと、さっきみたいに逆方向を延々と飛んでいることになるわけだ。

「ジャミング機能に不可視の機能も起動させたよ」

「マサキの言う情報だと、この辺りになるはずニヤんだけど……」

ピピッ

「生体反応 1。人がいるみたいニヤ」

「あゝ、ここだここ。家に戦術機の上半身だけが倒れ掛かって……」

戦術機【撃震】が、その身を家に預けるかのように機能せずに居る。そう、ここが白銀武の家だ。

「少し行って来る」

鍵は掛かっていなかった。床のきしむ音がわずかに響く。
階段を上がり、タケルの部屋を開ける。
ベッドには人が寝ている膨らみが出来ている。

「……仕方ないな」

俺はベッドの掛け布団に手を掛け、ゆっくりと持ち上げる。

「……うん」

「……うん」

「……うん？」

タケルが目を開ける。そして、固まる。そして……

「おはよ」

「キヤーツ!!?!?」

純情な女の子のように絶叫した。

「誰!? 幼女!?!?」

そこまで小さくねーだろ。これから出会うであろうタマよりも大き

いぞ。少しだけぞ。

「初めまして白銀武。俺の名前は海堂止樹だ。カイドウマサキ先に言っておくぞ。俺は男だ」

「何イーっ!?!」

「それと、お前の記憶は間違いない」

「俺の……記憶?」

「BETA」

「っ!?!」

目の前の青年はその身を震わせた。その表情は一瞬で絶望に近いものに変わった。

Side out

Side
白銀武 シロガネタケル

「BETA」

「っ!?!」

目の前の少女にしか見えない男の子(?)は、その表情を引き締め
て、そう言い放った。

BETA。

じゃあ、今フラッシュバックしている、俺の知っている人達。地球
を放棄した人類。オルタネイティブ5。これは……。

「マサキは……俺の事を？」

「知っている。と言っても曖昧になってきているけどな。一つ聞く
けど、2回目だよな？」

2回目。それはつまりこの世界。BETAのいる世界の事だろう。

「あ、ああ2回目だ」

「タケルはまた最初から始めるんだ。助けられなかった奴等がいる
だろう？」

……いる。沢山いる。

「あの歴史を変えたいだろうか？」
変えたい。

「じゃあ行くつぜ、横浜基地に」

「あ、ああ……ところで」

「何だよ？」

「本当に男？」

本当に聞きたいのは性別なんかじゃない。マサキ自身の事だ。

俺のことは知っていて、2回目だと知っていて、でも俺の記憶に海堂マサキという人物はいないし、目の前に居る少女のような姿も覚えが無い。

一体誰なんだ？

S i d e o u t

S i d e 横浜基地

「どっ？」

「駄目です。やはり機影は確認できません」

「そう」

白衣の女性は、自分から聞いた割には興味がなさそうに呟いた。

聞いた内容は、数分前に確認された所属不明の謎の戦術機のことだ。帝国軍からの情報によると、空を飛びまわり、レーダーからだと近衛軍衛士と接触したようにも見えたが、一瞬でレーダー圏外へ移動してしまっただけだ。との事だった。

その機体がまた現れた。今度はこの横浜基地近くの広大な廃墟からだ。

「レーダーの故障で済むならそれで良いんだけど……はぁ」

悩みの種にならなければ良いと思いつながら、白衣の女性は司令室を後にした。

S i d e o u t

01 それは疾風のごとく（後書き）

感想は随時受付中

まだ横浜基地に行かない人達なのでした。

今回はアムステルダム駅に到着します（世界の車窓から）

02 方向音痴はお約束（前書き）

ありがたい感想ばかりいただいて、残暑厳しい中、勝手に熱いものがこみ上げてきております。

チートしすぎないように気をつけて書いていこう。

失敗の経験は生かされるのか！？ その失敗も直す事が出来るのか！？

！
現状まだまだ戦闘が起きなさそうな感じで描かれる世界へレッツゴ

02 方向音痴はお約束

Side マサキ

「（シロ、クロ聞こえるか？ これから行くところではリーディングって言って、心を読まれる可能性がある。防げるか？ 大体、6〜7時間ぐらいだと思うが）」

「（大丈夫だよ）」 「（任せろニヤ！）」

サイバスターでこの世界にリンクさせた時に表示された日付は10月22日。今の時間は大体8時30分頃だろう。原作通りの時間ぐらいだ。

俺達は家を後にして、荒廃した街並みを見ながら進んでいく。タケルは少し落ち込んでいるようだ。

「タケル。先に言うておくけど、今日は10月22日だ。お前の友人達も生きている」

タケルはその言葉に反応する。

「タケルが2回目を繰り返している理由とか詳しく俺は知らないけど、生きているなら助けられるだろ？ しつかりやれよ？」

「……ああ」

「見えてきたな。タケルは何も話すなよ？ 話すのは夕呼先生に会ってからだ」

「分かった」

タケルが元々いた現実世界でのここは、タケルの通う学校だった。しかし、【国連太平洋方面第11軍横浜基地】という今の現実の姿を見せている。

そう、これもタケルにとっては現実の世界なんだ。

「こんなところで何をしているんだ？」

門兵が2人いる。近寄ってきて俺たちに話しかけてくる。

「外出していたのか？ 物好きな奴だな。どこまで行っても廃墟だけだろうに」

「隊に戻るんだろう？ 許可証と認識票を提示してくれ」

タケルは俺の言った通りに黙っていてくれるが、「ああそっいえばこんな事もあったな……」という感じの表情を見せている。

さて、通じるかな？

「あゝ戻る前に香月夕呼博士に連絡を取ってもらいたい」

「香月博士に？ ……問い合わせてみよう。名前は？」

「白銀タケルと海堂マサキ。あ、それと伝えて欲しい事がある」

「何だ？」

「【4から5】【00】【脳】って伝えて欲しい」

「何だそれは？ まあいいが……」

夕呼先生なら反応するキーワードを伝えてみる。これで駄目なら捕まろう。

門兵の一人が連絡を取っている。

しばらく待たされて門兵が帰ってくる。

「おい。博士がお前の事を知らないそうだがお前と話したいそうだ」

俺は門兵たちに聞こえないように話し始めた。

『アンタ誰？』

初対面に向かってなんて口調だ。少し機嫌も悪そうだ。

「初めましてですね夕呼先生」

『先生？ あたしは教え子を持った覚えは無いわよ？』

「この世界ではね。率直に言いますよ。俺は海堂マサキ、異世界から来た。それと白銀武の方は因果導体？って奴で、この世界は2度目だ」

『っ！ ……異世界……因果導体』

あなただったら、あなた自身の言葉を信じられる？牢屋で頭冷やして来なさい！！

とでも言われてしまいそうな予感がするが……。

『……迎えをよこすから待っていないなさい』

よしっ第一関門クリア！

「何だつて？」

「迎えをよこすだつて」

門兵2人は疑問符を浮かべた表情で俺たちを見ていた。許可証と認識票を出せば通れるというのに何故？ という顔だ。そりゃ仕方が無い話だ。どちらも持ってないんだから。

それから検査に4時間ぐらいかかり、俺とタケルは夕呼先生の執務室に通された。

「ふあ〜」

「眠そうね。あなたが海堂マサキ？」

「あ、はい。すみません」

まあ仕方ないでしょう？ 4時間も細かい身体検査や血液検査をさせられてるんだから。

「まあいいわ、因果導体と異世界人ね」

「異世界人？」

「あら聞いてないの？ 海堂マサキはこの世界の住人じゃないわ。データを照合してもそれらしい人物は出ないし……その見た目で18歳とはね……」

「同年！？」

「……あんた達本当に知り合いなの？」

「あ、今日初めて会っただけですから。言っの忘れてたスマン」

「あ、ああ」

「それで？ あんた達は何を知っているの？」

夕呼先生は椅子に体重を預けて、椅子の軋む音を鳴らす。

タケルが話し始める。1回目に体験した事。覚えている事。そして、更にその前の世界は平和だった事。

人類がBETAに勝つ為のオルタネイティブ4。その結果が出せない『4』に見切りを付けて、10数万人だけ宇宙へ逃げ出すオルタネイティブ5。後の残された約10数億人は滅ぶのを待つだけの世界。

タケルが1回目に体験した世界だと2カ月後の12月24日。そこが前回のタイムリミットだった。

でも、今回は2回目。更に俺もいる。まあ最初は死ぬ気で来たけど、月詠さんと偶然出会ったおかげで、すぐ死ぬ気にはなれなくなった。

「あなたが言っていること……どうやって信じればいいって言うの？」

「あゝその事なんですけど。隣で霞ちゃんがりーディングしてるんですよね？」

「そうなのか？」

「っ！？」

あ、驚かせちゃった。

やしろかすみ
社霞。オルテネイティヴ3の時に生み出されたリーディング能力者だ。

「あ、すみません話の腰を折ってしまって」

「……いいわ。あなたは異世界から来たって言ったわよね？」

「はっ」

「どっつしてこの世界の事を知っているの？」

「……ちゅっ？」

俺が居た世界のゲームでしたなんてアホ過ぎるもんな。ここは知らぬ存ぜぬで押し通そう。俺にリーディングは効かない様にしてあるし普通に嘘付こう。

「気付いたらこの世界に来ていて、生体反応があったからタケルの家に入って、でここに来たってところですよ。何故かこの世界の人の事を知ってるんですよね……知らない人もいるけど」

「……そう。生体反応って言ったわね。戦術機に乗っていたの？」

「似たようなものに乗ってきましたね」

「……アンタ、今日の朝 帝国軍近衛衛士と会ったでしょ？」

「何で知ってるんですか？」

「やっぱりね。私があんた達に興味が湧いたのがタイミングの良さ、いえ悪さかしら？ 今日正体不明の戦術機が空を悠々自適に飛びまわり、帝国軍近衛の衛士と相対し、一瞬で振り切ったそうよ」

「一瞬で……振り切った？」

「あはははは、そんな事もありましたねえ」

「はあ……頭痛くなってきた。その戦術機は今どこにあるの？」

「この基地に横付けしてあります」

「は？ どうして？」

見えないようになってるから、そりゃそうだね。

「90番格納庫でしたっけ？　そこに置いておけるなら見せられま
すけど」

「何でそんな事まで知ってるのよ……」

夕呼先生は頭を抱えながら机に突っ伏している。こんな人だっけ？

「90番格納庫？」

そう、タケルがこの2回目の世界で乗るXG-70の専用と言っ
てもいい格納庫だ。アレだけ広いんだからサイバスターの1機や2機
格納しても問題ないだろう。

「広いな〜」

ゴウン…ゴウン…。と、大型貨物を運ぶ音がする。乗っているのは
見た目、管理の人が一人と夕呼先生。タケル。俺の4人だけなのだ
が。見えないサイバスターが更に乗っていた。

これに乗せる時に、見えないのに動作音などがする光景を夕呼は額
に手を当てて溜息ばかりだった。

そして、ついに90番ハンガーに着いた。

「お〜これなら少しは動かせそうだ。じゃあ不可視モード解除しま
すね」

姿を現す銀色の戦術機。いや、戦術機などではない。夕呼はその機体を食い入るよう見つめていた。

「この3対6枚羽で飛ぶの？ 武装が見当たらないけど？ 動力は？」

「えっと、マニュアルによると、『フルカネルリ永久機関』で、俺の精神力みたいなものが持つ限り稼働できます」

「え？ ガソリンとか、電気とか、そういうものじゃねーの？」

「魔法と科学が融合した様な機体でね。試してみます？」

デイスカッターを異次元から取り出す。
ジャキーン！

「武装はこのように好きに出せます」

「夢ね」

いえ現実ですから。

何も無いところから出てくる剣に夕呼は頭を抱えるのをやめた。

俺は機体を降りて、シロとクロも連れてくる。

「で、こいつらが武装でもあり、使い魔ファミリアのクロとシロです」

「マサキ、それだけじゃ伝わらないニヤー！」

「あ、こらシロー！」

タケルと夕呼先生の顔がキョトンとしている。この表情は見た事が無いかもしれない。

「え？ 今喋ったのってこの猫2匹？」 ていう顔をしている。

あ、視線がコツチに戻ってきた。クロとシロは「僕たち猫ですよ？ 喋るわけ無いじゃないですか」 「お疲れなのでしょう？」 「みたいに俺の足元を歩き回っている。汗ダラダラ流してんじゃねーか。

「……喋る猫」

「喋ったわね」

「そりゃ喋るでしょう猫なんだから」

「その理屈はおかしいニヤ！ ……あ」

夕呼先生は再び頭を抱え始めた。

「と、まあそんな感じでBETAを倒すための機体として参加させてもらいますよ」

「それは駄目ね」

はい？

「周辺国が黙っていないわ。ただでさえ未確認の空飛ぶ戦術機が目撃されてるのよ？ 他の国にこれ以上の情報が行くのは大問題なの」

「はあ？ じゃあサイバスターは？」

「使えないわね。 出撃禁止よ」

「そりゃねーよ。 せっかく用意したのに……戦術機にも乗れるけど……はあ」

「海堂、今何て言った？」

「せっかく用意したのに？」

「その後よ。 戦術機にも乗れるって言ったわよね？」

「え？ はい。 でもタケルも乗れますよ？」

「白銀はこの世界を体験してるからいいのよ。 何で異世界人のアンタが乗れるの？」

「あ……さあ？」

「今、『あ』って言ったでしょ！ 何を知っているの？」

「違います違います。 『あ、そういえば何でだろうっ？』って意味ですよ」

ナイス咄嗟の一言！

「マサキは戦術機の知識もあるニヤ」

「整備班としても役立つし設計も出来るニヤ」

「海堂……何者よ」

「あ、何者で思い出した。お願いがあるんですけど、戸籍とか身分がないと動けないので何とかできますか？」

「ああ、それならもうやってるわよ。でもあんた達をどこに配属させるか……」

「あ、夕呼先生。前の時は先生が俺を衛士訓練学校に入れてくれて『第207衛士訓練小隊』に訓練兵として……」

「なるほど……我ながらいいアイデアだわ……今回もそうしましょう。まだ外で訓練してるでしょうから行って来なさい。話は通しておくわ」

「はい！」

「シロ、クロ行くぞ。喋るなよ？」

「待ちなさい。アンタはこっちよ海堂」

何故にホワイ？

Side out

Side

香月夕呼
「いっせい」

まりもに連絡を入れてからまた格納庫にあるサイバスターの前にやってきた。

「面白いモノを手に入れたわ」

因果導体にこの世界の知識がある異世界人。社のリーディング結果から言っても、事が不利に働く事は少なそうだ。

「このサイバスターって機体も気になるし……」

魔法と科学の合体？ 魔法って何よ？

でも一瞬で武御雷を振り切るデータも届いてはいる。本当の事なら……。

私はサイバスターの脚部に触れてみる。

ビーコンッ！ ビーコンッ！

『自爆装置が作動しました。停止には認証登録者による解除が必要です。自爆まで残り20分。自爆装置が作動しました。停止には』

「はあ！？」

「あ、解除すんの忘れてた。いやあ俺以外が触ると色々起こる事になってるんですよ」

笑いながら目の前の少女のような少年は言う。

「暢気に言ってる場合じゃないのよ！ 何？ アンタ異世界から来た破壊神！？ 全然笑い事じゃないわよ！」

「あはは、面白い事言いますね。ちなみにサイバスターはこの世界だと存在自体がブラックボックスみたいなんで、解析とかは一切出来ません。よろしくお願いしますね……さて、どうですか？」

「……止まった」

「（ふう、実際は自爆しない事は伝えない方が良かった……。絶対怒られるもんな）ところで、俺も訓練兵になるかと思ってたんですが？」

「一瞬でリーダーからも捉えられなくなる機体に乗っているという事は、相当なGが掛かっているということよね？ それを容易く操り、更に戦術機も乗れるし、開発系統も出来るよ」

「そうですね」

「そんな人材を遊ばせておくほど余裕は無いの」

「まあそれは知ってますけど……まあ大丈夫か」

「まずは実力から見せてもらおうよ？」

私は90番格納庫を後にして、海堂とともにシミュレーターデッキにやってきた。

S i d e o u t

S i d e 神宮寺まりも

夕呼から『新人が今からそっちに見学行くわ。白銀武って言ってね、アンタのタイプでしょうね。』特別な存在』だから後はよろしく』という連絡が来た。

「全く夕呼ったら……」

しかし、この時期に男が来るとは……しかも夕呼の言う『特別』。

「あれか？」

遠目に、こちらに向かってくる男がいた。

S i d e o u t

S i d e タケル

夕暮れのグラウンドに来た。

「もし……そこのお方」

「え？ ……俺？」

声を掛けてきたのは、御剣冥夜だ。

「……？ 何か？ ……どうかされましたか？」

俺は懐かしさを覚えてい凝視していた。

……救えなかった人の一人だ。

「あ、いや……えつと、何？」

「危険です故、外部の方のここからの立ち入りはご遠慮下さい」

「あ、いや」

ああくそっ しどろもどろじゃねーか。

「どなたかをお探しですか？」

「御剣、いいんだ！」

更に後方から女性の声が掛かる。 まりもちゃんだ。

「教官」

「……白銀武だな？」

「はい」

「…………。小隊集合ッ！」

「207小隊集合しましたッ！」

入院中の鎧美琴よろいみこと以外が集まる。

「よし……では紹介しよう。新しく207小隊に配属された白銀武訓練兵だ」

「白銀武です。よろしくお願いします」

「この時期というので驚いただろうが、とある事情により徴兵免除を受けていた者だ」

「色々とありまして……今後ともよろしく」

「訓練には明日から参加してもらおう。わかったな？」

「……はいっ！」「……」

「とりあえずは、一緒に食事でもして早く交流を深めることだ。榊、食事のあと兵舎への案内など、諸々頼んだぞ」

「はい！」

委員長がハッキリと返事をする。

やっぱり委員長って言っちゃまうな。

「では残り10分、引き続き訓練だ。白銀は少し見学をしている」

懐かしい顔ぶれだ。オルタネイティブ5が始まった時からもう記憶が無いかのようにはボロボロだから、一緒に居たのか、離れ離れになったのか、死んだのか、生き残ったのかすらも分からない。だが、先はそう長くは無かっただろう。

「……でも、生きてる」

俺は訓練を続ける彼女達を見て、「今度こそは」と意気込んでいた。委員長に基地内を案内された後、PXでの食事になっていた。俺はまりもちゃんに言われたとおり、食事を一緒にして親睦を深めようとしていた。

「ところで白銀」

「ん？ どうした？」

「……聞いておきたい事があるの。単刀直入に聞くわね。あなた……期待して良いの？ 神宮寺教官からは『特別な人物』だと聞かされているわ」

「ああ」

「それは、私たち……いえ、ひいてはこの国の、この星のためになる『特別』なのよね？」

「……そうだ……少なくともオレはそのつもりだ」

「それは頼もしいな」

「香月博士と神宮時教官のお墨付きだから、きっと大丈夫だよ！」

たまが賛同してくれるが、

「……だといいけど」

彩峰は本音は覗かせずに諦観しているようだ。

そんなこんなで一応仲良くやれそうだ。

明日からの訓練も楽しみだ。

まず最初の目標は総合戦闘技術評価演習をクリアして一刻も早く衛士になることだ。

Side out

Side マサキ

【目標沈黙】

【動作教習応用過程終了】

『言うだけの事はあるわね……これほど動ける奴は数えるほどしか見た事が無いわ』

モニター越しに夕呼先生の声が聞こえてくる。

「あの」

『何?』

「設定変えて良いですか? 動作が遅くて操作がし辛いんで」

『遅い? シミュレーター上、アンタが乗ってたのは【吹雪】なのよ?』

吹雪は非常に扱いやすい機体だ。様々なオプションパーツとも相性が良く更に上の【不知火】にも装備によっては引けを取らない。しかし、そう言われても試したい動きとかなできなかったし。まあでも、サイバスターの後だとどれでも同じに感じるかもしれない。

「すぐ済みますから。(カタカタカタカタッ)」

流石にその内出てくる新OSの【X M 3】までは行かないが、これだけでも5%ぐらいは動きやすくなるはずだ。俺の与えられた技術屋としての頭脳がそう告げている。

「再起動して、再トライします」

『……もう出来たの?』

「仮設定ですけどね。……行きます」

アグレッサー
仮想敵も少なかったため、3倍ぐらいに増やしてみた。

『アグレッサーの設定まで……?』

36ミリ突撃砲を手に短距離跳躍ショートフーストを効かせながら最小限の動きで邪魔なものから排除していく。

『何て速さなの……残り4……いえ、3機』

カチツカチツ

「あれ、弾切れか……弾薬まで制限掛ける必要は無かったかな。まあいい、ラスト!」

俺は短刀に持ち替えて残りの敵を排除した。

【動作教習応用過程・改訂版終了】

『……出てきなさい』

あー面白かった。思ったとおりには動けなかったけど楽しいもんだな

「海堂、今日はもう休みなさい。それと、明日私の執務室に来て。渡すものがあるわ」

「はあ分かりました……。あの、どこで休めば?」

「ピアティフ」

「ご案内いたします」

夕呼先生の秘書官のピアティフ中尉だ。

俺はピアティフ中尉に付いて行きながら考え事をしていた。

結局俺は何を見られたんだろうか？

戦術機に乘せられて、BETAの巢を落としてこい。とか無理難題を吹っかけられるのだろうか？ サイバスターに乗っていいなら成功の可能性は非常に高いと思うが……戦術機だとな……。

「海堂さんコチラです……右です右」

「あ、すみません」

考え込んでいる内にピアティフさんを見失っていたようだ。

「（やっぱり方向音痴ニヤ）」

「（リーダーが無いとどこにも辿り着けないニヤ）」

「（うるせいやい）」

明日は何を渡されるのだろうか……？

S i d e o u t

02 方向音痴はお約束（後書き）

感想は随時受付中

- ・サイバスター使用禁止命令が出されました。しばらく出番なしか。
- ・タケルたちとは一緒に行動できないようです。
- ・チートが見え隠れしながらマサキは行動しています。
- ・マサキ・アンドーと同じ様にウチのマサキも方向音痴なのさ。

次回、マサキは夕呼から何を渡されるのか？

お楽しみに！

03 階級はかなり上（前書き）

設定を更新したいが、今は物語が先だ！

今回は書いてて久しぶりに止まらなかった！ ひゃっほーい！

今回は少し短め。というかこれぐらいの長さの方が良いのかもしれない。と勝手に自己判断。長くなるときも短くなるときもあるので。

では本編3本目……どーん！

03 階級はかなり上

Side マサキ

コンコン

「……ううん」

コンコン

「……あゝい」

「起きていらっしやいますか？ ピアティフです。お迎えに上がりました」

あ、そういえば夕呼先生に呼ばれていて、夕呼先生の部屋に入るIDがないのと、そもそも執務室まで辿り着けるのが不安という事で迎えに来ると言う話だったんだっけ。

俺は昨日渡されていた軍服に着替えて部屋を後にした。訓練生用の白い制服ではなく、正規兵用の黒い制服には、その時疑問など少しも感じなかった。

「海堂さん。寝癖が付いてますよ。あ、ネクタイも……」

俺が目を擦っていると、ピアティフ中尉は俺の髪を撫でるように寝癖を治し、ネクタイも直してくれた。良い人だ。何というクールビユーティ。

そして、ピアティフ中尉の人気を知った。すれ違うもの皆、敬礼をしてくるのだ。
みんな顔が緩みきっている気がするが、見なかったことにしよう。
何か他にも視線を感じるような……。

「ふふふ」

「？」

人気があることは嬉しい事なのだろう。俺はそう思った。

コンコン

「入りなさい」

「失礼します」

シューーン

夕呼先生の執務室のドアが開く。

机に書類の山を2つ3つ築き、先生はパソコンに何かを打ち込んでいる。

学生時代打ち込んだものは何ですか？ 楔とキーボードです！ 合格！

あれ？ 俺は何を考えているんだ？ まだ寝惚けているようだ。

「よく来たわね」

「来いって言われましたからね。何です？ 渡したいものって」

先生はニヤリと口元を吊り上げ、B5サイズぐらいの封筒を渡してきた。

「見れば分かるわ……というか、制服でも分かると思うけどね」

「制服？」

俺は自分の着ている制服を見回すが、ピアティフ中尉が着ているものとの違いなどは分からなかった。スカートかズボンじゃないかの違いぐらい？ ツーか、これは当たり前だもんな？ 仕方なく俺は封筒の中を広げると、自分の認識票になるドッグタグ ・ IDカード ・ 戸籍関連の紙 ・ 紙キレー一枚が入っていた。

「おお〜ありがとうございます」

俺は早速ドッグタグを首から下げ、首のところを少し引つ張り胸元へ忍ばせた。ドッグタグの金属部分が肌に触れ、その冷たさが俺の身体に少しだけ震えを与えた。

次に戸籍の紙を見ていた。

えーと、俺はこの辺の出身ということ……

「ちよ！ 性別欄が女なんですけど!？」

「あら〜？ 間違えちゃったかしら？ まあ作り物だから気にしないでえ。それよりも もう一枚の紙のほうに苦労したんだから」

絶対嘘だ。わざとやりやがったこの極東の魔女め……。まあ戸籍自体を確認される事は無いだろうから、俺は気を取り直してもう一枚の紙を見やる。

「え〜と辞令？ 右の者を次の階級とする……中佐？」

「そうよ？ 苦労したんだから思う存分働いてもらうからそのつもりでね」

「いやいやいやいや。おかしいでしょうが！ やるなら最高でも大尉ぐらいで上司も部下もいる感じで、「海堂“大佐”」「私は大尉ですが？」みたいなやり取りとかをですね！？」

「ワケの分からない事をうるさいわね〜。偉い方が楽に動いて良いじゃない。アンタは開発も出来るし戦術機もこの基地で恐らくトツブクラスの腕前。さらに昨日は私の目の前で見せ付けたわよね？ OSをその場で書き換えて性能を向上させるなんてアホよ アホ」

「アホなら階級を落として下さい！」

「それにね、アンタはもう大人気間違い無しよ？」

ああ全く聞いてない。

夕呼先生は机の上のモニターをこちらに向けて動画を再生させる。

「ピアティフ中尉と……俺？」

ピアティフ中尉が俺の髪を撫でてクセを梳かしている。これは……
ついさっきの朝の映像か。歩き出して……。

「あ、ピアティフ中尉じゃなくて俺に敬礼してるのか？」

夕呼先生はニヤニヤと薄ら笑いを浮かべている。

「今の階級章 見たか？」

「ああ中佐だったぜ」

男は襟元を指で叩いて、同僚に話し始めた。

（ああ、俺とピアティフ中尉の制服の違いってこれか。こんなん分かんねーよ）

「何であんな子供が……？」

「いやいや、そんな事よりも……」

「ああ」

「「可愛かった……」」

ゾクッ

「ええ……？」

ムキムキの軍人二人組みに絶賛される少女の正体はもちろん俺のこ
とだろう。それが分からないほど俺もアホじゃない。もちろん分か
りたいとは思わないが。

「こんな感じでアンタのファンが増殖中よ。あの美少女中佐は誰だ
！？ てね」

俺はさつきピアティフ中尉が笑っていたのを思い出し、ピアティフ中尉を見た。
顔を逸らされた。罪悪感的なものがあるのだろうか。少し顔が赤い気がするが？

「ん？ そもそも誰が盗撮を……？」

俺は隣の部屋のドアを見つめた。もしかするとこれは……。

シューーン

「……スミマセン」

霞が出てきた。手にはカメラがある。

いや、お前だと怒るに怒れないだろ。かわいいなあ。黒いウサ耳をピコピコと動かし、霞はまたドアの向こうへと行ってしまった。

「あ、あとIDカードはアンタの網膜パターンと合わせれば最下層まで行けるようになってるけど、ハイブを落とす時とか以外はサイバスターは出しちゃ駄目だからね？」

「本当に駄目なんですか……じゃあ俺の機体は？」

「近いうちに不知火が届くわよ。知ってるわよね？」

【不知火】か。94式戦術歩行戦闘機。かなりの高速機動には優れるが、改修・発展などは難しいとされる機体だ。日本純国産戦術機の第3世代戦術機だ。

「……色々悩む事もありますが、俺は何をすればいいんでしょうか？」

「技術開発とウチの部隊を鍛えて欲しいのと、要望があれば聞くわよ」

聞くだけだろうな……。……。

「分かりました。ウチのつて言うのはA-01部隊ですよな？」

「ええ。流石、知ってると話が早くて助かるわ」

俺はタケルと一緒に話を進めていくつもりだったんだけど……。……。

「というわけで、俺は中佐になってしまった」

「は？」

タケルがフル装備でランニングをしているところに通りかかり、声を掛けていた。

他の隊員はそこまで重そうなものを担いだりはしていない。それに比べてタケルは、何ともまあ重そうなバッグや重火器を持って走っていた。

やっぱり原作通りか。

「白銀ーっ！！ サボリとは良い度胸だな！！」

「なっ！？ 違っ…………！！」

神宮寺まりも軍曹がタケルに矛先を向けた。

ああ俺が話しかけた所為か…………。

「任せる。…………あなたが神宮寺軍曹か？」

「は？ ……っ！？ 失礼しました！ 私が神宮寺軍曹であります
！」

俺の制服を見て、まりもちゃんはビシッと敬礼をした。

一瞬、何この子？ みたいな目をしたのは見逃せなかった。

「失礼、私は本日付で横浜基地に配属になった海堂正樹。階級は中
佐だ」

「ご苦労様です中佐殿！」

「彼、白銀武は傑物だ。よろしく頼む」

「はっ！！」

俺はタケルにウィンクをしてその場を後にした。

こういう時に階級を使うのは間違ってるんだろっな。

Side out

「マサキ……良い奴だな……」

「白銀、今の子は？ ……ウインクされてなかった？」

「随分かわいい人でしたねえ。 ……マサキちゃん？」

「彩峰、次は近接戦闘の訓練であったな？ エレメントを組まないか？」

「なるほど……いいね」

「……マサキ……この展開まで予想していたのか？」

マサキは知らないが、一人の新任訓練兵の叫び声がグラウンドに響いたらしい。

S i d e タケル

マサキが中佐になるとはな……。俺も早く衛士になって、発言力を持って、この世界をB E T Aから取り戻せるようにならなくちゃな。

俺は気分転換もかねて夜のグラウンドに散歩に出かけた。

ふと思いついたのは前回の12月24日のクリスマスの事だった。今思えばクリスマススを祝えるなんてありえない話だよ……。あの時は外に出るのも辛いくらい寒かったけど、今の夜はまだ結構暖か

い。

足音。走っている靴音がする。誰かいるな。

「ん？ 何だ、白銀か」

「冥夜か……つと、悪い……」

また下の名前で呼んじまった。

「別に構わぬが……順序というものがあるぞ？」

「すまん、オレ慣れ慣れしいらしくてな……」

「わかっていても癖は直らんか……もつとも、だから癖と言つのであろうが」

冥夜は自主訓練でトラックを周回していたようだ。前日も聞いた事があつたか？

「私は一刻も早く衛士となり、そして戦場に立ちたいのだ」

……そうだ、確かにオレはこの話をした。

冥夜はこの星。この国の民。そして日本を護りたいという。

「白銀、そなたにはないのか？」

「あるよ。地球と全人類だ。……別に対抗したわけじゃないぞ、念のため」

「誰もそんな事は言っておらん。だが何故そなたが『特別』と呼ばれるのか……納得できたのだ」

「ああ……目的があれば、人は努力できる」

「ほう……？ 簡潔で良い言葉だ……目的があれば、人は努力できる……か、私も倣わせてもらおう」

「もともと冥夜の言葉だ」

「え？」

あつとやべえ。オレは誤魔化して、冥夜と別れた。

目的があれば、人は努力できる。よしっ！ 一日も早く衛士になるぞ！

Side out

Side マサキ

……これで良し。

「あゝ眠い」

シューーン

後ろの自動ドアが開く。やってきたのは夕呼先生だ。

「一目で成果は出ないわよね。今日は何してたの？」

「タケルにオレの階級を伝えたのと、フォローしたのと、京塚のおばちゃんに「アンタちゃんと食べてるのかい!? 沢山食べて大きくなりな!」って特盛で飯食って、そっからはずっとここに缶詰ですよ。ふあゝあふう……」

「今は何をしているとところなの？」

夕呼先生はオレの後ろからパソコンの画面を見つめる。

「とりあえずは【X M 3】ですね」

「えくせむすり〜?」

「これはタケルの考えですけど、戦術機の機動に関してコンボとキャンセルを導入させているところですよ」

「コンボ? キャンセル?」

「コンボは、例えば『このボタンを押せばパンチを出す』というものがあつたとして、3回押すとどうなります?」

「そりゃあパンチを3回出すでしょう」

「そう、普通なら片手でパンチを3回出します。でも連続で押した場合は変化が出てくる。『左ジャブ・右ストレート・左アッパー』みたいだね」

画面に表示された青い戦術機。

俺はその【吹雪】を模した2頭身タイプの戦術機を操作しながら答える。

そのキャラは俺が言ったとおりのモーションを取る。

「……………何これ？」

「今日一日かけて作ったオリジナルキャラクター。SD戦術機の吹雪丸です！」

スパーンッ！

はいッツコミ入りましたーっ！ あざーっす！ おかげで少し目が覚めた。

「何を作ってるのよ、何を」

「XMM3の説明用プログラムですよ。大丈夫ですって明日は本題に取り掛かり始めますから」

「全く……………で？ キャンセルは？」

「戦術機って倒れそうになると勝手に噴出^{フイスト}とかを使って受身をとろうとしますよね？ その受身のシーケンスに入ると操縦が一切効かない状態になるんです。そのシーケンスをキャンセルして、射撃などの行動を取れるようにするんです。まあ機体の自動制御をキャンセルするんです」

「電子機器や機体に負担がかかりそうね……………整備兵に殺されるわよ？」

「まあ衛士が立つ戦場ではそのシーケンスですら命とりなわけですよ。倒れながらも射撃できた方が生き残る確率は上がりますからね。それに、殺されるも何も今朝の話だと、俺も整備する事になるでしょうしね。あ、それとコンボしてる最中にキャンセルも出来るようにします。まあ突き詰めれば【並列処理】ですよ」

「……………並列処理？　っ　まさか!？」

「ええ、これは00ユニットのためでもあるんですから」

ゼロゼロユニット
00unit。それはオルタネイティブ4に必要不可欠なもの。
タケルにとっても掛替えのない存在だ。

「……………そう。白銀は前回は12月24日がタイムリミットだったって言ってたけど、間に……………」

「間に合いますよ」

カタカタカタカタカタ……………。
俺はパソコンにプログラムを打ち込みながら、遮るように自信満々に答えた。

「大丈夫ですよ。この世界は人類のものだ……………いつかって明言はできないけど、全てのBETAをこの星から……………」

タンツ!

俺はもう一つのプログラムを組み上げ、

「出来た!」と言わんばかりにEnterキーを勢いよく叩いて言い放った。

「消します」

夕呼先生は息を吞んで画面に釘付けになった。

「……こ、これは？」

俺は画面に表示された緑の戦術機。

【F-22A^{ラプター}】を模した2頭身タイプの戦術機を操作しながら答える。

「吹雪丸のライバルのラプター君です！」

スパーンッ！

「違うんですよ聞いてくださいよ〜」

「何よ？ 納得のいく説明をくれるのかしら？」

もちろんですとも！

「いいですか？ 吹雪丸は身も心も大和撫子のような女の子で、ラプター君はアメリカからの転校生なんです！ 最初はいがみ合っ二人ですが……！」

スパパーンッ！！

「もう寝なさい。くだらない事で力使って倒れられたら堪ったものじゃないわ」

シューーン

俺はまた部屋に一人になった。俺はツツコミが入った箇所を擦り、少し伸びをした。

「ん〜っ……ふう。おかげで目が覚めた。さて、続けるか」

最小化してあったプログラムを元のサイズに戻して、またキーボードの軽快なリズムが暗い室内に刻まれていった。

S i d e o u t

03 階級はかなり上（後書き）

感想は随時受付中

- ・マサキは中佐になり活動、タケルは出来限り原作を進むようです。
- ・サイバスターはハイブ落としの時などは使用OKらしい。（他にも？）
- ・先んじてX M 3を作り始めました。（作り始めただけで完成は少し先）

というわけで、海堂マサキの軍属になったの初日を描いてみた。マサキはやると決めたらやる子ですから。うーんマンガム（何が？）

今回は凄く気持ち良く書けたよ　これも皆さんのおかげです！！

階級についてのツッコミは不可。「子供が中佐とか……」なんて言われても物語だもの。少しぐらいいいじゃない。だって人間だもの。
by みつ

さあ次回以降からが大変だ。………続け。

04 フラグ、それは折れたり立ったりする（前書き）

オルタネイティブ トータル・イクリプスも参入！

まず一人目は……！？

04 フラグ、それは折れたり立ったりする

Side ????

顔に大きな傷のある歴戦の勇士の顔を見せているその男は、数枚の書類を見つめていた。1枚、また1枚と読み進めていく早さはまるで流し読みしているのではないかという早さだが、何度も読み直している文面だ。当然のことながら、何度読み直しても内容は変わるはずもなく、その男、巖谷栄二は書類を机の上に置いた。

書類の内容はいたってシンプルだ。ただそれを長々と引き伸ばして書いたに過ぎないものだ。基本的に文章とはそういうもので、一枚ですむ内容も複数枚に及ぶことは、どの世界でもよくあることだ。そして、巖谷が何度も確認したのは仕事上の癖的なもので、別段これといって問題を感じさせるものではなかった。

コンコン

「入りたまえ」

「失礼します。お呼びでしょうか中佐」

「まあ、そう硬くなりなさんな。唯依ちゃんよ」

巖谷は入ってきた女性に親しく笑いかけながら、内容を伝え始めた。

「横浜基地で面白そうなことが起っているようだ」

「面白そうなこと？」

「確認してみたが、凄腕衛士で技術開発顧問で中佐だそうだ」

「はあ………?」

いきなりの話に要領を得ない女性は。たかむゆい篁唯依。日本の譜代武家出身の女性士官であり、日本帝国斯衛軍の装備実験部隊「ホワイトファンクス白き牙中隊」の中隊長で階級は中尉だ。唯依は書類を渡されて読み進めていく。

「……私が横浜基地へですか?」

横浜基地。極東の魔女と謳われる香月夕呼がいる基地だ。周りからの目は冷ややかなものの、唯依自身としては香月夕呼の考え、行動には賛同的であった。何も知らない人間から見れば確かに利益を求めめる人間に見えるかもしれない。しかし、唯依からすれば純粹に日本だけではなく、世界からBETAの脅威を排除するために動いている人間に映ったからだ。しかし、それもあくまでも聞いた話を憶測でまとめた考えに過ぎない。だが、各国と無茶な取引をすることもある魔女のことが、深く考えると理に適っている点が多く見える気がするのだ。

唯依は更に読み進めると、先ほど巖谷が言った内容と思わしき文面が目に入ってきた。

「海堂正樹中佐。最近の配属ですか」

文面を見る限り、「最近の配属で右も左も分からないから補佐が欲しい」という内容が書いてある。それなら同じく横浜基地の人間で良いではないか? と唯依は腑に落ちない点も感じるが、命令ならば軍人である以上、行くだけである。

「写真などは無いのですね」

「色男だと良いな？」

「叔父様っ！」

巖谷は豪快に笑い飛ばして続けた。

「唯依ちゃんが横浜基地に行く代わりに、魔女さんが色々とよろしくしてくれそうだからってのも一つの理由ではあるがな。……頼んだぞ、篁中尉」

くだけた話し方を最後までだけは軍人らしく止め、巖谷は唯依を見送った。

Side out

Side マサキ

「……さ……中佐……海堂中佐」

「うみゅ。もう大盛しか食べられません……」

「結構食べるんですね？ じゃなくて、起きてください中佐」

「ほう？（ポリポリ）……ピアティフさん？」

「はい、おはようございます中佐。こんな所で寝てたんですね。探しましたよ」

あ、寝オチをしてしまったのか。いかんいかん。

俺はあれから何日間かずっとプログラムを構築していた。X M 3はほぼ完成といって良いだろう。後はハード面を変えて、実験すれば実用化できるところまで来ている。

「ふあ〜う、くあ〜……何か用ですか〜？」

俺は長い欠伸をしてピアティフ中尉に向き直った。

「香月副司令より、『A・01部隊のことも忘れずに』とのことですよ」

「忘れてはいないですけど……今いるんですか？ この横浜基地に？」

原作だとココ、横浜基地がBETAに奇襲を受けた時ぐらいからしか見てないからそこら辺が分からない。

「大体、演習場で訓練をしているか、シミュレータデッキでの訓練あとは……ミーティングをしていることもありますね。何かあれば香月副指令からの指示によって任務に出る事もありますよ」

「へ〜。でもまだやること片付いてないんで……あ、そうだ。A・01部隊の戦闘に関する動画とか、データ見れます？」

「香月副司令に聞いておきます」

「じゃあ、ソッチはその記録とかを見た後で対応します」

「了解しました。それと」

「はい？」

「朝食に行きませんか？」

「ん〜寝起きでお腹減ってないんで、俺はもう少ししてからでいいですよ。お先にどうぞ?」

ポキッ

ん? 何の音だ?

「で、では また後ほど寄らせていただきますので、失礼します」

シューーン

それは、ピアティフ中尉が持っていたペンなどが折れたとか、そういう単純な事ではなく、実際には聞こえるはずの無い、【フラグ】の折れた音だった。

遅くなってPX。

俺はシロとクロを連れて、朝食終了ギリギリでPXにやってきた。

「こんな時間に一人ご飯を食べる。何と寂しきことが……」

「マサキちゃんじゃないか、こんな時間に食べて大丈夫なのかい？」

食事を取りに来た俺に飯をよそつてくれるのは京塚曹長だ。民間人だが戦時特例法により、臨時曹長という階級になっているが、あくまでも食堂のおばちゃんだ。上も下もない京塚のおばちゃん。この周辺の廃墟が、廃墟になる前に、「京塚食堂」とかいう名前の店を経営していたようだが、この前見たとおり、周辺は廃墟だらけ、まともに立っている建物なんて一つも無い。今では基地のみんなの肝っ玉母ちゃんのような存在だ。俺も数回しか会ってないのに覚えられてしまった。

「マサキちゃんは止めてくださいって、男ですから俺。まあ、みんなとする仕事が違うからずれちゃうんですよね。食事の時間」

「そうかい。何をやってるんだい？ 衛士じゃないのかい？」

「一応は衛士ですけど、その内にも整備も技術開発もすることになってます」

「偉いんだね。はいよ大盛りね」

どんっ！ と 出される量は特盛サイズ。あ、食欲が減ってきたぞ？

「残すんじゃないよ？ シロちゃんと、クロちゃんはこれね」

あいあいさ。

俺はシロとクロの飯も貰い、1人と2匹で食べ始めた。

そういえば、俺って技術開発部とかの人知らないぞ？ 紹介してくれないと始まらないぞ？ そもそもどこに行けばいいんだよ？

「とりあえず後で夕呼先生のところに行くか」

「止めといた方がいいんじゃない？」

「オイラもそう思うニヤ」

「何だよ？」

「迷うから」

何回か行ってる場所だぞ？ 流石に覚えてる。

そう思っていた時期が俺にもありました。

「……やっぱりニヤ」

「自信满满だったから任せただけ、やっぱり案ニヤイは必要だニヤ」

俺は何とか飯を完食し、夕呼先生の下へ向かおうとしていた。しかし、もう30分以上歩き続けているが全く辿り着かない、それどころか見覚えのある場所にも出れずにいる。仕方がないから誰かに会ったら案内を頼もうと思ったが、誰にも会わない。

「これは、もしかして……俺を先生の下へ辿り着かせまいと、基地

が変形をしているのか！？ 何という巧妙なトラップー！！」

汗を拭う仕草をする俺に後ろから聞こえるように話している2匹の猫がいる。

「単に迷ってるだけだニヤ。変形するわけニヤいニヤ」

「いい加減、方向音痴だって認めるニヤ」

更に歩き続けること、2時間ほど。

さっき食べたばかりな気がするが、次の昼飯の時間になっていた。

「もう良いんじゃないね？」

「ニヤにが？」

「諦めても帰れニヤいんじゃない……？」

俺は窓の外を見る。

2匹のネコは俺の考えを即座に読み取ったようで、飛び掛ってしがみ付いてきた。

「あぶニヤいニヤー！」

「マサキ止めるニヤー！」

「良いからしつかり掴まってるよ？」

「わっ！？ 何をしてるんですか！？」

「うわっ！ って、まりもちゃん？」

「まりもちゃん！？……確か海堂中佐でしたね。なぜ窓から飛び降りようとしてるんですか？　ここは3階ですよ？」

目の前で人が飛び降りようとしていた驚きと、「ちゃん」付けで呼ばれたことに様々な考えを巡らせながら神宮寺軍曹は俺に質問を投げかけた。どうやら、シロとクロが喋ることはバレてないタイミングだったようだ。

「丁度よかった。副司令の部屋まで案内してくれませんか？」

「博士の？　何度か行っているのでは……。もしかして……」

どうやらさっきの行動と結びついたようだ。

「……迷子です」

まりもちゃんは頭に手をあて、「コチラです」と案内してくれた。

「訓練中だったのでしょうか？　すみません」

「いえ、射撃訓練が終わり、次の教習の準備でしたので」

タケルは原作通り超人的な姿を部隊のみんなに広めたのだろう。

まりもちゃんは部屋の前で「次の訓練の準備があるので」と言い残り、戻って行った。

シューーン

相変わらず書類の山に囲まれた夕呼先生は余裕を持って迎えてくれた。

「あら海堂、どうしたの？」

「俺って、まだ整備兵のみんなと会ってないんですけど、どこに行けばいいんですかね？」

「X M 3 ってやつは完成したの？」

「一応ってところですね。とりあえず、バグ潰しとかもしたので、戦術機を借りて動作チェックに入るうかと思うんですけど」

「……うそ。本当に終わったの！？ 確か内容を詳しく聞いたときには、今のOSから30%ぐらい性能が上がるって言ってたやつよね！？ 数日で終わるものなの！？」

「ああ、いえ、OSだけです。CPUとかも変えないと処理が間に合いませんから、とりあえず一応です。一応」

「そう、まあ丁度よかったかもしれないわね。紹介したい人材も早めに届いてるから」

ん？ そんな人才ルタネイティブの世界にいたっけ？

Side out

S i d e タケル

「よし、今日はここまで、解散！」

「敬礼！」

射撃の訓練が終わった。

「さて、昼飯行こうぜ？ もう死にそうだ。

……あれ？ みんなどうした？ メシ行かないのか？」

俺は腹ペコでPXへ歩き出そうとするが、皆が着いてこない。

「……そなたが今更どのような実力を発揮しようが、驚きはしないが」

ああまたさっきの射撃訓練の話か。俺は長距離射撃をやってみてくれと言われ、850メートルの狙撃をやったのけた。この部隊で射撃に関しては右に出るものはいないタマより凄いことはやってないが、みんなはそれが引つかかるらしい。

「……白銀、兵役の経験あるんじゃないの？ つい最近入隊した人間が、何でも普通以上にこなせるなんて、さすがにおかしいわよ」

委員長も冥夜と同意見……というか彩峰もタマも同じようだ。

「と、とにかく腹が減ってるから、先にPX行ってるぞ」

俺は逃げるようにPXへ急いだ。質問攻めにされるのは敵わない。

「きゃっ！」

「うおっと……すまん。前見てなかった」

そこにいたのは鎧衣美琴。俺たち207小隊の入院中の美琴だった。

「ああそうだ！ ボク教官のところに行かなくちゃいけないかったんだ！」

そう言っつて美琴は去っていった。

「……まあ挨拶はまた後で良いか」

ともかく、これで全員そろった。早くみんなで衛士になるんだ。

Side out

Side マサキ

俺は強化装備に着替えるように言われ、夕呼先生に連れられて、シミュレーターデッキにやってきた。

「何でシミュレーター？ 戦術機は？」

「まあ乗りなさい。相手がお待ちかねよ」

(相手？)

俺はシミュレーターに乗り込み、とりあえず設定を確認する。俺の機体は吹雪だ。この前書き換えたままのデータが載っている。確認をしていると、夕呼先生から通信が入ってきた。

『とりあえずこの場での挨拶は無用とするわね。海棠、相手はとりあえずあなたの実力が知りたいそうよ。もし相手が納得いく力量があると判断すれば、あんたの手伝いをしてくれる。手加減とか考えなくて良いからね』

ああなるほど、中佐だから補佐が付くと……で、俺が子供の姿だから「パチこいてんじゃねーぞ？ ゴルア！ 俺様の補佐が欲しかったら実力を見せてもらおうじゃねーか！」っていうことかな？

『じゃあ始めるわね。……スタート』

画面に相手の情報が出てこない。この基地の機体じゃないってことか、誤魔化してるのか……恐らく前者であろう機体の姿はまだ見えてこない。この基地じゃないとなると、アメリカとかかな？

ビルが立ち並ぶ市街地戦。視界は悪く、音感センサーを頼りに地道に進む……なんて面倒くさいから俺はビルの屋上へ飛び出した。

(……いたっ！ 黄色……山吹色か……えっと……嘘だろ？)

一瞬見えたのは山吹色の戦術機。しかし、俺の記憶する限り、そんな色の戦術機は一機しか知らない。帝国近衛軍の戦術機【武御雷】。操縦者は篁 唯依だろう。しかし、オルタネイティブの中には出てきてないはずだ。確か、【トータル・イクリプス】という、オルタネイティブの数ヶ月前の世界のキャラクターだったはずだ。

山吹色の武御雷は俺の姿を確認するとすぐさま隠れた。恐らく突然現れるという戦闘行動にあるまじき行為に咄嗟に反応してしまったのだろう。

(何故 篁中尉なのかは分からないけど、とりあえず落とすぞ)

俺はビルの屋上からブーストタイプ噴射降下・ブーストダッシュ噴出滑走をして、距離を詰める。相手は逆に距離を取ろうとしているようだが、『この吹雪』は普通の吹雪とは違うため、差は徐々に縮まっていく。

武御雷は距離を取ることを諦め、逆に接近戦に切り替えたようだ。一気に俺との機体の距離が縮まる。目の前に迫った武御雷は俺に87式突撃砲を構え、撃ち放ってくる。

ビービービーツ！

けたたましく鳴り響くロックオンを受けている警告音。俺は構わずブーストジャンプ噴出跳躍をして避けた。

『なっ！？』

唯依の驚きの声が聞こえる。それもそのはず、基本的に避けられないのだ。この前に改造しておいた吹雪だから避けれるものだった。それでもギリギリだった。左脚部に軽微の損傷を促す音声流れる。

(掠ったか。　　っと！？　　すげえ！)

武御雷はすぐさま反転し、俺が本来いる場所に向き直り、長刀に装備し直し、袈裟切りに切りかかってくる。素晴らしい切り替えの早さ、普通ならなぜ避けれるかに疑問を浮かべ続け自滅してしまうだろう。

しかし、そこに俺はいない。

『っ！！？』

俺はその抜刀からの一連の動きを上空から見ていた。そして、そのままロックオンし、突撃砲の雨を浴びせた。

『状況終了ね。二人とも降りてきて』

俺は念のため吹雪のパターンチェックをしてから降りた。そして、先に降りて夕呼先生と話している篁中尉に駆け寄った。

「ありがとうございます！」

「？　あの……博士、この子は？」

「ふふふ、この子が今やった相手の海堂正樹よ」

「えっ！？　……あつ！　失礼いたしました！　篁唯依中尉であります！」

ピシッと帰ってくる敬礼に俺は答礼した。

「初めまして、海堂正樹中佐です。えっと……補佐に就いてくれるって本当ですか？」

「は、はい喜んで!!」

夕呼先生は何故か笑っていたが、とりあえず補佐が付いたからには、迷子にならなくてすむぞ。

「（ニヤンか補佐の事、勘違いしてニヤい？）」

「（確実にしてるニヤ）」

Side out

Side たかむら 篁 ゆい 唯依

最初は市街地戦だからゆっくり近づいてくるかと思っただため、驚きしか出なかった。まさかいきなりビルの上へ飛び出してくるとは思わなかった。アレが無くて勝敗は決まっていただろう。あの距離で突撃砲をかわされた瞬間、あとは苦し紛れに長刀を振りきる以外やりようがなかった。

一体どんな衛士なのだろうか？

「香月博士、こちらの我俣を聞いて頂きありがとうございます」

「いいのよ。コッチの方が話が通りやすくなって良いと思うし」

私が提示した我侭は『私に勝てる腕を持っていなければ、帰らせていただきます』というものだ。しかし、それで構わない上に、『全力で来ないと一瞬で終わるわよ?』と余裕すら言い含められた。結果は瞬殺だ。あんなに早く行動不能になったことはあつただろうか? 記憶には無い。

「素晴らしい衛士ですね。余程屈強な方なのでしょうね」

「屈強ねえ? ふふふ、驚くわよ?」

巖谷の叔父様よりも凄い傷だらけなのだろうか? それともかなりの筋肉質? 負けたことに關しての悔しさなどは全く無く、早くお会いしたいという想いだけが私の中にあつた。

少しして戦術機から降りて駆けてきたのは、黒と白のネコを一匹ずつ従えた少女のような男の子だった。誰か他の部隊も訓練していたのだろうか? 私は香月博士を見るが、意味深な深い笑みがそこにはあつた。

「ありがとうございます!」

「? あの……博士、この子は?」

「ふふふ、この子が今やった相手の海堂正樹よ」

「えっ!? ……あつ! 失礼いたしました! 篁唯依中尉であります!」

海堂正樹。男。衛士。技術開発顧問。……この目の前にいるカワイイ生き物は何歳だ。

「初めまして、海堂正樹中佐です。えっと……補佐に就いてくれるって本当ですか？」

自信なさ気に目の前の男の子は上目遣いに言ってくる。

ああコチラでも撃ち落とされるとは……。答えは決まっている。

「は、はい喜んで!!」

S i d e o u t

04 フラグ、それは折れたり立ったりする（後書き）

感想は随時受付中

- ・ つけええーっ！ フラグクラーツシュッ！！
- ・ これで方向音痴が改善されるはず？
- ・ 吹雪（少し改造）で武御雷に勝つ方法〃チート

えーというわけで、トータル・イクリプス（以降【TE】）からもキャラが出てきます。時間軸とかの説明は出来たらいいなぐらいで考えてますが、基本的にキャラが出てくるだけです。そこは深くはやらない。あくまでも【オルタネイティブ】主軸のお話。

まあ今後もう少し出てくるはず。タケルはヒロインたちと、マサキはTEキャラ達と……ムフフ

この前、設定情報を更新しました。スパロボ風にサイバスターの情報をUPしときましたが、今後は戦術機のスパロボ風設定も書ければと思ってます。

ではまたお会いしましょう。

次回も続くといいな……。

05 二つ見えて開発は得意なんです(前書き)

お気に入り登録100件突破アツ!!……しそうです!!…
早いかもしれませんが、本当にありがとうございます!!

マサキ初のBETA戦。サイバスターは今回も却下されてしまう!
早く乗せて! 禁断症状が出ちゃう!!

今回は長めになっております。
がんばって読んでね?

05 二つ見えて開発は得意なんです

Side マサキ

俺はやつと整備兵チームと合流し、戦術機の整備、新武装の研究開発、XM3の導入に入っていた。篁中尉は基本的に俺と一緒に行動している。この前も道に迷いそうなところを助けてあげた。意外と方向音痴なんだな。

「（気づかれニヤイ様に改竄するのはやめニヤさい）」

「（見てることちが恥ずかしいニヤ）」

「海堂中佐。ネコと戯れてないで……この状況はまずいのでは？」

篁中尉は俺に対して口添えをしてくる。「まずい」という内容はシンプルだ。俺の見た目、つまり容姿がアレで【中佐】という階級から、周りの目というものが軍人ではない状態ということらしい。しかし、俺はあえて反論した。

「大丈夫でしょ？ 唯依姫も気軽に呼んで良いよ？」

「その『唯依姫』も……はあ」

俺は篁中尉の事を唯依姫と呼んでいる。これも直らないものかと唯依姫は額に手を添える。

まあ俺からの視点だと、整備班はまじめに仕事をしている。というか、過去のデータを見る限り、今までのやり方と比較すると効率は上がっているように見て取れる。

「……でも、確かに『マサキちゃん』と呼ばれるのは……腹に据えかねるな」

俺はメガホンを取り、声を上げた。

『一旦作業中断。全体集合！』

ザツ！ と、一斉に集まる技術開発チームと整備チーム。一声かければ軍隊のように集まってくる。その行動力は大したものだ。衛士と比べても遜色ないだろう。しかし、目は何というか……やはり軍人とは違う。

『俺のことは好きに呼んでいいと言ったが、訂正する。次に『マサキちゃん』と呼んだやつはこの基地から追い出すから覚悟しろ』

「……ええ〜！」「……」

声を上げるのは、女性が多いが、男も若干名いるようだ。何コイツら。

「貴様ら！ 上官だぞ！ 口を慎め！！」

シーン……。

唯依姫の一喝でみな軍人の目に切り替わる。

そんな目も出来るんじゃないか。くそっこれもあのアホ女神のせいだ……。

『呼び方は『主任・チーフ・店長・団長・会長・部長』の中から好きに呼んで構わない。名前を頭に付ける事は許す。さて、話は変わるが、これから新型OS【XM3】の最終テストを行う』

ざわつ。と、ざわめきが広がる。「ついにか」「やっぱり主任は天才だよ」「見たい見たい！」様々な声がところかしこで起こるが、唯依姫がまた一喝して納める。

『これで成功なら更に忙しくなるぞ？ 気を引き締めてかかれよ』

「……………はいっ！！」「……………」

演習場には2機の戦術機。管制塔には技術開発班・整備班が詰め掛けていた。

俺はXM3搭載型【撃震】に乗り、唯依姫は通常の【不知火】に乗り込んだ。撃震はハッキリ言って重い機体だ。火力など言うならもちろん不知火や吹雪に劣ることはない。しかし、偉人さんの名言どおり【当たらなければどうということはない】。センサーの感度、反応速度、重さによるブーストの効き。どれを取っても、不知火に数段劣る。それほどまでに不知火は早い。撃震が小学生の全力疾走なら、不知火はオリンピック選手だ。まあこれは誇張しすぎかもしれないが、撃震が不知火に勝てる見込みは薄い。というか、ないに等しい。

『では準備はよろしいですね？ カウント開始します。3…2…1…スタート！』

XM3の最終テストの内容は2点。

アクセッサー

一つは機動力、精密性を測るための仮想敵の撃墜を含めたタイムアタックだ。これは俺だけの方で行う。俺は山あり谷ありのコースを

出来る限り早く進み、仮想敵も落としていく。

「事前データより早いっ!？」 「アレ本当に撃震？」 「吹雪以上じゃないか？」

「主任の腕に寄るところも大きいだろうな」 「あの見た目で細やかな機動をするのね」

管制塔の連中は各々で、この撃震を評価していた。

ビーツ!

『第一段階終了。海堂中佐、機体に異常はありますか?』

「問題ない。すぐにでも次を始めても大丈夫だ」

2つ目のテストは通常タイプの不知火との模擬戦だ。当然、ペイント模擬弾を使用しているので、壊れはしないが、システムにより状況は詳しく分かる。脚部にペイントが掠る程度でも実際にそうなった場合の負荷がかかるようになっていく。

そして、ビーツ! と、2回目の開始の合図が鳴り響く。不知火はまず俺の射線上から外れるように距離を詰めてくる。定石通りだ。火力がある相手に真正面から突っ込む馬鹿は新任衛士でもそうそうお目にかかれない。自分の機動力を活かし、距離を詰め、ヒットアンドアウェイの戦法が取れる相手なら、それが一番確実だ。しかし、『その戦法が取れる相手なら』の話だ。実際、先ほど同様にX M 3を搭載したこの撃震は吹雪ぐらいまでの機動力を見せていた。まあそれでも『吹雪ぐらい』だ。不知火に比べれば劣る。唯依姫は撃震の驚きの速さに慣れ始めたのか、徐々に詰めてくる。俺の砲撃は当たらない。そして……。

『じよ、状況終了。お疲れ様でした……』

「惜しかったな……」 「何言ってるのよ？ 大したものよ」
「主任以外が乗ってたらこうは行かなかっただろうよ」 「ああ、でも惜しかった」

戦術機のペイント弾に塗りつくされた光景を見て、管制塔のスタッフも整備兵も技術開発チームも息を飲んだようだ。

「ふう……よくやったな」

俺は撃震から降りて、胸部ユニットを撫でる様にそう呟いた。
コイツはよくやった。あそこまでやれば十分だ。俺は純粹にそう思った。

「中佐！」

唯依姫が駆け寄ってくる。

「あんな装備は聞いてません！」

そして、怒っていた。

結果は引き分けだ。唯依姫の不知火が一気に距離を詰めて突撃砲を放とうとした瞬間。通常はただの肩・腕・脚パーツのはずの部分がその姿を変化させた。各部位の蓋が開かれたそこには、マイクロミ

サイルがギツシリ詰め込まれていた。

『なっ!?!?』

俺はその驚きの声を聞いて、ニヤリと笑みを浮かべた。一斉に放たれる模擬弾のマイクロミサイル。不知火の突撃砲も火を噴いた。相打ちに終わるが、不知火は元の色は何か分からないほどにペイント弾を全身に浴びていた。

「いや〜楽しかった〜」

「不謹慎です！ 全く……」

『海堂正樹中佐、香月副指令がお呼びです。副指令執務室までお願いします。繰り返します……』

「今度は何をやっただんですか？」

唯依姫は俺をジト目で見てくる。身に覚えがありすぎてどれで呼ばれているのか分からない。

「……人聞きの悪い。さて何だろう?」

S i d e o u t

Side 香月夕呼

私は数日前の白銀との会話を思い出していた。

「ラプラスの悪魔はもう存在しないわ」

「ラプ……？ どういうことですか？」

量子力学の理の内にある限り、何人にも未来を予測できない。それが例え神や悪魔と呼ばれる存在しても。未来は不確定なもの。そういうことだ。

「あとはあなたが思うとおりに頑張ってみなさい」

私はそう言って、白銀を送り出した。

まあつまり『自分の力で未来を勝ち取る他ない』ということだ。私自身も含めて。

白銀タケルはこの世界が2回目だという。

「11月11日ねえ……」

白銀が言っていることは本当のことだろう。社のリーディング能力でそれは確認済みだ。そして、その白銀が1回目とは違うことをしようとしている。もちろん聞く限り1回目のまま進むと私も終わりなので協力をしている。白銀が言い出したのは、前回の世界の話だと、11月11日にBETAが佐渡島からやって来て、新潟に現れ

るといふことらしい。

とりあえず、A - 01部隊には出てもらうことにして、更に越中と下越新潟地域の帝国軍に10日付で防衛基準体制2を出しておいた。これで抑えられるといいのだが、これ以上派遣すると変に勘ぐられてしまう。BETAの予測不可能な行動を予測している行為に等しいのだから。何故、新潟に部隊を派遣したのか？ BETAが現れなかった場合も後の処理が面倒だ。

白銀が少し先の未来を体験していて、覚えているというなら、彼自身がラプラスの悪魔に成り得るのだろうか。いや、それこそ立証なんて出来ない。しかし、もう一人この世界を知っている男がいる。

「ピアティフ。海堂を呼んで」

『かしこまりました』

しばらくして、篁に連れてこられる形の海堂がやってきた。コイツは……いい加減ココまでの道のりぐらい覚えられないのだろうか？なぜ最近来たばかりの中尉が覚えられて、海堂は未だに覚えられないのだろうか。

「呼び出して悪いわね。海堂、アンタは……。篁中尉、外して貰えるかしら？」

「はっ 失礼しました」

篁は部屋を後にした。これで二人きりだ。

「明日、11日なんだけど。何か知ってる？ 11月11日」

「11月11日……。あ、BETAですか？」

「本当に知ってるのね。アンタのソレは何？ サイバスターに使われている魔法か何か？」

その言葉に海堂は考え始めたようで、手のひらを拳の底で打った。何かを閃いた様だ。

「……古い閃き方ね」

Side out

Side マサキ

「11月11日……。あ、BETAですか？」

「本当に知ってるのね。アンタのソレは何？ サイバスターに使われている魔法か何か？」

俺は何故知っているかの理由を考え始めた。今後のためにも何か良い言い訳はないものだろうか？ そして、夕呼先生の言葉を反芻して……。『サイバスターに使われている魔法か何か？』その言葉に俺はピンツときた。頭に電球ピコーンツのマークを浮かべて手を打つ。

「……古い閃き方ね」

あ、知ってるんですね？

俺がピンツと来たのはサイバスターに搭載されている「ラプラス・コンピュータ」の存在だ。これは、ラプラスの悪魔の名を冠するコンピュータであり、ラプラス変換理論が応用されている。機体や兵器の制御のみならず、使う者の魔力次第で因果律を計算し尽くし、ある程度の未来予測を行うことも可能となっているものだ。素晴らしい言い訳！ 素晴らしいコンピュータじゃないか！ これで俺がこの世界を知っていても不思議ではない！ 説明の手間が省けるってモンだ。

「……というわけです」

「何でソレを早く言わないのー!!」

怒られたであります。

「ふう、確かにソレがあれば90番格納庫を知っていたり、戦術機の操縦方法、兵器開発とかも出来るか……それは完全なものなの？」

「この世界で言うところの予言や占いですからね。まあそれよりは遥かに信憑性は高いと思いますか？」

「そう、なら あくまでも予言で留めていた方が良さそうね」

信じてると、外れたときに痛い目にあうからな。それが良いだろう。

「それで？ 11日が何です？」

「アンタ行きなさいよ」

あ、やっぱり？　ですよね〜。

「戦術機で？」

「当然よ。サイバスターは駄目。代わりにアンタ用の不知火が届いてるわ。元々予備で取り寄せていたものが来たから新品よ……シート以外は」

あ、新品シートのビニール破るの好きでしたね。

「じゃあX M 3の実験も兼ねて行きますよ。試したい兵装もありますね」

「期待してるわよ」

「お任せあれ」

「あ、それと」

「はい？」

「新潟から帰ってきた頃にまた紹介するのがいるはずだから」

「はあ………了解しました」

俺はそのまま格納庫に来た。

「明日までに仕上げるんですか？」

「そりゃあそうだ。明後日には新潟にいくちやいけないんだから。まあ簡単なもんだよ。X M 3 キットを載せて、開発してある武装に換装するだけなんだから」

X M 3 キットは O S と C P U のセットのことだ。まあ他にも細かい基盤やら変える必要があるが、そこまで時間はかからない。時間がかかるとしたら兵装のほうだ。

「明後日は私も同行します」

「唯依姫も？」

「補佐官ですから」

「別に良いけど今回はテストだから、データ収集をお願いしますよ」

「かしこまりました」

俺はその日は徹夜で O S の換装。テスト用の兵装を装備させて眠りに就いた。

S i d e o u t

11月11日

新潟 日本海沿岸。

ここだけで見るとかなりの戦術機が広がっている。海上には巡視船に潜水艦も何隻か構えている。

『大尉。BETAは本当に来るのでしょうか？』

『さあな、しかし副司令の言葉だ。我々は信じるしかあるまい』

若い女性の声が通信で飛び交っていた。彼女たちはA-01部隊。香月夕呼の直属のエリートであり、特殊任務部隊であった。衛士としての腕は今の白銀タケル以上の者もいる。

『それと、あの【不知火】のテストって、何も実戦でテストする必要ないんじゃないですか？』

『聞いているの？ 馬鹿みたいなタンク積んで動けないとか止めてよね？』

彼女たちのモニター上の視線の先には不知火を太らせたような戦術機があった。ヘッドパーツを見れば間違いなく不知火であろうその機体の両肩にはミサイルポッドかと思われる装備があり、背中には大きめのタンクが背負われている。そのタンクから伸びるケーブルは、右手に持つ砲身の長めのライフルに繋がっている様に見える。タンクのケーブルは左手側にも伸びており、そこには戦術機の手の平から少しはみ出す位の筒状のモノが見え、左手の甲を覆うように特殊なカバーみたいなものが付いている。更に脚部も2周りほども分厚くなっている。

『副司令から聞いているが、期待できそうにないな。助けてやれんぞ?』

対BETA戦において、衛士が望むのは機動力だ。もちろん火力も必要だが、BETAの攻撃を回避できなければ火力も持ち腐れてしまう。彼女たちから見て『その不知火』はソレに見えた。新兵器だか知らないが、客観的に見てバランスの悪そうな機体なのである。最高峰の機動力を持つ不知火の機動力を殺した不知火。火力アップするだけなら、撃震で十分な気がしてならない。なぜわざわざ機動力のある機体の特性を捨てるのか?

しかし、その不知火に乗る衛士は鼻を鳴らして一言だけ答えた。

『テストデータ取り終わったら助けてやるよ』

『なっ!?!?』

驚きは2点に対してだ。子供の声ということと、彼女たちが軽く見られてるということだ。

ドオンッ!!

海上で巡視船が燃え上がり、沈んでいく。

『来たぞっ! 全機出撃!』

『了解!』

A-01部隊。伊隅戦乙女隊は声を揃えて出撃していった。

S i d e マサキ

「唯依姫。データ転送確認を頼んだ」

『転送確認。感度良好です。お気をつけて中佐』

近くの基地管制塔から唯依姫は返答する。ここでの戦闘データ。兵装の効果は全てデータバックアップされる。つまり、俺のやることは、戦うだけである。

「了解。目標は6割かな」

俺の言う6割とは、テストの成果とかではなく、BETAを相手する……殺す数のことだ。帝国軍にA-01部隊。夕呼先生の声で動く以上、いずれもエリート集団だ。その中で、俺は6割を喰らい尽くそうとしていた。

鈍重に見える不知火が戦場に躍り出ると視界にはBETAの群れがいた。これほどとは正直思っていなかったが、俺は冷静だった。リーダーに補足できる数を確実に振り切っている。目の前に広がるBETAの海だ。

「まずはコイツから」

俺は砲身の長いライフルを構えた。しかし、これは普通のライフル

ではない。背負っているエネルギータンクからエネルギーが供給され放てるビームライフルだ。俺は冷却装置が正常稼動していることを確認しつつトリガーを引いた。

光の道が出来る。十戒のように、ライフルの射線上に道が出来上がった。BETAは融解するようにその体を死体へと変えていく。そのままの体勢でライフルを右に向けていくと道は更に広がっていく。一発あたり約5秒間斉射出来る効果は十分のようだ。事実、BETAの中で最大の防御力を誇ると言われる突撃級デストロイヤーの硬い装甲殻すらも余裕で溶けているほどだ。

『何アレ!?!』 『……レーザー?』 『BETAが……溶けてる?』

『凄い』 『……アレなら機動力も必要ないか』

シューウウウウウ……。

砲身からは冷却による煙が上がる。これは使える。後はエネルギー効率の見直し、小型化を進めれば良いだけだ。

空いた道にBETAの群れは雪崩込み侵攻を続ける。俺は次に両肩、両脚のユニットを開いた。唯依姫とXM3の最終テストに使用した物と同じ、マイクロミサイルだ。今回は当然 実弾の上に破壊力はお墨付きだ。放たれた数百発のマイクロミサイルは容赦なく要撃級クラッブラー戦車級の死骸を重ねていく。しかし、突撃級の装甲殻に当たったものに関しては、イマイチの印象を受けた。

「改良の余地ありつと、お次は……」

俺は両肩と、両脚部の装備をパージして重りを外す、迫ってくるBETAをビームライフルで再度薙ぎ払いながら、左手の筒状のモノ

にエネルギーを蓄えると背中中のエネルギータンクを外した。ビームライフルもエネルギータンクを外してから3発は撃てるようになっている。

『何故タンクを外す？ 燃料切れか？』

通信はA-01部隊の隊長である、伊隅みちる大尉からだった。通信とともに、伊隅大尉の乗る不知火が俺に隣接してきた。

「テストだからね。エネルギータンクを外してもデータ通りに撃てるのかの確認だ」

『貴重な兵器をテストだからと言って外すのか！？』

「『期待できそうにない』んでしょ？」

『っ！ 全機兵装自由！！ 喰らい尽くせ！！』

『了解！』

よしよし、俺は左手の筒を一度 腰に取り付けて、ライフルの砲身を左手で換えた。

そして、BETAの上を飛び、撃ち放った。ソレは先ほどまで一直線に放たれる光ではなく、円を描くように散る様に放たれた。砲身を換装し、切り替えのスイッチを入れるとショットガンタイプになる仕組みだ。

「うん、やっぱりこっちの方が好きかな」

『中佐、好みで武装を選ばないでください』

唯依姫にそう言われるが、個人的にはビームショットライフルの方が好きだ。

ビームライフルも悪くはないけど……あ、ビーム砲にすれば良いのか！ ゼロ距離で撃つたりだとか！ ああやりてえ！！ 造りてえ！！ あ、でもXG-70があるしな……。

「（また良からぬ事考えてるニヤ）」

「（ほつときニヤさいつて）」

『^{レーザー}光線級確認！ 中佐！』

「来たっ！」

光線級は俊敏だが防御力は大したことはない。有効射程距離は30？。決して味方誤射はしない特性を持っている。照射インターバルは約12秒。主にレーザー属種と呼ばれる。コイツと更に強力な重光線級により、制空権はBETAに握られていると言っている。サイバスターなら余裕だが、戦術機だと空を飛ばせば速攻である世行きだ。

俺はレーザー照射のラインに残り、照射を受けた。

『レーザー属種がいるのに何で射線から退かないのよ！』

『所詮は口だけだったか……まだ若かつたろうに』

OPEN回線でそんな声が聞こえてくるが、俺は死んでないし、不知火も無事だ。これがXM3に換装した結果出来るようになった自動防御プログラム。左手の甲にあるオペティカルシールドだ。一時的にビームシールドを張って、レーザーを弾く効果がある。欠点は、

そこまで高い防御力ではないため、真正面からだとはば無意味なこと。必ず斜めなどから受ける必要がある。これは使えるな。バシユッン！

『なっ！？ レーザーが……！？』 『嘘、生きてるの！？』

左手の甲の光が消えた。レーザーを弾き切ったのである。同時にライフルモードで光線級を薙ぎ払った。

「唯依姫。残敵は？」

『現状、BETAの数は残り100を切っています。先ほど仰っていた6割も達成しています』

俺は最後のライフルを撃ち放ちライフルとタンクをまとめて置いた。

「じゃあ、最後にA-01の面倒を見るかな」

S i d e o u t

『残りのBETAの数は100を切ったそうだ。最後まで気を抜くな！』

『了解！』

『言ってるそばから高原突っ込みすぎだ！』

『あのバカ!』

『あ……』

高原の横から装甲殻をもつ突撃級が突っ込んできていた。

ブオンツ!

一振りの光の剣によりBETAの血が舞い散る。
その一振りは装甲殻をバターののように切り開いた。

『データ取り終わったから助けにきたぜ?』

その不知火は戦闘開始前には重装備だった不知火だった。だが今はもう違う、その姿は高機動をよしとする装備内容だった。

『あ、ありがとうございます!』

『礼はいらん。手伝ってやるって言っただろ? さて、夕呼先生の直屬部隊の力、見せてもらおうか?』

『全機、聞こえたな? テストパイロットに7割近くも手柄を取られているんだ。押し戻すぞ!』

『了解!』

『無茶すんな……よっと!』

『なんて機動性能だ……』 『本当に同じ不知火なの?』
『もしかして副司令が言っていた最新OSの実験機?』

そう、彼女たちには常に最新情報が入るようになっていた。まだOSの内容は聞いていないが、その内にも最新OSが優先的に導入されること。かなりの腕を持つ者が指導にあたってくれらるること。まだ『これの事かもしれない』という確信まで届かないモノが目の前にあった。アクロバティックな機動。正確な射撃、斬撃。どれ一つを取っても超一級品の腕前だ。普通、アレだけの動きをしようものなら操縦者の体はすぐに疲弊してボロボロになってしまうだろう。しかし、その動きは最初から最後まで崩れることはなかった。彼女たちが9人でBETAを相手にし、10体撃破すると、あの機体は20体を軽く撃破している。

『化け物が……』

『周囲にBETAの反応なし。状況終了とし、以後は帝国軍に引き継ぐものとする』

『了解。じゃあな』

『待て!』

伊隅の静止も聞かずに、その不知火は行ってしまった。

「帰ったらまた紹介する人がいるんだってさ」

「また？」

「ああ、唯依姫の時も同じように言われたんだ。夕呼先生に」

マサキはトレーラーの中で唯依と話しこんでいた。

香月夕呼に横浜基地から送り出される前に言われた一言についてだ。

「でも補佐官ならもう唯依姫がいるしね？」

「は、はい。そうですね……／＼／＼」

マサキはシロとクロと遊んでいて見逃しているが、篁の目は嬉々としてマサキを見つめていた。

「クリスカ、あれ？」

「そう見えてきたね。あれが横浜基地」

車の後部座席で国連軍のジャケットを着た2人は、社霞と同じ色の髪をした少女と女性だ。少女の名前はイーニア・シエスチナ。イーニアは熊のぬいぐるみを大事そうに抱えている。女性はクリスカ・ビャーチエノワ。二人とも階級は少尉だ。名前からして、ソ連軍、ロシア軍あたりから来たかと推察できる。

知る人は彼女たちの事をこう呼ぶ。

【スカレット・ツイン紅の姉妹】

そして、その数十分前。

「ここが日本の横浜基地かあ」

褐色の肌をした少女が車から降りて、基地を見渡した。

更に後ろから車から出てきた女性は色白で綺麗なブロンドを輝かせている。

「なあステラ、ここでテストパイロットって必要なのか？ 別に世界各地の戦術機が集まってるわけじゃないしよ」

口が悪いのは褐色肌のタリサ・マナダル少尉。それを何も言わずに基地に目を向けるのは、ブロンドのステラ・ブレイメル少尉だ。彼女たちが横浜基地に来た理由。それはタリサが零したとおり、テストパイロットとしての着任であった。

横浜基地にまた新たな風が吹き込もうとしていた。

その風が、そよ風になるのか、嵐になるのかはまだ誰も知らない。

05 じっくり見えて開発は得意なんです(後書き)

感想は随時受付中

- ・『マサキちゃん』と呼ばないで!
- ・X M 3 ほぼ完成! 早すぎる!?
- ・そういえば『ラプラス・コンピュータ』ってあったな。思い出して
- ・試作型【ビームライフル】【ビームシールド】【ビームソード】登場。ダメ?
- ・やっぱり鈍感
- ・そよ風で終わるはずがない???

あゝ長かった。長いと読むほうとしても疲れますよね?

次回からはまた調整します。

今回は紅の姉妹と褐色娘に家庭的ブロンド女性との出会い!?
タケルは総合戦闘技術評価演習へ出発!

次回も続けば……

06 X M 3 説明会（前書き）

伸びてきた伸びてきた〜っ。うれしいな。うれしいなっとお気に入り件数が前回投稿から約50件増えた。ひゃっほい！総合評価も430を超えたぞ！PVも50000件を突破だじえい！

ありがとうございます。これからもがんばるぞ〜。ムッフーン！

今回はタケルSIDEを書くことと思ってたんだけど、思いのほか伸びた。

なので、今回もタケルちゃんはお休み。次回以降でよろしく！

タリサにステラにイーニアにクリスカ。更にA-01部隊との顔合わせの模様をお伝えします。

オルタネイティブとTEの時系列のツツコミがありました。原作破壊の一手でありますので流していただけるとありがたいと思いますが、

一応、その理由ももう少し先に書きたかったのですが、他の読者様も混乱されるかと思い、今回書きました。そのため、無理やりな感がある説明になってしまったかもしれませぬ。そこも流してね？無理？そこをなんとか。

06 X M 3 説明会

Side マサキ

……ゴクリッ

そこにいる全ての者が唾を飲み込み、目を輝かせて一台のパソコンの画面を見つめている。そこにいる者は全員が技術開発チームと整備チームだった。自分たちも携わったモノの結果だ。気になっても不思議ではない。しかし、携わったというよりも、『手伝えた』ということが大きい。誇りある仕事というよりも、誇りを持たせてもらえた仕事だったからだ。

出撃すれば大破して帰ってくる機体。テストすれば残骸となって帰ってくる鉄屑。帰ってこない事だつてある。そんなものが日常茶飯事だ。それが当たり前で、「BETAに負けない機体を」「BETAを殺せる兵器を」と考えていた初めてこの所属になった最初の頃の姿はどこにもなかった。しかし、そんな彼らの目の前には新品に泥が少しいた程度にしか見えない戦術機に、本当に使ったのか疑いなくなる兵器が格納されていた。

映されている映像は数時間前の新潟でのテストデータと動画だ。整備兵達にとって何故BETAが突如新潟に現れたかは不明であり不干涉ではあるが、BETAが次から次へと死体に変わるその映像は忘れてかけていた心を昂ぶらせるものがあった。

「交換が必要なパーツは……これだけ？」 「なんて機動だ。これだけ動いて……」

「X M 3。本物だ……」 「ビームもすげえつすよ！ BETA共

が溶けてやがる」

「さて、諸君。今度はこれを小型化。更にエネルギー効率性の向上。そして、破壊力も上げていくぞ……出来ないと思う者はいるか？正直に言ってくれ」

俺の言葉に手を上げる者は一人もいなかった。皆一様に、出来るとは言わないが、出来るという顔をしている。

「よろしい。では問題点の列挙から始めてくれ、次に改善案。俺は副司令のところに行ってくるからな」

「……了解！」「……」

頼もしい声が敬礼と共に一斉に上がる。

「大成功ですね中佐」

「BETAを全て消し去るまで大成功とは言えないよ。さて唯依姫」

「はい？」

「案内してくれ」

「……はい」

「というわけで、横浜基地としての被害はゼロに等しいです」

「電磁投射砲とは違った兵器……まあいいわ」

「そういえば、帰ってきたら紹介する人がいるようなこと言っ
てましたよね？」

「ええ、今頃演習場にいるわよ。あんたと篁中尉じゃあ大変でしょ
うからね。腕利きのテストパイロットを寄越してもらったのよ」

テストパイロットか……確かに俺以外でテスト出来る奴がいるなら
ありがたい。基本的に自分の腕で確かめたい気持ちもあるが、作業
に追われることもあるからな。

「資料いる？」

俺は資料を渡されるが、見ても知らない人だろうから実際に戦術機
を動かしている姿を見ないと腕とか分からないだろうな。と思っ
ていた。しかし、顔写真がその考えを吹き飛ばし、違う考えを頭に巡
らせた。

「タリサ・マナンドル少尉にステラ・ブレイメル少尉ですか……腕
前はどの程度なのですか？」

「え!？」

「ん? 何で驚いてるのよ海堂」「中佐?」

俺は唯依姫の発言に大きく動揺した。

(何で唯依姫が知らないんだ？ 同じ『X F J計画』で……あれ？)

「……篁中尉。少し外してくれる？」

「は、はい」

夕呼先生が唯依姫を部屋から出し、話を切り出した。

「海堂、この二人を知ってるのね？」

「あ、はい一応。でも、唯依姫が知らないのは変だなって思って……」

「聞かせなさい」

俺は記憶している限りのことをぼかして伝えた。まず、『X F J計画』。これはこの世界の数ヶ月前に不知火などが、これ以上の改修は無理。と行き詰った結果、アメリカなどの技術・装備などを組み込んで、改修不可という限界を破ろうとしたものだ。トータル・イクリプスの世界だと、タリサとステラはこの計画のテストパイロット。唯依姫は日本側の開発主任という立場で、彼女たちとも当然ながら面識があり、知らないはずがないのだ。

「なるほど、サイバスターのラプラス・コンピュータだとそういう可能性的なものを予言しているということね。なら、これで一つ勉強になったじゃない」

「は？ どういうことですか？」

「魔法の予言でも外れるってことよ。それに頼っているようじゃ大

怪我するってね」

それは違う。違うけどここでは否定できない。ラプラス・コンピュータのおかげでこの世界のことの方が分かるという風に説明しているのだから、これ以上は深く言えない。

「それと、一応言っておくけど明日から1週間ぐらい私いないから」

「明日から1週間ぐらい？ あ、タケル達の総合戦闘技術評価演習ですか」

「そう、クリア出来るといいわね」

するさ、タケルなら。

しかし今はそれよりも、唯依姫が何故タリサ達を知らないかが疑問で仕方がない。

俺は部屋を後にして演習場に向かった。

2機の戦術機が演習場を駆け巡っていた。2機とも俺がXM3開発前に改良した吹雪だ。日本の戦術機と海外の戦術機の機動特性はまるで別物だ。しかし、目の前の2機を見る限り、まだところどころにぎこちなさは残っているが、かなり自由に動かしているように見える。

「中々、見所がありますね」

唯依姫は客観的にその機動を見てつぶやく。

しばらくして、訓練を終わらせたのか、機体を降りて二人はこちら

に歩いてきた。

「あん？ 何だよお前。ガキがこんなとこまで入っちゃ不味いだろ？ 誰かお偉いさんの子供か？ ってかなり美形だな……何食ったらこんな風になるんだ？」

タリサは俺に対してそう言い放つ。隣から殺気染みたものを感じてそちらを見ると、唯依姫が冷たい目でタリサを見つめていた。

「……貴様、タリサ・マナンドル少尉だな？」

「っ！ 失礼しました中尉！ タリサ！」

「あ、失礼しました！」

ステラは唯依姫の階級章に気づいて、タリサに訂正するように伝える。そしてタリサはばつが悪そうに敬礼をした。

「私のことはいい。この方はお前らの上官だ！」

「「は？」」

「海堂正樹だ。階級は中佐。よろしく頼む」

本当に知らない者同士なんだと、俺は考え込んでいた。しかし、目の前で驚きの声を上げるタリサのおかげで、また現実に戻される。

「失礼しました……お若いんですね」

「ステラも美人だな。タリサもカワイイし」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……

隣から先ほどとは比較にならないほどの殺気が溢れている。俺はもうその方向を見れない。めっちゃ怖い……殺気だけでBETA殺せんじゃね？

褐色の肌でも分かるほどに赤くなるタリサが口を開く。

風邪か？ 体調管理もしっかりしろよ？ テストパイロットなんだから。

「／／／／……ほ、本当に中佐がああ吹雪を弄ったのか？」

「ああ、そうだな。更に性能向上した機体もあるから、乗り回してやって問題をバンバン出してくれ。それと、コチラの唯依姫が少しうるさいかも知れんが、好きに呼んでもらって構わない」

「じゃあマサキちゃ……／／／」

「それは駄目だ」

ステラの発言を止め、俺は話を続けた。

「明日、この基地のエリート集団に対してミーティングを開くことになっているんだ。タリサにステラも参加してもらえれば、新型OSについて説明の手間が省ける」

「了解！」

「ちなみに海堂中佐は……」

「好きに呼んでいいって、呼びにくいなら構わないけど」

「じゃあマサキは、資料で読んだ通りって事か？ 中佐で、凄腕衛士で、技術開発顧問で、新型OS開発者で、えっと……男？」

「そつだな」

「マサキちゃ……マサキは何歳なの？」

「18だ」

「……中佐？ そろそろ行きますよ？」

「ん？ 何かあったっ……け！？」

そこには怒りを全て内に秘めた天使がいた。悪魔のような天使の笑顔だ。みつどないとしゃっふるだ。さつきから何を怒っているんだ。唯依姫は！？ トイレか！？ ご飯か！？

夜、寝付けずにいた。疑問が晴れずに引っかかっているからだ。

「何で知らないんだ？」

そもそもこの時系列に唯依姫もタリサもステラも横浜基地にいるはずがない。

『説明しよう』

聞いたことがある声が頭の中に響いた。タバコ好きな不良の女神、フレイヤさんだ。

「久しぶりだな。今の現状を説明してくれるのか？」

『簡単にね。マサキをこの世界に送る前に『戦術機の知識や乗り方の能力をあげただけ、無償でつてわけじゃないのよ。この世界の他の人の知識を少しずつ貰って、マサキに入れたってワケ』

「この世界の住人の知識、戦術機の操縦方法を少しずつ……。それは分かった。じゃあ、唯依姫にタリサにステラがこの基地にいるのは何でだ？」 『XFJ計画』で面識があるはずなのに」

『ええと…(パラ)…。あ、これね。『XFJ計画』って言うのが実施されていない世界みたいね。だから面識もないみたい。この世界の過去の人からも知識をもらっているから当然ね、XFJ計画を立案しようって考える知識も薄れてしまえば計画が始まることなんてないんだから』

「……ここはオルタネイティブの世界で間違いはないんだよな？」

『ええ、そこは間違いのないわ。その代わりに、それに派生した世界。トータル・イクリップスの登場人物が出ないとは限らない。ある意味、『オルタネイティブの世界』と『トータル・イクリップスのパラレル世界』のクロスみたいなものね』

「なるほど……分かった。ところでタバコ税が増税……」

『聞きたくないわ』

買い溜めしたんだな……。

Side out

Side A - 01 部隊

伊隅みちるは香月夕呼を待っていた。いや、正確に言えばこの部屋にいる誰もが待っている。昨日の今日で、自分たちの乗る不知火に新型OSの搭載。更に開発担当者からの説明との事で、彼女たちは色めき立っていた。

「大尉、まだですか？」

はやせみつぎ
速瀬水月中尉は待ちくたびれたようだ。この部屋に来てすでに20分が経過している。確かにここまで遅れているとシミュレーターにでも乗っていたほうが有意義な気もする。彼女の性格がピッタリのポジションは突撃前衛長だ。ストーム・ハンガード・ワン

「でも速瀬中尉は焦らされると濡れるんですよね？」

「むっなっかったっ？」

むなかたみさえ
宗像美冴中尉はいつものように突拍子もない言動で速瀬中尉をからかっている。

「全く、美冴さんつたら……もう来ますよ」

冷静に一步引いてそれを見守るのは風間禱子少尉だ。個性の強い速瀬中尉と宗像中尉の間を取り持つ役割を果たせるのは彼女しかないだろう。

「水月も落ち着きなよ」

速瀬中尉を止めるのは戦域管制を担当する涼宮遙中尉だ。総合戦闘技術評価演習中に事故に合い、戦術機乗りは断念するが、全くそれを感じさせない強い心を持っている。

「ねえ晴子、新型OSって昨日の新潟のやつかな？」

そんな上官たちに慣れてしまっていて、目もくれずに同期の柏木晴子少尉に話を振るのは、涼宮茜少尉だ。名前から分かる通り、涼宮中尉の妹である。

「あれは確かに凄かったね」

そんな茜の軽い疑問に暢気に答えるのは柏木少尉だ。冷静で割り切った考えの持ち主だが、明るく暢気なため、周囲とのトラブルになることはない。

「でも子供の声じゃなかった？ もしそうなら萌える展開だよね！」

腐女子的発言が垣間見えるのは築地多恵少尉だ。興奮したりすると話し方に訛りが出てくるが、部隊のみんなは気にしていない。

「燃える？ 多恵の言ってることはたまに分からなくなるな」

軽く困惑の表情を浮かべながら麻倉少尉あさくらは隣の高原少尉たかはらに投げる。

「本当にね。でも子供が戦術機に乗れるわけないじゃん？」

彼女たちがA - 01部隊。伊隅戦乙女隊いすみウアルキリースの9人である。

ガチャ。

扉が開き、同時に静寂が訪れた。敬礼はしない。入ってきた人が敬礼というものを煩わしく思うからだ。

「揃ってるわね？ 私はこの後出かなくちゃならないから、早速説明を始めさせるわね」

香月副司令はバインダーを片手に入ってきた。説明させるということは、開発者も来たということだろう。

「入りなさい」

「はいはい。初めましてA - 01部隊の皆さん。海堂正樹といいます。よろしくお願ひしますね」

そこには整備兵のツナギを着ている銀色の美しい長い髪を持った美少女がいた。頭の上にはクロ猫が乗っており、腕にはシロ猫が抱かれている。なんと愛くるしい構図だった。

Side out

S i d e マサキ

俺は軽く機体の整備をしてからミーティングをする部屋へと向かっていた。シロとクロも当然ついてくる。この場に唯依姫はいないが唯依姫特製の地図がある。迷うはずもなくスイスイ進んで行き、そして俺は……。

「……迷った」

「ミーティングが始まるニヤ？」

「急がないと怒られるニヤ」

行けると思ったんだ。今日こそ迷わずに行けると！ ああこれじゃまた唯依姫に怒られる。幸い、唯依姫はタリサとステラのところへ行っているから問題はないだろう。……いや！ まさに今が問題だ！ 迷ってるじゃん俺！ アホ女神この方向音痴を直すような能力も付け加える！

「（はいはい手遅れ手遅れ）」

ちくしょーっ！

「中佐？ こんなところで何をしているんですか？」

「ぴ、ぴアティフさん！」

ひしっ！

俺は感動のあまり、ピアティフ中尉にしがみ付き、ワケを話した。

「と、とにかく離れましょう中佐／＼ コホンッ ご案内いたします」

俺はピアティフさんについていくと、途中 夕呼先生の姿が見えた。

「ピアティフ？ 何でこんなところ……海堂？ 遅いと思ったら、またなの？」

ええ、またです。また迷子です。

「あ、海堂中佐？ 30分ほど前に部屋で別れましたよね？ 部屋までの地図も用意しましたよね？」

「男は地図には縛られたらいけないのさ……」

「迷子は何言ってるのよ見せて御覧なさいよ……アンタこの地図でどうやったらこっちの通路からこれるのよ？ 右だと言われて一度右を確認してから左に進むようなものよ？」

地図を取り上げられ俺はアワアワとする。

「中佐って方向音痴なんですね。可愛らしい」

「いや、方向音痴で可愛らしいってなんだよ？」

ステラとタリサは俺を見ながら何か言ってる。

唯依姫は額に手を置いて苦悩している。大丈夫？ 疲れがたまつて

いるのかな？

「（誰の所為ニヤ、誰の）」

「ほら、ついたわよ。（ガチャ）揃ってるわね？ 私はこの後出か
けなくちゃならないから、早速説明を始めさせるわね。入りなさい」

「はいはい。初めましてA-01部隊の皆さん。海堂正樹と
います。よろしくお願ひしますね」

あれ、固まってらっしゃる？ 明るく元気にしたつもりなだけ
……。

「補佐官の篁唯依中尉です。あと、主にテストパイロットを務めて
もらう、ステラ・ブルー・ブルームル少尉に、タリサ・マナンドル少尉です」

ステラとタリサは声は発せず、敬礼をした。

「じゃあ、時間も無さそうなんでコチラをご覧ください。あ、ステ
ラもタリサも座ってね」

俺は唯依姫からノートパソコンを受け取り、プロジェクターに繋い
で説明を始めた。

「えー、今回説明させていただくのが新型OSです。正式名称は【
エクセムスリー X M 3】簡単に何が変わるかというと、行動制限の解除と衛士の癖
などをより多く覚えこませることが出来るようになってます」

吹雪丸とラプター君を表示して説明は続いていく。転びそうになる吹雪丸はオートモードが働き機体は自動制御される。その間にラプター君が突撃砲を撃ってくる。吹雪丸はペイントまみれになり『大破!』と表示される。場面が変わってまた転びそうになる吹雪丸。しかし、そのまま突撃砲を構えラプター君に追撃をさせない。むしろ逆に転ばせてペイント弾の嵐を浴びせ大破させた。

「さて、気になる性能向上率は30%です。もはや別物の機体として乗っていたかと良いかも知れません」

「し、失礼ですが。馬鹿にしていますか?」

伊隅大尉は手を上げて映像の内容について聞いてくる。

「大真面目です。じゃあ、これ見ましようか?」

それは昨日の新潟でのXM3の最終テストの映像だった。不恰好な不知火に7割近くのBETAが喰われて行く。A-01部隊はそれを見て釘付けになる。

「この不知火にはXM3が搭載されていました。あ、背中の中をパージしましたね。ここからが本領発揮ですかね。……この動きでもまだ余裕がありますね」

ざわっ!

一瞬、『この動きでもまだ余裕がありますね』の一言に室内の空気が変わった。彼女達の不知火で精一杯動かしてアレで、その上を軽く行き、更に余裕もある。それは信じられないことであったようだ。

しかし俺は気にせず説明を続けていく。

「このようにアクロバティックな3次元機動を可能としておりますが、機体の損耗率は変わりませんので、その辺が制御できない方は出来るようにするか諦めてください。整備兵が大変ですから。ちなみにA-01部隊で一番効率よく推進剤の使用を抑えていたのは伊隅大尉ですね。そして、こちらがX M 3搭載型不知火です」

俺は画面を切り替えブーストに必要な推進剤の使用率のデータを比較するように出した。

「ほとんど変わらないですよ？ あれだけ重そうな装備をしていて、なおかつ伊隅大尉以上に飛び回っています。ちなみに推進剤の量は弄ってませんでした。さて、この差は何でしょう？ ええと、最後にピンチになって『この不知火』に助けられた高原少尉、分かりますか？」

「わ、私？ え、ええとX M 3の効果でしょうか？」

「話の流れからしてOSの効果かと思っただ方も他にいるかもしれませんが、違います。単純に衛士の腕です。推進剤のほかに明確に分かるデータがあります。(カタカタカタ……) コチラです。これは基地に戻ってきた後の解析した結果です。『この不知火』の交換部品はこれです。そして、んー一番損耗率が激しいのは……ポジションから言っても速瀬中尉ですかね？」

「アタシ？」

おおー。

と、画面を見ての声上がる。

「速瀬中尉の機体はこれだけの部品換装が必要です。まあ他の方も似たり寄ったりですが、X M 3の効果はあくまでも機体制御面のマニュアル化が大きな変更点です。その分操作が多くなるところもありますが、機体はより速く動けます。その反面、部品の損耗率は大幅に上がります。では、この差は何故でしょうか？ 涼宮茜少尉」

「これもOSの効果ではなく、衛士の腕ってことですか？」

「その通りです。早くX M 3に慣れると共に、機体を壊さない、長く使うようにする癖をつけましょう。そうすれば結果的に人類の勝利はより身近なものになります。あ、もちろんこのA - 01部隊がこの横浜基地のトップガンと知った上での発言です。それでも未熟な点は多いので磨いていきましょうね」

「すっげ〜ぜマサキ！」

タリサが興奮を抑えられないように声を上げる。

「じゃあ、私は行くわね。あ、このデータは貰っていくわよ？ 海堂あとはよろしく」

そう言って夕呼先生はパソコンを取り、部屋を後にしようとする。

「あと？ 他にも何かあるんですか？」

「んふふふふ〜」

「いや教えてから行って下さいよ」

「アンタに紹介するやつってのはあそこのテストパイロットだけじゃないって事よ。その内にも会えるでしょうから。じゃね〜」

またか。また増えるのか。

Side out

Side 伊隅みちる

目の前の少女の声には聞き覚えがあった。しかし、似ているだけという可能性のほうが高い。この華奢な体であればどの機動が出来るはずがない。恐らくこのマサキという少女はX M 3の開発者のある程度近しい者なのだろう。子供でも天才というものはいるから不思議ではない。しかし、開発担当者本人から直接聞きたかったが、それでも十分理解は出来たからよしとしよう。

動かしてみても感想は驚愕だった。不知火であって不知火でない機体。今まであった遊びなどの面が大幅にカットされている。操縦桿を少し倒せばその通りに動く、これは慣れるのに苦労しそうだ。ましてや、『あの不知火の動き』になるまでもどれほどの訓練が必要なのか。

テストパイロットの2人はそれなりに動かしている。まだまだの動きではあるが、私達に比べれば2歩3歩先を行っている。

ズシャンッ！

『麻倉少尉。こけると整備兵から怒られるので気をつけてください』

先ほどの少女の声が回線に入ってくる。

『は、はい…』

トライアルコースを進むのがこれほど難しいと感じたのは初めてかもしれない。最初の結果は散々だった。これなら旧OSの方がまだ良いタイムを出せるだろう。しかし、1周2周と周ることにタイムは縮み、成績は伸びていく。

『速瀬中尉は今のカーブのところで減速せずに曲がるようにすれば面白い機動を取れますよ』

『減速なし!? 無茶言うわね』

なるほど、遊びがなくなり即応性が上がっているなら機体もそれなりのモノに換装しているということか、ならば……。

ギョオンッ!!

『今の伊隅大尉の動き良いですね。速瀬中尉、データ送るんで試してみてください』

なるほど、思うとおりに動かせると考えたほうが良いかも知れんな。

Side out

S i d e マサキ

この分なら早く慣れそうだな。俺は唯依姫と格納庫に来ていた。

「初めて戦術機に乗るってことなら問題ないだろうけど……」

「旧OSに慣れてますからね。新型に慣れるのは時間が必要ですね」

そこに格納庫では見かけることはまずない存在がいた。

「霞？」

呼んでみるが反応がない。そういえばウサ耳がなく、髪もツインテールに結っていない。国連軍のジャケットを着ている霞(?)がいた。

あれ？　今思えばウサ耳無しは寝るときだけだよな？　髪も……。しかもジャケットを着るなんて事は一度も……はっ！！

「何でここに……?」

「中佐？」

『その内にも会えるでしょうから』

夕呼先生の声が脳内に響く。

ってことは……イーニアか!?

ピクンッ

イーニアと思わしき人物が振り向いてくる。俺は固まる。間違いないイーニアだ。

俺は少し後ずさる、イーニアも連動しているかのように一歩近づく。初対面のはずだが、何故かイーニアは目を輝かせて俺から目を離さない。

俺も不思議な気持ちになる。何というか……獲物になってる気分?

クロとシロは何かを感じ取ったのか、唯依姫の方へと移動する。

ジリ……ジリ……

「中佐、どうしたんですか?」

バツ!!

唯依姫の俺を呼ぶ声が引き金となり、俺とイーニアの追いかけっこが始まった。

「どうして逃げるの!?!」

「何で追ってくるんだ!?!」

第4コーナーを曲がって格納庫を抜ける。

「あ、マサ……キ？」

一瞬タリサとステラが見えた気がするがとりあえず後回しだ。

「後ろの子は誰かしら？」

「さあ？」

「イーニア！？」

チラッとクリスカも見えた気がする。

「誰か後ろの子を止めてーっ！」

「誰かマサキを止めてーっ！」

俺の名前も知ってる？ ワケが分からん！！
それになんて体力だ。全力じゃないにしても息をそれほど切らして
ない。

147

ロングストレートに入り、PXへ俺は駆け入った。

「マサキちゃんじゃないか、どうしたんだい急いで？ まだ夕御飯
には早いよ？」

「おばちゃん匿ってくれ！」

俺は調理場の方へ入り、息を潜めた。

「おや、イーニアちゃんじゃないかい。夕御飯には早いよ？」

「志津江、マサキ来なかった？」

志津江とは京塚のおばちゃんの下の名前だ。そこまでの仲になっていたか。

「何かあったのかい？」

おおっ、おばちゃんが俺の味方をしてくれている。

「マサキが逃げるの。イーニア、何もしてないのに」

「何で追いかけてたんだい？」

そっだそっだ。何で追いかけれにゃあいかんのだ？

「……何でだろう？」

ガンッ

「？」

俺は勢いよく頭を冷蔵庫にぶつけた。

「いやーデカイ猫が紛れ込んでね。イーニアちゃんはマサキと仲良くしたいんだね？」

「うん！ うんうん！」

何度も頷いてるのか、イーニアの声が届いてくる。

「だってさ猫さん。出てきな」

俺は襟元を掴まれカウンター越しに顔を晒した。

「マサキ！ ……追いかけてごめんね？ 許してくれる？」

「あ、ああ逃げてごめんな。びっくりしたからさ……」

「イーニア！ ……良かったここにいたのか」

「クリスカ！ マサキと会えたよ！」

「クリスカ・ビャーチェノワ少尉だ。よろしく頼む中佐」

「何で俺の事知ってるんだ？ 特にクリスカなんてイーニアに近づくとやっは誰であろうと毛嫌いするんじゃないか？ スカート・ツイン 紅の姉妹がこの基地にいることも不思議だ」

俺が知る限り、クリスカ・ビャーチェノワ少尉という人間はイーニア・シエスチナ少尉以外の人間を嫌う節がある。恐らく国で色々あったのだろうが、イーニアが一番大切という印象がある。

「どうして中佐がそういったことを知っているかが私には不思議ですが、私とイーニヤは香月夕呼に呼ばれてきた。そして海堂中佐のことは香月夕呼に、そこにいる京塚志津江、他にも色々話を聞いた」

「聞いた！ 私と同じぐらいの身長で、銀色の長い髪、見た目に反して偉いって！」

エヘンツと言わんばかりにイーニアは俺をカウンター越しに撫で始めた。

「どづいことだ？」

「中佐のひとりなりは分かったということだ。あなたほどの基地で慕われている人物はいないだろうって。だから中佐のことは信頼する。そうでなくても信頼できそうだからな　／／／」

「中佐！　ここでしたか、いきなり走り出してまた迷子になったらどうするんですか!？」

「はっはっはっ！　唯依ちゃんも苦勞が耐えないねえ？」

おばちゃんは唯依姫を労っている。

「「ニヤーン！」」

カウンターに頭を乗っけている俺の頭にクロとシロが乗ってくる。

「あゝ腹減った。あ、マサキ腹減ってたのか？　すげえ速さで走っていくからびっくりしたぜ？」

「今日は何がいいかしらね？　……さば味噌？　マサキは何にするの？」

タリサにステラもPXにやってくる。

続くようにA・O1部隊もやってきた。

「おっとまだ早すぎたか？」

「速瀬中尉は相手が早いと満足できませんもんね？」

「む〜な〜か〜た〜？」

「って麻倉少尉が言っていました〜！」

「私言つてません〜！」

「全く静かに出来んのか貴様らは……」

「あ、海堂さん丁度よかったOSの質問なんですけど……」

「涼宮明日にしなさい明日に〜」

「海堂さんのことマサキちゃんって呼んでいいかな？」

「却下します……慕われて、ねえ？」

俺は騒がしくなったPX内でやっとカウンターから抜け出して席についた。クリスカは俺の前に座り口を開いた。

「……言いたい事は分かりましたか？ 中佐殿」

「ああ、よろしく頼むクリスカ」

「私も！ 私も名前呼んで！」

「イーニアもよろしくな」

「うん！」

「それから、クリスカ。俺のことは階級で呼ぶな。『ちゃん』付けでも呼ぶな」

「マサキと呼べばいいのか？ 変わった上官だ」

06 X M 3 説明会（後書き）

感想は随時受付中

今回の出来事。

- ・ T E キャラがいるのは何で？ の説明が不良女神からありました。
- ・ タバコ税の増税に女神も苦しんでいるようです？ ちなみに作者は吸いません。
- ・ X M 3 説明会へようこそ！
- ・ 追いかけてっしょうぜ！

A - 0 1 部隊の方々はまだマサキの正体（中佐・X M 3 開発者・凄腕衛士）に気づいてません。X M 3 についても説明要員としてしか認識してません。あ、もちろん男だとも思ってます。クリスカとイーニアは資料的なものを見ているので上記のことはほとんど知っています。

最後は少し青春っぽさが感じられる風なものに仕上がった。
いいな〜いいな〜。

次回こそタケルちゃんを書きたい。

続けば、続くとき、続きなさいっ！

07 泳げなくても海は楽しい(前書き)

この物語を、読む前に、言っておきたい、事がある、
なんて作者宣言的な間違った替え歌を歌いながら俺参上！

さて、戦況報告が2点ございます。

1. 『勝手にランキング』ってモノで第一位だよ！！
マジでびっくりした。何でもそうだけど【1位】って取ったことないから本当にびっくりした。ありがとうございます。言葉だけじゃ表しきれない感動があります。生きてて良かったよ……何回死のうと思っただことか、今日も思っただけどw。これからもよろしくお願ひしますだよ？

2. 前回の前書きでも似たような事を言っただわよね？
総合評価があれから更に100ポイント以上UP！ お気に入り件数もまた50件近くUP！ すんごいハイペース！？ すごいぞ！ コイツ……動くぞ！？ 読んでくれてありがとうございます。やっぱりこれからもお願ひしますだよ！

出来る範囲で、構わないから、

07 泳げなくても海は楽しい

Side タケル

11月11日。

基地全体に非常召集の警報が鳴り響く。

来た！

俺が夕呼先生に伝えておいたBETAが佐渡島から新潟へ侵攻してきた内容だ。

俺達207小隊は休日だったが非常召集によりまりもちゃんの所へ集まる。

「全員集合しました！」

「よし、状況を説明する」

そう言っつまりもちゃんは説明を始めた。

新潟に上陸して来たBETAは帝国軍が迎え撃つ形で今も戦闘は続いているらしい。更に援軍も合流し、戦況は優勢。前回はこの時点で更に侵攻してきたんだよな。

「上陸したBETAの進路を統計的に分析した結果、ヤツらの最終目標地点が本横浜基地である可能性が高いことが判明した」

「えっ！？」

そう、前回はほとんどまっすぐにこの基地にBETAは向かってきた。

「そのため、現時刻からBETA全滅が確認されるまで、当基地は防衛基準体制2へ移行する」

「は、はい……」

「その間、訓練兵である貴様達は待機とする。速やかに自室に戻り情勢の変化に対応できるように待機せよ。以上だ」

「……了解！」「……」

俺は自室にて待機していた。前回の世界ではBETAが基地目前まで来て気絶したっけ。でも、これでBETAが全滅すれば、前回から歴史は大きく変わるだろう。

俺の記憶の信憑性も高まっただろう。

俺だけじゃない、たくさんの人たちの歴史も変わるはずなんだ。

『総員に通達。防衛基準体制2は解除されました。繰り返します…』

…』

俺は真っ先に飛び出して、夕呼先生の執務室へ飛び込んだ。

「先生っ！」

「騒がないの、聞こえてるわ」

「いろいろ……ありがとうございます」

「あなたがお礼を言う必要はないわ。あたしの興味でアイツを試したかったんだから」

「アイツ？」

「アンタと1ヶ月前にここに来た海堂正樹よ。アイツは化け物ね。送られてきたデータだとBETAの数は2万強。その内の7割以上を一人で相手にしたらしいわ」

「7割!? 1万4千ものBETAを一人でですか!？」

「試したい新兵器があつたらしいけど、帰ってきてからその報告もあるでしょうね……。他のBETAは帝国軍がうまく連携して止めたらしいけど、まあいいわ。今日はもう戻りなさい。人が来るのよ」

「あ、はい。すみません」

コンコンッ

「もう来たのね。入って」

「香月副指令。予定通りテストパイロット2名着任しました」

ピアティフ中尉だ。後ろには褐色の肌の少女に金髪の女性がいる。2人とも服装は国連軍のジャケットを着ている。テストパイロットか……。

俺は敬礼して部屋を後にし、自室へと戻った。

「イーニア、何処に行ったの？」

「誰かお探しですか？」

見たことがない人だったが、非常に困惑の表情を浮かべて誰かを探している国連軍の人を見かけた。俺が話しかけると困惑の表情は怪訝そうな顔を一瞬浮かべて、一気に怒りの表情に変わった。

「貴様には関係ない！」

ええ〜？ 何で初対面で怒られてるんだ俺。

俺は謝罪して敬礼して自室へと戻った。

これも歴史が変わっているからなのだろうか？

総合戦闘技術評価演習

「本作戦は、戦闘中、戦術機を破棄せざるを得なくなり、強化外骨格も使用不能という状況下で、いかにして戦闘区域から脱出するかを想定した物である。従って脱出が第一目的だ。また行動中、地図中に記した目標の破壊……後方攪乱を第二優先とする」

南の島でバカンスを楽しむ夕呼先生を尻目に、俺達の訓練生の集大成とも言える【総合戦闘技術評価演習】が始まるうとしていた。

「各自時計合わせ……………57、58、59 作戦開始！」

「了解！」

俺は美琴と、彩峰はたまと、冥夜は委員長と組んで、3手に分かれて演習を進めていく。一日でも早くクリアできれば、一日でも早く衛士になれる。一日でも早く戦術機に乗れば、一人でも多くの命を救うことが出来る。俺は演習を確実に進めていった。

Side out

Side マサキ

「唯依姫。南の島に行かない？」

「何を言ってるんですか。まだデータのまとめが終わってないじゃないですか。現実逃避はまだ先にしてください」

データ入力をしながら唯依姫は声を上げる。

「タリサにステラは？」

「行きたいな。その時は1週間ぐらい休み貰いてえな」

「良いですね。水着も確か持ってきてるし」

タリサとステラはテストパイロットとしてやることがないため、シロとクロを撫で回して暇を潰している。二人は丸っと。

「悪いけど遊べるのは2〜3日だけなんだよね〜。クリスカは？」

「そ、それは命令か？（命令でなくとも行きたいが……）」

書類に目を通しながら赤くなるクリスカは答える。俺はクリスカの欄にも丸を付ける。

「命令なら行く……と」

「イーニアは？ 聞かないの？」

少し頬を膨れさせるかのように、イーニアは自ら聞いてくる。

「何だ断るつもりだったのか？ 強制的に連れて行くから安心しろ」

その返答に膨れっ面は一瞬でパアツとなり、明るいイーニアに戻った。

「中佐、先ほどから何を書いているんですか？」

データ入力に一区切り付いたのか、唯依姫は俺のところに来てくる。

「唯依姫、今一度聞こう。南の島に行かないか？」

俺は再度説得にかかった。

「最近働きづめじゃん？ 新潟の一件もあるし、自分にご褒美的な？ そんな何か欲しくてな。ほら、根詰めすぎても辛いだだけで良い結果は出ないよ。そんなわけで、みんなとの親睦も含めて南の島に行くことに……したんだ」

俺は書類を唯依姫に見せ付けるように掲げた。

「『したんだ』って決定事項じゃないですか!？」

俺から書類を奪い取り、内容を読み唯依姫は驚愕の声を上げる。

そう、決定事項なのだ。

【演習】という名目で提出された書類は、承認の判子を押されて帰ってきている。参加者は大多数にならない限り、俺のさじ加減で決めていいとの事なので、この場にいる面子で行こうと考えていた。もちろんタケル達がいる島へだ。

「水着に自信がないんですか篁中尉？」

「いや、マサキに見られるのが恥ずかしいんだろっ？」

「篁中尉。行かないならマサキを失う覚悟を持つんだな」

「南の島でマサキが貰えるの!？」

「意味不明だお前ら。さて、どうする唯依ひ……め!？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

「貴様ら……水着だの、中佐に見られるのが恥ずかしいだの、中佐が貰えるだの好き勝手言っ……」

マジギレか、マジで噴火する5秒前……良い人生だった……か？
俺は天を仰ぐように目を閉じた。恐らく悪魔の翼を生やした唯依姫が極大魔法を使用し、この基地全てが地獄の業火に焼かれ全てが融解するのだろう。え？　そういう話じゃないって？　まあそんぐらい怖いって事さ。

しかし、唯依姫の次の言葉は俺の意に反するものだった。

「中佐は私のだー!!」

「……なっ!?!」「」「」

「ん?」

俺以外の4人は愕然としている。俺は飲み込めずに首をかしげた。

「中尉!　マサキは私のことカワイイって言ってるんだぞ!?!」
ドサクサに紛れて抱きついたぜ、小さな一歩でも私にとっては大きな一歩!?!」

タリサは俺の腕を抱きしめるように唯依姫に向き直った。

「何だ何だ?」

「私のことはキレイって言ってます!　(あ、やわらかくて良い匂い……本当に男の子かしら?　ああカワイイ)」

逆サイドからはシロを放ってステラが腕を取ってくる。

「おわっシロが投げられた!　……おお流石ネ」

「ニヤァ（びつくりするニヤァ!）」

「中尉はマサキの事を名前ですら呼ばないではないか!（これほどとは……反則過ぎるぞマサキ!）／＼／＼／＼」

後ろからはクリスカが真っ赤になって腕を回してくる。

「キャラじゃない事するから真っ赤になるんだよ。無理すんな」

「マサキは私のだよ!（抱きつくのは私だけでいいのにっ!）」

イーニアは前からしがみ付き、唯依姫のほうに顔だけ向けている。

「もはや身動きも取れん。何だコレは?」

「貴様ら羨ましいことをするなーっ!」

「えーと、何だかよく分からんが唯依姫も行くって事でいいのか?」

「中佐の貞操の為に行きます!」

俺は再度首を傾げて、唯依姫の欄に最後の丸を付けた。
何なんだろう一体。

S i d e o u t

S i d e タケル

【3日目・夜】

「千鶴さんと冥夜さんが来たよ」

美琴は周辺の警戒をしながらそれを見つけたようだ。

「お、ついに来たか……」

前回は4日目のギリギリの時間に着いた……今回は2日目の夜に到着だ。体力がそのままで行軍速度が速いこと、トラップの位置が大体分かることなどが非常に大きい。

「タケル、少し灯が漏れているぞ……30m先からでも丸見えだった」

「え？ ああ、やべえやべえ」

冥夜の指摘に俺は焚いている火を若干散らしていく。少し気が緩んだかな。

「しかし……そなた達、さすがだな」

「ホント。ふたりはいつ着いたの？」

「ボクたちは昨日の夜に、ここに着いたんだよ」

「……!？」

「それは本当なのか……?」

ガサガサッ

「あれ、もしかして、すでに揃ってる?」

「おう。おまえ達が最後だ」

たまと彩峰も合流した。これで第一目標はクリアだ。俺達は各自、取得できたものの確認。施設破壊などを説明していった。

前回の世界と同様に、たま達は脱出地点が書かれた地図。弾が一発だけの対物体狙撃銃を一挺を手に入れていた。ライフルはかなりでかい。まあ2分割して持ち運べるから良いだろう。そして、冥夜達はラペリンググループ。俺達はシートだけだ。

「……OK、じゃあ、班ごとにローテーションを組んで、交代と休憩と食事を取りましょう」

「そうか、委員長達まだ食ってなかったのか」

「合流地点が近かったのはわかっていたからな。早く到着したかったのだ」

そう言って、俺達は食料調達に足を運んだ。

「わっ、この実食べられるかな」

たまが見たこともない木の実を拾い上げる。
それに対して間髪いれずにサバイバル特化した美琴が否定の声を上げる。

「パンギノキには強い毒があるよ」

「……………これは？」

「マチンは猛毒だね」

「……………なるほど」

彩峰は美琴に確認しながら委員長を見た。

「……………。なんで私を見るわけ？」

「……………え？」

「え？ じゃないわよ！」

「……………見てない」

「見たでしょうが！」

「あげる」

「いらないわよー！」

「おまえら……………」

……………前倒しに集合できても、いい感じに不安が残るのは何故だ？

委員長と彩峰の仲は悪い。実際は同じ方向性を持っているから話し

合えれば大丈夫なはずだけどな……。

俺達はその後も順調に進み回収ポイントまでやってきた。コレって確か、発煙筒を焚くと砲撃されるんだよな……。

Side out

Side マサキ

「番号！」

「1！」 「2！」 「3！」 「よーん！」 …… 5（完全に遊びに行く準備だけだコイツら……）」

唯依姫だけ元気がない。よっぽど疲れてるんだな。この南国行きでリフレッシュしてもらえればいいのだが。

「では帰るまでが演習だ。気を抜かずに全力で取り組むように！」

「……了解！」 「……了解」

俺達はへりに乗り込み、出発した。

そこまで時間もかからずに着くには着いたのだが……。

「見えてきたぜ海！」

「キレイなところね」

「貴様ら遊びに来たんじゃないんだぞ!？」

「唯依違うよ？ 遊びに来たんだよ？」

「イーニアの言つとおりだ。篁中尉、これは【演習】だ」

そんな会話が飛び交う中、発煙筒が焚かれているらしく、赤い煙が地上から昇ってくる。

「あれは?」

「ああ、言つのを忘れてた。訓練生が演習中なんだ。このへりはあいつ等の回収用のへり」

「なんだけど……」。

ガガガガガガガガガッ

「「「「「なっ!?!」「」「」「」

着陸地点のへりポートが離れたところに設置されている砲台によりポロポロにされていく。

「あの発煙筒を焚いている訓令兵は!？」

「……ものすごい速さで逃げてるわね」

よしよし、タケルは無事だな。

ヘリポートから逃げるようにヘリはその場を後にする。

「あれじゃあ降りれないんじゃないか？」

「なあに他のポイントで降ろしてもらおうか？」

「で、何しに来たのあんた達？」

夕呼先生はビキニ姿で完全にバカンスしてる。しかし、備え付けられたテーブルにはパソコンがあり、X M 3などのデータから000ユニットの件で思考しているのが分かる。いや、流石に000ユニットは分からんわ。脊髓付きの脳味噌から、すごい重要な役割を持った人間なんて造れないっす。流石本物の天才は違いますな、センセ。

「息抜きの遊びとお祝いに来ました」

「そ、あいつ等なら今頃……」

「さっき砲撃したところ見てました。別の脱出ポイント設定したんですよね？」

「ええ、まあ明後日ぐらいまでかかるでしょうね。……アンタ何してんの？」

俺はバッグから道具を次々に出していく。釣具だ。

「メシの調達をと考えましてね。あ、いい日本酒も用意してますよ

センセ」

俺は更に酒、調味料や米も取り出した。

「そこまで用意してるってことは期待していいんでしょうね？ 任せたわよ」

らじや〜。

女性陣は着替えに行った。

Side out

Side 女性陣

「少尉……何を见ている」

「やっぱり中尉のはでかいな……」

「あら、タリサは根強い人気がありそうなステータスがありそうじゃない」

「そしたらアレには勝てないだろ……」

視線の先にはたった今着替え終わったイーニアの姿があった。女性からしたら子供として映るが、男性からしたら熱狂的なファン

が出来そうな感じだ。

イーニアの胸元には「イーにあ」と書かれたネームプレートがあった。スクール水着というソレは似合うとかいうレベルを遥かに超えている気がする。

「そんな事よりも……」

地味な柄のビキニを着こなすクリスカは全体に聞くように声を上げる。水着の柄は地味かもしれないが、プロポーションが全てを語っていた。「この人は強敵です」と。

「そんな事って何だデカパイ!!」

「なっ!? 好きで大きいわけではない!」

「はいはい、落ち着いて。何を言いかけたの?」

顔を少し赤らめたクリスカは落ち着いて再度口を開いた。

「マサキは……どんな水着なんだろう? やっぱりハーパンツとかの下だけの水着なのか?」

「下だけって……当たり前じゃねえか。上半身裸に決まって……あれ?」

「それはそれで拙いんじゃない? 何か、そう、色々と拙い気がするわ」

何故か彼女達の脳内では胸元を腕で隠すマサキの姿しか浮かんでこない。

「じゃ、じゃあ……アタシ達の水着みたいにもも着けてるとか？」
ビキニの上だけを着けてるマサキの姿を想像して4人は鼻血を噴出す。

「ブツ……それは犯罪だ。確実に捕まる。何も着けてないより破壊力が……」

「ちゅ、中佐でヤらしい想像をするな貴様ら！」

「鼻血出して言うセリフじゃないですよ中尉」

「着替え、まだ終わらないの？」

いつの間にか先に行っていたイーニアが戻ってきて、4人は冷静さを取り戻し、砂浜に戻った。

「遅かったな？」

そこにはハーフパンツにパーカー姿の海堂正樹がいた。

「……そう来たかっ!!」「……」

Side out

Side マサキ

何か不思議な視線を向けられているが……。

「じゃあ各員全力で任務^{あそび}を遂行せよ！」

「ちよつ！ 『各員』って待てよマサキ！ 泳がないのかよ!？」

「泳がないのでしたら水着の意味も薄れてしまえますね」

タリサはスポーティーなセパレートタイプの水着に着替えていた。
ステラとクリスカはビキニタイプ。

唯依姫は競泳タイプの水着。

イーニアはというとお約束なスク水だ。スクール水着だ。

あえて略称から直して説明した意味は特にない。言わなきゃいけない気がしただけだ。

「マサキ、海に来て遊ぶといったら、コレじゃないのか!？」

「マサキが海に入らないなら、イーニアも入らない！」

「ど、どういことですか中佐?」

みんな俺の行動に疑問を持っているようだ。

説明しよう！ 俺は泳げないのだ!!

海? 見るものだよソレは。

泳ぐ? H A H A H A 船で渡ればいいじゃないか。

「というわけで、俺は別に泳ぐとか一言も言っていないぞ?」

「「「「「どういわけだ(ですか)!!」「」「」「えーっ!」」

俺は非難の声を聞き流し、大き目の麦ワラ帽子をかぶり、予定して

いた釣り場へと向かった。

「こうなったらビーチバレーで勝負だ!」

「私は止めておこう」

「中尉、逃げるんですか?」

「いや、逃げるとかではなく……」

「負けるのが怖いと?」

「いや、だから……」

「それじゃあマサキは私のだよ?」

「いつの間にそういう勝負になったんだーっ! やってやるわよ!」

うん。何の話をしてるかは分からないが、仲は良さそうだ。

今回は一本道だったから流石に迷うことはなかった。

「やつほ〜まりもちゃん」

俺はヒラヒラと手を振り、そこにジッと佇むまりもちゃんに軽い挨拶をした。

「海堂中佐!?! ご苦労様です!」

「あゝ敬礼いらないますよ? 休暇みたいなものですから。まあ休

暇以外でもいらないですけどね」

「は、はあ。このようなところへ、わざわざ？」

「まあタケルとかどうなのかなって思いましたね。まあ問題ないでしょうけど」

俺は釣具を組み立て、質問に答える。

「ええ見る限り、大きな問題はありません。昼間に基地襲撃を行うなど、セオリーとは違った行動をとることもありますが、行軍速度は速いですね」

「アイツはね、少し生き急いでるんですよ」

「生き急いでいる？ 白銀が、でありますか？」

俺は釣り針に餌をつけて海へ投げ入れる。

俺の頭の上にはクロがいる。膝の上にはシロがノビノビとしている。

「そう、人類がどうなるのか理解しているかのように、そしてそれを変えようと必死でもがいてるんです。まあ、誰も彼も……全人類を救いたいんですよ。タケルって全てにおいて普通以上にこなすでしょう？」

「え、ええ驚かされることばかりです。白銀が衛士になれば、と先を考えるのが楽しいほどに」

「もしそうになったら、まりもちゃんも階級が下になっちゃうんですよ……」

衛士になれば階級は少尉。まりもちゃん、そこまで育て上げる軍曹。少尉より下だ。

「ええ、送り出してやることしか出来ませんし、私から学ぶことはないかもしれませんがね……」

「ん、タケルはそんな事考えてないですよ。最高の恩師として考えているはずですよ」

「そ、そうでしょうか？ 彼ほどの者の教官を務められているのが日々疑問ですよ」

まりもちゃんは苦笑しながら照れたようだ。

「おっと……餌だけ取られたか……。魚はいるんだよね」

俺は餌をつけ直して、また海に投げ入れる。

「海堂中佐、不躰で申し訳ありませんが、香月副司令から少しは話を聞いています。中佐の衛士としての腕前は横浜基地トップクラス。開発顧問もされているそうで、そんな中佐は白銀とはどういった関係なのでしょう？」

「どういった関係って……男同士ですからねえ」

「男同士？ 誰と誰がですか？」

「あれ、聞いてませんか？ 俺は男ですよ。だから色恋関係は遠慮と
いうか、拒否したいですね」

「男だったんですか!?!」

「ええ、よく言われます(あの不良女神の所為で……)」

「……ってそうじゃありません! 白銀と何故知り合いなのかを……!」

「かかった!! お、デカイな……! まりもちゃん網用意して!」

「は、はい!」

釣れたのは見事な鯛だった。

「よっしゃ〜! 今晚、コイツの刺身とお吸い物でも差し入れ持ってきますね」

「あ、いや、あの……! 白銀のことは」

俺は唇に人差し指を当ててウインクして言った。

「Need to know」

Need to know.

つまり、『情報は知る必要のある人のみに伝え、知る必要のない人には伝えない』ということだ。

まあ、いつか話すことがあるかもしれないな。

「っ 失礼しました!(この仕草……! やっぱり女の子じゃないかしら……)」

「敬礼はいりませんよ。じゃあまたあとで」

俺はポイントを変えるために片付け始めた。

「というわけで、鯛の刺身とお吸い物。それに鯛めし。焼き魚が10本ほどございます」

「「「「「おおっ！」「」「」「やるじゃない」

「あ、夕呼先生。演習は明日で終わりだと思います」

「あら、結構早かったのね。じゃあ明後日で基地に戻るわけね」

「ん？ 何で明日戻らないんだ……ですか？」

タリサが、副指令だった。と口調を直して聞いた。俺がそれを答える。

「訓練生だからな。ご褒美だよ。南の島の海でバカンスなんて普通出来ないんだぜ？ 演習に合格して衛士になって『おめでと〜』ってな。次は戦術機だぞってな」

「そうか、これから肩並べて戦うことになるんだな……」

しみじみとタリサが夕日に染まる海を眺めている。

「お、今の表情良いね。カワイイ」

「っ！／＼／」

「「「「っ!?」「」」」

「「「「これから肩並べて戦うことになるんだな……」「」」」」

何を思ったのか、クリスカ・イーニア・ステラ・唯依姫がハモってタリサの言葉を海に向かって復唱していた。

「何？ あんた等って芸人だったの？」

「何をしているんだお前らは……」

「ぐっ！ 失礼しました」 「慣れない事はするものじゃないですね」

「……何が悪かったんだ？」 「ちゃんと言えたよ？ カワイイ？」

「あ、夕呼先生。基地に戻ったらでいいんで、少しの間基地を離れることを許可いただきたい」

「あら、何日ぐらい？」

「んゝ1週間もいらなかな……。1日で……。2日で……。2ゝ3日
つてところですかね」

「分かったわ。後でもいいから報告しなさいよ？」

「らじやゝ」

S i d e o u t

S i d e タケル

「回収ポイント確保！ 散開して全方位警戒！」

「回収機は!?!」

「目標範囲内に機影なし！」

俺達は5日目にして 総合戦闘技術評価演習をクリアしようとしていた。

「状況終了！ 207分隊集合！」

あ…れ……? ヘリは? まりもちゃん、どこから?

「只今を以って、総合戦闘技術評価演習を終了する。ご苦労だった」
終わったのか。……疲れた。

「評価訓練の結果を伝える」

えっ?

ここに来れば合格じゃないのか!??

「敵施設の破壊とその方法、鹵獲物資の有効活用……何れも及第点といえる」

よしっ！

「最後の難関である砲台を、最小の労力と時間で無力化したことは、特筆に価する」

きたきたー！！

「しかし……」

えっ！？

「白銀と鎧衣は基地襲撃を日中に行ったな……なぜ、セオリーである夜明け前を選ばなかった？」

「退路の確保ができていないジャングルでの夜間行動は危険だからです」

「……ふん。周囲の地形を確認してから、夜間に襲撃することでもできたのではないか？」

しまった……。焦りすぎたのか……！！？

「敵施設を迂回することもできたな？ これらの減点は決して小さくないぞ」

それは……人間相手の場合だろう！？

俺達の敵はBETAじゃないかッ!!

「　　まりもちゃん!」

「　　まりもちゃん……?」

しまった!　こんな時に……つい……。

「まあ……いい。白銀、今日の所は見逃してやろう……めでたい日だからな」

「「「「　　えっ!」」」」

……どういう事だ?

「おめでどう……貴様らはこの評価演習をパスした!」

「……えっ……でも……それだけの重大なミスを……」

「榊、この演習の第一目的はなんだ?」

「脱出……です」

「実践に於いて、計画通りに事態が推移することは稀だ。それ故、タイミングや運といった要素も重要になる。それらを全て味方に付け、結果として目的を達成すれば『それが正しい判断だった』ということになるんだ」

……!!

「マサキちゃんでしたっけ？」

「基地から南の島まで追いかけてくるほどの仲とはな……」

「みんな、体力は余ってるかしら？」

「……もち」

「ん？」

俺は変な威圧感を感じて後ろを振り返ると気絶する羽目になった。
気がつけばこの島、6日目、みんなは楽しそうに海で遊んでいた。
霞へのお土産でも探すか。

Side out

Side マサキ

「あゝ大丈夫かコイツ？」

俺はボロ雑巾のようになっていたタケルを棒で突いている。

「マサキさんでしたっけ？」

「んあ？ 委員長か。何かな？」

「こんな島まで白銀を追ってきたんですか？」

「まあ目的の半分はそうだな」

「たけるさんと、どういう関係なんですか!？」

今度はたまか

「関係も何も。ただの……知り合い? 友達？」

「何故、疑問なのだ？」

冥夜も参戦してくる。

「会って間もないし、違う配属になっちゃったしね」

「それで……どういう関係？」

「ボクも気になる!」

207全員集合だな。愛されてるね〜タケル。

あれ、待てよ？

「……もしかして、俺のことタケルから聞いてないのか？」

「聞いてない」「俺？」

「俺は海堂正樹。男だ」

「」「」「」
ええっ!？」」「」

「マサキ!」

ドスッ

俺の脇腹にイーニアが突撃してきた。

「ぐっ……イーニア色々と危ないから急にタックルを仕掛けるのは止めような？」

「マサキ、こいつ等が訓練生か？」

タリサが焼き魚をムシャムシャと食べながらやってくる。

「あら、カワイイお嬢さん達ね」

ステラは俺の両肩に手を置いて言ってくる。

「ほう、良い面構えをしているな」

クリスカは冥夜を見てそう呟く。

流れからすると唯依姫も来るかと思っただが、夕呼先生とパソコンの画面を見て話し合っている。仕事熱心だ……何しに来たんだか。まあ外すところは外してやってるのだろう。

「ああ、先に紹介しておこうか。横浜基地でテストパイロットなどを務めている少尉たちだ」

「けっ 敬れ……！」

「ああいらんいらん。演習はもう終わったんだし、俺達も休暇だ」

「じゃ、じゃあマサキさんも少尉なんでしょうか？」

たまが恐る恐る聞いてくる。ああ、普通に話してたからな。「やっべえ〜」って思ったんだろう。

「いや、俺は少尉じゃないよ。まあ、飯でも食べよ」

俺は面倒だから階級の話打ち切るかのようににはぐらかした。
話す時は話すさ。

「あ、唯依姫〜フルーツもあるよ〜」

「あ、はい。いただきます / / /」

お、よしよし。唯依姫の元気も出てきたようだ。

「ふふふ、ういういしいわね〜」

そんな事を夕呼先生が言ってくる。
はて、何のこと？

S i d e o u t

07 泳げなくても海は楽しい(後書き)

感想は随時受付中

今回の出来事。

- ・タケル達207小隊が評価演習を終えた。
- ・弱点その3。泳げないよ！(その1と2は方向音痴と鈍感)
- ・めでたい席に鯛……なんでもないよ！
- ・めんどくさいから自己紹介は名前だけ。何れ分かる日が来るさ。

今回はタケルとマサキで温度差を出した。……つもり。うん、あんま感じないねw

タケルは真面目に本気で演習に取り組み、マサキは遊び放題。

さて、マサキは夕呼先生に外出許可貰って何する気なのかニヤ？
突然、ワケも分からぬ行動を取らせたくなるのさw

次回も続きますように。

08 真・サイバスター無双！（前書き）

この物語はフリスタの提供でお送りしますっ

PV10万HIT！ OVER！！ ありがとうございませすっ

！！

順調にお気に入りも増えて、ポイントも上がっていつているよ！
そんな中、作者は風邪で喉と頭と関節が痛いのだ（老いてるw）

今回はマサキの3日間ほどのお出かけの模様をお送りします。
どこに行くかな？何をするかな？

08 真・サイバスター無双!

Side マサキ

「シロ、クロ。行くぞ」

「久しぶりに喋る気がするニヤ」

「みんなの前だと、はニヤせニヤイからね」

すまん。いつか説明できれば良いんだけどな。でも猫が喋りますとか、異世界から来ました。とか言ったら、大事になりそうで面倒くさい。俺はシロとクロを撫でて部屋を後にしたがすぐに引き返してくる。

「おっと忘れてた。これは置いて行かないと」

念の為に書置きを一枚残しておく。これで大丈夫だ。

「久しぶりだな……相棒」

サイバスター

そこには封印指定された俺のサイバスターが、封印指定された時のままの輝きで俺を出迎えてくれていた。俺はサイバスターに乗り込み、不可視・ジャミング機能を起動させて、エレベーターで外へ出た。

「さて……煌武院悠陽殿下の下へ馳せ参じますかね」

俺はこの世界に来た教訓を活かし、MAP機能を起動させ、進路を帝都へと向けた。コレさえあれば迷いませんとも。えっへん。

帝都付近の演習場に灯りがある。

「こんな時間に演習をしているのか……帝都守備連隊ってのは、熱心だな……」

まあ熱心すぎてクーデターなんか起こしてしまうのだろうか。

(……軽く遊んでやるか。)

俺はそう思って、不可視モードとジャミングを解除する。

『なっ 所属不明機だと!? いつの間にこんな距離まで接近を許した!?』

今の今までだよ。

俺はディスプレイで目の前に展開されている数十機の不知火や吹雪を薙ぎ払って行く。遅い遅い! 貧弱虚弱うーっ!

『グッ、早いっ!!-- 一発も当たらないなんて!』

『下がっている! どの所属か知らんが……この先へは進ませんぞ!』

「その声は……沙霧大尉か?」

『子供!? 私の事を何故知っている! 名を名乗れ!!--』

大当たりを引いたな。クーデターの首謀者が目の前にいるとは……。

「クーデター起こすの止めるなら、名乗ってやるっ」

『っ……何の話だ!』

ふふふ、そうだよな、反応できないよな。反応しようものなら、OPEN回線で演習に参加している全軍に「私、クーデター起こそうとしてますから。はい」と言ってしまうようなものだ。

しかし、通常のOSの不知火でよくここまで動けるものだ。軽く振り下ろしたとは言え、ディスクッターの一撃目を受けやがった。正直言って流石としか言いようがない。俺は少しだけスラスターの出力を上げて沙霧大尉の不知火を薙ぎ倒した。

「その程度で帝都守備第1戦術機甲連隊にいられるんだな……クーデターも諦める」

『貴様っ! 待てっ!』

待ちません。時間は有限であり、俺には成すべき事がある!

俺は再びジャミングなどをONにして、ラプラス・コンピュータの指し示す方へ……悠陽の下へ向かった。ラプラス・コンピュータからは軽いタッチで描かれた建物に大きめの矢印が『悠陽、ココ』と指し示している。ちなみに後ろから飛んでくる弾丸なんぞ一発も当たらない。俺は風だ! 何人も風を捕らえることなど出来ん!!

「久しぶりにノってるニヤ」

「開発も面白そうだけどニヤ」

Side out

Side 政威大將軍殿下 煌武院こうぶいん 悠陽ゆうやう

カタンツ

「あ」

「誰ですか!？」

あの日の夜、私は少し眠れずにいた。

そんなところに物音と漏れた声が静寂の部屋に響き渡った。窓からの侵入者だ。生まれて初めての経験。泥棒や誘拐などが真っ先に頭に浮かぶが……。

「……子供？」

「あ、夜分遅くにすみませんね。海堂正樹と申します。悠陽様。少しお話をよろしいでしょうか？」

とても害があるようには見えない。私はとりあえず問題があれば説得を、駄目な場合で尚且つ手に負えない場合は真耶まやさんと呼ばうと思っただ。

「このような夜更けにお話ですか？」

「あゝすみません。あ、敬語も上手く使えないのでお許しください」

「構いません」

私は微笑んでしまったらう。自分でも分かる。なんと正直で可愛らしい女の子でしょう。

「俺は横浜基地所属の中佐です。あ、信じられないでしょうから、これ階級章です。あ、あと最近多いので先に言っておきますけど、男です」

確かに目の前の少女（？）が着ているのは国連軍の上着だ。階級章も中佐のもの。この子は……。

コンコン

「殿下、物音がしましたが、まだ起きていらっしやるのですか？」

「っ！ コチラへ」

「は？ いや、それはちょっと……」

私は掛け布団を開き、中に入るようにマサキに言うが、困惑の表情を浮かべている。私はその手を取って引き入れた。

「早く」

「ちよっ……」

ガチャ

「殿下？」

「ごめんなさい真耶さん。少し眠れなかったので、本を読んでいました」

「左様でございますか、失礼いたしました。お休みなさいませ」

パタン

「……苦しかったですか？ いきなり布団の中へ引き込んでしまっ
て」

良い匂いが布団に微かに残る。香水などではない……：気にならない
程度の香りだが、気になれば引き込まれるような香りだ。

不良女神さんのキスの効果です。フェロモンのものが随時出
ます。

「あ、いや、大丈夫ですけど。っと、はえ？」

布団から出てしまいそうになるマサキを手で静止させ、私はそのま
ま話しをするように言った。不思議と離したくない方だったので。

「はあ、悠陽様が良いと言うのなら良いですけど。あ、今更ですけど
『殿下』って呼んだほうが良いんですかね？」

「構いません。名前で呼んでください」

私は何を言っているのだろう。

Side out

Side マサキ

悠陽は随分と物腰が柔らかい気がするが……とりあえず布団から出て話さないか？ 話さないか。そうか。何故、二人で同じ布団に入って話さなければいけんのだ。悠陽は名前で呼ぶことも許し、俺は悠陽様で呼んでいくことにした。

「じゃあ、お言葉に甘えて。まずは報告です。冥夜が総合戦闘技術評価演習に合格したので、近日中に衛士になります」

「っ……冥夜をご存知なのですか。あの者は元気でやっていますか？」

「ええ、俺はそこまで接することはないですから遠巻きにしか見てませんけど。えっと……ご心中お察しします」

「無理に敬語を使う必要はありません。私と冥夜の事をご存知なのですね」

まあ大体は知ってる。血の繋がった双子ではあるけど、古より煌武院家つて家には、『双子は世を分ける忌児』と言う事で、悠陽は『煌武院』で政威大將軍。冥夜は『御剣』で国連軍の衛士になるうとする身だ。偉い人たちの家柄つてのは分からないものだ。姉妹仲良く暮らせないのだから。

「あ、そうそう。悠陽様お願いします……」

「マサキ。『様』もいりません」

何言っただこの政威大將軍。この国で一番偉い人を呼び捨てにするって？

「……悠陽？」

「はい／＼／」

「やっちまった。まあその偉い人の要望だし？ 聞けることは聞きま
すよ。」

「話を戻します。お願いがありまして、近々、クーデターが起こる
かと思われまので、首謀者を説得して欲しいのです」

「説得ですか。何故クーデターが起こるのですか？」

「俺は説明した。今の現状で言うと、目の前の悠陽には権力的なもの
は無いに等しい。この国の象徴だということ、国民からの信頼な
どは厚いが、国連軍を動かすような権力は無いのだ。そんな中、榊
の親父さんがこの国の首相をやってるワケだが、クーデターの人間
からすれば悠陽、つまり殿下の考えと、榊首相のやっていることが
全く違うと怒っているわけだ。『殿下の御心を蔑ろにして！』と、
さっきの沙霧大尉は怒っているのだ。そこで……」

「では、その者達が榊首相を暗殺し、私の政威大將軍としての全権
限を戻そうというのですか」

「そうです。まあ悠陽様……悠陽に権力が戻るのとは良いと思うけど、
やり方が強引過ぎるし、人類同士、日本人同士で殺し合うなんてア
ホじゃないかと思うわけですよ」

「俺は『様付け』にした瞬間、ジト目で見られた気がして、呼び捨て
に訂正して話を続けた。本気だこの人。」

「クーデターの首謀者をマサキは知っているのですね？」

「ええ、帝都守備第1戦術機甲連隊の沙霧尚哉大尉です。止めていただけますか？」

「なるほど、そういつた話が出てきても不思議ではないでしょう。ですがマサキ、逆に質問をします。あなたはどこでそういつた情報を手に入れて来たというのですか？」

まあ当然信じられない点が多いわな。見た目子供の国連軍中佐が単身、政威大將軍の寢室に夜中に侵入しこんな話をしても……夢にも見ないだろう。流石は政威大將軍と言ったところだろうか。見抜く力と言うのは半端なものじゃない。これがタリサとかイーニアなら俺の言葉を信じてすぐにクーデターを止めようとするのではないだろうか。

「じゃあここで種明かしです。シロ、クロ」

「ネコ……ですか？」

「俺はこの世界の人間じゃありません。証拠として3点。まず1点目、先ほどここに来るまでに【帝都守備連隊】と軽く交戦しました。転ばす程度で倒してきましたけどね。後ほど確認してみてください。2点目にその時に使用したのは戦術機ではなく俺の世界に（ゲームで）存在した機体です。今も外にありますけど、見ます？」

俺は不可視モードだけ解除してその姿を見せた。

「……っ。た、確かに戦術機とは異なるようですね」

俺はまた不可視モードにしてサイバスターを見えなくした。

「そして、最後にこのシロとクロ、喋ります」

「は？」

「こんばんニヤ」

「政威大將軍殿下こんばんニヤ」

「まあ、このような物が今では売っているんですね」

「違います。抱いてやってください」

「……温かい。生きていますね……では本当に」

俺の目をジッと見据えて悠陽は聞いてくる。

「ええ。じゃあ、また来ますね。意味無いかもしれませんが、コ
レを置いていきます」

俺はドツグタグを首から外して悠陽に渡す。

「死ぬつもりですか？」

「まさか、また会う時に返してもらいますよ。じゃあ、行くぞクロ・
シロ」

俺は窓から飛び降りて、サイバスターに乗り込んだ。

さて、こんなに早く終わるとは思ってた。なかった。

「マサキ、世界各地を周った方が良いニヤ」

「何でだ？」

「サイバスターが日本のモノだと分かったら香月副指令が面倒ごとに巻き込まれるニヤ」

なるほど、世界各地で目撃情報が出れば正体不明機で罷り通るか。

その案、採用！ 俺はとりあえず北アメリカと南アメリカとオーストラリアとアフリカ大陸をジャミングや不可視モードを解除して飛び回った。

「……ついでにデータを取るか」

S i d e o u t

S i d e 唯依

コンコン

ノックをしても返事がない。起きていて既に整備などをしているかと思えば、まだ今日は見ていないと整備兵たちは口を揃えて言う。

では技術開発室かと思えば、そこでも同じ返答が帰ってくる。

「また迷子かしら」

その結論は探し始めた段階で出ているのだが、日々進歩すると信じ、結論は毎回急がずにいる。そして、毎回同じ結論に至るワケだが。

しかし、この日は見つからなかった。こんな事は初めてのことだ。

「中尉。マサキ知らないか？」

タリサ・マナダル少尉は強化装備を身に付けて駆け寄ってくる。どうやらXM3の機動についての質問があるらしいのだが、中佐は目下見つかっていない。

「中尉、マサキを知りませんか？」

ステラ・ブレイメル中尉も強化装備を身に着けている。どうやらマナダル少尉と模擬戦闘訓練をしているらしい。知っていたら傍を離れないのだが……。

「タカムラ中尉。マサキを知らないか？ 不知火の改良型を造るだとかで呼ばれていたのだが予定が変更されたらしく、いつにするのか聞いていないんだが」

クリスカ・ビヤーチエノワ少尉は国連軍のジャケットでノートパソコンを小脇に抱え中佐を探しているようだ。

「唯依！ マサキをどこにやったの！？」

イーニア・シエスチナ少尉はいきなり言い掛かりを付けてきた。流

石にそれはないだろう。

「美冴が言ってた！ 男は女の胸が好きだから、胸の大きな人に盗られるって！」

美冴？ 宗像美冴中尉のことだろうか。どういう経緯でそんな説明をこの子にしたのだろう。

「マサキを返して！」

「ひゃんっ！ ちよっ、イーニア！ 離しなさい！ んっ、駄目だつてば！」

イーニアは私の胸を鷲掴みにしている。私は何とか誤解を解いて中佐探しを続けた。宗像中尉には後でキツク言わないといけないな。

「あら、篁中尉。どうしたのですか？」

ピアティフ中尉は書類を抱えて途方に暮れ掛けていた私に声をかけてくれた。

「中佐ですか？ 昨日の夜から基地を出ていると聞いていますが」

え……私、何も聞いて……

「私も香月副司令から聞いたただけなのですが、3日ほどいないとの事で、置手紙をしていくとの事でしたが？」

そんな物は今のところ見かけていない。

さまよった拳銃、中佐の部屋の前に戻る。鍵は掛かっておらず、部

屋に入ると机の上に書置きがあった。

「何で私宛の手紙を自分の部屋に置いていくんですか……全く」

『唯依姫へ、日々の業務お疲れ様です。』

昨日までの南の島は楽しかったかな？

さて、突然ですが少し遠くに出かけます。

2〜3日で帰って来る予定ですが、その間のことはお願いします。

追伸：お土産買ってきます。何がいいかな？』

手紙で聞いても答えられないじゃないですか……もう。

「私は中佐さえいれば、それだけで……」

「香月副司令？ 誰が言いましたそんな事」

いつの間にか香月副司令が室内に入ってきていた。

「いや、篁中尉が入るの見えたから、マサキのベッドの匂いでも嗅いでるのかな？なんて思っで見守りに来たんだけどね。あ、なんなら今やつてもらっても構わないわよ？」

「しません！ 見守りにって悪趣味ですよ副司令」

研究が行き詰っているのだろうか。それとも息抜き程度でやっているのだろうか。カラカラと笑う目の前の天才の思考や行動は読めない。

「でも、そろそろ中尉も階級じゃなくて名前で呼べば？ 鈍感男も流石に誰かの物になっちゃうわよ？」

「何の話ですか！」

決まっている。中佐のことだ。

はあ、階級が下だったら楽だったのかも知れない……無いもの強請りか。

S i d e o u t

S i d e マサキ

「行くぜ！ コスモノヴァー！！」

ズンツ！ ドツゴオオオオオンツ！！

ハイヴの地上構造物であるモニュメントをコスモノヴァーで消し去った。

コスモノヴァーの威力がどれほどのモノなのかの確認だったが、モニュメントを吹き飛ばす程度は造作もない事が分かった。まあこれでも力はセーブして撃っているから本気でかました時がどうなるかは大体想像がついた。これの本気を地上で使っちゃ拙い。

「マサキ！ B E T A が溢れ出して来るニヤ！」

「気持ち悪いニヤ」

「今日は色々とデータを取りに来たんだ。我慢しろ。数は？」

「反応5万。更に深部ではカウントオーバーしてるニヤ」

トトトトトトトトトトトツ!!

来た！ 突撃級に要撃級、戦車級も大量につじゃうじやいやがる。
俺はサイバスターをBETAに囲まれるようにど真ん中に移動して、
デイスカッターを構えて必殺の広範囲型兵器を使用した。

「いつけえー！！ サイフラーツシュ！！」

ズガツガガツガガツガガツガ！！！！

「どつだ！」

「一気に3万以上を消し飛ばしたニヤ！」

精神コマンド使わず3万か……。

「それにエネルギーも残弾数も回復していくニヤ！」

不良女神の言っていたアレか。BETAを倒すとポイントが溜まり、
損傷箇所回復・エネルギー回復に自動的に回るって言うやつか。
まあマジで永久機関だな。

「しっかり記録取ってくれよ？」

俺は重光線級の下からのレーザー雨を高速で回避していく。

「クロ！ シロ！」

「ネコ使いが荒いニヤ……」

クロとシロのハイファミリアが無制限に敵BETA群を撃ち抜いていく。その間に俺はカロリックミサイルを乱発し、ディスプレイで要塞級を切り裂いて行く。倒しても倒しても湧き上がるように地中から姿を現すBETA群。しかし、こちらも兵器を使っても使っても回復するという仕組みだ。俺の体力に問題は全く無い。それでもBETAは突撃を繰り返す。目の前にいる異物^{サイバスター}を壊すことしか命令は受けていないかのようだ。

俺はもう一発かました。

「いつけえっ！！ サイフラーツシュ！！」

広範囲に亘りBETAの死骸が地上を埋めていく。

「地上BETAの反応消えたニヤ」

「マサキの言ってた通り、突撃級の装甲殻は一部使えそうな成分が含まれてるニヤ」

突撃級の装甲殻は非常に硬いということから、戦術機に使えないかと思っただけだ。しかし、単純に流用しただけでは重過ぎて使うことは困難を極める。そこで、軽くて装甲が硬い部位は無いかとデータをとり始めたわけだ。他にもレーザー属種の目の様なレンズの部位。アレも興味深いので調査を進めて行きたいところだ。

俺はそんな事を考えつつ、ハイヴ内へと進んでいった。

Side out

横浜基地

「はあ！？ ハイヴ攻めをしてる！？ どの国よ!？」

「それが……どの国も、国連も出撃はしていないとの事で……」

極東の魔女はそれを聞いてはつとした。

「あの馬鹿……」

「副司令?」

「何か他に情報とか画像とかは無いの?」

「ハイヴの方は無いそうですが……」。

ほぼ同時刻にこれが、各国地域で目撃されているらしい戦術機です」

画像は少し荒れてはいるが、香月夕呼はソレを見たことがあった。

今90番ハンガーにあるはずの機体。それはまさしくサイバスター
だった。

「……この国の戦術機でしょうか……ハイヴ攻略と関係があるのでし
ょうか?」

「……戦術機1機でハイヴを落とせると思っ?」

「……1機なら8分持てば英雄ですね」

そう、戦術機1機だけという話であれば、落とす以前の問題で生き残れるはずがないのだ。補給も無く、1機だけ？ そんなもの【死の8分間】すらもどんな腕を持っていようとも乗り越えられないだろう。

ハイヴを落とす？ 全世界の軍を動かしても絶対に落とせるとは言えない。それほどまでにBETAの巢。ハイヴとは広く、深い。その上、BETAは数十、数百万というだろう。

それを画像に映されている戦術機。もとい、サイバスターは1機でハイヴ内を進んでいるわけだが、それを知らない香月夕呼は間違いなく海堂正樹の仕業と考えていた。

Side マサキ

コンコン

「ただいま戻りました」

俺は悠陽の部屋へと窓から侵入した。

ヒュッ

「おっと……」

頭一個分をお辞儀するように高速で蹴り出された足を回避した。

「何者だ貴様！　ここをどこか知っての行いか！」

悠陽専属のメイド……というのはオルタネイティブではなく、タケルの元々の世界での設定だ。まあ今のタケルは知らないかもしれないけれどな。

「真耶さん！　いけません！」

「殿下！　お下がりください！　子供の姿でここまで気づかれずに進入し、あまつさえ私めの蹴りも避けた者にございます！」

「下がりないさい真耶さん。これは上意です」

「……はっ」

月詠　真耶さん。月詠中尉のお姉さんだ。見た目はメガネを掛けるか掛けてないかの違い。月詠中尉が裸眼。目の前の悠陽様お付の真耶さんがメガネ。髪を下ろしたこの人は好きかな。

「マサキ、失礼しました」

「大丈夫、大丈夫。ドツググ返してもらいに来たよ」

「貴様！　殿下にそのような口の聞き方を……！！」

「真耶さん」

「くっ……失礼しました」

おー、睨まれてるよ俺。

俺は悠陽からドッグタグを受け取り、首から下げる。

「時にマサキ。先ほど【エキバストウズハイヴ】が落ちたようです。それに各国で正体不明機も目撃されているようですが……タイミン
グが良すぎる気がしませんか？」

「あれ、やったら駄目でした？」

俺の返答に二人は驚きの表情を隠せないようだ。

それもそうか、見知らぬ機体でハイヴを1日で落としてきた……子供。

「色々データは取れたんで、戻ってまた缶詰ですよ」

「……貴様の目的は何だ？」

「あ、先にご挨拶しておきましょうか。初めまして、横浜基地所属、
海堂正樹中佐です」

「子供で中佐だと？」

俺は悠陽に説明したようにクロとシロを呼んで説明した。

異世界人でサイバスターに乗っていて、階級とかは夕呼先生から貰
ったこと。

「……」

何か真耶さんの目が輝いている。シロとクロから視線を外さない。

「真耶さん？」

「っ！ こほんっ そういえば、海堂正樹という者……貴様のデータは突然出てきたな……もう一人も、確か白銀武」

「ああ、やっぱり城内省のデータベースとかに出るんですね」

「理解しがたいが、確かに納得しなければならぬのかもしれないな。しかし、その言葉遣いは何とかならぬのか？ 近い将来、洗練された女性になりそうに見受けられる。今のうちに直しておいたほうがよいと思うが？」

「ああ、必要ないですよ俺、男ですもん」

「何？ データベースには女と記載があったが」

「夕呼先生がワザとやりました」

「証拠がないではないか」

「ああ……ちょっと失礼」

俺は真耶さんの手を取り、俺の胸に押し当てた。

「無いでしょ？」

「真耶さんズルイです！ ……私もよろしいでしょうか？」

何この政威大將軍。

「は、恥じらいというものは無いのか!？」

真耶さんは真つ赤になって俺の胸から手を離す。恥じらいも何も……

「男ですからねえ。……流石に下は勘弁してもらいたいですけど」

「結構だ!」

「マサキ。コレをお願いできますか?」

渡されたのは書状。手紙とか簡単なものではなく、書状だ。難しいことが長々と書いてありそうなため読まないが、政威大將軍の印が押されている。

「昨日お話しいただいた件です。お願いできますか?」

「了解しました。少しの間だけ不知火をお借りできますか?」

「真耶さん」

「かしこまりました……また戻ってくるのだな? / / /」

そりゃあ、不知火返しに戻るけど……何で確認した?

「月詠さんは中尉ですか?」

「真那は中尉だな。私は大尉だ」

なるほど、階級で分かれてるのか、分かりやすいかな。

「あ、そうそう もう一つだけ。悠陽」

「はい」

「悠陽に政治的権限を戻すように出来るか？」

「私だけでは難しいでしょう。ですが……」

「榊首相に働きかけよう。現状から言って色よい返事は頂けるはずだ。元々、そういう話も出ていたからな。政治は政治家に続けてもらい、最終的権限は悠陽殿下にあられるようになる」

「それは好都合。じゃあまた行つてきますよ」

……イン、ガシャン

「さて、どこかな。すまないが沙霧尚哉大尉はどちらかな？」

「は？ ……失礼しました！ こちらです！」

階級章見てから反応するの止めてくれないかな……無理だよな。

「国連軍の中佐殿が私に何用ですか？」

沙霧は俺の姿を一瞥すると、怪訝そうな顔を浮かべながら質問してきた。

「昨日の件が堪えているのかな？ 沙霧大尉？」

「その声は、昨日の!? 貴殿は一体どういうおつもりか!? あの戦術機は一体……!!」

「まあ落ち着けや大尉。殿下からの手紙を預かってきた」

「殿下から!?」

数分後。

「確かに殿下からの書状だ。しかし……」

「クーデター止めるって書いてあんだろ? わざわざ書いて貰ったんだから言っとおりにしろよ」

「書いてもらった? 海堂殿は殿下とどのような関係なのだ!？」

俺の名前は書状に書いてあったらしい。

「昨日あつたばかりで、名前で呼び捨てにする仲だ。んなことはどうでもいいから。どうすんだよ? クーデター起こすなら、俺は手加減なしで止めるぞ?」

「雪は降らねばならない……」

そう、沙霧を代表とするクーデターグループは自分達を【雪】と称する。汚れきった大地に雪となり降り積もり、陽が昇れば溶けて汚れを洗い流す。つまり、榊首相などの政治権限により、悠陽の考え方を汚したものを暗殺し、権限を悠陽に戻す。そして、自分達は処罰されるというのだ。汚れは今の政治。雪は沙霧達。陽は悠陽殿下。というわけだ。

「随分勝手な言い分だな。殿下のため〜とか言って、結局のところ悠陽を困らせてるじゃねーか」

「しかし！　そうでもせねばこの国は……！」

「それにな、お前のところにアメリカのやつも入ってるんだ。利用されてオシマイだ」

「なっ！？　嘘を申されるな！　我が同士は全て志を一つとし……！」

「他人の心なんて誰にも分からない。違うか？」

「……それでも。あの国賊共は消さねば……」

「頭の固い奴だな。近いうちに悠陽に権限が戻る話になってるんだが？」

「それは本当なのですか！？」

「悠陽は政治に関わらないが、最終権限は持つ。今より良くなるはずだ。安心したか？」

「……しかし、それでも今までしてきた事に対する……」

「面倒くさいなお前。BETA滅ぼした後に考えろよ。今年中に地球から消すからさ」

「何を言っているのですか？」

「聞いてないか？ さっきカザフスタンにある【エキバストウズハイヴ】が落ちたのを」

「聞いてはいますが、誤報の可能性は……」

「ない、ちゃんと反応炉を潰してきたからな」

「海堂中佐……あなたは一体」

「今は控える、その血は人類のために流せ。生き残ったら日本のために流せ」

「……はい」

ふう、説得って俺には向いてないんだよな。

コンコン

「ただいま戻りました」

俺は窓から3度目の侵入を成功させた。
不知火を返して、じゃあまた会う時があれば、と分かれようとしたら……。

「近衛に入らぬか？」

真耶さん。どーしちゃったのよアンタいきなり。

悠陽も何か言っただけやんな！

「私も賛成です。マサキいかがですか？ 私のそばで守っていただけないでしょうか？」

あるえ〜。

味方がいない。

しかし、帝国軍からの引抜とは誰も^{ヘッドハンティング}が喰い付く内容だ。

「謹んでお断りします」

「何故だ！」

「横浜基地に仕事も残ってますので失礼します」

俺は窓から飛び降りてサイバスターで基地へと向かった。帝国軍なんかいたら話の展開が分からないのさ。横浜基地でのんびりやるさ。

Side out

Side 煌武院悠陽・月詠真耶

「行ってしまいましたね」

「ええ……まさか断るとは……あ、消えた」

窓際で不可視モードになったであろうサイバスターを二人は見送っていた。

「私に魅力がなかったからでしょうか？」

「それは有り得ません殿下」

「次に来たら……真耶さん」

「はい。鎖と手錠を用意しておきます」

二人の表情は本気的笑顔だった。

Side out

Side マサキ

さて、サイバスターの調子が微妙に悪いのは何でだろうか……？
さつきからスラスターの調子が上がらない気がする。
クロとシロは口を揃えて分からないと言う。

『あ、それはね。ハイヴってやつを単騎で落としたからよ』

突如、不良女神の説明コーナーが始まった。

「は？ 何で？」

『私の上司がね制限を加えちゃったのよ。一人で救えるってのは面白くないよねって』

「……何なんだよ。じゃあサイバスターはいつまでこの状態なんだ？」

『数日間らしいよ。まあ使わないでしょ?』

「まあデータの取り出しだけ出来ればしばらくは……」

よく分からん設定を聞き、俺は横浜基地へと戻った。

「マサキ! どこ行ってたんだよ! 模擬戦やろっぜ!」

「X M 3の機動で質問がありました」

「マサキ、不知火を改修する話をしたいのだが……」

「マサキ! どの女のところ行ってたの!？」

「何だ何だ?」

「みんな中佐がいないから心配して待ってたんですよ」

「……心配してたのは中尉(唯依)だけ(でしょ?) (だろ?)」

「……」

「海堂おゝ? 私に話すことあるわよねえ?」

え? 夕呼先生に? 無いよ? 出かけるって事前に言ってたじゃない。

「え? 何? つ! いだだだだっ!」

俺は耳を引っ張られて執務室へ連行されていった。

「ハイヴを落としたのはアンタね!？」

「Yeah!」

スパーンツ!

「サイバスターも持ち出したわよね!？」

「of course!」

スパーンツ!

「ハアハア……まあいいわ。それなりのモノ持って帰ってきたんでしようね?」

「ハイヴ内のデータ完全版と。BETAの死骸を戦術機へ流用する案ですね」

「ハイヴ内の完全版!? 『ヴォールク・データ』も目じゃないわ!!!」

「隅々まで飛びましたからね。フェイズ5までのハイヴ攻略の助けになるでしょうね」

「よくやったわ! で? BETAの死骸がどうのってのは?」

「レーザー属種のレンズと突撃級の殻が使えるかなって思いました。少し切り取って持ち帰ってきました。最高の衛士には最高の機体に乗ってもらいたいですからね」

「白銀のこと？ 買い被りじゃないの？ 衛士としての腕はアンタの方が上でしょう？」

「ん〜どうでしょうか。もしそうだとしても、俺の中ではタケルが世界最高の衛士ですから。まあ完全にワンオフの機体でブラックボックス扱い予定ですね」

「まあBETAも使われちゃあね〜」

コンコン

「どうぞぞお」

「失礼します。資料をお持ちしました。海堂中佐お帰りなさい」

「ども〜」

俺はピアティフさんに軽い敬礼をしてみせた。

「ふ〜ん。海堂……こいつ等の事知ってる？」

夕呼先生が見ていた資料は俺に渡される。俺が見せられた資料には、ソビエト連邦陸軍のファイカーツィア・ラトロワ中佐と、ナスターシヤ・イヴァノワ大尉。統一中華戦線軍の崔ツイ亦菲イーフェイ中尉だ。知ってるも何もまたかよ……TEキャラ3人だ。

「一応、知ってます」

「この基地に来るわよ」

「何で!？」

「ソ連はシエスチナとビャーチエノワに機体を届けに来るみたいね」

ああ二人で乗る戦術機。複座型の戦術機ね。

「統一中華戦線の方はこの基地でテストパイロットをさせる。このことよX M 3の成果ね」

「まあ情報は漏れないようにしますよ」

「よろしく頼むわ」

……平穩は無いのか。あれ、何か忘れてないか俺。

「あつ! 唯依姫へのお土産忘れた!」

「あら、抱きつけば良いじゃない?」

何を言ってるんだ? 怒られるだけじゃないか。

S i d e o u t

08 真・サイバスター無双！（後書き）

感想は随時受付中。

今回のお話し

- ・ お出かけ先は悠陽のところ
- ・ クーデター止めて、BETAのハイヴを一つ潰した
- ・ ベッドをクンカクンカ……しないでござる！
- ・ 帰ったら怒られた……ぐすん
- ・ タケル専用機を思案中
- ・ また人が増えるらしい

次回は人が増える話……書けるか？

月詠真那さん登場予定！ 真耶じゃないよ、真那だよ。え？ 分か
りづらいって？ ほら、中尉が裸眼で冥夜専属でマナだ。

大尉がメガネで悠陽専属でマヤで作者の好みだ。（知るか）

09 こんなでも中佐です。(前書き)

総合評価1000ポイント突破！

何度でも言うよ！ 読んでくれてありがとうございます！

さて、今回は

『月詠中尉登場』

『ラトロワ中佐達がやってきた』

『タケルX M3初体験』

の3本です。

どうぞ

09 じんなでも中佐です。

Side マサキ

基地に戻るとタケル達207小隊はシミュレーターに乗っていたよ
うで、更に本日の早朝、吹雪が搬入されているとの事だ。これは弄
らずにしておこう。原作通りにタケルがXM3の基本概念を思いつ
くまで放って置こう。いや、もう直接言いに行くか。

「やあ、207小隊諸君。お待ちかねの吹雪はどうか？」

俺は軍手をグツパーグツパーと着けて委員長たちに軽く挨拶した。

「マサキ……整備士だったの？」

「まあね〜すっかり整備してやるからな」

俺は手を振って唯依姫と合流した。

「おは〜唯依姫、来たね武御雷〜」

「お、おはようございます。何故ここに將軍専用機が……？」

ああ、唯依姫は知らないのね。まあ普通は冥夜の存在は知らないの
かな。

この武御雷は唯依姫が乗る武御雷とは格が違う。見た目は色が紫で
性能は基本的に同じだ。

元々、この武御雷は將軍家の人間、もしくはそれを直衛する人間が
乗る機体であり「將軍家の人間は前線に立って模範となるべし」と

の思想から、格闘戦能力（とくに長刀）を重視した設計で、他の機種と比べ機動力などがすばらしく秀でている。その中で乗り手の偉い順でカラーリングが変わり、この紫であるType-00Rは將軍のみが搭乗を許される特別仕様機なのだ。

「唯依姫の山吹色の武御雷を並べてみようか」

「そんな恐れ多いこと出来ません!!」

「特別なのか？」

「みたいね」

タリサとステラはその色の意味を深く考えずに行ってしまった。今日も模擬戦ですか。

「冥夜様」

「月詠……いえ……月詠中尉……何でしょう？」

「ッ 冥夜様！ 私どもにそのようなお言葉遣い おやめください!!」

「そうです！ 斯衛の者はいかな階級にあっても
「將軍家縁の方々にお仕えする身であります!!」

月詠中尉と3バカ……神代かみよ 巽たつみ ・ 巴ともえ 雪乃ゆきの ・ 戎えびす 美凧みわぎ は
帝国斯衛軍の軍服に身を包み、冥夜に頭を下げる。やってるやってる。

「冥夜様……武御雷をご用意いたしました。なにとぞ……」

「己の分はわきまえているつもりだ。一介の訓練兵には吹雪でも身に過ぎるといふもの」

「おやめください！ 冥夜様には
「くどい！ すぐに搬出したせ！ 他の者が何事かと思つてあるつ
が！」

「この武御雷は冥夜様の御為にあるのです。冥夜様のお側に置くよう命ぜられております。どなたのお心遣いかは……冥夜様もご存知のはず。どうかそのお心遣いを無下になさいませぬよう……」
「……勝手にするがよい」

「」承諾、感謝いたします。では我々はこれにて……」

月詠中尉は去り際に、タケルを睨み付けるかのように一瞥していった。

207小隊はタケル以外が戻っていく。午前の訓練の準備かな？

「御剣冥夜……殿下に似ておられる……」

「そりゃあ双子だからね」

「そうなんですか！？ 双子だなんて……聞いたことが……」

「あ、拙かったつけか？ 今の聞かなかった事にしといてね」

「……はあ」

唯依姫は『Need to know』と理解したのか気持ちを切り替えたようだ。

「タケル。ここにいると怖いお姉さんが来るぞ」

「マサキ……どこまで知ってるんだか」

基本的に全部さ。

「ここで何をしている」

ほら来た。月詠さんだ。

「月詠さん……」

「名を呼ぶ許しを与えた覚えはないがな……白銀武。何をしていると聞いている」

「さつき中尉がオレに何か言いたそうでしたからね」

「死人が何故ここにいる？」

そう、この世界の本当のタケルは既に死んでいる。並行世界パラレルワールドのタケルがこの世界に来てしまったただけだ。しかし、死んだ人がいるというのの意味が不明なわけで、冥夜に近づく不審人物として見られているわけだ。

まあそんなことはどうでも良いんだけどね。オレとしてはあの機体を改造したい。

「あのく取り込み中すみません月詠中尉？ あの武御雷、改造していいですか？」

「貴様！ 愚弄する気か！！ ……ん？ その声は……」

半分本気ですが？

「中佐駄目ですよー！」

「中佐？ ……その出で立ち。もしや、海堂正樹中佐ですか？」

「なぜ敬語？ そうですけど？」

「失礼しました。殿下よりコレを預かっております」

おお、月詠さんが俺には怒らない。なるほど、悠陽とか月詠大尉の方が手を回してくれたんだな。そして、渡されたのは沙霧大尉に渡した時よりも少し分厚い書状……。また長そうな文面で。難しい文章でよく分からないよ。

「是非とも斯衛軍に来て頂けないかと、殿下よりの書状です」

「え、断つたのに？」

「……なつ！！？」「」「」

「ん？」「な、何だ？」

この場にいたオレとタケル以外が騒然とする。

「主任が斯衛軍の誘いを断つたつて！？」 「主任すげーっ！！」

「嘘でしょ！？」 「殿下の誘いを！？」 「殿下直々にか！？」

「こらー聞き耳立ててないで仕事しろーっ！」

「いやいや中佐！ 何をしたか分かっているんですか！？」

俺は拳骨をブンブンと振り撒を飛ばすが、突然 唯依姫がオレの肩を掴み前後に揺らす。なにになに！？ やゝめゝてゝ。

「……だって俺の居場所はここだけだろ？ なら帝国軍に行ってもなゝ」

「主任……」「主任……」

「まあ悠陽に『ごめん』って伝えといてよ」

「……」「呼び捨て?!?!?」「……」

「ああそう呼んでくれって言われて……ってサボるなーっ!! 働
けお前らーっ!!」

「いやいや中佐! 何をしてるか分かってるんですか!?!」

また前後に揺らされる。やゝめゝてゝ。

「……だって呼び捨てにしないと睨むんだもん」

「だもんって……」

「殿下が下のお名前を呼び捨てで呼べと!?!」 「主任すげーっ!
!」

「領ける点はあるかな……」 「あの分厚い書状の返事に3文字か
よ!!--」

「しかも手紙じゃなく伝言?!?!?」

「月詠中尉は、俺のことは聞いているのにタケルの事聞いてないの
?」

「聞いておりません。海堂中佐はこの者をご存知なのですか?」

俺説明しとかなかったっけ? ……あ、してねーか。

「国連軍のデータベースを改竄してここに潜り込んだ目的は何だ!
」 「城内省の管理情報まで手が回らなかったのか? まさか追求され
ないとも思ってたか!!--」

あ、またタケルが攻められてる。

いや、しかし下から見上げると、この武御雷がグランゾンに見えるんだよね。スマートなグラゾン。紫色だし……。グンゾんにしまつか？ いや、流石に無理だな。うん無理。そんな技術情報俺の脳内には無い。期待したか？ すまん。

「冥夜様に近づいた目的は何だ！ 返答次第によっては、今この場でもう一度死」

「何をしている！！ 月詠！ 神代、巴、戎！ まだいたのか？ ここで何をしていた！」

「冥夜」

「冥夜様をそのように呼ぶなどっ！」

「よい。私が許した」

「冥夜様は、この者がどのような男かご存じないのですか！？」「知らぬ……だが、ここではそれでよい。もうよい、下がれ」

おお、俺が武御雷に見惚れている間に話しが進んどる！
まあいつか。タケルの問題だからな。

「じゃあ早速調整するぞ。作業に取り掛かれーっ」

「……………はいっ！！」「……………」

「主任。X M 3はまだ搭載しないんですか？」

「ああ少しだけ待ってくれ。唯依姫の武御雷には搭載していいけど」

「了解です……許可貰ってますよね？」

もちろん。そこまでなら許可貰っている。そこまでならな。

「チーフ。ソ連から戦術機が入ってきましたよ」

ああ、クリスカ・イーニア専用で複座型のやつだな……っておい！

「1機だけじゃないのか？」

振り向いた先の、少し離れた格納施設には3、4、……目の前にはまだ搬入されていく機体が見える。

「部長」。統一中華戦線軍からの搬入もあります」

ああ、あの中国娘か。これが終わったら弄るか。

「中佐。私は一度受付に行かなければなりませんので、失礼します」

「あいあい」

「変なことしちゃ駄目ですよ？」

何をするってんだ俺が。少しだけだよ！

S i d e o u t

「横浜基地へようこそ中佐殿」

「うむ」

「横浜基地へようこそ中尉殿」

「はいはい」

「篁唯依中尉であります。何かございましたら私にご報告ください」

「タカムラ……？ では貴殿が資料にあつた海堂中佐の補佐官か。

海堂中佐とはどのような人物だ？ 資料では経歴も載っていないから情報が少なくてな」

「人物像……でありますか。掴みどころのない方です。会って頂いたほうが早いかと存じます」

「そうか、すまなかつた。では明日からの正式参加と言う事でいいんだな？」

「はい。なので本日は自由に過ごして頂いて構いません。案内が必要であればご用命ください。ではこの者達に部屋まで案内させますので、よろしくお願いいたします」

受付を通り、ソ連軍と統一中華の衛士、技術開発担当、整備担当の者たちは部屋に案内されようとしていた。篁中尉はそれを見送った。

「あ、アタシの殲撃^{ジャンジ}届いてるわね」

そうやってツイ・イーフェイ中尉は窓から見えた格納庫に歩みを進める。

「我々も少し見ていくか。案内中にすまない、少し寄り道をするぞ」
そう言ってラトロワ達も格納庫に足を向けた。

「あ、ねえねえそのあなた。この基地にある新型のOSって凄いの？」

話し掛けられたのは銀の長い髪の少女だ。整備服を着て、黒いネコと白いネコを連れている。

「ん〜、最初は使い辛いでしょうけど、慣れれば凄いですよ〜」

「チーフ。どうするんですー!？」

「ごめん！今日はA-01部隊の不知火の調整だけにしよう！
！ 戻してー!!!」

管制ユニットから整備兵の声が飛んできて、少女は両手を口に添えて大声で返答する。

「会長ーっ！ ここにいましたか、篁中尉の武御雷なんですけど、
ここが……」

「ああ、なるほどね。じゃあここの設定を変更して、それで再起
動かけてみてよ」

「30ですか？」

「ん？28かな？」

「了解です試してみます。おーい！ 28に変更して再起動！！」

「店長！店長！」

「はいはい！ あ、ケーブル気をつけてね」

少女は様々な呼ばれ方をしながら、臨機応変に質問に答えていく。

「チーフとか店長とか会長って？」

「ああ好きに呼ぶように言ってるんで、好きに呼んで大丈夫ね」

「あはは」と軽く笑い、少女は照れたそぶりを見せる。

「ここの基地はこの様な子供まで整備として働かせているのか？」

やってきたのはラトロワ中佐達だ。目の前の整備服姿の少女に向けて落胆の声をあげた。

「ははは、こつ見えて結構力ありますから」

「私よりも小さいのに凄いわね……」

ナスターシャ大尉は少女を撫でながらそう言った。

「あ、私も撫でていい？ 子供整備兵なんてカワイイんだけど」

「あはは、子供って……あ、新型のOSですけど、明日デモンストレーションしますから楽しみにしてくださいね」

「うわっ！ 予定まで把握してるの！？ 偉いね」

「バカにし過ぎだ中尉。悪気はないだろうがこの少女とて軍人だ。自分の所属する部門のスケジュールぐらい把握しているに決まっている」

「失礼しました！ そっか、それもそうよね……にしてもこんな子供まで扱き使ってるような海堂中佐は変態口 コン野郎よね」

「あ、それは俺で……」

「あ、駄目だよ？ 『俺』なんて言ったら。勿体ない」

先ほどまで照れ笑いをしていた少女は苦笑いに変わっていた。

瞬間、周囲の空気が冷たくなったように感じた。この基地の整備兵たちが作業を止めてラトロワ達を睨み付けるかのように視線を投げつけているからだ。先ほどまで活気があった整備兵の声は静まり返り、機械の動作音だけが格納庫に響いていた。

「な、何よ？」

「どうしたんでしょうね？」

タタタタタタッ！

「マサキを馬鹿にするなーっ！！」

そこにやって来たのは強化装備を身に着けたタリサ・マナダル少尉とステラ・ブルームル少尉だ。模擬戦闘訓練が一段落したらしい。

「わつとと、タリサ落ちて着いて」

「落ち着いてられないわね。マサキを馬鹿にされて冷静でいられるわけないでしょう？」

「ステラも。すみませんラトロワ中佐。意外と結構好かれてた様でして」

「「意外！？」」

強化装備の二人は少女に驚きの声を向けながら制された。

「いや、我々もこの基地に着たばかりで勝手な評価をしてしまった。それだけ好かれていいるならばそれなりの人物なのだろう。しかし、上官を呼び捨てにするのは感心しないぞ少尉達。作業の邪魔をしてすまなかった」

「いえいえ」

ラトロワ中佐はタリサとステラの返答も聞かずに踵を返して去って

いった。他の派遣グループも後に続いた。

「はい作業にもどれーっ！ 手を休めるのは休憩時間！ 今は作業に集中！」

格納庫は再び作業の音と声に包まれていった。

格納庫を出ようとする頃、ラトロワは妙な引っ掛かりを感じていた。

「……大尉」

「何でしょう中佐」

「私はあの少女に名前を名乗ったか？」

「……階級は会話に出たかと思いますが……名前は、すみません記憶にないです」

ラトロワは「そうか」と整備服の少女に視線を向けた。銀髪の少女は受付にいたタカムラ中尉に怒られている様子だ。

海堂中佐といるとストレスも溜まるのだろう。しかし、あんな娘に当たらなくてもいいだろうに。

ラトロワはそう思った。

そして、『掴みどころのない方です』受付時に聞いた補佐官からの評価を思い浮かべ、鼻を鳴らして部屋へ向かった。

Side マサキ

「マサキ、『意外と』ってどういうことだ？」

「いや？ 好かれてたんだな〜って」

「当たり前でしょう！」

おお、嫌じゃないけど、なんていうか照れる。

「中佐？」

「おわっ唯依姫！ どしたの？」

後ろからいきなり声をかけられビックリした。

「私の武御雷に何をしたんですか？」

「何って、許可貰ったでしょ？ X M 3 搭載したよ」

「……後は？」

するどい。俺は更に背面ユニットに手を加えて、緊急用の試作ブースターを組み込んでいた。他にも武装をちよいちよいと。

「あ〜シロ少し汚れちゃったかな？ お風呂行こうか」

「誤魔化さないでください！ 真っ白じゃないですか！」

ん？ 何か視線を……ラトロワ中佐か。苦手なんだよな。あの感じ。何で来たんだらう。お、行った行った。

「どこを見てるんですか！」

「明日を見据える男。海堂正樹です」

「何を馬鹿なことやってるのよ。海堂、明日デモンストレーションするんですって？」

夕呼先生。ついさっきの話なのにどこで聞いてたんですか？ 耳が早すぎます。

「やりあうの？ 見せるだけ？」

「見せるだけですよ。わざわざ持って来てくれた戦術機を壊すことはないでしょう」

「あら、余裕ね。そんな事よりも聞きたいんだけど、後で執務室に来なさい」

「了解です」

「ご案内までします」

俺が迷うとでも？

「（絶対に案ニヤいニヤしだと迷うニヤ）」

執務室に向かう途中の廊下で月詠中尉を見かけた。

「あ、月詠さんじゃないですか。道に迷ったんですか？」

「いえ、中佐と一緒にしないほうが……」

「一つ質問がございます。殿下より失礼のないようにと厳命されておりますが、お許し願えますか？」

「むしろ俺が失礼ですから気にしないでください。何ですか？」

「ありがとうございます。では、10月22日に未確認戦術機が確認されました」

「未確認……戦術機？」

唯依姫は記憶を探っているようで、月詠中尉は一度頷き続けた。

「そして海堂中佐は23日に、ここ横浜基地に配属となっております。その未確認のパイロットは子供の声でした……中佐のようなね。未確認戦術機は更に先日、帝国・海外にも確認され殿下のいる帝都城にも現れたという報告があります。いかがですか？」

「いかがも何も、あの時はすみませんでした月詠さん」

「っ！？ では！ やはりあの時の戦術機は中佐の！？」

「ええ、俺の機体です」

「あのデータにあった銀色の戦術機ですか……」

唯依姫も知ってるんだね。そりゃそうか。

「では……タイミング的に考えて、ハイブが落ちたのは……」

「月詠中尉そこまで……それ以上は秘密でお願いします。面倒な
で」

俺は月詠さんを制止させて、執務室前で唯依姫と別れた。

Side out

「篁中尉は知っていたのか？」

「いえ、この基地であの戦術機を見たことはありませんし……
中佐の機体だと知ったのはたった今です」

「そうか……。私もどうしようと言っただけではないからな。
失礼したことを詫びておいてくれないだろうか？」

「お伝えしておきます」

篁唯依は敬礼して月詠真那を見送る。

そして、自然と声がこぼれた。

「……中佐の事、知らないことだらけだ」

Side マサキ

「海堂正樹中佐入室しました！」

「うっさい。色々使い方間違ってるわよ」

俺は敬礼を解いて歩み寄った。

「不知火の式型を造るんですって？」

「ええ、まあそっちは基本構想は出来てるんで後回しでも良いんですけどね」

「じゃあBETAの装甲殻とかレンズとかは他の機体を使うの？」

「そうですね。骨に使おうと思います」

「骨？」

「戦術機とは異なる戦術機を造ろうかと思ひまして」

「何それ？」

戦術機は外骨格構造モノコックのロボットだ。安く造れて強度が高い利点はあるが、骨格が外側になるので、各関節稼動部の可動範囲や強度に制約が生まれてしまう。そこで人間と同じように骨が[△]あって、そこに筋肉や皮があるようにする内骨格△にしようという考えだ。XMM3で機動性が向上してるんだから更なる性能の向上があるのだ。デメリ

ットで言うなら骨に装甲を取り付ける様になるので重くなるという点だが、そこで登場するのがBETAの突撃級がもつ装甲殻だ。この装甲殻は重くて硬い物質が多くを占めているのだが、軽くて強度は変化なしの物質が含まれているのである。サイフラッシュでBETAを殺した時に殻だけ残るように死んでいくので助かる。アレだ。『プ ラヴオス』の殻だ。殻を攻撃すると大変なことになるやつだ。何？ 知らない？ 時代かな……。

「なるほど、それで骨に武装とかを着けるわけね。レンズは何に使うの？」

「ビーム兵器とかに流用しますよ。割と軽い物質で出来てるんで助かりますね。ところで呼び出したのは他のことでしょうか？」

「あら、するどいわね。00ユニットのことよ。確かにXMM3は研究を大幅に進められたわ。でもどうしても00ユニットに届かない。何か分かる？」

「それについては俺じゃあ話になりませんよ。でも、タケルならこの世界じゃない夕呼先生に会ってるんで会いに行けばどうにかなるかもしれないよ？ どの世界でも先生は天才ですからね」

「この世界じゃない私……白銀の『因果導体』」

「そうです。ええと、ホワイトボード借りますね。

(キユキユキユ……) (こういう図とか理論であります?)

「よく知ってるわね。それよ行き詰ってるのは」

「これをタケルに見せればアイツも思い出しますよ。この世界じゃ

ない、元々いた世界の夕呼先生の授業で見たってね。でもタケルは覚えてないから理論を取りに行かせれば良いんですよ」

「流石ね、いや、助かるわ。キスしてあげましょうか？」

「いいませんよ。それに守備範囲外でしょ？」

俺は執務室を後にした。

部屋を出ると、唯依姫は窓の外を寂しげに見つめていた。

「唯依姫、どしたの？」

「ち、中佐！ 終わっただんですか？」

「ん？ ああ、大丈夫？ 元気無さそうだけど……」

「大丈夫です大丈夫です！」

「そう？ 何かあったら言ってね。唯依姫がいないと俺大変なことになるんだから」

主に迷子。基地内で大遭難。

「私がいないと……ですか？」

「うん。そう」

俺は笑って言った。

「そうですか……仕方ないですね。格納庫までお送りしますよ（別

に知らなくても良い。中佐は中佐。中佐も、私も、私の考えも、私の気持ちも、何も変わらない。」

唯依姫も自然な笑顔が浮かんでくる。

「（ガーン……呆れられた？）」

「（みたいだニヤ）」

「（シロもマサキもおんニヤ心が分かってニヤいんだから）」

格納庫で作業割り当てを見直した後、俺はシミュレーターデッキに来ていた。そろそろタケルがX M 3を思いつく頃だろう。

シミュレーターデッキに来ると207小隊メンバーはタケルの操縦テクのデータに注目して俺に気づいていない。少し離れたところにヘッドセットを付けて機材を弄っているまりもちゃんを発見した。

「まりもちゃん。タケルはいる？」

「お疲れ様です海堂中佐。白銀なら丁度出てくるところですよ。」

敬礼はいらないうちゆうに。

「少し借りていいですか？」

「ええどうぞ」

「神宮寺軍曹！ すみません少し香月副司令の元へ行ってもよろしいですか!？」

「駄目だ」

俺は今にも駆け出していきそうなタケルを足を引っ掛け、体捌きをしてデッキ内の通路に押し倒した。

「なっ！ マサキ!？」

「えっ!？ タケルが投げられた？」

「……嘘」

「私達なんて二人掛かりでも組み伏せるなんて不可能じゃない？」

「でもマサキさんが押し倒してますよ」

「あのような体格差で信じられん」

ようやくこちらに気づく小隊の面々。いかん、引きとめようと思ったら勢い余って投げてしまった。

「すまんすまん。少し付き合え、許可は貰った」

「いや、俺今すぐ夕呼先生のところ……」

「戦術機のことだろ？ いいから来い。満足できなければその後に行け」

「いや、もう引きずって……」

俺らの後ろではすでにまりもちゃんが残された隊員の指揮を取っていた。

「貴様等は今から吹雪で実機訓練に移るぞ！」

「「「「「りよ、了解!」「「「「「」

俺はヘッドセットを付けて管制塔で指示を出していく。

「さて、タケル。君が今乗っているのは何かな？」

『吹雪だろ？……一体何なんだよ？』

「実機訓練と行こうじゃないか。ステラ、模擬戦闘をお願いできるかな？」

『了解。でも良いの？……この前の訓練兵よね？』

「良いんだ。その代わり、少しだけ時間をくれ、ステラは10分後に起動してくれ」

『了解』

「タケル。ただの吹雪と思ったら大間違いだ。お前の願いの一端がそれに詰まっている。とりあえず動かしてみる」

『俺の願い？ 意味不明だ……よっ！？』

タケルの吹雪が高速機動で壁スレスレまで突っ込み、急速回避する。

『……なんだ！？』

「良い反応だ。では10分間の準備運動だ。早くなれないと訓練にならない結果に終わるぞ？ せっかくの美人衛士の個人授業だ。早く果てると呆れられるぞ？」

『美人……／／／』

時間はあっという間に過ぎていく。まあバグ潰しとかは終わってい

るし、タケルの3次元機動のデータもほぼそのままにインストールしてあるから慣れるのには時間は掛からないだろう。タケルのデータは戦術機の訓練の度にまりもちゃんから唯依姫を経由して貰っている。

『すげえ、こんな早く動けるのか……バルジャーノン以上だ!』

「喜んでもらえたかな? お前が考えた新型OSの性能は」

『は? 俺が考えた? マサキが造ったんじゃないのか?』

「そう、造ったのは俺。でも、考えたのはお前。さあ準備は良いか? 時間だし始めるぞ」

俺は誤魔化しながらステラの方に合図を送る。

『マサキ、私が勝ったら何かご褒美はあるのかしら?』

「勝って当たり前だろう? まあ5分以内に勝ったら何か考えるよ」

『そう、楽しみにしてるわ』

5分で勝てるならな。しかし、テストパイロットに相手してもらえ
る訓練兵なんてどこの国探しても多分いないだろう。なんとも贅沢
な演習だ。

「上出来だな」

俺は一部分だけピカピカの吹雪を見上げて言った。

「そりゃ磨きまくったからな」

ペイント弾で汚れた箇所をタケルは磨き上げたのだ。

結果として、タケルは負けた。そりゃそうだ。XM3に乗ったばかりの奴が乗り続けてるステラに適うわけがない。ましてやテストパイロットと戦術機乗り始めたばかりという差は大き過ぎるだろう。主人公補正のおかげなのか5分以上はもったけどな。ステラは無表情になって部屋に戻っていった。訓練兵に5分以上も粘られてプライドとか傷ついたかな？

「（ご褒美ニヤ）」 「（そうニヤ）」

何？ 聞こえない。

「さて、乗つての感想は？」

「反応速度が凄い。それと何か俺に馴染んでた気がした」

「そりゃそうだ。お前用に調整しといたんだからな」

「……何で俺にそこまで力貸してくれるんだ？」

「……さあ？ そういえば何でだろうな？」

「俺に聞き返すな！」

さて、明日はXM3のデモンストレーションか……。

度肝抜けると良いんだけどな。ラトロワ中佐とか「その程度のOSいらん」とか言わないだろうか？

S i d e o u t

09 こんなでも中佐です。(後書き)

感想は随時受付中。

今回の出来事箇条書き

・月詠中尉と出会った。【01】の時のがバレた。悠陽が手回しをしてくれてて怒られなかった。でもタケルのこと説明するの忘れててタケルだけ怒られてた。

・ラトロワ中佐・ナスターシャ大尉・イーフェイ中尉も横浜基地にやってきた。

まだ『少女』男『マサキ』中佐』だとはバレてない。

・タケルが強くなるまでもう少しかかる。強いけど、テストパイロットと比べるとまだまだ。なんだぜ？

今回はデモンストレーションのお話。その先も書けるといいな。出来ればたまパパが出るところまで!!! うん無理だ。じっくり書いていこう。

まったり楽しんでいてね？

10 急襲！ デモンストレーション（前書き）

いつもより少し遅れて更新！

ち、違うんだよ。パソコンを水冷式にしたりHDDをSSDに変えたりしてたんだよ。はい、スミマセン。でもこれにより滅茶苦茶PCの起動が早くなったぞ！ 物語には本当に関係ないかもしれないけど……orz

さて、こちらの物語。更新始めて1ヶ月が過ぎました。前回同様に勝手にランキングでも一位を譲らず、PVは20万件を超え、お気に入り登録は450件を突破。総合評価を1334ptと最高のスタートを切りました！ みんなこんなにも読んでくれて評価までしてくれて本当にありがとうっ！ でもね、本当に嬉しいのは感想。もう59件も貰ってる。感想以外にも誤字情報やアイデアも頂き、これが一番嬉しいし、励みになる。まあ、それでも更新ペースは揺らぐ……スマンでござるー！

というわけで、今回はデモンストレーションなお話しだよ？

10 急襲！ デモンストレーション

Side マサキ

格納庫に吹雪が用意されていた。新型OSのXM3を搭載してあるものだ。他にもクリスカとイーニアの二人で乗る一つの機体。SUチェルミナルトル - 37UBも用意されている。当然こちらにもXM3が搭載されている。

そして、もう1機がその対面にシートを被される様に隠れている…。

「マサキ。アタシ達も参加していいんだよな？」

「ああ、うん。派手をお願いね」

「任せてくれよ。マサキを馬鹿にしやがった奴等の顔を驚きで変形させてやる」

変形って……やりすぎだよタリサ。

演習場には既にA-01部隊が吹雪にて待機している。いつもの不知火ではなく吹雪だ。彼女達もデモンストレーションに参加してくれるようだ。夕呼先生の差し金だ。しかし……本当にやっていいのかな……？

「あれはあ、昨日の夜のお、ことじゃった。」

「海堂、明日のデモンストラーション。アンタ参加しなさいよ」

「え？ 何ですか？」

「アンタA・01部隊にただの整備兵……OS担当者ぐらいにしか思われてないのよ。自己紹介してないでしょ？」

「ああ、してませんね。でも俺も一緒にXM3動かすだけですか？」

「んなわけないでしょう？ 派手にやりなさいね」

「はあ……派手にですか？ どういう風に？」

「いい？ って感じよ」

「はあ！？ 怒られますよ……！」

「あのね、テストパイロット達に好かれてるのは良いけど、アンタ整備しかしてないでしょう？ そっちの腕も確かだと分らせておいた方が後々が楽よ？ それに、怒られるも何もペイント弾ですよっ？」

俺は昨日の夜の夕呼先生との会話を思い出しながら、シートに隠れた膨らみを見つめていた。

「本当にやっていいのかな？」

「何がですか？」

「あ、おは、唯依姫」

「おはようございます中佐。今日はデモンストレーションに参加できないと聞きましたが？」

「あ、うん。そういう事になってるね」

「は？」

「あ、いや。少しだけ近くの基地に向向してくるよ。すぐ戻ると思うけど、デモンストレーションでのX M 3の説明とかよろしくね？」

「ちゃんと挨拶できてないから申し訳ないんだけど……」

「了解しました」

俺は唯依姫にこの後のことを頼んで、出かけた。向かう先は第二演習場だ。そして、俺が消えるとはほぼ同時に、シートに隠れていた戦術機も格納庫から姿を消していた。

Side out

Side 篁 唯依

ヘッドセットを付けて、私は大型モニターに映る演習場を見る。吹雪が11機・チエルミナートルが1機の合計12機がその姿を晒していた。A-01部隊とタリサ、ステラ、クリスカ、イーニアの合計13人、12機の姿だ。

私は振り返り、同じくモニターを見る軍人達に説明を始める。

『お集まり頂きありがとうございます。昨夜はよく眠れたでしょう』

か？ では早速、新型OS【XM3】のデモンストレーションをご覧に入れますよう』

「待つてくれ、タカムラ中尉。海堂正樹中佐は来られないのか？」

『はい、残念ながら急な出向により、このデモンストレーションには参加できなくなりました。中佐自身も残念がっておりますが、ご不明点などは私の方からご説明させていただきます』

「引籠もりよ」「やっぱりそうなんですか？」

少しのざわめきが聞こえるが、私はあえて触れずに説明を始めた。

『では、まず始めに旧型OSによるデータをご覧ください』

画面の脇に演習場内でのタイムアタックなどのデータが羅列される。

『まず始めにタイムアタックから参りましょう。画面脇に映されたデータと、これからそれを大きく上回る新型OSの性能差を確認して頂きたいと思います。伊隅大尉、始めてください』
『了解した』

仮想的を撃ち落しながら、高速機動で2機の吹雪は演習場を駆け巡る。射撃・格闘戦・機動力。あらゆる点においてXM3は旧型OSの上に行く。その差は歴然だ。

「早いっ！」 「撃ち漏らしとか以前に、ほとんどが（ほん）真ん中……」
「……見直さなければならぬか、新型OS」

ざわめき色は分かりやすい変化を見せていた。始まるまでの色とは

明らかに違う。吹雪の機動性能はそれほどまでに見るものを変化させていた。

『ご覧頂いている通り、新型OS【XM3】の性能は従来のを遙かに凌ぐものとなっております。海堂中佐いわく、衛士の腕によつて更に向上していくOS。とのこと。デメリットを挙げるとすれば、慣れるまでの調整です。モニタリングされているテストパイロットや横浜基地のエースパイロット達ですらしばらく時間が掛かりました』

「性能差から察するに30%ほど向上しているが、扱いきれないと？」

『別物の機体と考えていただいたとしても、慣れるまで時間を要するでしょう。タイムアタックが終了しましたね。では伊隅大尉、模擬戦闘に移って下さい』

『了解した。今回は6対6の市街地戦を想定し……』

ビービービー……！！

突如、演習内容に無い警報が鳴り響く。

「何だ！？」

『確認します。伊隅大尉、何事ですか？』

『正体不明機だ！ くっ早い……！』

正体不明機？ あの機体かと一瞬画像データの機体を思い浮かべる。しかし、中佐は今この基地にいない。モニターにやっとその機体が映し出される。

『……不知火？』

その機体は確かに不知火……に見える。しかし、一回り大きい？各部も微妙に違う。色は国連軍仕様の青でも、帝国軍仕様の黒でもない、赤と白の派手なカラーリングだ。

『こちら横浜基地A-01部隊 部隊長の伊隅大尉だ。所属不明機に問う、こちらは演習中だ。所属を明かし、停止行動を取れ。貴殿の機体は横浜基地のエリアに侵犯している』

しかし、所属不明機からの応答は無く、嘲笑うかのように突撃砲を伊隅大尉の吹雪に向け打ち放った。

『大尉！』

『当たっていない！ 全機！ 所属不明機を基地に寄せ付けるな！ 格闘戦で仕留めろ！』

『『『『『了解！！』』』』』

『早いつ！ 困んでも捕まらないなんて！』

『新型OSを搭載しているんだぞ！？ それよりも早く動けるなんて……』

正体不明機は伊隅ヴァルキリーズの攻撃をかわしながら、少しずつこの基地に向かってきている。

「篁中尉、私達も出よう」

『しかしラトロワ中佐!』

「今日から私達もこの基地の人間だろう?」

『……お願いします』

仕方ない。デモンストレーション中のため、演習場にいる機体は模擬弾しか搭載されていない。私は敬礼をして、格納庫に向かうラトロワ中佐達を見送った。

「中佐がいないときに……」

私はヘッドセットを外し、ラトロワ中佐達に続こうとしたが、余裕の笑みを浮かべた魔女を前に足を止めた。

「あら、派手にやってるかしら?」

「香月副司令!? あの機体を知っているのですか!?!」

「まあ見てなさい」

副司令は机の上に置いた私のヘッドセットを渡してきた。

S i d e o u t

S i d e マサキ

「いい? 。模擬弾の前に最初の数発だけ実弾にしときなさい。もちろん威嚇射撃よ? 後は回避行動を取り続けながらゆっく

りと基地に向かってきなさい。そうすればお堅いソ連軍の中佐殿は参戦してくるわ。そこにペイント弾を浴びせて、全機フルボッコ。

って感じよ」

フルボッコって言葉は俺が前に教えたが……味方をフルボッコしてどうするんですか……。さて、仕方ないけど、コレ命令なのよね。

俺は不知火弐型にまで改修されてない機体に乗っていた。一応デモンストレーションカラーという事にしておいて、赤と白のカラーリングとなっているが、ハッキリ言ってまだ出来損ないの機体だ。推進剤の使用効率は悪いし、重量は重い。まあそれでも今ある普通の不知火よりは早く動けるのだが……。コレは急いで改良していかないといけないな。

一応、クリスカとかも手伝ってくれている機体なので、バレない様に更に手を加えており、カラーリングも派手にした機体だ。

『止まれーっ!!』

「おっと、みんなX M 3に慣れてきてるんじゃないか？」

『何なんだよお前はーっ!!』

タリサの声を聞きながら俺はヒラヒラと避ける。たまに威嚇射撃をしながら当てないように、そして相手の攻撃に当たらないようにと、横浜基地へと向かっていく。

『止まりなさいってーよっ! くっ! 馬鹿にしてるの!?!』

突撃前衛の速瀬中尉も怒って俺の機体を追い続ける。

「あゝやっぱり怒ってるよな。はあゝ、許してくれるかな……」

ピピッ

横浜基地のマーキングが出てくる。

「あ、横浜基地に着いちまうな……」

ビービー！

M A Pに横浜基地の識別コードの3機が表示される。

「ロックオンされた？ …… チェルミナートルが2機。ラトロワ中佐にターシャか…… 後ろには殲撃もいるな。夕呼先生の言うとおりになったけど……。逃げて消えてしまいたい」

ラトロワ中佐が乗るのは一人乗りのチェルミナートル。S u - 3 7 M 2だ。型番違いでクリスカとイーニアが乗るチェルミナートルと見た目による違いはほとんどない。

『所属を明かし、武装を解除せよ。それ以上近づけば撃ち落とすぞ？』

ロックオンは外れない。マジだよあの人。

まあ、こっちも止まる気は無いんですけどね。

『ふんっ撃て』

『了解！ 射線上の方は乱数回避してください！』

ドンッ！

ターシャの砲撃が俺の機体の左側を通り過ぎていく。

『避けた！？』

『接近戦なら負けたことがないわよー！』

イーフェイの殲撃がブーストで急速接近してくる。俺はそれをポイント弾で脚部を撃ち、腕を撃ち、背後に回り、背面ユニットを撃つた。

『……これが、実弾だったらでも言いたいのーっ！？　って動かない！？　何で！？　ポイント弾でしょーっ！？』

それは、【ジャイブスJIVES】の効果だ。

JIVES：統合仮想情報演習システム。戦術機の実機の各種センサーとデータリンクを利用した仮想訓練プログラム。砲弾消費による重量変化や着弾や破片による損害判定及び損害箇所など、あらゆる戦闘における物理現象をシミュレート可能。また、BETAの外見や行動パターンなども精緻に再現することができ、現在、衛士訓練プログラムとして最も有益なシステム。

そのため、ポイント弾であっても致命的損傷と判定されれば、特殊なパスコードを入力しないと再起動はかけられないのだ。その辺の設定はこの演習に参加する機体、するであろう機体に組み込んでいたため問題は無い。

『背後がガラ空きだー！！』

後ろから宗像中尉は長刀で切りつけてくるが、俺は読んでいる。最

「カーは生きてる。目の前にいるはずのマーカーだが、そこにはおらず、消去法で上かと思えばモーターブレードで切りかかってきていた。俺は65式近接戦闘短刀を腕部から引き抜き、それを受け止めた。」

「いい反応だ！」

『うう〜！』

『イーニア大丈夫？』

この二人は複座型だとやはり凄腕だ。

もちろん他のみんなも凄腕だが、一步先を行くような感じだ。

「でも、ここまでだ」

俺は肩部から小型ミサイルを撃ち、ペイント塗れにする。ちなみにこのペイント弾は特殊な液体で出来ている。浴びると特殊な電磁波を流すため、戦術機の機能が停止までは行かないが、動作は困難になる。ちなみにパイロットには影響は無いのでご安心を。

『12機が全滅だと！？ 貴様……何者だ！！』

通りすがりの仮面ラ……通じるわけ無いか。うん。

つていうか、13機だよ。イーフェイをカウント外にしないであげてください。

ラトロワ中佐の機体が飛んでくる。ターシャも追従するように突撃砲を構えて接近してくる。

「試したい武装はもうないよな……じゃあ、後はブースターの確認だけだな」

俺は出力を最大まで上げて、接近してくる機体よりも倍以上速い速度で接近した。

『ラトロワ中佐！』

こちらもいい反応だ。流石は10代半ばで大尉になるナスターシヤだ。支援砲撃が巧い。この腕ならまず外す事は無いだろう。俺以外が相手ならの話だけだ。

俺はラトロワ中佐のモータブレードをかわして、先に突撃砲を構えるナスターシヤを止める事にした。

『くっ！！ うあっ！！』

五体に突撃砲によるペイント弾を浴びたチエルミナートルはその場に膝を着くようにバランスを崩した。

『ターシヤ！』

『派手にやりなさいって言ったはずよ？』

夕呼先生の声がスピーカーから流れてくる。

え、一人で全機落としてる時点で派手でしょうが……。

『今のは誰だ！！』

怒りの矛先が夕呼先生に向くが、戦術機のデュアルアイは俺を見放

さないままだ。

「マサキあれをやれば？」

「あれニヤら派手だニヤ」

「お前らまで……ええいつ　もうどうにでもなれっ！」

俺は残った一機、ラトロワ中佐へ武器を変更してロックオンした。

『なにっ！！』

兵装は俺の大好きなマイクロミサイルだ。開かれた肩と脚部から赤い弾頭がギツシリと覗いている。

「すみません……怒らないでくださいね？」

「聞こえてニヤいよ？」　「あとで怒られるニヤ」

最後の一機はマイクロミサイル全弾の内、6割をその身に受け、その場に崩れた。

『今の武装は、あの時の……じゃあまさか……中佐！？』

その通りです。

『はい、そこまで。アンタ達、恥ずかしくないの？　相手はたった1機よ？』

夕呼先生のOPEN回線が全機に行き渡る。

いやいや、アンタがフルボッコにしるって言ったんじゃん。

「博士はご存知なのですか!?!」

「誰なんですか!?!」

「あの機体は!?!」

「負け犬がうるさいわね。とりあえず基地に戻りなさい」

全機、JIVES管制から解除され、通常機動し、基地へと帰還した。

俺が最後に基地に着くと、俺の機体は囲まれていた。

完璧怒られるだろ、コレ。

俺は渋々、機体から降りて強化装備を身に着けた姿を晒した。

「……マサキ!?!」「……」

「え? マサキって、OS説明してくれてた子!?!」

「中佐!?!」

「……袴子、私の頬を掴ってくれない?」

「自分でやって下さい美冴さん」

「紹介が遅れたかな。俺は横浜基地所属の海堂正樹中佐だ。いきなりの演習参戦で混乱させてしまったかと思う、すまない」

A-01部隊・ラトロワ中佐・ナスターシャ大尉・イーフェイ中尉の機体に向かって頭を下げた。

「昨日の整備士の娘じゃないのよ！ 海堂正樹……中佐は男でしょ！？」

「見た目がどうであれ、生物学上ソイツは男よ。間違いなくね」

戸籍上は女にしたくせに。

「嘘だと言ってーっ！！」

「どうしたの多恵！？」

「どうしたもこうしたも、興奮して眠れなくなるでしょっ！！」
「……………」

「放っておけ涼宮」

「了解」

少しノイズ混じりに声が聞こえた気がするが、とりあえず無視だ。

「海堂中佐！」

イーフェイが突然声を上げる。

「何かな中尉？」

「昨日はスミマセンでした！ 勝手な想像で中佐を見下してしまい……………」

「気にしなくていい。それから『マサキ』って呼んでもらえると助かる。A-01部隊の皆さんもね」

「りよ、了解！ じゃ、じゃあ！」

「ん？」

「マサキの嫁にしてもらえる！？」

「」「」「駄目だ！」「」「」 「ダメーッ！！」

「うおっ！」

俺じゃない人たちが答えた。

「私からも良いか？ その機体は何だ？」

「ああ、これは不知火の改修機ですよ。まだ出来損ないですけどね」

「それで出来損ないか……昨日の非礼を詫びさせてくれ、これからよろしく頼む」

お、認めてもらえたようだ。

俺はラトロワ中佐と握手を交わして、唯依姫にデータを渡した。

「先ほどの機体のデータですか？」

「うん、そう。推進剤の消費が激しいからかなりの改修が必要だね」

何か他のエネルギーとかがあれば……。

S i d e o u t

S i d e ラトロワ

「私より少し年上のはずなのに中佐。しかもあの衛士としての腕前に技術力」

ターシャの声に私は頷いて答える。

「横浜基地は極東の魔女だけではなかったな」

X M 3の機動性能は良く分かった。さらにそれを軽く超える腕前の開発者。

「ふっ……愚かだったのは私だったか？ まったく恐ろしい国だな」

マサキは整備服に着替えてきて早速チエルミナートルと殲撃にX M 3を搭載している。その周りには整備兵だけではなく、白と黒の猫先ほどのテストパイロット達も参加している。人望が厚い……というよりもアレは……。

「タカムラ中尉」

「はっ、何でしょうラトロワ中佐」

「彼のことは名前で呼んだほうが良いのではないか？ 周りの猫共に盗られてしまうぞ？」

「……お、お心遣い感謝します中佐殿」

やはり軍人一筋か、恋愛には弱いな。

彼とこの中尉なら良い関係になるかと思うんだがな。
私はマサキと握手した感触を確かめながら着替えに戻った。

Side out

Side A - 01部隊

「海堂中佐！ これまでの非礼を何とお詫びしたら……」

「ああ、別に階級なんて良いですよ。都合のいい時だけに利用しますから。それ以外ならフレンドリーに行きましょう？ そんな事よりも伊隅大尉、ここの兵装なんですけど……」

「あ、はい」

伊隅大尉が謝罪をしているその光景を遠目に見守る部隊員たちがいる。怒られた場合を想定して一応隠れて待機している。

「許された？」

「みたいですね……というよりも気にしてない様ですけど」

「マサキ……呼び捨てって言うのもむず痒いわね」

「でも、『マサキちゃん』って呼ぼうとすると、怒られるから気を付けてね、みんな」

「同い年で中佐で凄腕で天才かあ」

「あはは、あれには驚いたね」

「今でも信じられないわよ。あれ？ 多恵は？」

「あれ、さっきまでいたのに……あっ！ あそこ……」

「あの子の行動力には驚かされてばかりね……………」

「本人は考えてやってないでしょうけどね」

「えへへへへ。シロちゃんとかクロちゃんって言うんですか」

「ああ、マサキの飼い猫なんだ」

タリサ・マナンドル少尉と一緒に白猫と黒猫を可愛がる築地多恵がそこにいた。和みながら会話を弾ませる姿に部隊員達は隠れているのが馬鹿らしくなり溜息をついた。

「和んでるし馴染んでるんですけど……………」

「わ、私も撫でさせてもらおうかな……………」

「あ、私も行くよ!」

こうして、A-01部隊とテストパイロットたちも親睦を深めて行った。

Side out

Side マサキ

「さて、外装パーツの取り付けだけだな」

コツコツコツ……………」

「もう出来たの? ホネ」

夕呼先生がやってくる。

ここは90番格納庫だ。流石にこの機体だけは表立って造ることは出来ないので、秘密裏に進めている。

「ホネは出来ましたよ。あとは肉付けだけですね」

「なんか美術品みたいね」

美術品か……まあコイツが完成すれば人類の勝利は目前だろう。

「あ、そうそう。面白いニュースがあるんだけど聞く？」

「何ですか？」

「この前ハイヴ落としたわよね？ あれ、専門家の間だとBETA同士の潰し合いの可能性も考えてるらしいわよ」

「はあ？ BETAって潰しあうんですか？」

「まさか」

夕呼先生は鼻で笑いながら答えた。

「でも、それだけ信じられない出来事だったのよ。どこの国も軍を動かしていないのに落とされたハイヴ。未確認の空飛ぶ銀色の戦術機でも戦術機1機でハイヴを落とせるか？ 答えはNOよ」

「まあアイツはしばらく使えませんか」

俺は少し離れた場所に静止しているサイバスターを見ながら言う。

「あら、トラブル？」

「まあそんなところです。本当の切り札になっちゃいました」

「その様子ならアレが使えなくても問題なさそうね」

現状なら問題ない。

「そういえば、このホネはワンオフの機体なの？ 製造ラインの話
を聞いてないんだけど？」

「ええ、ワンオフです。この世界で最高の衛士に乗ってもらいます
よ」

「あら、自分専用ってことね」

違いますよ。

俺は声に出して否定せずに作業を続けた。

夕呼先生は踵を返して帰ろうとするが、思い出したように立ち止ま
り口を開いた。

「あ、もう一つ聞くの忘れてたわ。明後日、珠瀬事務次官がこの基
地に来るんだけど、H S S Tが落ちてくるって白銀がつるさいのよ。
アレって本当？」

「あ、忘れてた。本当ですよ。落ちてきます、この基地目掛けて…
…あゝそれ、止めないで貰えます？」

「あら？ 白銀には止めるように釘を刺されてるんだけど？」

「刺されて止まるような人でしたっけ？」

「ふふふ、言うようになったじゃない。また何かの試験でもするのかしら？」

「ええ、利用させてもらいますよ。確実に防ぐんで流していただいて構いません」

明後日か、明日までにレンズを利用して……

「じゃあ私は行くわね……って聞こえてないわね」

「こうニヤると徹夜確定ニヤ」

「止まらニヤいわね」

「あら、あなた達の声、久しぶりに聞いたわね」

「「博士お疲れ様ニヤ」「」

「猫から劳いの言葉を貰うなんてね。じゃあ行くわね」

そして、俺は地上の格納庫に上がり、格納庫の一角だけ照明は消えずに作業は続けられていった。

S i d e o u t

10 急襲！ デモンストレーション（後書き）

感想は随時受付中

今回の出来事ゝ。

- ・上司の命令は絶対！ 悔しい！でも命令なら暴れちゃう！ ビクンビクンッ！
- ・もうすぐ不知火式型が出来上がるのか！？ 鋭意製作中なマサキ。
- ・エリート集団？ 10機以上？ マサキに敵う者なし！
- ・これでマサキの正体を知らないのは…… 207小队だけかな？
- ・ワンオフ（タケルちゃん専用機）鋭意製作中。

タケルちゃん専用機の名前どうしようかな。スサノオがあるんだから、やっぱりアツチ系の名前かな？ 一応募集！ 作者想像中の名前以上の『ピンツ』と来るものなら変更しちゃう！ まあ出るのはしばらく先になりそうですがね。作者想像中の名前は明かさずにおきます。もったいぶる必要も無いかもしれないけどね。

さて、次回はたまパパ登場！ その間に落ちてくるHSS Tはマサキにお任せ！ 腕によりをかけて撃ち落とす算段をつけるぞ！

……ダメだ。続くのかこの物語は……。

ドサッ。

この後、作者の姿を見たものはいない……続く？

続
く
と
い
い
ね。

11 狙い撃つ！ ……のは男の娘（前書き）

お気に入り5000件突破！

PV250000突破！

総合評価1500pt突破！

勝手にランキング1位独走中！

最高の気分にしてもらった。もう思い残すことは何もない。

……何て言つても思つたかあ！ まだまだ行くぜーっ！！

では、今回はHST事件の模様をお伝えします。
今回は更にボリュームありませ旦那。

11 狙い撃つ！ ……のは男の娘

Side マサキ

「くへへへ……スウ…スウ…」

「だらしニヤい顔で寝てるニヤ」

「まあ昨日の今日で、ほとんど完成させてる時点でおかしいニヤ」

「コツコツコツ……」。

「あら、シロちゃんにクロちゃん？」

「「にゃ〜」「」

「どうして格納庫に……あつ、まったく中佐は……起きてください。風邪をひきますよ？」

「んん〜。朝ごパン〜？」

「朝食はもう少し先ですが、今日はパンじゃないですよ」

「（ポリポリ）……唯依姫？」

起きると頭はボーっとしていて視界もボヤけており、傍らのパソコンはスリープモードになっている。確か、H S S T 撃墜用に不知火を改良していて……。あ、ちなみに、なぜ不知火で改良しているかというと、性能という点もあるが、大きく占めているのはフォルムだ。ヘッドパーツを改良するのが一番楽だったのが不知火だからだ。

「おはようございます。こんな所で寝ないで部屋で寝てください。
ああクマも出て……しっかり寝ないと……」

「うん、そうするう」(コテン)」

「こので寝ないでくださいってば」

唯依姫は再び倒れ眠ろうとする俺を自然と抱きとめた。

「じゃあ(急接近ニヤ)」

「じゃじゃ(いい感じニヤ)」

「ん〜、温かい、良い匂い……スウ」

「ちよっ 中佐っ!?!」

「く〜……zzz」

「(あ、駄目ニヤ。寝不足ニヤ)」

「(マサキ、空気ちゃんと読まニヤきゃ)」

「まったく……本当に困りますよ / / / / /」

「(……大丈夫みたいだニヤ)」

起きるとそこはPXで、俺の目の前には湯気が立ち、いい香りを立ち昇らせる朝食があった。

「寝起きで食べられ……」

「残すんじゃないよ？」

おばちゃん……分りました。今日もがんばります。ですが、そろそろ特盛りを大盛りぐらいに変えては頂けないでしょうか？ あ、そうですね。すみません。

「中佐、お身体に障りますから、無理な徹夜は避けてください。私も手伝いますから」

「あ、唯依姫おは〜」

「……聞いてます？」

他の整備兵とかクリスカとかに指示出すのは問題ないが、唯依姫には指示出しするのが……何ていうか、難しい？ ように感じる。何でだろうな？

しかし、眠い。何かスカツとする事でも無いものか……。

「ん？ アレは……」

俺は二人組の立って視線を投げつけている衛士を見つけた。視線の先はタケル達がいる席だ。タケルもいたんだな。つーか、このイベントってまだ終わってなかったのか。どうも記憶が曖昧だが。

「まあいいか。憂さ晴らしして目を覚まそう」

「中佐？」

「ああ少しトイレに行ってくる」

あ、先に動いちゃったよタケルの奴。
俺はフォローするために席を立った。

「あ、マサキ。隣の席いいか？」

「ああ、好きにしてくれ。今は少し外すがな」

「あ、主任。格納庫にある不知火の改修機なんですけど……」

「あ、店長。OSの設定で質問があるんですけど」

お前ら今はどけ。イベントに遅れてしまう。

Side out

Side タケル

「ねえ、あの正規兵の人たち、さっきからこっち見てない？」

美琴が目で訴える先には二人組の正規兵がいる。

(ああ、前回の世界でも武御雷のことで冥夜に絡んできた奴か)

「見てるだけだろ……ほっとけよ」

「でも……ほら、なんか目つきが」

たまも頷いて不信感を抱いているようだ。

(ほつといたら、同じことの繰り返しか……)

「悪いちよつと便所行ってくる」

俺が立ち上がり、正規兵の近くに行くと呼びとめられた。やっぱりだ。興味本位と俺たち207小隊が優遇処置されていることに嫉妬してるくだらない奴らだ。人類はそんなことしている場合じゃないのに。

「お前らの隊はあそこにいるので全部か？」

「はい総員で6名であります少尉殿」

「だったらハンガーにある特別機……帝国斯衛軍の新型は誰のだ？お前らの誰か用だと聞いたが？」

「少尉私の機体です」

冥夜の声が後ろから聞こえてくる。

「あ！お前いつの間！(あーもう、これがイヤだから席を立ったのによ……)」

「少尉。あの機体が何かご迷惑を？」

「お前の名は？」

「……御剣冥夜訓練兵です」

「ん？……あれ……お前の顔どこかで……？」

「ああ……どうなってる？あんなモンなんで武御雷がここにあるんだ？」

「……………」

冥夜は視線を伏せて答えられずにいる。

「黙ってちゃわかんねえだろう？ 訓練兵」

「恐れながら少尉殿」

「何だ？」

「それは少尉殿の個人的な興味からの質問でしょうか？」

「……………あ？」

「あれのためにハンガー一つ占拠されてるんだ。整備兵もあの特別機の点検を行っている。その事情を知る権利があたしたちにないでしょ？」

「聞けばお前らずいぶんとワケありの特別待遇らしいじゃねえか。そこんところもきっちり説明してもらいたいもんだな？」

「こいつら……………！」

俺は自然と握り拳を作っていた。こんな奴らがいるから人類は……………。

「それは武御雷やその搭乗衛士のことを調べろ……………という任務を受けているということですか？」

「お前がそれを気にする必要があるのか？ いいから訓練兵は聞かれたことを答えてりゃいいんだよ」

「……少尉殿にはもっとほかにやるべきことがあるかと考えますが？」

「よせタケル！」

「……なんだと？」

「少なくとも訓練兵相手にイキがることよりも優先すべきことが……」

バキィ！

「タケル!?!」

突然の騒ぎに他の207小隊の面々も立ち上がる。

Side out

Side マサキ

「あ、殴られた。殴る前に止めたかったんだけどな」

俺は独り言を愚痴りながら整備兵たちの会話から解放されて、タケルのもとへやってきた。もう一発殴られようとする瞬間。俺は少尉の足を引っ掛けて転ばせた。

「マサキ?」

「おは、で? 少尉殿は何をしているのかな?」

「何だお前は！ 整備兵が口を出すな！」

ああそういえば整備服でしたな。まあ今はそんなことよりも。

「（パシーンツ！）この軟弱者！」

こいつの顔見てたらやりたくなる。ついやっちゃったんだ。
俺は立ち上がった少尉を平手で撃ち抜いた。

「貴様！ 少尉に手を挙げたな！」

そう言いながら少尉（軟弱者）は俺に殴りかかってくる。
それを俺は絡め捕り、そのまま自然な力の流れで組み伏せた。

ガキイツ！！

「あだだだだだだっ！！！」

「マサキ！ 拙いわよ！ 正規兵に手を出すなんて！」

俺は委員長に言われながらも関節技を外さない。

「 騒々しいな」

やってきたのは月詠さんと3バカ。

「て、帝国斯衛軍！？」

「マサキ？ 何遊んでんだ？」

「店長？」 「主任？」 「会長？」

「何をしてるんですか？ トイレに行くのではなかったのですか？」

「昨日の今日で楽しませてくれるな、マサキ」

「少尉如きが私の未来の旦那様に何羨ましいことさせてるのよ！」

更に唯依姫やタリサ達もやってくる。オールスターだな。

「篁中尉！？ ツイ中尉！？ ラトロワ中佐も！？」

「ほう、唯依姫もイーフェイもラトロワ中佐も知ってるのか軟弱者」

まあ美人揃いだからな、噂にでもなっているのだろう。

イーフェイとラトロワ中佐は昨日配属になったばかりなのにな。

「何なんだよ！ お前は！」

「少尉、中佐を『お前』呼ばわりか？」

その場にいるほとんどの者が冷たい視線を軟弱者コンビに浴びせている。

マサキって呼ぶのは許しているから問題ないが、何も知らない奴が好き勝手に呼んでいい人物ではない。そう断じているかのような視線だ。

「……………中佐？」

207小隊の面々と、軟弱者コンビは呆けている。

「さて、少尉。武御雷を『あんなモノ』と愚弄し、その搭乗者を探すとは、誰に頼まれた？ ……月詠中尉、帝国軍では武御雷を愚弄

した者はどのように処分する?」

俺は口調を軍人らしくし月詠さんに聞いた。

「武御雷の愚弄は我ら斯衛軍を愚弄するも同義。ひいては將軍殿下を冒瀆する行為であります。更に今回の件に関しては武御雷の機体情報の漏洩の可能性もあります故、全てを洗い出した上で処刑になるかと思われませう」

「だそうだ。少尉、誰に頼まれた?」

「お、俺たちは……」

お、抵抗する力が抜けてきたかな。ここいらで勘弁してやるか。

「興味を持つのはいいがな、苛立ちを覚えて八つ当たりするのは違うぞ少尉? こんなことで無駄な力を使うな。その力はBETA相手に奮ってほしいものだ。……さて、月詠中尉もういいでしょうか?」

「ありがとうございます海堂中佐。国連軍とはいえ日本人だろう。今後は国連軍の名を落とすようなことは避けるべきだな少尉」

「すみませんでした!」

軟弱者コンビは腰が抜けて逃げるようにへこへこと去っていく。

「け、敬れ……!」

委員長が敬礼をしようとするが俺は止める。

「敬礼はいらんよ。邪魔したな」

「で、ですが。私たちは今まで散々呼び捨てにしてしまっ……」
「中佐だったなんて知らずに……」

「整備まで……」

「今の吹雪すつごく乗りやすいです」

「なんとお礼、お詫びを申し上げますね……」

「おう、大事に乗ってやってくれ。今まで通りにマサキって気軽に呼んでくれ」

「よくやったよマサキ。これも食べな！」

「いや、アレだけでじゅうぶ……いただきます」

京塚のおばちゃんから更に大盛りのオカズが手渡され、断ることもできず俺はがんばって食べることになった。どうしてこうなった。

「マサキ、食べさせてあげるわ。はい、アーン」

「っ！ これも美味しいぞマサキ。アーン」

「合成宇治茶もありますよ！」

「イーニアのもっ！」

「イーフェイとかいったな、後から来て図々しいんだよ」

「上官に向かってそんな口聞いていいと思ってるの？」

「食事中だぞ貴様ら。マサキこれも食べるといい」

「ずるいです中佐！」

「……食べるのを手伝ってくれ」

そんなありふれた空気に包まれたPXでのひと時。素敵やん？

ちなみにタケルは一発とはいえ殴られていたので、冥夜の親愛の手当を受けている。素敵やん？

「うつぷ……ふう。さて、仕上げるか」

「何をすればいいんですか？」

唯依姫は散らばった書類を整えながら聞いてくる。

シロとクロも手伝うように紙を啜っては所定の位置へと運んで行く。この猫の動きは不思議に思われないのだろうか？

「ん〜じゃあ、テストするからデータ取りお願いできるかな？」

「了解しました」

最終調整をして、問題なければそれで完成だ。まあ、兵装は見直さなければならぬが、今回はこれだけでいいだろう。

とは言っても、持っているライフルは随分と砲身が太い。これは、夕呼先生から試作1200？超水平線砲の資料を見せてもらい、コンパクト化して持ち運び可能なものとして、更に改良を加えたものだ。

通常の超水平線砲だと、極超長距離からハイヴを直接砲撃するといふ概念で試作された対BETA兵器だ。通常圧力で激発された砲弾

の通過に伴って、砲身内に多数配列された薬室が順次点火し砲弾を極超音速まで加速させる。発射後は、砲弾内の砲弾のコンピュータが入力データに伴い、砲弾側面の火薬パレットを制御爆発させ、2度の弾道補正によって遙か彼方の目標を狙撃する。タケルの1回目この世界だと、これでHSSST（再突入型駆逐艦）を衛星データーリンク間接照準（TYPE 94 SBS SYSTEM）によって撃破した。

しかし、装弾数は5発だが3発以降は砲身がもたないため、前線運用が疑問視されお蔵入りとなったライフルだ。しかし、この面も俺の改良により強化されている。

「随分と軽装ですね。ライフル以外は盾もなく……頭部パーツが変わっているようですが」

「まあ今回はスナイパー性能の実験テストだから。一応、内部のOSとかを射撃に特化したような感じにはしたんだけどね。更に遠くまで見えるように『強化型モノアイ』にしてあるんだ」

「なるほど」

俺は強化装備を着て、不知火に乗り込む。JIVESにリンクさせ、演習場に出る。

『ではデーターリンク開始。状況開始します。ってこれ何ですか!?!』

唯依姫は驚きの声を上げる。

「どうかした?」

『想定されている状況が……。H S S Tが落ちてくるって、どういうことですか？』

「まあまあ、それぐらいシビアにしたい方がいいデータ取れると思っただけ。まあ状況としては、夕呼先生や、明日来る予定の珠瀬事務次官が邪魔と感じる某国の陰謀により、横浜基地一体を吹き飛ばす爆弾が積まれたH S S Tを落とされる……。ってところだ」

『唐突な設定にしては随分と具体的ですね。……はあ、わかりました。では落下が始まります』

落下のデータが送られてくる。実際に想定して見てみると遠いな、でかいな、早いな。これをたまは撃ち落としたいんだよな。流石射撃の名手。まあ出来ないとも思わないけどな。

俺は構えて射撃をする。

キュゴンッ！

外したか。

『……目標健在。中佐、ビームにより砲身が過熱しないように気を付けてください』

冷却装置は正常に動作。もう少し冷却を高めに設定するか。

「こんなもんでいいかな……。うし、2発目行くぞ」

『どござ』

キュゴンッ！

『……目標に着弾。砲身は大丈夫です』

「了解。もう一機落としてくれるか？ 試したいものがある」

『了解しました。……落下スタート』

俺は砲身に、一見蓋のように見えるパーツを組み込む。

俺は再度構えてトリガーを引く。

キュイイイ……。バシューーンッ！！

『……も、目標着弾。中佐、今のは？』

「名付けて『八岐大蛇』ヤマタノオロチだ。射撃に自信のない奴でもほぼ確実に当たるぞ」

実際の空にはそんなビームなんて放たれていない。そのため、そのライフルの性能、特性を確認したのはJIVESを操作している唯依姫だけであった。

S i d e o u t

S i d e タケル

「『珠瀬1日限定分隊長』計画を発動せよ！」

何て言ったのが昨日のこと。
そして、今俺たちの目の前にはたまの親父さん。珠瀬事務次官がいる。

「ではここから先は、珠瀬訓練兵がご案内差し上げます。珠瀬訓練兵！」

「あ！ は、はいっ！ どうぞこちらへ！」

まりもちゃんはずたまの1日分隊長の事を陰ながら了承してくれたようだ。ありがとう。

たまは少し緊張で硬そうだが、親父さんを事務次官として見つめている。

たまの親父さんも事務次官らしい顔してそれを受けているように見えるが、それも一瞬だけだった。顔は緩み切り、親バカな顔で対応を受ける。

「うんうん、頼もしいなあ……でもパパは甘えてもらえないの、ちよおつと寂しいぞお……」

パパ相変わらずかよ。

「ででででは、こ、こちらへ！」

「つむ……パパ、今日はたまの小隊長っぷり、いっぱい見せてもらっぞお」

パパ、分隊長です。

「こ、こちらが兵舎です！ け、敬礼！」

「お待ちしておりましたっ！」

委員長と彩峰は敬礼をして事務次官を迎える。彩峰……やめろよ？ フリとかじゃなくてやるなよ？ 本当にやるな。

「……あんたもたま……」

バカ！ 言いやがった……！

「たまパパ……ひげ……」

まだ言うか！ ていうか前の世界よ口数増えてるじゃねーか！ お前が未来を変えるな！

「し、私語を慎め……っ！」

「その凜とした姿。いいじゃないか、たま……。パパ、たまが命令しているところもって見てみたいな」

この親父は……。

「そ、その！ 手が空いているならトイレの掃除でもしろ……」

おわっ！ 霞がいつの間にかいてロックオンされた！

……掃除は適当でいいぞ。

基地のトイレ全て綺麗にするまで帰ってこなそうだ。後で探しに行こう。

「ん？ 君はさっきまで一緒にいた……」

「榊千鶴訓練兵です！ 分隊長には毎日、ご迷惑をおかけしております」

「うんうん、知っているよ。父上に似て、物分かりが悪くて融通が利かないらしいねえ。あまりたまに迷惑ばかりかけないでくれたまえよ？」

「……は、はい……」

「千鶴さん抑えて……」

元はと言えば、たまが親父さんに出している手紙が原因なんだよな。親父さんも手紙の内容を大袈裟に言っているんだろうけど。やっぱりこうなるのか。

「ん？ 君は……」

「はい！ 鎧衣美琴訓練兵です！」

「ほほお……君か、たまより平坦な鎧衣君とは」

「……ボクは……ボクは……ひどいよ、気にしてるのに……」

美琴は猛ダツシユでその場から逃げだした。

「ん？ 君は……」

「御剣冥夜訓練兵です！」

「そうですか、あなたが……」

「……？ 私には何も無いのですか？」

「……死活問題です」

「……そうですか」

そりゃそうだ。相手は將軍家縁の者だもんなあ……。一体何を書いたんだたま……。

たまは脅えきつっている。どれほど手紙で書かれたのかと、小隊メンバーはたまに視線を集中させている。だが、安心しろたま。ここでみんなの怒りは俺に向く。

「……白銀武君だね。先ほどから見ていたが、うむ、なかなかの好青年だ。顔も悪くない。性格もいいと聞いている。おまけに座学、兵科共に成績優秀、冷静で頼りがいがあるという。今のご時世で、君ほどの男はそうそう居まい」

なんか褒めちぎってねえか？

前の世界よりエスカレートしていると思うのは……気のせい？

「君ならば……うむ、よかろう。たまをよろしく頼むよ。傍で支えてやって欲しい。今までも、そしてこれからもね。いやはや楽しみだ……わはははは。いや、そろそろわしも、孫の顔が見たいかなま、ご、の、か、お、が、な！ わはははは……」

「「「「「ま、孫お！？」「「「「」

おいおい！ 一気に飛躍してるじゃねーか！

ガシッ!!

「お？」

「……ちよつと、いい？」

「いやッ、後にしてくれ」

ガシッ!!

「んお？」

「タケル、そなたに話がある。なに、時間はとらせん……よいな？」

「き、君たち！ 事務次官の前であるぞッ!？」

その怒りで震えた手を離せ!!

ひよいつ!

「え？」

「……もう放さない」

「よし彩峰、そのまま連れ出すのだ」

おおおっ!?! 担がれてる!?!

「おお、歓迎のパフォーマンスかね？」

どの目で見ても、どの口が言っただそれ!

「全速力!!」

ちよ、おい……!!

俺は死んだ。スイーツ（笑）。
教えてもらったけど、スイーツ（笑）って何だマサキ？

まあ警報は鳴らなかったからHSS Tは落ちてこなかったんだ。
未来は変わったんだ。確実に変わったんだ。

Side out

Side マサキ

俺は少し離れた演習場にある高台に待機していた。

『海堂、聞こえる？』

「感度良好。オーバー」

『警報はギリギリまで鳴らさないで置いてあげるわ。確実に落しな
さい』

「ラジャー」

俺は念には念を入れて砲身を【大蛇】^{オロチ}から【八岐大蛇】^{ヤマタノオロチ}に変更して
いた。命中率は飛躍的に上がる。まあ……単純に精神コマンド使え
ばいいんだけどさ。最終的には俺が使う機体ではないからなあ。

オロチは主砲の1発だけの超長距離ビームライフルだ。それに対し
てヤマタノオロチはその主砲の砲身に蓋のような特殊なアタッチメ
ントを取り付けて、少し威力の落ちた主砲とその周りを八角形を描

くように並走して放射される合計9発からなるビームライフルだ。

そして、真っ直ぐ放射されるのは主砲のみで、他の8発は幾何学的な動きで放射される雷のような砲撃だ。真っ直ぐ移動しない8匹の蛇。正にヤマタノオロチ。冷却やエネルギー供給などが正常に行われるのであれば最大連続放射時間は30秒。前線にこの機体がいればかなり楽に戦域を維持できるだろう。まあ、BETAの素材が使われているから製造ラインに乗ることはない。この機体だけでも造れたのが不思議なくらいだ。

『来たわよ。データ送ったわ』

それを聞いて俺は不知火のヘッドパーツを稼働させ、デュアルアイは目隠しされるようにモノアイになる。

「受け取りました。リンク完了。冷却装置正常。エネルギー問題なし。目標、H S S T……確認。あ、夕呼先生」

『何？ まさかトラブル！？』

「あ、いえいえ。放射してる時の写真を記録して、後でください」
絶対カッコいいはずだ！

『まじめにやりなさい！』

……怒られた。

俺は引き金を引き、ビームライフルを撃ち放つ。ビームは主砲を胴体とするかのように8発の不規則な大蛇が並走していく。一瞬、空

が真っ赤に染まった。HSS Tに当たったのだろう。その衝撃は少し遅れて響き渡った。

『……目標消滅。御苦労さま。興味が湧く兵器だったわ。後で報告書の提出ね』

「……………写真は？」

『まったく……………後で取りに来なさい。一応機密性の高いモノだから気をつけなさいよ？』

「ひゃっほーいー!!」

戻ると唯依姫が怒って待っていた。別のスケジュールを入れていたはずなのに何故ここにいる？

「本当にHSS Tが落ちてくるなら言うてください！」

「ちょ、何で知ってるの!？」

「香月博士から聞きました！」

「……………何で話すかな？」

「あんた達は隠し事ない方がいいんじゃないの？ 先のことだろうけど、今から隠し事してるようじゃ、将来うまくいかないでしょう？」

「博士！ もうっ！ / / / / /」

夕呼先生はカラカラと笑って、唯依姫は赤くなって夕呼先生に言い寄っている。

俺たちは？ 将来？ どういうことだろう？

「にゃー（鈍感にゃ）」「にゃにゃ（オイラでも分かるニヤ）」「
「どづいうことだよ？」

「にゃ〜（自分で考えるニヤ）」「にゃ〜（そうニヤ）」

その日の空での出来事は、BETAの光線級に何か撃墜されたとか、そんな話で持ちきりになった。そんな他の大部分の人とは違うベクトルで、俺の疑問は晴れずにいた。しかし……。

「あ、そうそう。海堂、これ写真ね」

その写真の効果により、疑問は吹っ飛んで、俺は写真に興奮していた。

「カックイーツ！！ 見ろよシロ、クロ！ このモノアイとか！
このビームの放射の流れとか！ く〜たまらん！」

「「（……駄目ニヤ〜いつ、早くニヤんとかしニヤきゃ）」「

Side out

11 狙い撃つ！ ……のは男の娘（後書き）

感想は随時受付中

いついかなる時も誰からの感想も受け付ける！

逃げも隠れもしない！ でも凹むところは凹むからよろしく！

一人で特攻野郎Aチーム！

今回の出来事箇条書き編。

・不知火スナイパーカスタム仕様登場。大量生産不可、ほぼワンオフ機に近い。

・マサキと唯依姫が急接近！？ 勝ち取れメインヒロインの座！！

・軟弱者！！（パシーンッ！！）

・これでマサキの階級と性別は全てに知れ渡ったかな？

・夕呼先生は唯依姫とマサキの仲を自然と取り持っているようです。魔女でも基本的に良い人。

少しクロとシロの出番を増やしました。その分、他のキャラが薄くなる時もある。申し訳ない。

でも、あれだ。私が思うに、マサキのような鈍感タイプと、唯依姫のような今まで仕事一筋で恋愛下手みたいな人は面白い関係になれる。そんな風に思います。

ああ、タリサ可憐いな〜(おい)

12 休日と抱き枕（前書き）

働きすぎだよアンタ！

ってなわけでマサキは休みを命じられている設定のお話。

休みを貰ったマサキは休むのか！？

12 休日と抱き枕

Side マサキ

ベトナムで鳴らした俺達特攻部隊は、濡れ衣を着せられ当局に逮捕されたが、刑務所を脱出し、地下にもぐった。しかし、地下でくすぶっているような俺達じゃあない。筋さえ通れば金次第でなんでもやってのける命知らず、不可能を可能にし巨大な悪を粉碎する、俺達、特攻野郎Aチーム！

俺は海堂マサキ。通称 開発部の天才主任。
メカの天才だ。大統領でもブン殴ってみせらあ。でもBETAに撃ち落とされるから飛行機だけはかんべんな。

俺達は、道理の通らぬ世の中にあえて挑戦する。頼りになる神出鬼没の、特攻野郎 Aチーム！ 助けを借りたいときは、いつでも言うてくれ。

パチッ

不意に部屋は明るくなる。うおっまぶし！

「何やってるんですか中佐」

「……自己紹介の練習」

「誰に自己紹介するんですか……まったく、今日は休んでしっかり寝てくださいって言いましたよね？」

「は、すみません」

オマージユとかインスパイアとかちゃちなもんじゃねえ。完全にパ

クリだ。

さてさて、俺は最近働き詰めで休んでないと指摘され、休みを言い渡された。夕呼先生とか上官からではなく、部下に当たる唯依姫からの指摘だ。楽しく開発してるんだからよくね？

仕方ない。眠くもないからアレを仕上げるか。俺はベッドの下から色々を取りだして作業を始めた。

「あとは縫い合わせるだけか……よし、もうすぐ仕上がるぞ」

「まったく休む気配がニヤいニヤ」

「しかも絶対没収されるニヤ」

S i d e o u t

S i d e A - 0 1 部隊

今日も訓練に励む私達、特攻野郎Aチームとは私達の事よ！

「あだっ！」

「ぼーっとするな築地！」

「博士から聞いたんだけど、事務次官が来たときH S S T落ちてきてたんだって」

「ああ聞きましたよ。海堂中佐ですよ。撃ち落とされたの」

「その機体見ましたよアタシ！」

「どんなのだった？」

「不知火の全ての兵装を取っ払って、大きめのライフルと、頭部に変わったパーツを付けてるぐらいの印象しかないですね」

「スナイパー特化タイプか……いつ準備したんだか」

「凄いですよね〜中佐」

「貴様ら！ お喋りなら降りてからにしろ！」

戦術機でX M 3に慣れてきている彼女達は、X M 3の開発者であり、凄腕衛士であるマサキの行動は気になっているようで、香月博士から出来る限りの情報を得ている。

「ってか早いわよ！ ビャーチエノワ！ シエスチナ！ くっつ止めなさいよあんた達もテストパイロットでしょう!？」

「うるさいであります速瀬中尉殿！」

タリサはテキトーに敬いながら得意とする機動を繰り返して詰めていくが、すぐに引き離される。クリスカとイーニアのチエルミナールはそれほどまでに早い機動をしていた。

「タリサ、捕まえられないなら一度離れて、支援砲撃が出来ない」

「なめんなー!!! ……げっ!!!」

いつしかタリサは後ろを取られて大破扱いされ演習場内から外れた。

「くっそーっ!!! 撃ち落とせステラ!!!」

「アタシに任せなさい！ うわっ！ 危ないじゃない！」

「危ないも何も私こっち部隊の設定ですから、ね！」

イーフェイの殲撃が襲いかかるが、柏木の正確な支援砲撃に阻まれ

る。

『 状況終了。御苦労さま、あんた達にプレゼントがあるわよ』

「プレゼント!?!」

「プレゼントお?」

明らかに2手に分かれ違う色を見せる反応を前に、夕呼は特に何も感じさせず、データをリンクさせた。

『 さあ、兵装自由でやりなさい』

「ハイヴの完全版データ!?!」

「この前落ちたっていかザフスタンのハイヴですか!?!」

「ふふふふふ……ビビってるの? アンタ達い、こっちはX M 3搭載してるのよ? 冷静にやれば行けるわよ」

速瀬は口元を歪めながら兵装を前衛仕様にして準備を進めていた。

「新型OSを過信するのは違うが、確かにデータにビビる事はないぞ」

「……………了解!」

戦乙女たちはBETAを滅ぼすために剣を取り、BETAの巣へと進んでいくのであった。

Side out

Side タケル

H S S Tは落ちて来なかったし、市街地戦での新型O S【X M 3】の搭載した吹雪は調子良かったし、最近是好調に進んでいる気がする。すげえよなマサキ。X M 3か……あれがあれば人類はB E T Aなんかに負けない！ っと、今はそれよりも。

「夕呼先生ありがとうございました！」

「あら、何かしたかしら？」

「何って、昨日の件ですよ。H S S Tの件」

「ああ、私は何もしてないわよ」

「え、でも実際落ちてきてないですよね？」

「昨日、地震があったわよね」

「え？ あ、はい。軽いやつがありましたね」

「前の世界でもあったかしら？」

いや、それはどうだろう。正直H S S Tが落ちてきているのだから、地震とか気にしてる場合じゃなかったし……。というか何でそんな話を……。

「アンタも結構鈍感ね。昨日落ちてきたわよ。アンタの言うとおり」

「え？ 何がですか？」

「何って、アンタが言い出したんでしよう？ H S S Tよ」

「……は？ いや、だって警報も鳴らなかったじゃないですか」

「警報はカットしておいたわ。H S S Tは海堂が撃ち落とししたわ。

地震はその時の物よ。あんた達は外が見える場所にいなかったでしょうから、一瞬赤く染まった空を見てないのね」

「マサキが……？ 超水平線砲を使っていますか？」

「いいえ、新兵器をまたテストしたいとかでね」

「テストでって……命がけですか……マサキは？」

「ふふふ、今日は休むようにキツく言われてたわ。将来尻に敷かれるのかしらね。幸せになりそうではあるけど」

「はあ？」

俺は良く分からず、とりあえず相槌をうった。

「それよりも、コレを見なさい」

「レポート？ 俺なんか見ても内容なんて……」

「良いから見なさい！ 図だけでもいいから。何か気がつくことあるかしら？」

「図だけって……（ペラ）……（ペラ）……あ、これ……うん確か夕呼先生の授業で」

「確定ね。白銀、アンタこれから社と同棲しなさい」

「はあ！？」

何言ってるんだこの人！？

「なに？ 疾しいこと考えてる？ アンタが社に手を出すなら犯罪よ？」

「いやいやいや！ それを助長する行為を何故！？」

「白銀、これはアンタが元の世界に戻れる実験でもあるのよ。その先駆けとして私の論文をアンタの元々いた平和な世界とやらのアタシに渡して、論文を完成させてきなさい」

「そんなこと出来るんですか！？ というかそれと霞にどんな関係が！？」

「準備はしておくわ！」

俺はわけもわからず追い出されて隊に戻った。

夜、枕を持って霞が部屋に来た時は、驚きと様々な考えが頭を駆け巡り、その日は眠れなかった。しかし、最近、昔の夢を見ることが多くなっている気がする。

翌朝のPX

俺はまた昔の夢を見た。幼馴染の純夏が俺のポテトを犬っころにあげるといふ夢だ。懐かしい夢だ。純夏はこの世界にいないのに……。

霞は俺がぼーっとしてる間に俺と自分の分の2食分を持ってきてくれていた。

「ああ、すまん霞！ 次からはこんなことしなくていいからな！」

「何だか今日の社の様子は少し違うな」

「そうね」
「普通だろ？」

霞は食事を見つめて箸を手取る。そして魚に箸を付けたかと思うと……

「……………」

「……………」

「い、いや、それは霞のだから食べていいんだぞ？」

「……………」

霞は何かを考え直したのか、再び同じ行動をとった。

「……………」

「普通……………」

「楽しいお食事中に恐縮だが……………」
「詳しく事情を説明してもらいたいな」

「あぐんっして……………」
「あぐんっして……………」

「な、何もねーよ!」

「……………」

「いや、嫌ってわけじゃ……………」

「……何か間違っていましたか？」

「ま、間違いつてわけじゃ……」

「」「」「」……「」「」「」

「……どござ」

「ぐっ……（ぱくっ）」

「」「」「」っ！」「」「」

「まだあります」

この精神攻撃は食事が終わるまで続いた。
あ、味がしない。

食後、戦術機の整備訓練中。

「委員長、トルクレンチ取ってくれるか？」

俺は無言で飛来したトルクレンチを額で受け止める形になった。何故だ。

「何しやがる！」

「あらごめんなさい。でもトルクレンチもまともに受け取れないなんて、先が思いやられるわねえ」

今は戦術機の整備の方法を勉強中で、トルクレンチの受け取り方を学んでるんじゃないー!!

「タケル……私はソケットレンチを取ってやるのか？」

「い、いや！ 遠慮しておく！」

「ラチェット……いる？」

「ドライバーは？ プライヤーは？」

「どれも要らんー!!」

「あわわ……」

「白銀、ここで何をしている？ 博士のところに呼び出されているのではないのか？」

「いえ、聞いてませんが？」

「おかしいな……直接伝令が行くと聞いていたんだが……まあいい。直ちに博士の元へ向かえ。……ところでその額はどうした？」

「白銀が工具の扱いをミスしたのです。以後、気を付けさせます」「なにいいいつ!？」

「まあ、おおむね間違いではない」

「大間違いだ!！」

「戦術機の操縦ばかりうまくてもダメ……」

「よくわからんが、お前がトラブルの原因である事は間違いなさそうだな」

「まりもちゃんまでそんな事を！」

「まりもちゃん……だと？」

「あの……その……つい」

「白銀、何度も言わせるな……私は貴様のお友達でも仲良しお姉さんでもない。上官を侮辱した者がどうなるか……分かっているな！」

「し、失礼しました！」

「本来なら一喝入れてやるどころだが……早く行け！」
「りよ、了解！」

俺が全て悪いのか？！

Side out

Side マサキ

「中佐これでいいですか？」

「ああ、ありがとうターシャ」

「いえ、でも『掛布団を用意してくれ』なんて、これ何に使うんです？」

「イケナイ事さ。確実に怒られるね」

「わ、分かっつて それをやるんですか？」

「バレない限りは！ 秘密だからね？」

「守秘義務ならば守るだけですよ。では」

ターシャは掛布団を置いて、俺の部屋を後にした。

ピキーンッ！

「来る！」

「ニヤにが？」

「ん？ 確かにここに向かってくるニヤ」

コンコン ガチャ

「中佐？ ……掛布団を2枚も……」

「あ、唯依姫？ いや、少し寒くてね……」

「そうですか……一応、遊んでないでちゃんと寝てるかの確認だったのですが、風邪には気を付けてくださいね。シロちゃんとクロちゃんも中佐をよろしくね」

「「にゃ」「」

パタン

「ふう〜危ない危ない」

「アタシ達が気付く前に察知したわよね？ ニヤンで？」

「だんだん人間はニヤれしていくニヤ」

なあに、こういう時だけは勘が働くんだぜ。

「でも、こういうのって技術力の無駄使いつて言うんじゃない？」
「何枚作ったのかニヤ？」

「えっと、ステラ、タリサ、クリスカ、イーニア、唯依姫、イーフ
エイの6枚だな」

「ラトロワ中佐は作らニヤいのかニヤ？」
「バレた時が怖いニヤ」

そう、怖い。消されかねない。戦って死ぬなら仕方ないけど、味方
のはずの人類から死を貰うのはちよつといただけでない。

「出ゝ来た！」

俺は掛布団を詰め込み『ポント』と叩いた。唯依姫だ。抱き枕だ。
俺は他の抱き枕カバーをベッドの下に隠し、抱きついて眠ることに
した。

「抱き心地抜群。……く〜」

「そんニヤに早く寝れるニヤら枕いらニヤいんじゃない……」
「あ、誰かまた来たニヤ」

コンコン ガチャ

「中佐、京塚曹長に頼んで風邪に効く飲み物貰ってきましたよ……
眠っているのですか……あら？ 掛布団が減って……誰！？ ……
人じゃない？」

「（あゝ、確実に怒られるニヤ）」

「私の顔……！？」

「くへ〜……すぴ〜……唯依ひめ〜……く〜く〜」

「……もうっ中佐ったら / / / / /」

「（怒らニヤいの！？）」

「でも、没収です！」

「（ですよネ）」

しかし、寝ている俺は抱き枕を離さない。

「うう〜。……何だ？」

「起きましたか？ 離してください中佐」

「唯依姫！？ 夜這い！？」

「なっ！？ 違います！ 夜でもありません！ とにかくコレは没収します！」

「やだ〜やだ〜。せつかくさつき完成させたのに〜」

「やっぱり休んでなかったんですね！？ 休んでくださいって言うてるのに！ きゃっ！」

唯依姫はバランスを崩してそのまま倒れてしまう……。しかし、その先には……

「シロ!？」

「ミギヤ! アイタタタ……あ」

「……」

「……さて、オヤスミナサイ」

「「にゃ、ニヤ」……」

「……」

「いやいやいやいやいやいや!! 今シロちゃんとクロちゃん話しましたよね!? 中佐!？」

「唯依姫も疲れてるんだね? よし、上官命令だ部屋に戻って寝なさい!」

「誤魔化されませんよ!」

「ぬう……仕方ないか。シロ、クロ」

「良いのかニヤ?」

「オイラ達がバレるとまずいんじゃない?」

「タケルと夕呼先生は知ってるだろ? もう良いさ」

「……本当に喋った」

「唯依姫。ここから先はその内に話そうと思っていた事だけど、ただ他の人に言っちゃ駄目だからね」

「は、はい。ネコ型の偵察機とかだったんでしょ?」

「生きてるよ。会話もできる。俺はね、この世界の人間じゃないんだ」

「……どういふことでしょうか?」

「90番格納庫に行こうか。俺の機体も見せるよ」
「……中佐の機体」

格納庫内は誰一人おらず、静けさを保っていた。照明を付け、サイバスターを見せる。

「画像データにあつた機体……」

「これが俺の機体【AGX-05】正式名称【サイバスター】」

「サイバスター……綺麗」

唯依姫はサイバスターに見惚れている。

「シロとクロはこのサイバスターの兵装の一つでもある。俺の使い魔でもある」

「使い魔？」

「ちよつと待ってて」

俺はサイバスターに乗り込んで夕呼先生に説明した時のようにディスプレイを異次元から取り出す。更にシロとクロもハイファミリアとして射出する。俺はシロとクロがコクピット内にいない事を見せながら説明する。

「こういう風に兵器は取りだすんだ。飛んでるヤツにはシロとクロが憑依してる」

「……憑依？……信じられないことですが……」

俺は再び降りて、サイバスターの脚部に唯依姫と寄りかかって説明を始めた。

「シロとクロは使い魔だから話せるんだ。機体も魔法と科学の融合したような機体だから戦術機としての考え方は全く通用しない。信じた？」

「これだけ見せられてしまうと……信じざるをえません」

「信じてもらえたニヤ」

「これで少し動きやすくニヤったわね」

「……俺、元いた世界で死んでね、もう生きる気はなかったんだけど、他の世界で生きろって神様に言われてね。まあそれでも生きる気は最初なかったんだけど、なんか楽しくなってきたやつてさ死ぬ気も今ではないのよこれが。……そんで、この世界に来たら戦術機の知識とかはあったから、夕呼先生が中佐としてこの基地に置いてくれてね。あ、中佐はやりすぎだつて言っただよ？」

「……中佐は、どうしてこの基地に？ 中佐の腕なら資源の豊富なアメリカとかでも高待遇でしたでしょうに。アメリカなら食料自給率は100% それに比べて日本を含め他の国では合成食料がほとんどですし、国としての力でさえも……」

「そりゃあ……俺が日本人だからだろうな」

「……日本人」

「そ、日本人だから。飯が旨かろうが、自分の国じゃないなら願い下げだな。国の力が低いつて言うなら上げればいい。それに飯なら京塚のおばちゃんの飯は旨いしね」

「中佐……（やっぱり変わらない。うん、再確認・再認識。中佐は

中佐。私は私。自分の気持ちに変わりはない。中佐だから私は……」

「唯依姫？」

「ふふふ、大丈夫です。信じました。でも……神様はないと思いませんよ？」

「いや、いるんだって神様。タバコ吸ってラフな格好してて不良な感じの赤い髪の女の子」

「もう良いですって。戻りましょう、ここは冷えますから」

「信じてないでしょ！？ いるんだって」

「はいはい。風邪ひかないでくださいね……マサキ」

ん？

「今、名前で呼んだ？」

「呼んでないですよ / / /」

「いや、呼んだね」

「聞こえませんか / / /」

「じゃあ抱き枕は使うね」

「それは駄目です！ / / / /」

「聞こえてるじゃん。じゃあ唯依姫が生抱き枕になってよ」

「な、なま！？ だ、駄目です！！ / / / / /」

「ねえクロ、あれでもマサキは気付いてニヤいでしょ……」

「そうね、抱き枕を取り返そうと必死にニヤってるだけニヤ……」

「はあ、バカップル……」

結局俺は抱き枕を取り上げられ、落ち着きを見せた。

しかしまだ5枚あるのさ……。くくくくく。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……。。

「中佐？」

……取り上げられた。ぐすん。

S i d e o u t

12 休日と抱き枕（後書き）

感想は随時受付中

今回の出来事、箇条書きコーナー

- ・抱き枕作成！
- ・唯依姫にサイバスター・クロ・シロを教えました
- ・マサキを名前で呼んだ？
- ・抱き枕取られた。

今回はジャイロボールの投げ方について考察していくぞー！（おい）

13 呼び出し・模擬戦・クーデター！？（前書き）

全話にサブタイ付けてみた……変更の可能性もあり。

13 呼び出し・模擬戦・クーデター!?

Side マサキ

ここは90番格納庫の割と奥にあたる格納スペース。
サイバスターは割と手前に置いてあるのだが、タケル専用機はこの奥にて制作中だ。

俺は制作したパーツ・武装を取り付けて行く。

「主任、本当にこれだけの重量であってますか？」

「ああ、間違つてない。それで強度は十分なんだ」

「随分軽いですね……分かりました。ここは……？」

「背面ユニットは外部パーツを外した時にしか使わない。外部パーツ自体が武装であり、ブースターでもあるから大丈夫だ」

「了解しました」

目の前の機体はブラックボックスのオンパレードだ。骨格はBETAの素材を混入させ、武装のビーム兵器も光線級のレンズを必要としたし、内部のエンジン部分なんて誰に聞かれても答えられないような代物だ。

「あ、おい！ 何で複座型の管制ユニット持ってきてるんだ！」

「ああ、良いんだ。これは複座型で良いんだ。というかアレは3人乗りだ」

「は？ 3人……ですか？」

疑問も当然だ。複座型ですら珍しいのに、3人乗りなんて聞いた事がない。しかし、それほどまでに複雑な機構を持つ兵装がある。普通に戦うなら1人乗りでも大丈夫だが。BETAと全開で戦うなら3人だ。少し窮屈そうに見えるが、基本的に操縦するのは1人だから問題はない。

「海堂中佐はいらっしゃいますか？」

「ここにいるぞーっ！」

俺は手のひらを広げ、高らかに突き上げて、呼んだ奴の目の前に現れた。

「ってピアティフ中尉じゃないですか。どうかしました？」

「お久しぶりですね中佐。香月副司令がお呼びです」

何用でっしゃろ？

Side out

Side 夕呼

ジュジュジュッ

通信が入る。ここに直接という事はよほどの事だろう。

『香月副司令。帝国斯衛軍が、海堂中佐を呼び出しに応じさせるよ
しゅと……』

これは海堂には伝えていないことだが、何度か断つてきた事だ。突如現れた18歳の中佐、同時期に目撃された所屬不明機^{サイバスター}、少ししてからまた各国で目撃され、同じ時間帯でBETAの巣であるハイヴが一つ落ちた。海堂と関係はありませんと言えるのも限界かもしれない。

「また月詠大尉かしら？」

月詠大尉とはいっても、恐らくは殿下直々の呼び出し。まったく、海堂が余計な事をしなければ……。

『ええ、しかし今回は大将も絡んでいるようでした』
「は？」

帝国斯衛軍の大将？

S i d e o u t

S i d e マサキ

俺はピアティフ中尉に案内してもらい夕呼先生の執務室に来ていた。ピアティフ中尉は部屋を後にして、今この部屋は二人だけになっていた。

「海堂、今アンタが作っているモノについても聞かなきゃいけないんだけど？」

今作っているモノ？ タケル専用機だろうか？

「えっと……あつたあつた。コレをどうぞ」
「これは？」

俺は何枚か持ってきていた資料を選別して渡し、読めばわかると促す。

「サイバスターみたいに飛びはしないのね……（ペラ）……なるほど……これは、この前の新潟の奴ね？」

「ええ、その改良型です」

「そう……この外部パーツは使い捨てなのね？」

「そうですね。撃ち終わったらただの重りなので、パージすればOKです」

「ビームライフル。これだけでも戦局は有利になるわね」

「ああ、ライフルは数本作るんで、それで楽になるでしょうね。装備する戦術機はタンク積まなきゃならないでしょうけど」

「ふーん、じゃあなんでこの機体はタンクなしなの？ 内骨格だからと言ってエネルギーの供給は同じようなもんでしょう？ これも使い捨て？」

「別のエネルギー供給のラインがあるんですよ。これはまだ試作なのでお伝えできませんけどね」

「そ、まあ良いわ。それよりもアンタ何をしたの？」
「は？」

夕呼先生は目を細めて俺を見やる。

どれがバレた！？ あれか！？ それともアレか！？

「帝国の大将からのお呼び出しだそうよ？」

「は？ 大将？」

何それ？ 聞いたことないイベントなんだけど。

「では、中佐よろしいですか？」

「唯依姫も行くんだね」

俺は不知火・式型改をトレーラーに積んでもらい、帝国軍へと向かう事になった。

内容は、悠陽が斯衛軍のトップである紅蓮大将・神野中將というお偉い方々に口添えをして、俺との模擬戦をすることだ。俺が勝ったら出来る限りのバックアップ。俺が負けたら俺の身柄は国連軍横浜基地から帝国斯衛軍、殿下直属部隊への配属となるらしい……。

「って、アホか」

「どうかしました？」

俺は唯依姫に軽く内容を話した。

「は？ 紅蓮大将と神野中將と月詠大尉と沙霧大尉を相手にするんですか！？ 何ですか！？」

「最初は一人ずつって話だったんだけどね、模擬戦は疲れるだろうって、2〜3日掛けて1対1でやるとか言い出したからね。そんな時間ねーっつーの。了解は貰ってないけど、まとめて相手して、すぐに帰るよ」

「……負けたら中佐は帝国斯衛軍なんですよね？」
「俺が負けるとでも？」

唯依姫は口元に手を当て、「中佐なら……でも紅蓮大将に神野中将
つて……他の二人でさえも日本を誇る腕前の衛士だし……」とか言
つてる。

まあ折角用意してきた機体だ。この世界のトップクラスの衛士がど
れほど持つのかも見ものか。俺はトレーラーに乗っかってる不知
火・式型改を想像しながら頬杖をついていた。忙しい時に呼び出し
やがって。……ああイライラする。

指定された厚木基地に到着する。

俺は強化装備に着替えて、不知火のシステムチェックに入った。ト
レーラーから不知火を切り離し、兵装の最終確認をする。

『お待ちしてりました海堂中佐』

すでに帝国軍仕様の不知火。武御雷、瑞鶴2機が俺を待ち受けてい
た。不知火は沙霧。武御雷は月詠さん。瑞鶴には大将と中将が乗っ
ているのだろう。武御雷が配備されているのに瑞鶴に乗るとは、性
能よりも個人的な乗りやすさ重視といったところなのだろう。

「お久しぶりです月詠大尉」

『本当に子供だとはな、衛士として沙霧が負けたと聞いたが？』

『紅蓮大将、嘘偽りではございません。私は海堂中佐に負けました』

『さて、こちらは準備が整っているが、どうかなお若いの？』

「中佐、管制はお任せください」

「ああ、頼んだ。さて、いっちょ行きますかあ」

俺は目の前に広がる4機を見つめて言った。

「確認させてほしい。俺が勝ったらバックアップをしてくれる……」

「はい。その代わりに、中佐が負けた場合は、その腕を帝国軍にいた
だきたく思います。どうか殿下のお傍に……」

「負けた場合はそれでも構いません。ですが、条件が一つ」

「何でしょう?」

「全員まとめて相手します。この条件が飲めないなら帰ります」

「……何を言っているのか、分かっているのか?」

「恐れながら中将殿、ありがたい進言かと存じます」

「私も同意見です。私や沙霧大尉では結果は見ております」

「ほほう、不知火1機に4機がかりで『ありがたい』と……」

「先に言わせてもらいましょつか紅蓮大将、神野中将。……俺が乗
っている機体が不知火でよかつたな。それとただの不知火だと思っ
たら即死だぞ」

「……くかかかかかかか!! 面白い!!」

「ワシらにその様な口を聴く者があるとはな、殿下からもキツク言
われておるからな、手加減はせぬぞ?」

それでいい。

『それでは、JIVESによるデータリンクを開始します。準備は
よろしいですか?』。では、状況開始!』

S i d e o u t

S i d e 篁 唯依

JIVESの設定を進める中、今回の演習……中佐の身柄を拘束する圧力と、そう言えなくもない演習が始まるうとしていた。

『先に言わせてもらいましょつか紅蓮大将、神野中将。……俺が乗っている機体が不知火でよかつたな。それとただの不知火だと思つたら即死だぞ』

「中佐……」

私は中佐の乗る真っ白な不知火の背を見つめ、何て事を言うのだと思つた。紅蓮大将と神野中将と言えば、日本帝国軍の双壁とも言つべき存在。その衛士としての腕前は……あ、でも中佐も化け物か。

『……くかかかかかっ!! 面白い!!』

『ワシらにその様な口を聴く者があるとはな、殿下からもキツク言われておるからな、手加減はせぬぞ?』

どうやら本気の勝負になったようだ。1対1で進むはずだった話はいつの間にか1対4へ。負ければ中佐は帝国軍に行ってしまう。だが、何故かそうはならない気がした。中佐が負けるところを想像できない自分がいた。

「それでは、JIVESによるデータリンクを開始します。準備は

よろしいですか？

。では、状況開始！」

もしかすると、中佐と一緒に仕事ができなくなるかもしれないのに、私の心は撃ち震えていた。

Side out

Side マサキ

この不知火は、不知火の改修機で【不知火・弐型】だ。更に武装も改良を加えて、俺好みにしてあるので【改】としている。紅蓮大將や神野中將には悪いが、試したい動き、兵装があるので良い機会だ。極上の実験台になってもらおう。

さて、自分より多く敵がいる場合の対処法はいくつかある。一人ずつしか戦えないような狭いエリアに誘導して戦う。素早い動きで攪乱し出来る限り早く各個撃破する。隙が出来るのを耐えて待つ。等等。しかし、

「（そんなの性に合わないから、やっぱりコレなんだけどね……まあすぐに終わってもつまらないからな……だから）避ける！」

俺はいつものようにマイクロミサイルを肩と脚から放出していく。今までランチャーが、装填出来るのが1層だったのが、3重装填まで可能となったため、ミサイルはこのパーツ内に脚に25発×3層で計75発が左右合わせて4ヶ所。脚部だけで合計300発のマイクロミサイルを搭載している。肩も同じように25発を3層と、胸部にも20発を2層搭載しているため、それぞれ左右合わせて、2

30発。上下合わせて530発ものマイクロミサイルを搭載している。脚部のランチャーに関しては、発射口の調節も180度稼働できるため、後ろへも撃つ事が出来る。

さて、気になるのは重量だが、ランチャー自体もブーストが付いているため問題はない。通常の不知火と比較すると多少遅くなるわけだが、そこはXＭ3もあるので気にしないでほしい。

「（誰に解説してるのかニヤ）」

『ぬおっ！？ いきなり全弾発射とは！』

『これさえ凌げば近接戦闘しかないだろうに……衛士の腕前を見誤ったのではないか？ 月詠、沙霧』

全弾？ んなわけないだろう。全弾発射したとしたら、それはそれで面白い事になるがな。

『くっ！ 何て数だ避けきれない！』

『沙霧大尉、左脚部に被弾。続行可能』

『月詠大尉、左腕部に被弾。続行可能』

紅蓮大将と神野中將は長刀と薙刀でミサイルを切り払い、ビルの残骸などを利用して巧く回避していく。流星は大将と中將といったところだろうか。

「なら、これはどうかな？」

俺は長刀を装備し、一気に距離を詰める。

「かかった！　ワシに接近戦を挑むか！　若造！！」

神野中将の薙刀と俺の長刀がぶつかり合う、しかし、それも一瞬の事だった。

「何！？　くっ！」

神野中将は距離を逆噴射で取る。薙刀だった物は、ただの棒になっていた。

「神野の薙刀が……どういう事だ？」

「演習中だけと説明しましょう。俺のこの長刀は高周波ブレードとなってます。その程度の物なら簡単に切れますよ。刃こぼれもしないで基本的には延々と切刻む事が出来ます。それが突撃級の殻でもね」

俺は言葉と同時に拳をグーのまま神野中将の瑞鶴に向ける。

「更に挑発とはな……」

「いいえ、これで終わりです」

拳の甲の部分が開き、ガトリングガンが現れる。神野中将の驚きの声とともに銃声を鳴らすガトリングは管制ユニットを的確に捉えていた。

『神野中将、管制ユニットに被弾。致命的損傷、大破』

俺はまだ残弾数も残っているアーマーパーツをパージした。更に長刀も地上に突き刺して、短刀のみを装備する。これは標準的なダガーのため、高周波などの機能はない。

『馬鹿にしておるのか?』

『流石にそれは無謀といえるのではないですか?』

『試してみればわかる。新型OSとこの機体なら、余裕だ』

「行くぜ、【オーバーブースト】」

俺の乗る不知火・弐型改の背中が開かれる。そこにはブースターが取り付けられているが、随分と小型なものだ。しかし、その出力は通常のブースターの数倍の出力を持って突進する。

『なんと!?!?』

突撃砲の雨が横から前から降ってくるようだ。しかし、それは俺がいた場所に降っていく。撃った瞬間に俺はすでに相手の懐だ。

「遅い!」

俺は短刀一本で次々に落としていく、距離を取ろうとしても、詰めようとしても結果は同じ、このスピードについてこれるとしたらサイバスターと……。

『……参った。まさかこれほどの腕前に開発力とは……正直予想以上であった』

何て、大破扱いされた紅蓮大将が言ってくる。

「こんなに小さい衛士だったとは……」

「負けはしたが、帝国に欲しいな」

「諦めてください大将殿。じゃあ悠陽によろしく」

「いえ中佐殿、自分でお伝えください」

ゾクッ！

背後に気配を感じ振り向くと、悠陽が箱を手に待ち構えていた。

「マサキ、お久しぶりですね」

「ひ、久しぶり……なんか変なオーラ出てない？」

何とも形容しがたい笑顔だ。笑顔だけどなんか……黒い？

「これを受け取っていただきたくお持ちしました」

「何これ？」

俺は箱を開けると中には【カギ付きの首輪】が入っていた。

「……じゃあお疲れっした〜」

ガシッ

「受け取っていただけますね？」

「受け取れるか！ 何で首輪だ！ なんもん貰って喜ぶとしたらあそこのメガネぐらいだろう！」

俺は沙霧を指さして怒鳴る。アイツなら殿下〜殿下〜って喜ぶだらうよー！

「では仕方ありません。真耶さん！」

「はっ！」

ジャラッ！

どこから出したその鎖と手錠は！？

「唯依姫出して！」

「は、はい！ 出してください！ 中佐お手を！」

「……っ！ 逃がしてはなりません！ これは上意です！」

「「「はっ！」「」」

何で全員で追ってくる！？ もっとスピード出せ！！

なんかター ネーター（T-1000）4体に追われてる気分だ！！

Side out

Side 煌武院 悠陽

「申し訳ありません。逃しました」

「……構いません。冗談はさておき真耶さん、マサキがいれば我が国にも光は見えるでしょうか？」

「恐らくは」

私はその答えが返ってくるだろうと、分かっているながらも心を満たしていた。

紅蓮大将・神野中將を手玉にとり、4対1であっさりと勝ち逃げさ

れてしまった。

マサキ、あなたがいれば、我が国……この世界は救われるのでしょうか。

「殿下、海堂マサキを国連軍から引き抜きますか？」

「ふふふ、紅蓮大将。人の恋路は邪魔してはなりません」

「は？」

「殿下、アレは篁の家の者でございます」

「そうですね……正妻でなくとも私は構わないのですが」

しかし、トレーラーに飛び乗る際のあの二人の姿には何故か見惚れてしまいました。

「ところで、沙霧大尉のソレは外せないのですか？」

「申し訳ありません。直ちに」

真耶さんは鎖と手錠で縛られた沙霧大尉の拘束を解いていった。どうやら捕え間違えたらしい。

Side out

Side マサキ

揺れるトレーラーの中には俺と唯依姫と猫2匹しかいない。

「先ほどの不知火は全軍に配備されるのでしょうか？」

「ははは、無理無理。結構好き勝手やっちゃってるからね、予算が

ないだろうね、A-01部隊に回せばいいなってぐらいにしか考えてないよ」

「さっきのアーモードパーツはかニヤリ有効ニヤ武器だニヤ」

「インバクト・ガード砲撃支援にはビームライフルだニヤ」

「いや、でも数的にも厳しいか……クリスカとイーニアが乗るチェルミナートルでしょ、タリサにステラ、イーフェイ、ラトロワ中佐にターシャか……A-01部隊はそのままでも良いか」

「独立部隊を申請すると？」

独立部隊か、それも良いかもしれないな。

俺は妄想ともいえるべき事を考えながらシロとクロを撫でていた。

ピピピピピピピピッ……!!

突如鳴り響く警報。

「何があつた!?!」

唯依姫はすぐさま運転している兵士に小窓を開けて声を上げる。

「な、何者かにロックオンされています!?!」

「なっ!?!」

「すぐにトレーラーを止めて降りるぞ!」

「し、しかし!」

ドゴゴッ……!!

トレーラーは縦に激しく揺れた。

「キヤーツ！」

「唯依姫掴まって！ アンタも降りろよ！」

俺はドアを開けて外に飛び出す。俺は唯依姫の頭を抱えるように道路脇の土に塗れながら転がった。地面が柔らかくて助かった。俺は起き上がり状況を確認する。

運転手だった兵士は恐らく即死だったのだろう。トレーラーの全面はペシヤンコに押し潰されている。トレーラーに乗っている不知火・式型改は炎に包まれている。いつ爆発してもおかしくはないかもしれない。早くこの場から離れなければいけない。

ブーストジャンプの音が鳴り響いている。空には目で追う限り、黒い不知火がブーストで跳躍していた。黒い不知火には烈士のマーキングが施されていた。あれは、帝都守備連隊。

「クーデター……！？ バカな！ 沙霧大尉は……！」

「中佐！ ご無事ですか！？ 今はここから離れなくては……！」

俺は混乱しながらも唯依姫に手を引かれるようにトレーラーから一歩でも遠くへと離れていく。

ドガアンツッ！

ドツッ！

「がっ！」

「マサキ……？」

「中佐！？ ……血が……。止まらない……どうしたら……中佐、

中佐「ッ！」

Side out

マサキは爆風により吹き飛んだ物体を頭部に直撃させ血を流している。

その赤い液体は流れる事を止めずにいる。

そして、沙霧を失ってもクーデター部隊は決起してしまった。
はたして、クーデターを止める事は出来るのか？

13 呼び出し・模擬戦・クーデター!? (後書き)

感想は随時受付中なんですって

今回の出来事、箇条書きver

・タケル専用機の完成は近い!?

・T-1000を振り切る爽快感!

・アーマードって素敵じゃないですか!?
全弾発射とか痺れる憧れるうゝ!! 私は大好きです!

・不知火弐型がゝ!! マサキがゝ!!

次回、人類同士の戦い……始まる。

14 Blitz (前書き)

クーデター編は前編・後編に別れることに、まとめられないよ！

そんなことより！！ 総合評価2000ポイント突破！ ありがとうございます！ お気に入りも700件突破とニヤニヤする作者で
がんです。

11月11日11時にプッ……ゲフンゲフン
Blitzというタイトルで……何でもあらへん！
この物語はフリスタの提供でお送りします！

12月5日。

『防衛基準態勢2発令。全戦闘部隊は完全武装にて待機せよ。繰り返す、防衛基準態勢2発令。全戦闘部隊は……』

基地全体に鳴り響くアナウンスと警報。

ここ、横浜基地に所属する全衛士に緊張が走った。訓練兵といえども同じだ。

【格納庫】

直属の上官とも呼べる海堂マサキと篁唯依は帝国軍へと足を運んでいた。そんな中、落ち着いて行動してられるのは彼女達の軍人としての心構えというモノが出来ているからである。そして、何よりも海堂マサキと同じ階級の者がいるからでもある。

「全員揃っているな？ 海堂中佐と篁中尉が不在のため、この場の指揮は私が取ることになる。指示があるまで待機。各自、戦術機の機体、システムチェックを怠るな。いつでも出られるようにしておけ」

「……………了解！……………」

フィカーツィア・ラトロワ中佐は簡潔に指示をして自分のチェルミナートルに向かった。他の者も同様だ。全員強化装備に身を包み自

分の機体に足を向ける。

「一体なんだ？ B E T Aじゃなさそうだけど」

「そうね、情報が全く降りて来ないわ」

「マサキがないのと同関係……ないわよね？」

「それは流石に無いんじゃないですか？ でもB E T Aじゃないとしたら……」

彼女達の疑問は晴れない。先ほどの警報がB E T A侵攻の警報ではない事はほぼ間違いがない。B E T Aであれば情報が降りてくるのが当たり前だからである。では一体何のための防衛基準態勢2なのか？ B E T Aじゃないのであれば導かれる答えもある。

「つたく、どこの馬鹿だよ……」

「……人類同士で戦うなんてね」

【中央作戦司令室】

「ラダビノッド司令……それは、どういうことですか？」

「これは日本帝国の内部の問題です。我々国連が帝国政府の要請も無しに干渉する事では……」

「最早一刻の猶予もすでに許されないはず。この機を逃しては、後悔する事になりますぞ」

「まるで米国みたいなやり方ですね……国連はそんなにアジア圏での米国の発言力を回復させたいのかしら？」

そこには横浜基地の司令であるパウル・ラダビノッド、副司令である香月 夕呼、そして、国連事務次官の珠瀬 玄丞齋が熱を込めて話していた。

この事態を早急に収束させようと、米国軍に手を貸してもらおうと進言する珠瀬事務次官。日本帝国内部の問題ですぐに収束すると話すラダビノッド司令と香月副司令。米国の手を借りるとするならば確かに早急に自体は収まるだろう。しかし、その後には米国が発言力を高めて混乱させられては困る。話は平行線を辿る。

「では事務次官、展開中の第7艦隊にお引き取り願って頂けないかしら…… 大変目障りですので」

「私にそのような権限などありません。それは、承知のはずだと思っただけです。」

「あら……失礼」

手を貸してください。

そう言う前に、既に貸せるように近くに展開している米国軍の艦隊。脅しも含むように話は進んでいるように見えるが、実際には進んでいない。自国を汚さんとする米国のやり方に香月夕呼は常々怒りを覚えていた。もちろん顔に出さないとこころは流石、極東の魔女といったところである。

話が終わり、事務次官は司令室を後にする。ラダビノッド司令も発令室に戻っていく。その場に残ったのは……。

「い、いや俺、すっかりオルタネイティヴ5だと思つて……慌ててここに」

「安心しなさい。日本国内で、ちよつとした面倒が起きてるだけよ」

「……流石ですな。帝国軍が必死に情報操作を行っている最中だというのに……どこまでご存じなんです？」

記憶にない警報に驚き、オルタネイティヴ5だと思つた白銀武と、鎧衣美琴の父親である帝国情報省外務二課 課長というに職に就く鎧衣左近であつた。

鎧衣課長の話しによると、クーデター部隊は帝都守備連隊を中核とし、首相官邸、帝国議事堂などの政府主要機関を制圧をし、新聞社や放送局などの占拠もしているようで、帝都機能のほとんどを掌握されている。

「主要な浄水施設と発電所も幾つか確保しているようで……しかし、制圧といつても完全ではないようで、政府側も抵抗を見せているようです……いやはや、それでも大した手際だ」

「そのようね。で、將軍は無事なの？」

「帝都城は斯衛軍の精鋭が固めていますが、帝都守備部隊のほとんどを向こうに回しては……戦闘が始まったら、それこそ時間の問題でしょう。この脚本を用意したのは恐らく、国連上層部のオルタネイティヴ5推進派と米国諜報機関でしょう」

そう、白銀武が初めてこの世界を体験した時に、オルタネイティヴ

5と、G弾によるBETA殲滅作戦が1対になって発動したのはこの所為である。」

「先ほど、珠瀬事務次官に随分と勇ましい事を言っておられましたね……ここに来て順調、というわけですか？ オルタネイティブ計画は……この白銀武……それと今、帝都に行っている海堂マサキのおかげ……といったところですか？」

「……便利な駒が他人の都合で無くなるのは困るけど、自分の都合で無くなるのは……割と納得できるモノよ？」

「おお怖い……つれないですなあ、私は博士のために粉骨碎身しているというのに」

鎧衣課長は大袈裟にハンドリアクションを取り、おどけて見せた。

Side 煌武院 悠陽

マサキと別れ、帝都城に戻った途端にそれは起きた。

「何事ですか？」

「殿下クーデターです。御召し物をこちらに着替え、万が一の時は地下よりお逃げください」

クーデター。以前マサキが沙霧の事を話してくれましたが……。これはつまり、沙霧大尉が抜けても躍起した者たちがいるということ。沙霧大尉と話をした限り、クーデターの参加者は今の政府のや

り方に異議を唱えんと立ち上がるうとしていた。沙霧大尉がいなくなつたぐらいで止まらないという事？ いえ、それだけではなく恐らくは米国の……。

私は服を着替え、状況を見守ることにした。

状況は悪くなる一方だ。紅蓮大将や神野中将がいると言っても数が違う、撃墜の報告は聞いていないが、恐らくそれぞれ一人で数機を同時に相手にしている事でしょう。

「殿下……」

「……行きます」

結局、私は数時間後に帝都城を後にすることになった。

Side out

Side 篁 唯依

あの時、私は中佐の手を引いてトレーラーから一步でも離れようとした。しかし、逃げる暇もほとんどなくトレーラーは爆発。爆風による飛来物がコース的に私の方に飛んできたらしいのだが中佐が私の頭を抱えるようにそれを受けてしまった。

最初、中佐から流れる血は止まらなかったのだが、静かな呼吸が聞こえてきたので、私は中佐をシロちゃんとクロちゃんに任せて、急

ぎ水などを探しに離れていた。水などの救急セットなどは飛来物の中に含まれていたようで、茂みの中で見つける事が出来た。幸運としか言いようがない。だが……

「中佐……」

私は中佐のいる場所に戻ると、体を起こしている中佐がシロちゃんとクロちゃんと話しているのを見た。私は駆けだした。

「中佐！ 目が覚めたんですね！」

「唯依姫は無事だった？」

血だらけの中佐から出た第一声は私を心配する声だった。

S i d e o u t

S i d e マサキ

「マサキ……マサキ……」

何だ？ 明るい……というか赤い？ 確か紅蓮大将とかに呼び出されて、演習して、勝って……それから……帰りにトレーラーがロックオンされて……。

ガバツ！

「シロ、クロ！ あっ……っ……」

「目が覚めたニヤ！」

「……ここは？ つーか見えるモノが全て赤いな……シロが赤に……」

「血だらけニヤ！」

「篁さんがもうじき戻ってくるニヤ」

俺はズキズキする頭を触らぬように状況を確認した。トレーラーは燃えている。不知火も鉄屑になってしまっている。シロとクロが言うには横浜基地までもう少しといえはもう少しなのだが、移動手段が潰れたため歩いて行くのも大変な距離らしい。

「中佐！ 目が覚めたんですね！」

「唯依姫は無事だった？」

「わ、私の事なんかより中佐の事です！ どうして庇ったんですか！」

「知らないよ。身体が勝手に動いたんだから。あゝいてえ。とにかく急いで基地に戻るか」

俺は唯依姫から水を受け取り頭から流し掛けていく。傷口には染みだが、視界もクリアになる。俺は袖を切り取って頭に巻きつけた。ゴワゴワした感じが少し痛い、何も無いよりはマシだろう。

俺は基地に向けて歩き出した。

「中佐！」

「マサキ！」

「何だよ？ 怪我なら心配ないから急ぐぞ」

「基地はこっちです（ニヤ）！」「」

「……あ、そう」

俺は基地だと思っていた方向から踵を返した。

「だ、大丈夫なのですか？」

「大丈夫大丈夫、急いで戻ってクーデター止めなきゃね」

いやあしかし、まずったな……沙霧を抑えたからクーデターは起こらないものだとばかり考えていた。納得がいかない衛士とそれを助長する米国が動いたか。

数時間後、俺は横浜基地の医務室にいた。麻酔を打たれ、7針だけ頭を縫われたようだ。俺の頭には包帯が巻かれている。傷口が開かぬように絶対安静だそうだ。

「さてと治った！」

「治ってません！」

「まさかクーデターに巻き込まれてるとはね……しかも生きてるし」

「夕呼先生状況は？」

「207小隊、A-01部隊、それからラトロワ中佐に指揮を任せたテストパイロット部隊が出撃しているわ。聞いたわよ。不知火の改修機が鉄屑になったってね。アンタみたいな化け物でも流石に戦術機に乗ってないと勝てないのね」

そりゃ当たり前前だろ。どうやって人が戦術機に勝てるって言うんだ。しかし、不知火は勿体なかったな……まあいい。昼間の演習で

帝国軍のバックアップが確立されたしな。

「冗談よ。分かっているとと思うけど、サイバスターは駄目よ」

「副司令！？ 中佐を出撃させる気ですか！？」

「別に私は出撃してくれなくても構わないわよ。ただコイツはどうなのかしらね？」

「……中佐？」

「もう一機、造ってあるからな（俺のじゃないけど）……行ってくるよ」

俺は立ち上がって医務室を出ようとするが、唯依姫が立ちはだかる。

「世界有数のトップクラスの衛士が出撃してます。中佐がいかなくても大丈夫です。先ほど聞いた限りですと首相官邸などを抑えられてはいますが死者は出ていないそうですし……怪我してるじゃないですか！ 行く必要なんてないじゃないですか！」

「唯依姫……怪我って言っても、もう傷は縫ってあるし、何より……仲間が死なないとも限らない。別に全員救いたいとか綺麗事をいうわけじゃない。俺の知り合いが俺の知らないところで死ぬのが寝覚め悪いだけだ。アメリカの介入もさせたくなかった……」

「海堂、あの機体なら90番格納庫から出してあるわ、いつでも出られるわよ」

「ありがとございます夕呼先生」

「7針縫っているんですよ！？ 絶対安静なんですよ！？」

「大丈夫、戦術機に乗った俺は死なないよ」

S i d e o u t

S i d e 唯依

私は中佐の背中を見送ることしかできなかった。

「大丈夫、戦術機に乗った俺は死なないよ」

知ってますよそんな事……あれほどの腕をもった衛士を私は見た事がない。初めてこの基地に来た時に模擬戦で手合わせをして、新型のOSのテストの時も手を合わせた。新潟での時も大半のBETAを相手にしたのは中佐だ。今日だってこの国の大将と中将を軽くあしらって……。

「信じて待つだけってのも辛いんじゃない？」

「……副司令」

「信じていても不安なんでしょう？ アイツって、どこから来たかわからない奴だから、またどこかに行つてしまいかもしれないものね。まあ怪我して帰ってくるなんて私も思ってみなかつたけど……鈍感な奴を相手にするとしたら大変よ？」

「……」

「鈍感な奴を好きになった時、一番楽な解決方法を教えてあげるわ」

「

「今は、そんな事……」

「篁中尉の武御雷もいつでも出られるようにスタンバイさせてあるわ」

「は？」

「行ってきなさい。不安なんて振り払えばいいのよ。それぐらい強気でいけば鈍感でも気付くわ。とにかく押して押して、引かれるぐらい押してから不安になりなさい」

「こ、香月副司令……ですが、私は……」

「アイツに中佐って階級あげたけどまだまだガキなのよ。戦術機に關しては天才かもしれないけど……アイツの補佐官でしょ？」

補佐官だから何とかしると？

私は……

Side out

Side マサキ

「さて、毎回テストが初出撃になっている気がするが……大丈夫だよな？」

「いつものマサキらしくニヤいニヤ」

「まあ、確かに怪物マシンではあるけどニヤ」

恐らくまだ改良の余地はあるこの機体こそタケルの専用機として開発をしたモノ。武装は間に合わないものが多かったが、今回のようにブリックリーク電撃作戦ではそれなりの武装とは言えよう。

「じゃあ急ぐとするか」

キイイイイイイン……ドツオオオオオオンツ！！

爆撃されたかのようなその轟音とともに第2の所属不明機は夜空へと同化していった。飛びはしない機体だが、オーバーブーストの超高出力で操縦桿を少し引くと機体は軽々と空へと上がる。戦術機で言うところの通常のブーストジャンプと変わりはない。ただ、出力が違い、エンジン、エネルギーも異なるため、周囲には飛んでいると錯覚させるのかもしれない。飛べるように改良してしまった方が早い……うん帰ったらそうしよう。

「大丈夫かシロ、クロ」

「Gキャンセラーも上手く働いてるニヤ」

「問題ニヤいニヤ」

機体の名前はまだ無い。まあこの世界に倣うなら武御雷や不知火を超える【第4世代】の戦術機ということになるのだろう。機体には一応国連軍のマーキングだけは施してある。

- 首相官邸 -

戦術機に囲まれている官邸。俺は官邸に被害が出ないように短刀で

機能停止にさせる。

『何者だ!!!』

「動くんじゃねーよ!」

『早いっ!!!』

相手が一步動けば俺は既に懐にいる。相手が撃とうとすれば俺は既に倒れている。その繰り返しだ。

「マサキ、首相と見られる人がセンサーに反応したニヤ!」

「無事……というより、官邸ニヤい部で侵入した部隊の人間は取り押さえられたみたいだニヤ」

「へえ、やるじゃねーか……沙霧がいないと士気にも関わるのかね」

『所属不明機に問う。貴殿は国連軍か?』

「ああ、特務みたいなものだ。榊首相は無事か?」

『首相は無事だ。感謝する』

「首相と話してもいいか?」

『何? ……お会いになるそうだ』

「君は何者なんだ?」

「横浜基地の戦術機とかの開発担当者です。榊千鶴のお父様でしょうか?」

「娘を知っているのか、千鶴は……いや、いい」

「あら、肩書でも邪魔しますか？」

「千鶴の選んだ道だ。心配ではあるが訃報は聞いていない……」

「（頭の固い親父様だこと……まあいい）……クーデターを止めてください。その後の処理を頼むことになるかと思しますのでよろしくお願いします。それと煌武院悠陽殿下に政権を戻して頂けたらと思います。それで混乱も収まるでしょうから。政府が殿下を支えるようにしてもらえれば強い国になるかと……」

「ふ、簡単に言う。しかし、そういった話も受けている。近いうちに何とかしよう……ところで君は」

「海堂マサキです」

「あなたが！？ 殿下よりの全幅の信頼を得ているというあの……」

「（知らんがな）じゃあ私は急ぎますので。娘さんに手紙ぐらい書いてあげた方がいいと思いますよ？ ところで……その貴方はボディーガード？」

「そつだが？」

「名前は？」

「朝霧雅樹だが？」

なるほど……何でこの世界にいるかは知らんが、この人がいたから首相は無事だったのかもしれないな。

「彼だよ。侵入してきたクーデター部隊を一人残らず捕えたのは」
「でしょうね……お邪魔しました」

まあ今後の関わりはないだろう。

さて、誰も死ぬなよ？
おっと、少しフラフラするな……。
血が足りねえ。

S i d e o u t

S i d e クーデター部隊

通信が飛び交う。どこの部隊がやられた。あの場所は制圧したと目まぐるしく回線はパンク寸前だ。

「増援はそちらに送った！ 何をしている！」

『こちら小田原西インターチェンジ跡に展開している国連軍と接敵。第一陣は全滅……全滅です！』

「ちっ！ 時間がかかりすぎている」

「沙霧大尉が抜けたんだ……仕方ない」

「だからと言って止めるわけにもいかないぞ？」

「分かっています駒木中尉」

「私は厚木基地に向かう。後のことは任せる」

「了解！」「」「」

そして、クーデター部隊は、計画の最終段階まで進もうとしていた。

Side out

Side A - 01部隊

『上出来だ……全員生きているな』

『新型OSが無かつたら何回死んでいる事か……』

『でも実戦が人間相手になるなんて……』

『今は任務に集中しろ少尉……第2陣が来たぞ』

モニターに現れるのは10個に満たない赤い点。識別は帝国軍守備連隊 敵だ。BETAではなく人を敵と識別するモニター。新任少尉以外は冷静さを持っているようだが、ほとんどが敵が『人』という事に戸惑いを感じている。

『全員聞け。ヴァルキリーズ^{われわれ}は人類を守護する剣の切っ先……いかなる任務であれそれを完遂する。その妨げとなるならBETAであれ人であれ排除するのみだ』

部隊長である伊隅の声に頷く衛士達。殺したいわけでもない。殺されるわけにもいかない。彼女達は第4計画の直属部隊。相手は帝都守備連隊の精鋭……日本を守護する最強の楯。しかし、この場を制してこそ……いや、制さなければ存在意義など無いも同然。人類の未来を切り開く駒。それが彼女達

『伊隅戦乙女中隊』^{イスマ・ヴァルキリーズ}

なのだから。

『こちらヴァルキリー1』
『ラトロワだ』

回線は秘匿回線へと切り替わる。

『海堂中佐が本日、横浜基地に帰還する際にクーデターに巻き込まれ負傷した模様。命に別状はありませんが……え、嘘』

『どうした涼宮！』
『マサキがどうした！』

『あ、すみません。続けます！ 頭部に7針を縫う怪我を負っていますが、出撃し、首相官邸に向かったそうです。……え、もうですか！？』

『7針！？』
『どうした！？』

『首相官邸は解放された模様。すごい速さでそちらに向かっていきます』

『……本当に怪我をしているのか？』
『全く、馬鹿モノが』

秘匿回線は解除され、伊隅はA-01部隊に、ラトロワ中佐は混成部隊に指定回線で説明をした。

『7針って無事なんですか！？』
『しかも出撃してるって！？』
『私のために……』
『いや待てよ！ どういう思考回路してんだよ！』

ピッ。

『来たぞ……全機、兵装自由！
後悔させる！』
『』『』『』『』『』『』『』『』『』『』
『了解！……』『』『』『』
『』

S i d e
o u t

14 Blitz (後書き)

感想は随時受付中

毎度の箇条書きシステム起動！

・7針って……どうなの？ よう知らんけど、まあバンソーコーじや治らないんだぜ

・精神コマンドは使いません！ アレは機体に乗って使うもの！
自分を治すためのモノにあらず！

・唯依姫は……まあ次回以降だわな。

・チラツと出てきた謎のキャラ『朝霧雅樹』なんとなく出してみただけ、気にしないでね！ ボディーガードの中で私が『最強』と思っっている人物です。さてさて、何人の方が知っている事やら？

・タケル専用機はほぼ完成し、クーデター止めるのと並行してテスト中！ 性能に関してはまだ先にする。

とまあ、こんなところだろうか？

次回、クーデター編が終わる？ たぶん終わる。

15 強引に押すと違う方向に倒れる(前書き)

クーデター編はこれで終わり。

今が書いてて一番つらい時期！ 思いつきで書いてるから引き返せない時が大変！

次回こそは……次回こそはあ……と物語始まる前から次回の事を考えております。

では、この物語はフリスタの提供でお送りします。ペロペロ

15 強引に押すと違う方向に倒れる

Side 唯依

私は強化装備に身を包み、第11艦隊に乗せてもらっていた。

『篁中尉。現在の状況を報告します。海堂中佐は首相官邸を解放したようです』

「もうか……いや、中佐なら当然か」

しかし、早い。先ほど出たはずの機体が首相官邸にいて、更に解放までした。クーデターの思考を全て読んでいるかのような早さだ。

『それから……』

ピアティフ中尉が口ごもる

「何でしょう?」

『……海堂中佐をよろしく願います』

「……分かっている」

鈍感な人には強引に……か。副司令も難しいことを言う。

Side out

Side マサキ

雪が降ってきたな……。

『その所属不明機！ 止まれ！』

この声は　　　　まりもちゃんかな？

「こちら横浜基地所属、海堂中佐だ」

『中佐！？ お戻りになったのですか！ その包帯は……？』

「ああ帰りにクーデターに巻き込まれてな。見た目ほどじゃない」

『ご無事で何よりです！ 我らはここで待機を……お待ちください』

中佐。秘匿回線に繋がります。
CP「コマンドポスト」から06　　秘匿回線の

使用を許可する。報告せよ』

タケルが悠陽を見つけたか。

『先ほど確保した3名について身元判明』

『身元判明？ どういう事だ！？』

「煌武院悠陽殿下に侍従長、それと帝国情報省の鎧衣課長だろ？」

『マサキ！？』

『白銀！ 上官だぞ！』

「今はいい。タケルの吹雪じゃ無理だろうな。俺の機体に乗せよう
複座型だから殿下も楽なはずだ」

『で、殿下が！？』

『鎧衣課長と侍従の女性が、今そちらに向かいました。詳細はそち

らで確認してください』

俺は降りて悠陽のところに向かう。

「よう、お昼ぶりだな」

「マサキ、その包帯はどうしたのです？」

「帰りにクーデターに巻き込まれてな。大した傷じゃない」
「そうですか……殲滅戦ですね！」

おいおい、政威大將軍殿下の発言じゃねーだろそれ。

「神宮寺軍曹聞こえるか？ 指揮はまかせる」

『は？ 中佐！？』

「面倒なのは嫌いなんだ。それに感を取り戻しておいた方が良かったらうな」

『それはどういう……？』

「まあ今は上官命令だ」

『……分かりました。指揮はとらせていただきます』

『では、海堂中佐の乗る……中佐、機体情報が反映されていないのですが、なんとお呼びすれば？』

「ああ、すまない。まだ名前はないんだ」

『了解しました。中佐の乗る機体を中心に円型陣形サークル・ワンで全周警戒、別名をまて』

俺は悠陽を管制ユニットのシートに座らせ、着座調整を済ませる。その間にも通信が流れる。原作通り、鎧衣課長が殿下の居場所をクレーター側にもリークした。これによって他の施設などの攻勢も助かるだろう。

「これは割と広い管制ユニットですね。あら、確か……ルナとアルテミス」

「凄い間違え方だニヤ」

「シロとクロだニヤ殿下」

「俺は突っ込まないぞ、あとこれ飲んでおいてくれ。酔い止めだ」

俺はスコポラミンという薬を一応飲ませる。加速度病対策だ。まあGキャンセラーも正常だったから問題はないかと思うが念のためだ。

「前々から思ってたはいましたが、シロとクロの仲は良いのですか？」

「オイラとクロは仲良しだニヤ」

「ケンカはしニヤいわね」

「まあちゃんと話せば悠陽と冥夜も同じようなもんだろ。白黒、陰陽は関係ない悠陽は悠陽、冥夜は冥夜だ」

「では、武御雷は何故この場にいないのでしょうか？」

「冥夜への贈り物の武御雷か。そりゃあ周りの目があるし冥夜自身の気持ちの問題もあるだろうからな。よく心構えが出来ていっても女の子だろ？ もう少し待ってやれよ」

「……冥夜の事、よく見ているんですね？」

おい、良い事言ったはずなのに『あなた？ シャツにキスマークがついてるわよ？』的な感じで怒られそうなのは何でだ？

『海堂中佐、聞こえますか？』

「ピアティフ中尉？ どうしたんですか？」

『現在の状況を報告いたします』

「それは助かる」

「マサキ、私にも通信を聞こえるようにしてください」

ああ、忘れてた。強化装備付けてないと通信は聞こえないんだ。俺は通信を切り替えて管制ユニット内に聞こえるようにした。

『首相官邸は中佐が解放していただき、機能を取り戻しております。他の主要施設もラトロワ中佐の率いている部隊により着実に解放されていっています。クーデター部隊は厚木基地に集結していたようなのですが、そこもラトロワ中佐、A-01部隊により奪回されました』

「すげーなあいつ等。なるほどね、アメリカ軍は？」

『アメリカ軍も奮戦しており、そちらへ援軍として向かっています。それから、間もなくのようですが、斯衛第19独立小隊が殿下の護衛として合流するようです。ご武運を』

「月詠中尉達か……ありがとう」

さて、これから南に逃げて海で待ち構える艦隊に乗っけてもらい横浜基地に帰るといふ作戦がまりもちゃんから伝えられるわけだが。

「マサキ、あなたの腕ならクーデター部隊を全て落とせるのでしょ
う？」

「出来なくはないと思うけど……?」

この殿下様がそうはさせないらしい。いやいや、こっちは攻められてるんだぞ? 何で殲滅しようとしてるんだ?

『こちら斯衛第19独立小隊、月詠中尉だ。殿下はどの機体に乗っている?』

「月詠さん、俺の機体に乗ってるよ」

『海堂中佐ですか心強い。その包帯は?』

「大した怪我じゃない。さて神宮寺軍曹、聞こえるか? 全速力で南下してくれ」

『いえ、それでは殿下が……』

「ああ、心配いらぬ。この機体は特殊でな、揺れだとかはほとんど感じないように出来てる。むしろ207小隊がこっちの早さについて来れないのが問題だ」

『了解しました』

「それから陣形も変えるぞ、俺を先頭にアローヘッド・スリー楔参型、後方は斯衛がハンマーヘッド・ワン型隊形で固める。月詠中尉もいいか?」

『……承服しかねます。殿下の安全が第一。どうか中佐は中心に配置されるような隊形を……』

「月詠、マサキはクーデターに巻き込まれて怪我を負ったのです。そのマサキが怒りに撃ち震えているのです。私はその気持ちを汲みたいと思います」

「いや、俺は怒ってな……」

『殿下……かしこまりました』

おい斯衛軍

『 4時方向より機影多数接近！ 稜線の向こうからいきなり
！！』

「落ちて着け鎧衣訓練兵。207小隊全機だ！ 安心しろ撃つてはこ
ない。こっちには殿下がいるからな」

『 ……中佐、その発言はいかがなものかと』
「私は役に立っていますかマサキ？」

ある意味、人質的な？ どっちが悪者か分からなくなるな。まああ
つちも悪いとは思ってないんだろっけど。

『 国連軍及び斯衛部隊の指揮官に告ぐ、 我に攻撃の意図非ず。
繰り返す 攻撃の意図非ず。直ちに停止されたし、貴官らの行
為は、我が日本国主権の重大なる侵害である』

「だってよ？」

「ふふふ、マサキに傷を付けておいて面白い事を言うのですね？
あの者たちを焼き払って頂けますか？」

寝てないだろうから疲れているんだろう。とてもじゃないが国のト
ップの発言とは思えない。

おっと目の前から機影多数。確かコレは……。やっぱりそっだ。

『 こちら米国軍第66戦術機甲大隊』

『 速度を落とすな！ 早く行け！』

『ここは任せろッ』

『207リーダー了解!』

『作戦に変更はない。安心していけ』

アメリカ軍のストライクイーグルにラプターだ。ラプターに関しては俺の機体じゃあほとんど意味無いが、タケル達の乗る吹雪などのモニターで見ると、かなりステルス性の高い機体だろう。BETAというより、戦術機同士で戦う事に重点を置いている面も見える機体だ。俺としてはアメリカのそういうところが気に入らない。何で対戦術機用に作る必要があるんだ。

「あ、忘れてた悠陽、大丈夫か？ 加速度病とか」

「問題ありません。この機体は凄いですね……今までに何種類かの戦術機に乗ってみた事はあるのですが、シュミレーターのような揺れも僅かしか感じない。名前はまだ無いと言いましたね？」

「ああ、まあその内にも名付けなきゃな」

「この機体は全軍配備になるのですか？」

「まさか、俺の技術力を結集させた機体だからな。この世にこの1機しか存在しない機体だ」

「そうですか。そうですね。このスピードでも出力をかなり抑えている。後ろの小隊は全速力でしょう、付いてくるのがやっとに見えます。この機体の出力エンジンは何を使っているのですか？」

「……答えられません」

「……確かに答えられないでしょうね」

「でしょうねって、分かるのか？」

「話には聞いた事があります。ですが完成しているという話を聞いた事ありませんし、どの国でも今では採用されないでしょう。お金も危険も伴いますから。この機体の出力系統はそれに近いモノ……やめておきましょう」

「……いいのか？」

「私は何も知らなかった。そして、この機体の機密は漏れずに事が済めば廃棄される。情報も残らない。これならば構いません……私の独断で決めていい事ではないでしょうが、守れますか？」

「必ず」

「では、構いません」

『 207 戦術機甲小隊に告ぐ、私は米国軍第66 戦術機甲大隊指揮官ウォーケン少佐だ。現在我がA 中隊が時間を稼いでいるが彼我の戦力差を考えれば樂觀できる状況ではない。我々は亀石峠で諸君らの到着を待つ。到着次第、補給作業を開始する。可及的速やかに合流せよ 以上だ』

- 亀石峠 -

『 中佐、補給をどうぞ』

「この機体は補給要らずだ気にしなくていい。特殊な機体でな、他の者を優先させてくれ。ウォーケン少佐聞こえるか？」

『 こちらウォーケン少佐です。横浜基地の中佐がいらっしやるとは

知らず失礼いたしました。殿下は中佐の機体に？」

「ああ、少佐、そちらの部隊はどうだ？」

「現状から言つて問題はありません」

「恐らく富士教導隊もクーデターにいるはずだ。この後が厳しい戦いになる」

「はっ！ 全力で食い止めて見せます！」

「いや、衛士の命を最優先にしろ。少佐はこう考えているはずだ。

何故日本国内での戦闘にアメリカが命を掛けなければならないのか。BETAと戦うための多くの衛士の命をこんなところで散らすとは……と」

「……確かに個人的感情としては持ち得ているモノです。ですが我々は軍人です！ 上からの命令は絶対！ この命に代えても殿下の命、207戦術機甲小隊の撤退を最優先に……！」

「必要ない。俺も少佐と同じ考えだ。BETAを倒すのが俺たち軍人の役目だ。人類同士で争うために生きてるわけじゃない」

「しかし……！」

「しかし、賛同できない点もある。自分の国を汚したくないから日本に潰れてもらつては困るという考えでの派遣……気に食わない」

「……」

「もちろん少佐には関係のない話だ。さて、何が言いたいかわかるか？」

「黙つて見ていると？」

「なに、補給の時間だけで構わない。それで終わる」

『一機やられました！』

ズガンッ！

『これが富士教導隊か……タリサ達のほうが少し上か？』

それはアメリカ軍と違って日本語、そして子供の声だった。

『何者だ！』

『お前らに怪我させられた者だ』

一機の戦術機が暴れまわる。手の甲からガトリングガンを撃ち、肩から長刀を抜いて、ブーストを効かせて跳躍してくる。長刀を振り上げるとたまたまそれに当たって鏢迫り合いになる。しかし、

『何っ！ 折れた……？ いや、切られた！？ がっ！』

『お前も寝てる』

また一機、もう一機と、次々に大破していく戦術機。よくよく見ると、管制ユニットだけを取りだされるように切られ、開閉口は歪められ、出ることは叶わない。

『たった一機で……化け物め』

ズガンッ！

Side out

Side テストパイロット部隊・A-01部隊

『ヴァルキリーマムより各員へ。クーデター部隊はもう周辺にいない模様』

『全員無事だな。よくやったお前達。高原は死にかけたがな』

『すみません。OSの力を過信してました。ありがとうございます。たイヴァノワ大尉』

『私は別に良いんだけど……』

『マサキのOS馬鹿にすんなよ！』

『実力が無いだけでしょ？』

『そうよへボだからよ』

『お前から新任少尉を虐めるな。築地も一緒になって何をやっている』
『マサキは大丈夫かしら』

『ヴァルキリーマムより各員へ。クーデター部隊の鎮圧に成功した模様。各機帰還してください』

『『『『『了解』』』』』

Side out

Side 唯依

艦の上で待機していた。

ピピ！

横浜基地から通信が入る。

「なんだよ？ あ、ウォーケン少佐御苦労さまでした。今度はBE
TAと戦う時に合うかもれませんね」
『は、はあ……まさか一人で残敵を？』

俺は答えずに海を目指した。ウォーケン少佐達アメリカ力軍とはこ
で別れた。ヤバイ、動きすぎた所為か血が滲んできた。眠気も増し
てきた……。

「あれが第11艦隊か、さあ乗り込めお前ら、ふあ〜あふう……」
『『『『『了解！』』』』』

『中佐！』

「唯依ひめえ……？（ウトウト……）」
「確か、篁家の……」

モニターリンクに唯依姫の顔が映った……気がする。俺は横浜基地
に帰ってきた気がして安心して眠りについてしまった。

『私は……私は……。……中佐の事が好きです！』
「まあ……」

『（わ〜）』

『（……大胆）』

『（篁中尉すごい勇氣ありますねえ）』

『（あれぐらいやらないと伝わらないかしら？）』

『（なんとという決意だ。見習わねばならんな）』

『……ち、中佐？』

「くう）……zzz」

「あらあら……ふふふ」

『『『『寝てる!?!?』』』』』

『……中佐』

『（怒るよね）』

『（流石に今回は口もきいてもらえないかもね……）』

『（まさかあれほどのタイミングの悪さとは……）』

『（殴り飛ばされるわね）』

『（……合掌）』

『中佐つたら／＼／＼』

『『『『ええっ!?!?』』』』』

目が覚めると医務室だった。

「起きましたか中佐？ 絶対安静って言いましたよね？ 何でもう一回縫いなおさなきゃいけないんですか!?!?」

え？ なに？ 医療班の人がメチャキレてるんだけど。

巻いてあったであろう包帯はゴミ箱に捨てられているのが見える。少し赤い。

そして、頭には真新しい包帯が巻かれている。

「マサキ起きたか!?!?」

「無事ですか!?!?」

「倒れたって聞きましたが!？」

「頭大丈夫!？」

「イーニア……」

いや、寝てただけだけど……。はて、何か叫ばれていた気がするんだが……。誰かに……。誰だろう？ 夢だったのかな？

「医務室で騒がないでください!」

「そついえば悠陽は?」

「殿下なら帝都にお戻りになられました。何かあったのでしょうか? とてもスツキリとしたお顔をされていましたが……」

クーデターも無くなったからな。そりゃあスツキリもするだろう。

「中佐、起きてますか?」

「あ、唯依姫ただいま」

「沙霧大尉がお見えです」

「失礼します! ご無事でしたか海棠中佐!」

「うるせー。どうしたんだよ?」

「今回のクーデター事件。私の力が至らぬばかりに引き起こすことになってしまい……。更に中佐が相手をした者は皆、不殺を押し通していただけ……」

「気にすんなよ。それとも何か? お前は自分の部下の不満を全て解決できる奴だったりするの? だとしたら今回はお前の所為だ。違うだろ? お前がクーデターに参加してたとしたら更に大事になつてたさ、被害も予想より少ない。殺さなかったのもやりたくなかったからだ。話は終わりか? 頭痛いんだ帝都に帰れ帰れ」

沙霧は深々と頭を下げて帰っていく。
俺も甘かった。沙霧を抑えれば終わりだと高を括っていた。
まあ人類同士の戦いもこれで終わりだ。後はBETAのみ、気兼ねなく殺せる。

「頭が痛い？ おかしいですね。麻酔が効いてるはずですが？」
「……うっせ」

俺は医療班の人にボソツと答えた。

「（柄にもニヤク照れてるニヤ）」

Side out

『我が親愛なる日本国民の皆様。長きにわたり多大な苦難を強いている事、誠に申し訳なく思います。此度の事件は、若き命が国の過ち、延いては私の至らなさを正そうとしたが故の決起でありました。彼の者達の所業は決して許されるものではありません。されど、日本の目覚めを願い、已むに已まれず立ち上がったその志までを軽んずることはできません。私達の心に刻みつけ、省みるべきは日本人として在るべき真の姿にあると思ひ至りました。それが、延いては人類が一丸となり、強大な敵に立ち向かう為の力となるでしょう。』

長きにわたる戦乱の終わりは未だ見えぬ、皆様の中には不安の大きなうねりとなって押し寄せていることでしょう。だからこそ、私達は今という時代を、強靱な精神を持って歩まねばなりません。敵を砕く為の牙を同胞に向けざるを得なかった彼らは身を持ってそれを

示そうとしたのです。私達の心に、今再び、誇りと力を呼び戻す為に。座して得られるものはありません。

しかし、得るべきものが何かもわからず、徒に拳を振り回したところで、望むものを得ることは決して叶わないでしょう。若者達の潔き志を礎に、私達は一丸となり、勝利と平和を勝ち取る為、共に苦難を乗り越えて参りましょう。日本国民の皆様。民と国の為、その身を捧げた者達、そして己の責務に殉じた者達の心を、どうか忘れないでください。数多の英霊の遺志を背負い、私は歩み続けます。

どうか、皆様のお力を、今暫くお貸し下さい。同じ過ちを繰り返さぬよう、各々が為すべきを為せるよう、共に未来を見据え、歩んで参りましょう』

クーデター事件のその日のうちに行われた煌武院悠陽殿下の演説は多くの人の心に灯された。

15 強引に押すと違う方向に倒れる(後書き)

感想は随時受付中

ああ、箇条書きのシーズンですね。

・ルナとアルテミスで何も調べずピンツと来た人は私と同年代のはず！ 違うかな？

・殿下がマサキの機体の出力系統に思い当たる節があるそうです。
極秘扱いにしなさいねって感じい？

・いつけ〜！ フラグカラーシュツ！！ 眠くなって聞き逃す事ってあると思うんだ！（あるあ……ねーよ！）

いやー、本当にクーデター編は飛ばせばよかった。次回はふざけるぞーっ！！！！

次回 『任官・階級・タケル弄り』

次回もあなたのハートにアカシックバスター

……はあ疲れた orz

16 休めと言われて休まないバカもいる（前書き）

今回はふざけたお話。

ほとんどがマサキ視点でのお話となっています。

そんな中、感想が100件を超えました！ 温かい声援・ご指摘ありがとうございます！ 逆お気に入りユーザー100名到達！！

お気に入りも800件突破！！ すんごいよ！！ 頑張れ自分！

この物語はフリスタの提供でお送りします！

16 休めと言われて休まないバカもいる

タケルが夕呼先生の数式をアッチの世界に行って回収して帰ってきた。そんな中、俺は『安静に』とか言われても、個人的に問題を感じないほどに回復していた。というか元から問題とは感じていないわけだが……。邪魔な包帯も勝手に取っ払った。バレなきゃ別に何をしてもいいと俺は思う。

「何で包帯取ってるんですか!！」

当然ながらこの様にバレたら怒られるわけだが。

「治った治った」

「7針を縫う怪我がそんなに早く治るわけがありません!！」

この様に言い訳をしても正論で返される。俺が悪いみたいじゃん？

「明らかに中佐が悪いですよね!？」

心で思っても突っ込みが来るのは喜ぶべきなのか、自分はサトラレなのではないかと心配した方がいいのか困ってしまう。

「む、海堂中佐。怪我はもう良いのかね？」

「あ、どうも基地司令。完治しました」

「治ってません!！」

俺がラダビノット若本司令に敬礼をすると後ろから否定の言葉が飛んでくる。

む。唯依姫はどうしたら納得してくれるのだろうか？

「あ、いたわね海棠。探したわよ。アンタ絶対安静じゃなかったっけ？ 部屋にも医務室にもいないって聞いて、格納庫かと思ったら…… ああ篁中尉と逢引？」

「あ、逢引!？」

「いや、する事がなくなっつて言うか、何もさせてもらえずブラブラしてますが？」

逢引とか唯依姫が怒るから冗談でも止めてほしいものだ。

「暇ならアンタの考えを聞かせなさい」

「俺の考え？ なんですか？」

「……逢引」

俺は執務室に案内され……場所は分かる。分かるから大丈夫だ。

それで話を始めた。唯依姫は何か考え事をしている。大丈夫かな？ 仕事が忙しいのかな？

「クーデターの時の会話データを確認したんだけど、まりもに指揮を取らせたわね？ その時にアンタ『感を取り戻しておいた方が良さ』みたいな事言ったわね？」

「ああ、まりもちゃんね。原隊復帰出来ないですかね？ A-01部隊ってこれから人増えるんですよね？ 伊隅大尉だけじゃ大変だと思っわけですよ」

「……中佐と……わ、私が」

「なるほど面白い考えね。アンタのお気に入りはどうするのかしら？」

「タケルの事ですかね？ 出来れば最低でも中尉ぐらいにはしてほしいですね。XM3はタケルがいたから造れましたし」

「で、ででで……データ……」

「ラプラス・コンピュータで未来予知をしたってことね。でも白銀に実力が伴わなくちゃ難しいわよ？ アイツの実力は訓練兵ではズバ抜けてるけど……衛士としては実戦もクーデターが初めてだったし、A-01部隊の速瀬とかと比べてもねえ……」

「それを言うなら俺だって最初から中佐ですよ？ 実力なら速攻で付ける方法がありますから、どうにかありませんか？」

「帝都がいいかしら……あ、でも着ていく服が……」

「アンタはいきなりOS書き変えてたでしょうが。アホだから良いのよ。それで？ 速攻で実力を付ける方法って何よ？」

「アホって……。この前の帝国斯衛軍との演習で、帝国軍からのバツアップの約束を貰いましたので、紅蓮大将だとかにタケルを揉んでもらおうかと」

「こんなことならそれらしい服を買っておけば……」

「へえ、面白い事考えてるのね。いいわ、私の特殊任務ってことで数日行かせましょう。帰ってきた時が楽しみね。OSを横浜基地全体に認めてもらえるように評価試験もこれからしないといけないし、それが終わってから帝国軍に行ってもらって、帰ってきたらA-01部隊に配属で良いかしら？」

「ばっちしですね。じゃあ、俺はタケル専用機でも完成させますかね」

「……今からでも休みとれるかしら？」

「アレ白銀の機体なの？ アンタのじゃなくて？ そういえばこの前『この世界で最高の衛士に乗ってもらおう』って言ってたわよね？

白銀ってそんなに凄いの？」

「俺にはサイバスターがありますしね。アレはタケルの機体です。」

そのつもりで造りましたよ。それに、タケルはこの世界を救う男ですよ。アイツがいなきや例の脳みそも意味をなさない。あ、そうだと207小隊って解隊式はいつですか？」

「……いや、軍人としてあるまじき」

「今日だけど？ 今頃、講堂に集まってるでしょうね」

(司令はさっき見かけたから……もう始まるか?)

俺はビデオカメラを借りて、執務室を後にした。

「唯依姫？ 講堂まで案内してくれないか？」

「人の気も知らないで！」

おおぅ……やっぱりさっきの夕呼先生が言った冗談にキレてるよ。逢引とか冗談ですから絶対。唯依姫の怒ってるところを見ると不安というか不思議な気分になるよ……ん？ 何でだ？

……ま、いつか。

『世界は今、力と勇氣ある若者を欲している。実戦において、経験豊富な指揮官や兵士の力は、勝利を掴み取るためには欠かせないものである。だが、それと同じくらい重要なものがある。それは勝利を信じる心だ』

始まってるな。司令の訓示が講堂に響き渡る。やっぱり良い訓示だよ。良い声だよ。俺は隠れて盗さ……後世に残すためにビデオカメラを向ける。唯依姫は仕事があるらしく行ってしまった。

『若者たちよ、失敗を恐れず己の最善を尽くせ。どんな苦境に陥ろうとも、最後の勝利を信じ努力を惜しむな。勝利を信じあきらめぬ心、それこそが君達若者が持つ唯一にして最大の武器なのだ』

うんうん。熱いぞ！ 最高だ司令！

俺は録画をしながら拳を作りぶんぶんと振り回す。

『君たちの誇りは私の誇りであり、日本国民の誇りである。そして、世界の、全人類の誇りだ。……手のひらを見たまえ。その手で何を掴む？ その手で何を守る？ ……拳を握りたまえ。その拳で何を拓く？ その拳で何を倒す？』

胸が熱くなるな……ふう。

俺は撮影を続けた。基地司令からの訓示、訓練兵たちへの悠陽からの手紙も読み終え、207小隊は一人ひとり、衛士徽章授与を受けました。基地司令も、まりもちゃんも講堂を去っていく。タケル達は衛士になれた事を、今までの事を振り返り、涙ながらに喜び讃えあう。

「……白銀。ありがとう。あなたの入隊は、私達の大きな力になったわ……本当にありがとう……」

「委員長……がんばれよ」

「……ばか……」

「たけるさぁん……ミキはぁ……ミキはぁ……うわううぁぁ……」
「おいおい……泣きすぎだろ？」

「急な任官でビックリしたけど……タケル今まで本当にありがとう」
「俺も……お前には感謝してるよ」

「また同じ部隊に配属されるといいね！」
「その時はよろしくな」

くくく、同じ部隊になるに決まってるじゃないか……あぁもし自分が同じ立場なら恥ずかしくて逃げ出したくなるな。泣いて喜んで、『また会えたらいいね』みたいにして、午後には同じ部隊だと分かるというのに……。
ニヤニヤが止まらない。

「彩峰……」

「本当は……色々と感謝してる」

「そっか」

あの彩峰ですら泣いている。

「そなたは……立派な男だ。私は……そなたのように強くありたい」

「ありがとう冥夜。お前にそう言われるのは、本当にうれしいよ」

「配属はまだわからぬが……達者でな」

うんうん。良い絵が撮れた。この後も君たちはまりもちゃんに感動のお別れを言うのだ。知っている。知っているぞ。くくく、俺の暇つぶしになるのだ。

俺は撮影を終えると昼飯を食いにPXへと向かった。

「で？ アンタ何しに来たの？」

「PXへお昼ご飯を……」

ここは夕呼先生の執務室。自力で辿り着いた事がないので快拳と言
えるかもしれないが、PXに向かったはずの俺が何故かここに辿り
着いている。

「この基地つて変形して迷路に……？」

「ならないわよ」

そうですか、機密事項なんですね。分かります。

シューーン

「お昼、お持ちしました」

そこにはピアティフ中尉と霞がいた。

「あら？ 社がこの部屋で食べるなんて初めてじゃない？」

「いえ、これは海堂さんのです」

「俺の？ ありがとう助かるよ……でも何で？」

「社さんは中佐がお昼なのにPXに向かわないのを見かけて、用意
してついできたそうですよ」

なるほど……ありがたく頂きます。

「丁度いいわ。一緒に話しながら食べましょう」

霞とピアティフ中尉は部屋を後にする。部屋に残るのはいつもの2
人と2匹の猫だ。

「午後にまりもがあの子たちに配属先とかを説明するんだけど、そ

の時に諸々伝えようかと思うんだけど？」

「良いんじゃないですか？ その時に俺も一緒して良いですか？
する事がなくて暇で暇で」

「暇だからってあんニヤことしてていいのかニヤ？」

「突っ込んでも無駄にニヤるわよシロ」

俺と夕呼先生はOSの評価演習などについて話し合った。

所変わり、元207小隊のミーティングが行われている。解隊になるので正式な国連軍としての制服などの支給の話なのだが……。

「では続きまして、配属部隊についてご説明します」

ガララララッ

「邪魔するわよ〜」

「邪魔するよ〜」

「博士！？ 中佐も？」

「け、敬れ……!!」

「要らんっちゅーに」

俺は委員長を止めて、白い制服姿の新任少尉達に向き直った。

「さて、少尉昇任おめでとつ諸君。これからは訓練兵だからと言って周囲から守られる事も、後ろに回される事もないという、常に死と隣り合わせの環境となる。これまでの経験、これから経験する事を活かし、最善を尽くしてほしいと思う」

「（やる事がないやつって暇潰しを見つけると目が輝くわよね）」

「神宮寺『大尉』から説明があるはずだったが、俺が代わりに……」

「ちゅ、中佐？ 私は軍曹でありますが……」

「ふふふ、まりも。これをあげるわ」

それは封筒だった。中身は知ってる。俺もそんな風に渡された記憶が昨日の事のように思い出される。まりもちゃんは封筒を中身が見えるわけでもないのに怪訝な顔で見つめ、夕呼先生の顔色も窺っている。夕呼先生はニヤニヤとして、その表情は「悪いことに違いなし」という可能性しか見えない。まりもちゃんは封筒を開けて、一枚の紙を取り出した。

「……はあ！？ ちょっと夕呼！」

「……………？」「……………」

「あら、海堂と話し合って決めたのよ？ 不満？」

「不満とかじゃなくて……！」

「ああ、白銀にもあるわよ」

「俺ですか？」

タケルも封筒をまりもちゃんと同じように確認しながら開けて紙を見つめる。

「うええ！？」

「……………？」「……………」

「さて、ついて来れない者もいるから最初から説明しようか。君達、元207小隊の配属先は全員A-01部隊に決まった」

「ぜ、全員同じ配属先でありますか？」

「左様」

「……………(波兵!?)」

「そこで、こんなビデオを撮って編集してみた。短い時間での編集ではあったが、中々見ものだぞ?」

「……………???」

パンパカパーンパパパパパパンパカパーン

「……………ばか……………」

「たけるさぁん……………」

「タケル……………今まで本当にありがとう!」

「本当は……………色々と感謝してる!」

「私は……………そなたのように強くありたい!」

涙を流し別れを言いあう者たち。その姿をカメラは捉えていた!

【実録!白銀武に惚れた乙女達!】

「……………なっ!?!」

「ちなみにこちらは白銀少尉からご依頼されて撮影させていただいたものになります。白銀少尉!後でマスターディスクをお渡ししますね!」

俺は丁寧にタケルを嵌めた。当然依頼なんてあるわけがない。俺の暇つぶしに冥夜達の反応を見たかっただけだ。

「誰が信じるんだよ俺がマサ……中佐に依頼なんてするわけないだろう？　しかし良く撮れてるな……あ、やっぱり彩峰泣いてるじゃねーか。ほらな？　見るよみんな……な!？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……!

「……問答無用」

「録画してたつてことは最初から同じ配属先になる事も知ってたのね!？」

「タケル酷いや!」

「すぐにデータを消せ!」

「あわわわわ……」

おおくすげえく。愛されてるなタケル。あ、倒れた。

「結構歪んでるわねアンタ。まあ面白いから良いけど」

「このように騙されるといふ経験を生かし、次からは嘘は嘘と見抜けるように育ってほしい。では次にこちらにいらっしやるのはさっきまでは軍曹だった神宮寺大尉だ」

「さっきまで?」

「本気なの夕呼!？」

「本気よ?　アンタが元はA-01部隊も育てたんだから良いですよっ?」

「そして、そこで倒れてるのが白銀武大尉だ」

「……」大尉!？」

「さ、先ほどの解隊式では私達と同じ……」

「そう、少尉だった。だが、君たちが今乗っている吹雪に搭載されている新型OS【X M 3】は白銀がいたからこそそのモノだ。まあ、OSの立案者だな。その功績も含め、研修の後に大尉となる」
「……」

タケルは返事をしない。ただの屍のようだ。まりもちゃんは混乱で表情を崩している。

「もしかして、タケルと同じ階級だと甘えさせる事が出来ないとか考えてます？」

「そんなこと言ってます！」

「でも、まりもちゃん安心してください」

「いえ、話を聞いてください……」

「今回は大尉という階級に【上級】を付けます。これで上級大尉という階級になり、伊隅大尉よりも上でやりやすいでしょうし、タケルからも甘えられる事が出来ます」

「……………（どこの悪徳商法だ……………）」

「さて、話を進めるぞ。階級に関しては今言った事は本当だ。お前達はA - 0 1部隊に入るわけだが、A - 0 1部隊は現在この基地から出払っている。戻り次第に正式配属となるが、その前に新型OSの評価演習にて、実力を示して貰いたい」
「評価演習……………でありますか？」

「左様」

「……………（天井！？）」

「お前たちはX M 3のテストパイロットとして乗りこなしてきた経

験があるだろう？ その経験を生かして、既存の衛士達を出し抜け、それが適うならX M 3は全軍に配備出来るからな」

「確かに今までのOSに慣れているパイロットは、新型OSというものに抵抗があるでしょうから、新任少尉が既存の衛士を出し抜ければ、OSの評価は上がり、そのOSを使いたいという声は上がるでしょうね」

お、まりもちゃんが復活したようだ。

「俺のこのOSを全軍配備させたい理由っていうのは『BETAに勝つため』って言うのとは少し違う。そうなれば確かにありがたいが、実際問題としては、反応速度が上がって回避が容易になる面があり、生存時間が上がるぐらいだろう」

「……………っ！」「……………」

「でもそれで十分だ。生きている時間を稼いでくれるなら後の事は任せてくれて構わない。生きている間に全てのBETAを消す手段もある」

「…………… っ！?」「……………」

「……………喋りすぎよ海堂」

おっと、いかんいかん。

ついつい口が滑ってしまっ。

「とりあえず、OSの評価演習の件頼むぞ？ 結果が残せないようなら全てがパーだ」

「……………了解！」「……………」

ふふふ、良い顔するようになったな。少尉になって更に気を引き締めたか。

「主任大丈夫なんですか？ バレたら……」

「大丈夫大丈夫〜バレなきゃ大丈夫〜」

俺はレンチをクルクルと器用に回しながら戦術機を弄繰り回していた。タケル専用機はアレで完成だ。使うのは佐渡島の時になるかな……。今は破壊された不知火式型・改を帝国軍のバックアップの下で作成中だ。設計図はあるから楽々ですたい。

カツカツカツカツカツ……

「あ、やばいですよ店長〜」

「ん？ 何が？ 設定間違えたのか？」

カツカツカツカツカツ……

「いや、違くて……ああ〜」

「何だよ？」

カツカツカツカツカツ！

俺は顔を出して声の方を向く……。

「なにしてるんですか！」

怒られた。何故に？

「治ってないからです！」

また心まで読まれて……。

「唯依姫、怒らないでよ。リハビリは必要だと思っただ」

「必要ならですがね！ 中佐に今必要なのは『安静』という事だけです！ 何で無茶するんですか！」

「無茶だとは考えてないんだけどな。あ、もうこんな時間だねー
緒に夕ご飯行かない？」

「くっ……食べ終わったら部屋で休んでもらいますからね！？」

今日はここまでか……仕方ない。後は任せたぞ整備兵の諸君。

俺は引き摺られながら敬礼してくる整備兵たちに手を振って答えた。

「なあ、俺は篁中尉だと思っただけど……」

「鉄板だよな。でもクリスカさんとかはどうなんだ？」

「ほら、イーニアちゃんがいるから……」

「そうだな、……イーフェイ中尉は？」

「押してはいるけど、過程を飛ばしてるからね。まだラトロワ中
佐の方が……」

「恋愛はもうしないんだろあの人？ タ シャちゃんもいるし」

「ステラさんは？ 家庭的で優しいわよ？」

「お前、同じ女なら分かるだろ？ 明らかに反応が違うよ」

「え！？ どこが！？」

「タリサちゃんは？」

「うーん、中佐には少しずれる様な……やっぱり篁中尉だろ」

「ピアティフ中尉は？」

「何回か旗を折られてるらしいよ」

「殿下は？」

「おい、消されるぞお前」

誰が海堂マサキの心臓ハートをモノにするのかの議論は日々、関係各所（主に整備兵達）によって行われている。しかし……。

「後は中佐の問題だもんね」

「鈍感って凄いやなあ」

議論の結末はいつもこうだ。

- マサキ自室 -

「眠つれない」

「とりあえず布団のニヤかに入ったら？」

「設計図見ても眠くニヤるのかニヤ？」

むく休みたくないのに休めという。したいけど出来ない。出来るけどしたくない。どの世界に行ってもこれは変わらないのだろうか……。

助けて誰か！

「ニヤにを念じてるのよ……」

「遂におかしくニヤったのかニヤ？」

失礼な！ もういい寝る！

「……寝れない〜……ZZZZ」

「どの口が言ったのかニヤ？」

「寝れないって寝言で言うニヤんで……」

- 夢の中 -

夢を見ていた。BETAを追い詰めたが、逆に追い詰められるまで反撃を受けた夢だ。何故かBETAも言葉を喋っている。こういうところが夢の不思議なところだ。

「君達人類はあのまま滅びれば良かったんだよ」

「ふざけるな！ 俺たちは諦めない！」

「無駄なあがきだよ……」

ドンッ

容易く破壊される戦術機の四肢。

「ぐっ……それでも……」

「そうだ！ 諦めない！」

「マサキ!？」

「どうやってここに!？ まあいい。君もここで終わりだよ」

「終わり? それはお前らだBETA!! タケル行けるな?」

16 休めと言われて休まないバカもいる(後書き)

感想は随時受付中ーッ!! 熱くなれよーッ!

箇条書きねえ……あ、見る?

・マサキの鈍感はまだ続く! 早くくっ付けよ! って声は却下!
まだ終わらんよ!

・基地司令の声は若本さん。良い声してるし良い事言っぜ!

・まりもちゃんは【上級大尉】。タケルは紅蓮に揉まれたら【大尉】

・整備兵達の会議は続く……私も唯依姫に一票!

・俺(達)を誰だと思ってやがるーっ!! 走り出した〜想いが
今でも〜 つと夢か!? ビビらせやがってBETAめ〜。

偽・次回タイトル

『邪神降臨!』

ラグナロクの日に近い!!

次回も君のハートにアカシックバスター

無意味に少し気にいった。すぐに飽きる予定。それでも予定は未定。

17 井の中の蛙、大海を知る（前書き）

今回は井の中の蛙達のお話。

しばらく更新できなくてゴメンナサイ。

精神的ダメージが一番の原因です。

第二にもう一本の方の作品が進む進むw

第三にアイデアが浮かばなかったから

そんなこんなで〜！

この物語はフリスタの提供でお送りします！

17 井の中の蛙、大海を知る

Side マサキ

X M 3の評価演習が行われていた。そんな中、俺はというと機体の中にいた。

『207小隊全機、相応の成績は残してるみたいね』

「ええ、これでX M 3は国連軍全体に行き渡りますね」

旧型OSに慣れている者。古参の衛士。どんな奴もアレに慣れている衛士には勝てないだろう。

『それで？ A - 01部隊にテストパイロット部隊だけで本当に足りると言うの？ それでOSに慣れてない衛士達が何百人と死んで行くのは勘弁してほしいんだけど』

「だからこそ、俺がサイバスターに乗っているんですよ。」

そう、俺が乗っているのはサイバスターだ。

『まあ此方としても、そろそろ隠せない状況になってきたみたいだから。アンタの機体をこの機会に正式に認めてしまおうと思うんだけどね』

「見えないところでご迷惑をおかけしております。結果でお返しします」

『ふふふ、言うわね。仕方ない……か』

「海堂マサキ。サイバスター……行くぜえ！」

キイイイイイインツ……ドオツ!!

出力はまだ全開じゃないが安定しているな……。

「久しぶりだな相棒。頼むぜ?」

「オイラ達に任せときニヤってえ」

「ああ、クロもシロも頼むぜ?」

「分かったニヤ」

Side out

Side 伊隅みちる

「大尉、本当に来るんですか? BETAは^{やっかい}」

「BETAの動きを予測できるなら、この後の戦いも楽になりますけど……」

「無駄口を叩かずに策敵警戒を怠るな」

『『『『『了解!』』』』』

確かにそうだ。分かっているなら演習をキャンセルして完全に武装して待ち構えればいい。それをBETAが来ると予測立てしておきながら、我々ヴァルキリーズと、テストパイロット部隊のみ即応させるようにしている。

『こちらラトロワだ。伊隅大尉聞こえるか?』

「こちらヴァルキリー1。聞こえます。どうぞ」

『先ほど基地より入電があった。海堂中佐が新型機で出撃したそう
だ』

「また新型ですか……？ あの人はいっ休んでいるのか……」

ピピピッ！

反応が来る。アンノウンだ。恐らく中佐の機体だろう。しかし目の前に現れたのは……。

『これは……！？』

「銀色の戦術機……！？」

それは何度か見た事のある戦術機だった。見た事があると言っても写真でだ。ほぼ同時刻に各国で撮影された銀色の機体。それは、カザフのハイヴが落とされた事に関係する可能性が極めて高いという空を高く飛ぶ戦術機だった。

『まだBETAは出てきてないみたいだな』

その声は正しく海堂マサキ中佐のものだった。しかし、それでも確認してしまう。

「か、海堂中佐なのですか？」

『ああ、お初にお目に掛けるかな？ 俺の専用機【AGX-05】。
正式名称【サイバスター】だ』

『さ、サイバスター……』

『カザフスタンのハイヴ落としに関連がある機体が横浜基地に……
？』

ドガンッ!!!

突然の爆発音に地面が揺れ、煙が上がる。

『お出でなすった。全機、死ぬなよ?』

サイバスターと呼ばれる機体は飛んで行ってしまふ。爆発した場所に向かう機体は光線級のレーザーを避けて行く。

『嘘!?!』

『レーザーを……よ、避けてる?』

『HQより全機に告ぐ!!! 第二演習場にBETA出現!!! 演習は中止!!! 実弾装備に切り替え即応せよ!!! 繰り返し……!!!』

「……(はっ!) 全機!!! 兵装自由!!! 一匹も逃すな!!!」
『『『『『了解!……!』』』』』

全くあの人には驚かされてばかりだ……。

Side out

Side マサキ

レーザーが下から突き上げてくる。俺はそれを回避し続ける。

「へっ当たらねえぜ。……やってやるぜ!……」
「やるのはアタシ達ニヤンだけどね」

ハイファミアを射出し、クロとシロは低空を飛びまわり、BETAを撃ち抜いていく、その間に俺はデイスカッターを取り出して進んでいく。

「デイスカッターの切れ味を見せてやるぜ……デイスカッター霞斬り!!!」

突撃級、要撃級を切り裂いていく。切っても切ってもキリがない。やがて見えてきた邪魔な光線級。

光線級の群れのと真ん中に滑り込むように機体をねじ込み、一気に吹っ飛ばす。

「邪魔なんだよ！ サイフレーション!!!」

しかし、予想以上に敵が多い。ハイヴの時は狭い場所でやってたから分かりづらいが、こつも広範囲にバラけられると……。何て厄介なんだ……。演習場の連中の待避もまだまだ済んでいない。

「くそっ……くそっ!!!」

甘かった。負けはしないが、予想以上に死んじまう。誰一人として殺させない予定だったのに……くそっ!!!

Side out

Side タケル

演習中に突然現れたBETA。回線は混乱を極め、演習中という事もあって全ての機体がペイント弾。俺たちは基地に戻り実弾兵装に切り替えようとしていた。HQが言うには武器を運んでいるという事だが、取りに行った方が早い。だが、俺達の足取りは重く、HQと同じように混乱していた。

突然、秘匿回線Bに切り替えるように指示が飛んでくる。

『夜の虹、黒い霧、血の雨に打たれし者よ』

何だ？

『月の雫、白い水面、魂に導かれし者よ』

こゝ、これは……。

『朽ち逝く地平に幾万の鐘打ち鳴らし、鋼の墓標に刻まれし其の名を讃えよ』

いざ我等共に喜び行かん、死と勝利に彩られた約束の地へ……』

『こちらジャール1、ラトロワ中佐だ。A207各機。秘匿回線Bを解除。落ち着いたか？』

後催眠暗示のキーだ……しかも今のはかなり強力な奴だったはず……。

「……………」

『仕方ないな。今から興奮剤を打つ。楽にしる』

くっそ……モルモットみたいに扱いやがって……。こんなもんに頼らなくても取り乱すことのない強靭な精神が欲しい……。

『大丈夫だな？ さて、奴等を殺すのには武器が必要だ。いくら新型OSが優れていても、貴様らが優秀な成績を収めようとも逃げ回るだけでは話にならん。ここは我々が務める。貴様らは37番ハンガーまで後退し、突撃砲をありつたけもってこい』

「中佐殿！ もう少し待てば武器は運ばれてくるはずじゃないですか！ ここは戦力を……！」

『ふう、マサキもこんな奴のどこに期待しているんだ？ こんな状況でHQの言っている事を鵜呑みにするとはな……それとも興奮剤が効きすぎたか？』

「くっ！ 時間を取らせてしまった分全速力で戻ります……！」

『良いだろう。急げよ？』

くっそ！ BETAめ！ てめえらのせいで、こつちの予定大狂いだぜ！ 未来を変えて、数式も回収して……やっと衛士として新型OSでの実力も見せつける事が出来たんだ！！ いやいよこれからだって時に出てきやがってッ！！

ああ、やってやるよ！ やってやらあ！！ 待つてるよ！ 必ず助け……えっ！？

「うああああああっ……！」

突然先回りされて現れるBETAに俺は緊急制動を掛け、ブーストジャンプで距離を取った。

『全機散開！！ 全速待避！！ 各自ハンガーを直指して！！』

「うおおおおおおおっ！！

『タケル！？』

『白銀！？ 何やってるのよ！？』

いつの間に現れやがった！？ 殺してやる！！ てめえらの所為で！！ てめえらの所為で！！

「地球を返せ！！ 人間を返せええっ！！ うわあああ！！！！」

『やめてくれタケル！！ それはペイント弾だぞ！！』

『白銀お願い！！ 早く逃げないと囲まれるわ！！！！』

なんで！ 何でだ！？ どうして！ どうして死なないんだ！！ ぶざけるな！！

『鎮静剤を打つぞタケル！！ 正気に戻れ！！』

くっ！ 何だよまた注射かよ！

「俺はてめえらなんか負けねえんだ！！ 俺が地球を救うんだ！！ そんな攻撃当たらねえんだよ！！ 俺に当たるわけねえんだよ！！ うおおおおお！！」

ズガンッ！！

俺は弾切れに気づかずに、要撃級の攻撃の前に遂に膝をついた。

『間に合え！ サイフラッシュュ！！』

目の前が明るくなる。BETAがない……。俺は……。

『無事か！ タケル！？』

「ま……マサキ？」

『このエリアは大丈夫だ。俺は他のエリアにまわる！ 早めにハンガーに行けよ！？』

「あ……ああ……いやだ。行くな……うう……置いて行かないでくれえ！ うあああああああ！！」

Side out

Side マサキ

戦闘は終わった。念には念を入れてサイフラッシュを何発も広域に放った。

俺は夕呼先生に秘匿回線で報告した。

『アンタが知ってるこの世界での被害は？』

「多くの衛士が死んで、まりもちゃんも死んで、ヴァルキリーズも誰かが死んでいたはずです……」

『アンタが知っている奴は死んだ？』

「いいえ……でも知らない奴も全員生きているはずだった。全員助けられるつもりだった」

重い沈黙が流れる。結局、少ないとはいえ……いや、数なんて関係ない。人は死んだ。俺は……どこかで出来るって思ってたんだ。サ

イバスターがあればって……チートだからって……でも、人は死んだ。何が結果で返すだよ……。ちくしょう……。俺は……！！

ポタツ

涙が止まらない。何でだよ。俺の知らない奴だろ？俺の知ってる奴はみんな生きてるよ。何で泣くんだよ。止まれよ、くそ！

『……安心したわ。アンタもちゃんと見た目通りのガキだったのね』
「え？」

『最強の機体に乗ってるから負けない。救える。そんな考えで、もしも負ける時が来たらって思ったら怖かったのよ。投げ出すんじゃないかって……ちゃんと後悔できるのね』

「夕呼先生……」

『……私は科学者だからね。数字にしか興味ないわ。これだけの被害で済んだのはアンタのおかげよ。良くやったわ』

嘘だ。夕呼先生はそういう人間じゃない。

『何よ？ まだ泣きたいなら私の胸貸してあげましょうか？』

さっきまでの重苦しい感じを払拭させるようにカラカラと笑いながら夕呼先生は余裕を見せた。俺はそれでも、悔しくて、辛くて……。

「……今だと本当にそうしてしまうので勘弁してください」

俺は通信を切ってサイバスターから降りた。

これで、サイバスターを隠す必要もなくなった。夕呼先生への風当たりも更に強くなるだろう。これ以上迷惑はかけられない。でも、

俺はそんなことよりも、やっぱり被害が出たことに意識が集中していた。

「中佐……泣いているんですか？」

「……唯依姫？ ううん、大丈夫、大丈夫……ぶ……あれ？ （ポタッ）」

タイミング最悪だ……今優しくされると……。

ふわっ

俺は唯依姫に抱きしめられていた。

「あっ」

「良いんですよ。泣いてください。私はいつでもそばにいます。階級は中佐の方が上ですけど、私の方が年上なんですからね。もっと頼ってください」

何だろう、このホツとする感じ。感じた事のない気持ち。俺は……。

「あーっ！っ！……！」

タタタタタタタッ！！

「ずるいぞ中尉……！」

「抜け駆けですか!？」

「マサキが泣かされてる!？」

「なっ！ 違う!! 私はまだ……!!」

「唯依、どこまでやったの？」

「イーニア!？」

「マサキを泣かせたのは中尉なのか!？」
「どうなのマサキ!？」

いつもの仲間。俺を慕ってくれる仲間。

「……何でもないよ。うん、何でもない」
「「「「「????」「」「」」

人類全員を救う事なんて出来ない。俺は神様じゃない。ただの人だ。でも、手の届く範囲では誰も死なせない。逆を言えば、手の届かない範囲では助ける事ができない。その覚悟を持つ。俺は俺が救える人しか救えない。

俺は気分を入れ替えるように両頬を叩き、準備をして演習場に向けて走り出した。

Side out

Side A207小隊

白銀が一人地面に力なく座っている。海堂中佐が言うには、今回の演習のOSの提案者。訓練兵とは思えないほど完成された凄腕人物。実力も自信も使命感もあった。そんな一人の男がBETAとの戦いにその全てを打ち砕かれたのだ。

「……みんなで励ましに行こうよ」
「そ、そうだね。あのままじゃ、たけるさんかわいそうだよ……」
「やめておいた方が良さそうわ」

「え？」

「そうだね……」

「慧さんまで……。一体どうしちゃったの？　ボク達は仲間じゃないか……」

「仲間だから……仲間だからこそ、距離を置いて見守ってほしい時もあるのではないか……？」

「冥夜さん……」

「白銀は今、積み上げてきたものが吹き飛んでしまった苦しみと戦っているんだと思う……。そういう時に、人の優しさや労いに素直になれないのって……。それがみつともないって分かっていれば余計、自分が嫌になってしまっただけじゃないかしら……。少なくとも私はそう……。強迫的ともいえる程の使命感を持っていた白銀だから、そこは同じなんじゃないかと思うの」

「まして、実力も自信も才能も、あれだけ持っている人だから、その挫折感私の比じゃないはずだわ……。だから今はそっとしておいた方がいいと思う……。そして普段通りに接するのが一番だと思うわ……。白銀が私達にそうしてくれたように」

「その通りだ……」

Side out

Side タケル

……ちくしょう……ちくしょう……！！

何なんだよ……この無様な結果は……！！　　こんなはずじゃなかつ

ただらう……！

後催眠暗示と興奮剤であんなになっちまうなんて……ビビってた反動じゃねえか……！

何でだよ……ちくしょう……なんでここまで上手くいってたのに……ちくしょう……！

お笑い草だ……みつともねえ……！！

何が衛士の才能が並みじゃないだ？ ふざけんよ……！！

人間同士の戦闘で……いろんな状況に護られて生き残ったからって……何が実戦経験だよ……！ 結局同じだ……前の世界の俺と何も変わってない。シミュレーターのBETAにビビってた俺と何も変わってない……。

「……白銀」

まりもちゃん……

「少しは落ち着いたか？ 気持ちは分かるがそろそろ……」

「……お願いです。ほっといてください。お願いですから……」

どんなツラして、まりもちゃん達に顔を合わせていいか分からないんだ。

「こんなことしても無意味なのは分かってます……だけど……俺は

……俺は……」

「……それにしても、派手にやられたわねえ……」

「……え」

「これだけやられて生きていたんだから、大したものよ……月並みな言い方だけど、戦術機の換えは利いても、白銀の換えは利かない。

あなたと、あなたの才能が生み出すものは、これから何万人という
衛士の命を救うわ……」

「……フツ……」

俺は鼻で笑う。BETAにビビって、やられて、無様に地べたに座
り込んでいる男が？ 俺の失笑にまりもちゃんはそれを真剣に答え
る。

「少なくとも私はそう信じている。今まであなたが見せてくれたも
のは、そう信じさせてくれるのよ。そのあなたの命が失われなかつ
た事を……丸腰でBETAと戦って生き残った事を誇りなさい」

「やめて下さい。……戦ったなんて……そんな大層なもんじゃない
ですよ。俺は……何かすっかり勘違いしちまって……人類を救うだ
とか……色々、舞い上がってたんですよ……でも、実際BETAが
出てきたらビビりまくって……凄く怖くて……でも、自分じゃそれ
に気づいてなくて……やれる気がしてたんですよ。興奮剤でアガつ
て『ぶつ殺してやる』って、真顔でBETAにペイント弾打ち込ん
でたんですよ……？」

「レコーダーの記録を見たわ。あなたは戦術機の機動だけで、何体
ものBETAを足止めしてたのよ？ そのおかげで、207小隊は
前線部隊に武器を届けられたし、全滅も免れた。臆病でも構わない。
勇敢だと言われなくてもいい。それでも何十年でも生き残って、一
人でも多くの人を守って欲しい。そして、最後の最後に白銀の人と
しての強さを見せてくれればそれでいいのよ」

「……」

「8分……。BETAと直接戦った初陣の衛士が、戦場で生きてい
られる時間の平均。あなたは泣こうが喚こうが、BETAと直接戦

い、デッドラインを越えて生き残った。これまでに何千、何千万もの衛士が越えられなかった壁をあなたは丸腰で突破した。それがそんなに不名誉なことなの？」

「いえ……そんなことはないです……」

「自分の失敗を笑って話せるようになる頃には、白銀が失ってしまったものも、また見つかっているはずよ」

「……ありがとう……まリモちゃん」

あつ！ しまった！ 気持ちの流れでつい、まリモちゃんって言いしまった！

振り向きづらいなあ……。怒ってるよな……。

そして、俺が振り向くと。

Side out

Side マサキ

「ム~~~~ツ!!」

口には猿轡、両足と両手をロープで縛られ、担がれる男。それは白銀武その人である。

「何て言ってるんだ？」

「ムームー!!」

「ふんふん、それで？」

「ムムムムムー!!」

メルメルメ〜? ウマゴンか貴様は。

「ははは、何言ってるか分かんねーや」

「ムーーーーーッ!!!」

ドスッ!

「~~~~~ッ!!」

「騒ぐな暴れるな」

これもタケルのためなんだ。許してほし……(ズンッ) 暴れるなっ
ちゅーに!

「あ、あの中佐?」

「まりもちゃんごめん。どうしてもタケルの力が必要なんだ。先日
言ってあった通りに、研修先に送り込む。もう少しまりもちゃん
のモノになるところで取り上げて悪いんだけど許してくれ」

「何の話ですか!」

「その者が帝国軍に託したいという少尉ですか?」

「ええ、紅蓮大将にお渡しお願いします」

俺は月詠大尉の乗る車両に強化装備のままのタケルを放り投げた。
荷物も一応持つて来てある。

「しかし、どうして縛られているのですか？」

「いえ、なんとなくですよ。では、死なない程度に色々叩き込んでください。コイツの機体は後ほど送ります」

「承知しました。しかし、BETAが強襲してきたのにも拘らず、これだけの被害で済んでいるとは……流石としか言いようがないですね」

「（……俺はそれでも全員助けたかった）そうですか？ 月詠大尉に褒められると自信もっちゃうな」

「……。なるほど、これだけの被害で済んでも納得してないんですね。これほどの被害が出てしまった……というところですか」

「何の話ですか？ あ、そいつの事よろしくお願いします」

「しかと、承りました」

白目を向いてタケルは連行される。余程この基地から離れるのが嫌なんだろう。しかし、帰ってきた時、それは君が日本……いや、世界の切り札になる時なのだ。

「いや、あれは気絶してだけニヤンじゃ……」

「あれは酷い送り出しの仕方だニヤ……」

「さして、こっからは忙しいぞ」

「XM3の全軍配備に、ビーム兵器の増産といったところですか？」

「ゆ、唯依姫……」

「どっかしたんですか？」

何だろっ、まともに顔が見れない。

「な、何でもない！」

「？」

「ニヤんだマサキ。怒られるようニヤ事したのか？」

「違うわよ、照れてるのよね、やっと気付いたんじゃない？」

よく分からん！ 何で顔が熱くなるんだ！？

俺は両手で意味不明に真っ赤になる顔を隠した。

S i d e o u t

17 井の中の蛙、大海を知る（後書き）

感想は随時受付中！！

- ・井の中の蛙達〓マサキ&タケル でした。
- ・サイバスターが周知の存在に！！
- ・おや？ マサキの様子が……？

次回もあなたのハートにアカシックバスター

18 人類の危機でも愛は生まれる(前書き)

へいお待ち!

この物語はフリスタの提供でおおくりするぜ?

18 人類の危機でも愛は生まれる

Side ラトロワ

白銀武……海堂マサキが一目置く男。

先日まで訓練兵だった……という点では驚くべき存在だ。

こういう評価は好きではないが、強いて言うなら『天才』

訓練兵の時のデータを見る限り、確かに常人よりも秀でてるものがある。

ギイ……

椅子がきしむ音が静かな部屋に響く。

しかし、それはあくまでも『訓練兵なら』の話だ。

『衛士』としてみれば中の上と言ったところか。

今日のBETA強襲が初陣だとして、確かに素晴らしい機動をしていた。

アレが興奮剤などに流されなければ、更に期待は出来る。しかし、

『中の上』だ。

今は私が率いているテストパイロット部隊、伊隅大尉が率いるヴァルキリーズ。

衛士は多いに越したことはない。しかし、荷物だというならマイナス要素にしかない。

我々のようなテストパイロット部隊。特殊任務部隊に必要なのは『上』以上だ。

研修で帝国軍に送られるとは聞いたが……。それで使い物になるのか……？

「いや、マサキが信じているんだ……大丈夫だと信じよう」

コンコン

「開いているぞ」

ガチャ

「失礼しまーす。お酒いりませんか？」

「マサキか、どうしたんだ？」

「いや、前のクーデターの際に一緒に行動してたウオーケン少佐から届きましてね。俺飲めないから如何かなって思ってた」

「そうか、貰おう」

そうだったな。アメリカは資源とかにはそこまで困窮してないんだっつたな。

「じゃあ、失礼しました」

「まあ付き合えマサキ」

「いや、だから飲めないって……」

「だからそんなんじゃないんれふよ」

「……もう酔ったのか」

コップに3杯程度で酔うとは……。あ、子供か。

「でも唯依姫も唯依姫なんれふよ？　すぐ怒るしい、俺の事を子供扱いして迷子だって聞かなくて常に近くにいるしい」

「いや、迷子になるのは間違いないだろう？　しかし、苦手だったのか？　仲良さそうに見えたんだが？」

私はグラスに残った酒を飲み干し、また注ぎなおす。

「ん〜よく分かりまへん中佐殿。少し前から唯依姫の顔を見ると胸が苦しくなつて顔が赤くなるから確かに苦手なのかもしれません！！　あはははははは〜」

「いや、それは明らかに逆だろうに……」

本当に子供なんだな。自分の気持ちも分からず、それが負の感情だと勘違いしているのか。しかし、篁中尉も同じように奥手ではあるか……。いや、クーデター事件の際にマサキに届かなかつたが告白はしたと聞いたな。

「篁中尉はマサキに好意を持っているようだが？」

「……でも、唯依姫は多分俺の事、ただの年下の上官。って感じで見てるだろうから……（グイ！）」

「一気に飲むな。……気持ち伝えたのか？」

「苦手なふ！　ってでふか〜？」

「ふむ、埒が明かないな……」

私は篁中尉を呼び、マサキを介抱してもらい、一人酒に逃げた。

飲ませるんじゃないかな。

Side out

Side 唯依

「すまないな。飲ませたのは少しだけなのだが」

そう言われて引き取った中佐は呂律が回っていなかった。

「んう〜？ あ〜唯依姫え？」

「大丈夫ですか中佐？」

「怒るう？ 未成年でお酒飲んで迷惑かけてえ〜。唯依姫は怒りん坊だからストレスも溜まつてるし怒るよねえ？ あはははは〜ごめんねえ〜？」

「……………一つだけ誤解があります。確かにストレスなどは溜まる事もあります。私がストレスのはけ口に怒るとい事はありません。迷惑をかけてもらっても構いません。子供なんですから迷惑かけない子供なんていませんよ」

「あ、やつぱりい？ 子供だと思ってるよねえ？ ごめんねえ年下の上官で、やりにくいよねえ？」

「い、いえそんな事は……………」

「あー！ 今度は酔い潰して襲う気か!？」

「そこまで手を尽くすとは……………」

「違つ……………」

「あ！ 唯依がマサキおんぶしてる！！」
「私のマサキどこに連れ込む気よ！？」
「違う！」

次々に集まってくる面々を前に中佐の部屋に向かう。

「あはははは　あれ？タリサにステラだ　おはよ」
「いや、とつくに夜だぜマサキ？」
「凄く酔ってるわね……どれだけ飲ませたんですか？」
「ラトロワ中佐が少しだとは言っていたが……」
「マサキ何かされた？」
「い、イーニア……」

「らとろわ中佐があゝ、唯依姫が俺の事好きだって言ってた」
「……」

「あはははは　そんな事あるわけないのにね」
「……」
「（超鈍感！！）」
「……私は好きですよ中佐の事」

「ふええ？」
「……ちよっ！！」「……」

「でも俺はあゝ唯依姫の事見るとお、胸が痛くなって顔が赤くなるんだよお？ 拒否反応なのかな？ 苦手みたいでえね？ あ、唯依姫には内緒だよお？」

内緒にする対象である私がいることすら忘れて、いや酔って理解できていない中佐は内緒をバラした。

「「「「「……いや、苦手って言うか内緒って言うか……」「」「」「」

「なあ、どこが拒否反応なんだ？ 完全に恋してるよな？」

「そうね……」

「未来の旦那様が取られたか？」

「両想いなんだね……？ ……唯依？」

私は歩みを止め、立ち尽くしていた。

私はどんな顔をしているだろう？

顔は熱い。思考は止まっている。

汗が徐々に流れてくるのは感じる。

「おわっ！ 完全に乙女の顔だ！！」

「まあ、私は何となくわかってたわよ」

「まあ篁中尉なら許せるかな？」

「いいなあ〜唯依」

Side out

Side マサキ

「うう、頭が痛い……」

「記憶はあるかニヤ？」

「凄かったわよね？」

シロとクロが起きた俺のところに戻ってくる。

「記憶？ 何かあったのか？」

「お約束だニヤ」

「ニヤんとか思い出せニヤいかしら？」

何かあるなら言ってくればいいのに。薄情な使い魔たちだ。

夕呼先生から連絡が入った。どうやら00ユニットが完成したらしい。タケルが帰ってきたら混乱するだろうな。

「ほく、これが鑑純夏か」

「あら、やっぱり知ってるのね」

「まあそれなりに。タケルに会わせたら劇的な変化が生まれるでしょうね」

「期待してるわ。ああ、それとね。サイバスターを引き渡すように言ってきたわ」

「却下」

「もちろんよ。ただ、データだけでもって事なんだけど？」

「ブラックボックスです」

「もちろんそう答えたわ。X M 3を無償で公開したのが効いてるから、そこまで強くは出て来ないようだけど……まあ、おかげでアメリカからX G - 70貰えなくなったけどね」

「まあ必要ないですから。アレですよ？ こんな鉄屑どうして欲しいがるんだ？ って感じて怪しまれたんでしょう？」

「まあ、00ユニットが完成した今、少し弄るだけで荷電粒子砲が

撃てるようになるんだけどね……ビーム兵器も順調なんでしょう?」

「数は揃ってきてますね。不良品も多い気がしますが、急ピッチで仕上げてますから……まあ今は質より量ですかね」

「まあいいわ。サイバスターは大丈夫なのね?」

「ええ問題ないですね。X M 3も全軍に行き渡って行くし、早く佐渡島を取り戻して反撃の狼煙を上げたいですね」

「そうね。ところで? 篁中尉と何かあったのかしら? 雰囲気違っただけ?」

「さあ? 俺も何が何だか?」

唯依姫は部屋の外で待っているのだが、何かおかしい。俺と同じ反応をするようになった。顔を赤くして、そっぽ向いてしまう。俺は一応その事を夕呼先生に話すか……。

「それは私に話す事じゃないわね。自分たちで解決しなさい。でも……ふふふ、そう、ようやくそれらしくなってきたのね?」
「?????」

俺はわけも分からず部屋を後にした。

「じゃ、じゃあ格納庫に行きましょうか」
「う、うん」

ぎこちない関係は続く。

数日が経ち。面白いデータが送られて来て、俺はブリーフィングを始めた。

「集まっているな？ 今日はいVIVESを使って、ハイヴの制圧作戦をやるぞ。さて、今まで、A-01部隊だけの戦果のデータを見せてもらった。ハッキリ言うぞ？ 酷い」

「……………!?」「……………」

「コンビネーションやエレメントを崩さない点は褒められるが、時間がかかり過ぎだし、反応炉に辿り着けていない」

「で、ですが実戦では更に多くの支援や……………」

「可能性としてな。しかし設定では【ハイヴ内の戦力はA-01部隊のみ、支援なし、HQとの通信も不可。兵装は自由】だったはずだ。こういう状況にならないと言い切れるか？」

「い、いえ。失礼しました」

「さて、しかし言うだけ言っても納得は出来ないだろうからな？ 模範解答を見せる」

俺はデータを引っ張って来て再生させる。

「これは単機でハイヴ内に入り、兵装は俺の開発したアーマード仕様の不知火だ。当然ながら、レーザー属種はハイヴ内では撃つてこないから防御面はザルだ」

単機の不知火は高速でハイヴ内を突き進んでいく。

「あ、あの……」
「何だ？」

「べ、BETAを相手にしてないのですが？」

そう、再生されているデータの不知火はBETAを回避して奥へと進んでいく。

「高原少尉、BETAはどうするべきだと思う？」

「それは、一匹残らず殺すべきかと……」

「では、仲間がいない。少ない場合に殺せるBETAの数はどれくらいだと思う？」

「そ、それは……補給次第です」

「補給がなければ、弾薬が尽きれば、俺たちが殺される側だ」

「……はい」

「それで、反応炉を潰すだけですか？」

「シンプルだろ？」

「で、ですが、それまでに取り付かれたら……？」

しかし、データの不知火は止まらない。通れない様に壁を作るBETAがいれば最低限排除して更に奥へと進んでいく。それは止まるところはない。常に前を向き進んでいく。

「早い……」

「……あっ」

「反応炉!？」

「残った最大火力。またはS-11で破壊で終わりだ……まあこれは惜しかったな、目前でBETAに捕まっちゃった」

「凄い……」

「これは、やっぱり海堂中佐が乗ってるんですね？」

「いいや」

俺は口元を釣り上げて笑うように言った。

「……………えっ!?!」「……………」

「この基地にこんなパイロットがいるなんて知りませんよ!?!」

「あんな機動するのは海堂中佐だけなんじゃ……………!」

「あれ?」

途中から配属になった元207小隊の面々は一人の男を思い浮かべた。

「知ってる奴も多いだろうが、まだ顔も見えない奴も多いかな？」

これに乗っているのは白銀武だ」

「……………えーっ!?!」「……………」

「帰ってくるのが楽しみだな。では続いて……………」

本当に楽しみだ。紅蓮大将に揉まれて劇的に進化してるな。見違えるような機動性に判断力だ。

Side out

S i d e タケル

「おらぁー!!!」

『まだ粗いわー!!!』

俺は拉致られてからというもの、この目の前にいる鬼と延々と戦術機で戦っている。食う・寝る・戦う。これの繰り返しだ。ヴォールクデータという物で仮想的にハイヴに何回か潜ったりもしたが、何回も死んだ。

【反応炉以外は無視して進め】

何てマサキからの連絡が来たのは少し前の事。それでも死んだりしたが、今は反応炉に到達して、破壊することが目標になっている。

『白銀、実力差が分かったか！ 己に足りないものが何か分かったか！』

「……………分からなかったんでもう一本お願いします!!!」

『……………フハハハハハハ!!! 良いだろうかかってこい!!!』

初めは、こんだけ強いならアンタがハイヴ落とせよ！ っと思ったが、あくまでも対戦術機戦が半端なく強いらしく、ハイヴ内だと俺よりも若干下みたいだ。でも、この前から戦わせてもらっている、沙霧大尉や月詠さんのお姉さんも凄く強く、まだ勝てない時も多い。

「絶対強くなってやらぁー!!! 待ってやがれー!!!」

「それで、紅蓮大将と何戦したんだ？」

「10戦です。2勝しか出来ませんでした」

「何と！？ 2勝したのか……まあ私も白銀とやって10戦中5敗しているがな。これが終われば大尉か……海堂中佐もこれほどの逸材を隠していたとはな」

沙霧大尉はそう言って頭を抱えた。とりあえずの目標はこの沙霧大尉に全勝することだ。

もうBETAになんか負けない。絶対に負けない。

「残すところ3〜4日か。初めから傑物だったが、更に真綿のようにまだまだ吸収し成長していくか……面白い」

「また明日もよろしくお願いします！！」

Side out

Side マサキ

ある日のこと。

作業をしながら目で追ってしまふ。

視線の先にはキャットウォークを歩いている唯依姫がいる。

何だろう。近くにいると何も話せないし目も見れない。離れていると目で追ってしまふ。少し前までこんなことなかったんだけどな。

「会長〜ここなんですけど、23番じゃあ駄目で……」

「ふえ！？ あ、ごめん何？ ああ、じゃあ23番でやってみて？」

「いや、23番で駄目だったんですよ。大丈夫ですか？」

「主任が真面目にボケるなんて珍しいですね？」

「とうかが初めてじゃない？」

「熱あります？」

「ないない！ じゃあ25番で再起動してみて」

「はい了解です」

うっん作業にも身が入らない。

「何だか篁中尉もおかしいですよね？」

「何かあつたんじゃない？」

「何かつて何だよ？」

「そりゃあ、ほら……ねえ？」

「貴様ら！ 私語が目立つぞ！！」

唯依姫が一喝する。その姿を俺はまた目で追っている。

「（はニヤしてみれば？）」「

「（はニヤせニヤいんでしょ？）」「

「篁中尉、なんかフラフラしてないか？」

「寝不足かね？ 衛士としても中佐の補佐官としても仕事があるからな。しかも休む暇もほとんどないらしい」

「じゃあ気合い入れ直して、少しでも負担が無くなるようにがんばりますか！」

「」「」「」
「おおー！！」「」「」

「貴様らーッ!」
「「「「「ギヤーツ!」」」」」

唯依姫が整備兵たちを追いかけてまわす。
俺はその光景を見てることしかできなかった。

俺は自分の手のひらを見つめて、異様に汗ばんでいるのを感じた。
別に落下するのをキャッチするのに緊張したとかそういうわけじゃない。
でも、心臓がバクバクいつてるのは感じた。

「中佐、ありがとうございます。おかげで傷一つなく作業に戻れ
そうです」

唯依姫は傷だらけの整備兵たちの山の前で俺にお礼を言った。

「ぶ、無事なら良かった。あの唯依姫？」
「な、何でしょうか？」

「この後、少しだけ時間貰える？ 少し外に出よう」
「は、はい」

外に出た。
廃墟が立ち並ぶ街並み。人なんて一人もいない。
そんな風景を一望できる丘に来ていた。

「シロとクロも少し離れてて」

「分かったニヤ」

俺の気持ちの正体。

それは、

「唯依姫。最近ね、俺、唯依姫の事をまともに見れない。上手く話す事も出来ない」

「……はい」

「最初はね、怒られてばかりだから、俺は唯依姫の事が苦手になってるんだって思ってた」

「はい」

「でもね、さつき唯依姫が落ちた時、何となくだけど分かった。苦手じゃないって。苦手なんじゃなくて、好きなんじゃないかって」

相槌を打っていてくれていた唯依姫は黙っている。何かを考えているような表情だ。

「BETAと戦うって時に間違ってるのかもしれないけど……！」

「……中佐」

俺の言葉は遮られる。

「クーデター事件の時に告白しました。中佐は寝てしまった後でしたけど、昨日も中佐は酔っていましたけど告白しました。今度は……3回目は聞き逃さないでくださいね？ 私は海堂マサキが好きです」

「…………え!？」

「聞き逃したんですか!？」

「あ、いや違って…………何て言うか…………どうしよう?」

両想いつてやつだよな? だとしたらどうするんだ? あれ?

「私も初めてなのでどうしたらいいか分からないんですけど、お付き合いいただけますか?」

唯依姫ははにかみながら、俺に手を差し伸べてきた。

「あ…………はい。お願いします」

俺はその手を取り、唯依姫の顔を見た。

さっきまで見れなかったはずなのに、今はすっかり見える。

『おめでとー!!』

『唯依ズルイー!』

『すぐに別れても良いのよ?』

『やっと告白したか』

「へ?」

裏側にある格納庫施設から出ている戦術機から声上がる。

「な…………何をしているんだーっ!!」

唯依姫は怒ってその格納庫に向けて走り出す。

俺は呆然と何が起こったのかまだ理解できないでいるが、唯依姫が

戻ってくる。

「何してるんですか!?! 中佐も怒ってくださいよ!」

「え? ……あ、うん!」

俺は手を引かれて、基地へと駆けだしていった。

俺たちはこの日から恋人同士になったんだ。

S i d e o u t

18 人類の危機でも愛は生まれる（後書き）

感想は随時受付中

・酒に弱く、笑い上戸で、何でも喋り、何もかも忘れる。未成年の
飲酒（ry

・タケルの進化が凄いらしい。君の隣、戦うたび 生まれ変わる！

・あれだ、「蘭ねーちゃん」が映画になると「蘭！」「ってなるや
つだw

・もうエンディングでいいんじゃない？

後はBETAを蹴散らすのみ！！

平和な世界にしてほのぼのと暮らすのだ！！

次回「SADDOGASHIMA」

もちろんタイトルは変わるw

19 反撃の光（前書き）

メリークリスマススツ！！

お気に入り1000件突破！ 総合評価3000ポイント突破！！

ありがとうございます。ありがとうございます、ありがとうございます、ありがとうございます。

今回はすごく長い。

そう思うのは作者だけか？

いつもより余計に書いております。

書き足りない事もあるけど、仕方ない！！

全軍突撃！！

この物語はフリスタの提供でおおくりします。

19 反撃の光

12月16日。

主任が煌武院 悠陽殿下に拉致されそうになる。

誕生日プレゼントは中佐が良いそうだ。中佐は篁中尉に助けられ難を逃れた。

噂によると篁中尉と付き合う事になったらしい。羨ましい限りだ。

白銀武少尉、横浜基地に帰還。同時に階級を大尉となる。

大尉としての初任務、00ユニットの調律。

00ユニットはかなり繊細なため、時間をかけて調律すること。

12月17日。

主任のサイバスターを各国へ新型戦術機として正式発表。

しかし、その存在は写真のみで紹介され、名前・識別コード以外は一切伏せられた。

しかし、ハイヴを単独で落とした事は公表された。

現在は70番ハンガーにて凍結中。という事にしてあるようだ。

12月18日。

横浜基地より主任の作った新型兵器が各国へ輸出される。

大口径ビーム兵器『オロチ』・オプションパーツ『八岐大蛇』。冷却装置。

ビームサーベル。肩・脚部特殊兵装『アーマード』。その他諸々。

この兵器に疑問の声はあったものの、衛士からは感謝の声が多かつ

た模様。

12月19日。

横浜基地のもう一機の新型機が正式発表。完全なワンオフのようだ。コードネーム『天照 - アマテラス -』。BETAを素材に使用した戦術機。

その機体は全身が黒でありながら『美しい』という言葉が適していた。

そのコードネームは日本帝国政威大將軍、煌武院 悠陽殿下より贈られたらしい。

パイロットは横浜基地所属『白銀武 大尉』。製作者は海堂マサキ中佐。

横浜基地所属、松島整備兵の箇条書きの日記より抜粋。

S i d e マサキ

「じゃあ、頼んだ」

俺が管制ユニットに手を掛けて、この機体に乗るのは3回目という中にあるパイロットに期待を込めて言った。

「ふう……了解」

俺が先日の事を思い出していると、中で待機している衛士は深く深呼吸をして、冷静な声で言った。一皮むけたなこりゃ。

初めは機体の出せる速度、加減を掴めずにいた。

2回目では、もう自分の手足のように自由に動かせるようになり、その機体性能に感動していたようだ。

そして、今回の3回目では……。

『天照という名は如何ですか？ その力で日本に光をもたらして貰いたいのです』

武が横浜基地に戻ってきた時に悠陽も同伴して来ていた。

その悠陽から貰った名前。【アマテラス】。

BETAを骨に使ったと知って尚、俺に真正面からそう言った。その後、拉致されそうになった……唯依姫が助けてくれたけど。あれは身の危険を感じた日だったな。

それはそうと、これから始まるのはこの機体のデモンストレーション

ン。昨日にこの機体の事は全世界に知れ渡っている。文章と写真だけ。

そう文章と写真だけなのだ。データなどは送っていない。数少ない情報の文章には驚くべきこと。

いや、信じられない事ばかりが書かれていた。

- ・単独で補給要らず。
- ・ビーム兵器の使用もエネルギータンクの積載は必要なし。
- ・不知火・ラプター等の最新型の戦術機の5倍以上の速度が出せる。
- ・レーザー属種のレーザーの回避も可能。
- ・それでいてパイロットへの負担も低下されている。

というものだ。

「信じられないが、サイバスターの件もある」

「横浜基地には魔女とその使い魔がいる」

と、変に信じられている。

信じてもらうのは構わないが、使い魔扱いされるのは困る。

俺は管制ユニットから離れて下に降りた。漆黒の戦術機、天照を見上げる。

今回のデモンストレーションはJIVESによるデータリンクで、各国へもデータが届くようになっていた。

天照は起動した。

設定では、まず艦隊からの出撃。

ビーム兵器を駆使してハイヴを一直線に目指す。

それを裏付けるかのように天照は一直線の黒い線を引いていった。地上のBETA排除率5%……やりすぎだ。3%もいらないうらうに。

それほど掛らずにハイヴのモニュメントが映し出される。

天照のデュアルアイはモニュメントを睨みつけている。

BETAは先ほど引かれた線を消そうとその隙間を埋めに来る。

天照も囲まれるが……天照は高く跳躍……いや、飛んだ。

容赦なく下から降り上げるレーザーの雨。

それを回避する。回避する。回避する。

前へ後ろへ、右へ左へ、上へ下へ。動けない方向はない。

避けるだけ？ 違う、避けるだけではなく、

最適な攻撃ポジションを取り、維持する。

『アーマードを使用する！ フォックス2!!』

肩から、脚部から、無数のマイクロミサイルがモニュメントの一点を目掛けて放たれる。そして、脇に抱えられるように砲身が飛び出す。強化型の【オロチ】だ。冷却面など問題からの連発は出来ないが、大型に対する時は絶大な威力だ。基本的には今回のようにモニュメントの破壊に適している。その砲撃でモニュメントは崩れた。

映像を見る衛士達は呆然としている。呆気ない。こんなに簡単にハイヴのモニュメントが崩れるのか？ 古参の衛士は特に思うところがあるようだ。実際にハイヴ・モニュメントを間近で見た事があるものは感動するだろう。

あの忌々しく禍々しい城を崩せた映像だ。

JIVESとは言え、抑えきれない何かがあるそこにはあった。

ハイヴ内に侵入した後も天照は止まらない。メインシャフトを迷うことなく進んでいく。突然新たな穴を掘って出てくるBETAにも冷静に対処する。必要なところは撃ち、無視するところは無視して突き進む。

そして、デモンストレーションを見た者は口を揃えて賞賛の言葉を放つ。

「アレは化け物だ」と。

「ご覧いただきましたでしょうか？ これが【天照】です。残念ながらサイバスターと同じくワンオフの機体なので、増産も不可能ですが……」

『何故増産は出来ないのでしょうか？ アレほどの機体ならば全てのBETAをこの地球から排除する事も夢ではないでしょうか？ 資金でしょうか？ もしそうなら……』

俺の言葉を遮るように国連のお偉いさんが口を挟む。

声と口が揃ってないのは同時通訳だからだ。

「資金もそうですが、あの機体はブラックボックスの面が非常に問題であり増産出来ないのです」

『BETAを素材に造っている以上のブラックボックスがあるのかね？』

「あります。しかし、追及されるようであれば私は躊躇いも無く天照を廃棄します」

『『『『ざわざわ…… ざわざわ…… ざわざわ……』』』』

「しかし、これだけは約束します。私の造ったモノ、サイバスター全てに関して追及しないのであれば、この世界からBETAを排除します。くだらない発言力や自国の力を高めるのではなく、どうか今はこの地球のために力をお貸しいただきたい」

沈黙が流れる。俺は下げた頭を上げない。

そして、沈黙は一人の年配の男から解かれた。

『海堂マサキ中佐……お幾つだったかな？』

「18歳です」

『世界は君のような子供に命を懸けてもらわなければいけないまでに衰退している』

『命を懸けて多くの血が流れ、落としたものも多い』

『私達のような大人に代わって世界を変えていくのはいつも若い力だ』

『不甲斐ない大人に代わって、力を貸してくれないだろうか？』

『もちろん、私達も協力は惜しまない』

一人を皮切りに続々と声を上げてくれる各国の偉い方々。その顔は

嘘偽りの無い表情ばかりだ。もちろん、結局は腹の中では何を考え
ているかは分からない。夕呼先生の悪評もあるだろうから簡単には
信じられない。

それでも、信じられる顔をしている。

「ありがとうございます。では、まず手始めに12月25日に佐渡
島を取り戻したいと思います」

S i d e o u t

S i d e 篁 唯依

中佐が各国の代表に向けて説明をしている。誰が相手でも整備服だ。
「国の代表だから？ 同じ人間だろ？」と、結局着替えずにそのま
まの格好で行ってしまった。

しかし、あの天照と呼ばれる機体の衛士。白銀武大尉。
少し見ない内に、格段に地力がついた。もっと感情的だったり新任
らしい感じだったと思っただけ……。

「ただいま、唯依姫」

「お疲れ様です。大成功ですね」

「デモだけね。次は実戦だ」

「……」

その中佐の表情はどこかに行ってしまったいそうな決意を秘めた顔に見

えた。

「わあっ？ ゆ、唯依姫……？」

私は不意に中佐の手を握っていた。

「あ、す、すみません！ ……」

しかし、私は手を離さない。

「唯依姫？」

「その……どこへも行かないですよ？ どこかへ行ってしまいそうで……」

「お腹減ったしPX行こうかと思うんだけど？」

「あ、いえそうじゃなくてですね……もういいです」

私は少しムツとなって、手を離してしまふ。

しかし、その手はまた握られた

「え？」

上目遣いに中佐は視線を合わせてくる。

「一緒に行こ？」

「……はい！」

「見た？」

「見た見た」

「凄いな」。ああいうのバカッフルって言うらしいよ？」

「ああ」

私は中佐に少しだけ時間を貰い、ウォーミングアップをしてPXへと向かった。

「PXに行くのにウォーミングアップはいらな……ぐふっ」

Side out

Side タケル

横浜基地に帰った時。マサキは不知火に乗って演習に出ようとした俺にこう言った。

「そんな装備で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

元々はマサキが開発したアーマードの兵装だったし、俺も気に入ってたから、そう答えた。なんでそんな事を聞いてくるのかすら疑問に思った。すると、何故かここでボディブローを貰って俺は気絶した。

「そんな装備で大丈夫か？」

目が覚めると再度同じ質問が飛んでくる。俺は困惑した。また殴られて気絶させられるのかと。そこへやって来たのは、マサキの喋る猫のシロとクロだ。紙を啜えてやってきた。

「読むと良いニヤ」

「い、一番良いのを頼む」

それで案内されたのが、この戦術機。天照だった。

初めから案内すれば良くないか？

そして、演習が終わると驚きの2つ目が待っていた。

この世界にも純夏はいた。

いたんだ……。

俺は純夏を抱きしめた。何度も何度も名前を呼んで。

「BETA殺す」

最初はそう言っていた純夏も、俺の知ってる純夏になって行き、今では一緒に飯食ったりしている。

そして、それは天照のデモンストレーションの次の日だった。

俺は天照の管制ユニットが複座型というか3人分の座席だったのが気になって、マサキに聞いたんだ。

「ああ、あれはお前と、純夏と、霞の座席だ。あの機体ですべて出し切るには霞も純夏もあの機体には必要不可欠なんだ」

「十分すぎるぐらいに感じたんだけど……。だってハイヴ落としたんだぜ？」

「ハイヴを落とすのが仕事じゃない。BETAを一匹残らず殺すのが仕事だ」

「それは、そうかもしれないけど……あの機体だけだと出来ないのか？」

「必要な情報があるんだ。霞と純夏嬢にはBETAとお話してもらおう」

「BETAと……お話し？」

何を言ってるんだ？ BETAに思考なんかは無いつて言ってたじゃないか。俺達人間の事も生物だと認識してないって……。

「上位種って言うのかな……俺も色々ありすぎて忘れちゃってるんだ。とにかく、BETAの親玉みたいな奴とは話しが出来るはずなんだ。あの二人がいるならな。まあ明日一緒に乗るのは純夏だけだ。そのテストも兼ねての佐渡島奪還作戦だからな」

佐渡島の奪還ですらテスト扱いか、俺は少し離れたところにいる純夏を見る。

「ん？ 何々タケルちゃん？」

「好きで好きでたまらないだつてよ」

「ちよっ！！」

「本当！？ タケルちゃん！」

「い、いや……マサキ！！」

「冗談だ。まあとにかく、純夏はすっげ〜頭が良いんだよ」

「え？ 私？ そ、そんな事ないんだけどな〜。マサキちゃんの方

が戦術機造つたりして凄いよ」

「マサキちゃんはやめてくれって……まあ3人でいた方が良さだろう?。」

マサキなりに色々と気を使ってくれてるのかもしれない。

この世界には純夏はいないかと思っていた。

でもいた。00ユニットとかいうモノだったとしても、純夏はいたんだ。

しかし、あの天照って機体は凄い。

戦術機の操縦方法で、戦術機とは全く違う性能。

内骨格という機構になっている所為か、更に動きやすくなっていて、動かしているというよりも、自分が戦術機になったかのような自由度がある。

BETAを素材に造られた漆黒の戦術機【天照】

紅蓮大将たちと演習とかタイムマンしてた時は不知火に乗って、それでも吹雪とは違つと、その機動性などに楽しみを覚えていたのだが、コイツは格別だ。

「タケル。25日に佐渡島を奪い返すから頼むぞ」

「了解」

俺は軽く敬礼をして答えた。今回は大丈夫だ。人類は負けない。

Side out

12月24日

深夜。

明日は佐渡島を取り返すという最大規模の作戦が始まる。

『甲21号作戦』だ。

俺達整備兵は今も最終チェックに追われている。

この前のデモンストレーションには度肝を抜かれた。

あの黒い戦術機。天照の映像には痺れた。

謎の戦術機、主任のサイバスターもある。

単機でハイヴを落とせる衛士が2人もいるんだ。

俺達は遂に悪夢から覚めるんだ。

そう考えたら整備にもより一層の力が入る。

今まで地下深くにあった青みがかった銀色の戦術機が、漆黒の戦術機の隣に並んでいる。

見ているだけで涙が出てきそうだ。

この2機が俺達の、全人類の明日を変えてくれるんだ。

でも。

もし……もしも、それでもBETAに勝てないなら。

……BETAに人類が勝てないなら。

死んだ先は地獄だったとしても天国だろう。

「海堂中佐、A-01部隊。総点検確認、各自仮眠を取らせています」

「了解です。まりもちゃんも寝てていいですよ？ 明日は嫌でも寝れないんですから」

主任は原隊復帰した神宮司上級大尉にいつもと変わらない表情、態度で話す。

他の人達を見る限り、走り回って緊張をほぐしたり、うろろろしてたりする人が多い。

そんな人たちよりも子供のはずなのに……天才ってやつなんだなあ本当に。

「ところで、中佐。お言葉ですが強化装備に着替えた方が……」

「ああ、サイバスターには強化装備ってないんだよ」

強化装備無しでアレだけ動いてるのか？

俺はその声を聞いて、デモンストレーションの時の天照の機動性にサイバスターの姿を重ねていた。

「マサキ。私達のテストパイロット部隊も準備は出来てるぞ」

「ラトロワ中佐。テストパイロット部隊じゃなくて、【ホワイトフアングス】ですって、唯依姫をよろしくお願いしますよ？」

そうそう、篁中尉の元いた中隊。日本帝国斯衛軍の装備実験部隊「一白き牙中隊（White Fangs）」って名前をそのまま借りたんだっけ？ ホワイトファンクスなのに機体の色はバラバラだけど……。国もバラバラか。

「む、分かった。しかし、いつも通りだなマサキは」

「なるようにしかならないですしね。それに……」

「それに？」

ラトロワ中佐は聞き返す。神宮寺大尉も聞いている。蔭ながら俺も聞いている。

「死に行くわけじゃない……取り返しに行くだけですから」

その言葉にまた震えが来た。

何人もの衛士を見送ってきた。何人もの衛士に黙禱を捧げてきた。何度も何度も整備して、機体の所為だ。俺達がすっかり整備できないから帰ってこれないやつがいるんだ。って先輩たちも泣いてて。いつしか表では泣かなくなつて、いつしか衛士が悪いんだ。って擦り付けて、それでも整備して。帰ってきた肉片とか、金属片とか見て、結局また泣いて……。

「こらー！ そこにいたのか松島あー！！」

「人手が足りないんだサボってんじゃねえー！！」

「あーすまんすまん。松島は俺が仕事任せてたんだよ。終わったから今からそつち手伝いに行つてもらつから」

「そつなんですか」

「それは失礼しました」

主任が俺をフォローしてくれた。

「盗み聞きしてる暇があったら仕事しろ。全く、お前らがいるから衛士が帰ってこれるんだぞ？ しつかりしろよ？」

「は、はい！！ 失礼しました！！」

Side タケル

「タケルちゃん起きた？」

天照の中に着座している純夏は先に起きていたようだ。

「ああ……。寝れたか？」

「もう、ぐっすり眠れたよ」

日時は12月25日の早朝。と言ってもまだ朝日は見えない時間帯だ。それにここでは朝日すら見えない。俺達は艦に搭載されている戦術機の中で仮眠を取っていた。

ジュジュ

電子音のアラームが管制ユニット内に鈍く響いた。

「なあ、マサキが言ってたやつは本当にやるのか？」

「やらないと沢山の人が死んじゃうんだからやるしかないよお」

純夏は口を尖がらせて答える。当然だ。という事だ。

『起きていますか？ 白銀大尉』

「こちら天照、白銀大尉であります」

見知らぬ女性だが、この艦のオペレーターだろう。階級章は中尉だ。

『5分後に作戦開始となります。機体の最終確認をお願いします』

「……問題ありません。いつでも行けます」

ピピッ

『割り込むぞ〜。タケル〜お前の機体にしか出来ない事だからな。』

頼むぞ?』

マサキが回線に割り込んでくる。

「何度も聞いて悪いんだけど、大丈夫なんだよな?」

「もう、タケルちゃん! 大丈夫だって夕呼先生もマサキちゃんも言ってたでしょ?」

『不安なのは分かるけどな、俺の風当たりも強いんだコレが、BE TAなんて敵じゃないって全軍に分からせないとただのガキって思われちゃうんでな。頼むわ』

「お前の名声のためかよ! 分かったよ。死んだら化けて出るからな?」

『ああ頼む。化けて出たら御被いしてもらっからな』

微塵も俺の怒りを感じてねえし……。

Side out

艦隊はアローヘッドの陣形を崩さずに佐渡島に接近して行く。

先頭には先日デモンストレーションがあった【天照】という機体だ。補給要らずの黒い機体。そのスピード、火力はどの戦術機にも無いモノだ。

しかし、先頭に立たせるのは如何なものだろう。

レーザー属種から照射されれば数秒で撃墜されるのではないだろうか？

動いているのならまだしも、艦にまだ乗っている内に狙われたら……。

『敵の迎撃を確認。作戦開始!!』

上空から降り注ぐ対レーザー用の無数のミサイルがレーザー属種の光によって迎撃されていく。

『天照、発進どうぞ!』

今回の全てを握ると噂される黒い機体が艦隊の戦闘に打ち出されようとしていた。

『レーザー来ます!!』

終わった。瞬間の閃きで誰もが思った。
出る直前に放たれたレーザー。
人類はまた地獄を見る。

しかし、先頭に立っている艦のマークは消えない。

『えっ!?!』

オペレーターの間抜けの声が聞こえてくる。

艦隊から打ち出された戦術機の視点からは良く見えたであろう。

レーザーは曲がって行った……。無効化されたのだ。

『天照、フォックス3!』

そう言って放たれたのは艦隊側からの初めてBETAへ有効とされた攻撃だった。

8つの光が走る。一瞬BETAが大人しくなるのが肌に感じて取れた。

レーザーが無効化された。それは人類の希望の扉を叩いた。

Side タケル

「し、死ぬかと思った……」

「だから大丈夫だって言ったじゃん！」

ムアコック・レヒテ機関。それを制御するための00ユニット。それによって形成されたラザフォードフィールドの磁場は、天照を先頭に全ての艦隊を守った。

レーザーに撃たれると言われた時には、ただの死刑宣告にしか聞こえなかった。

『はっはっは、生きてるか？』

「笑い事じゃねえよ！ それよりマサキはどこにいるんだ！」

『俺ならもう佐渡島の上空だ。レーザーを避けてるところだ』

「どれだけ余裕なんだアイツは……。」

『さつさと来いよ？』

回線は切れる。

「純夏、問題ないか？」

「大丈夫。この中って全然揺れないから楽勝楽勝」

「ここにも余裕なやつがいたか……。」

Side out

Side マサキ

「いつけえ！ アカシックバスター！！」

火の鳥がBETAを焼き尽くしていく。

作戦開始から30分が経過していた。

立ち上る黒煙は死に行く者達の棺桶からだ。

そして光の線は棺桶になる前の戦術機から放たれる反撃の光だ。

「シロ、クロ！」

「行ってくるニヤ！」

「任せろニヤ！」

ハイファミリアがBETAの群れに突っ込んでいく。

「やっぱ一人じゃないと楽だな……っ！ カロリックミサイル！」

『うわあああっ！！』

『動くな！ 今、排除して行くからな』

『大尉！』

『なんだ？ うわっ！！ あああああっ！！』

近くの回線を拾っては俺は駆けつける。

「いつけえ！！ サイフレーション！！！」

『えっ？ 生きてる……？』

『銀色の戦術機……』

『あれが、サイバスター……』

「そろそろタケルも来るかな……。シロ、クロ！」

俺はファミリアを戻して、モニュメントを睨んだ。

「見えてるぜ、ハイヴ・モニュメント。こいつで消してやる！ コ
スモノヴァ！！」

光の魔弾が4つ飛んでいく。モニュメントに直撃した瞬間、光の柱
が佐渡島に立った。

「こちら横浜基地所属、海堂マサキ中佐だ。これよりハイヴ内に突
入する！」

S i d e o u t

S i d e 艦隊司令部

ドツゴオツ！！！！

『 『 『 …… 『 『 『 『

佐渡島を奪われた時にもその場にいた歴戦の勇者たちが、その光の
柱を見つめていた。

艦長達は何かを思い出すように、
何かを取り返したかのように、

何かを手に入れるかのように見つめていた。

その光は人類の希望の光。未来を照らす光。
黒煙を上げて消えたモニュメントを目の当たりにして、
未来を確信した信濃艦長の安倍は涙を流した。

「ハイヴが……消滅した……我々は、我々は遂に……彼奴等に一矢
報いたのだッ……！」

ワアアアアアアアアアアツ！！
見たかーっ！！！！
ザマアミロツ！！！！

その一撃は、美しく、深く戦場にいる全ての者の胸を貫いた。

『（ザーツ）……こちら横浜基地所属、海堂マサキ中佐だ。
これよりハイヴ内に突入する！』

その存在には半信半疑だった者も多いだろう。サイバスターと呼ば
れる機体はハイヴへと侵攻して行った。

「サイバスター……人類の……希望の光だ」

S i d e o u t

ハイヴ内。

縦揺れの大きい衝撃がハイヴ内部を包み込む。

『な、なんだ!?!』

『H QよりC P。ハイヴ・モニュメントが消された衝撃だ。作戦に変更は無い』

モニュメントが消された?

何の冗談かとも思ったが、先行部隊の面々は先日のJ I V E Sの映像の事を思い出した。

『生き埋めにならない様にさっさと行くぞ』

『違いねえ』

『ん? 待ってください……震源が……センサーが止まらない?』

『なっ!?! 推定個体数4万!?!』

ドゴンツ!!

慎重に進んでいた先行突入部隊は、突然の震源センサーと、その肌を感じる振動で現れたB E T Aの群れと交戦していた。突如として地面から、横の壁から、上から、数え切れない戦車級が飛び出してきたのだ。

無数の弾丸がB E T Aを撃ち抜いて行く。

しかし、味方への誤射もしてしまう。

また、戦車級に囲まれ戦術機が見えなくなる者もいる。

『死ねクソヤロウ共があ!!』

『うわああああ!! 助けてくれえーっ!!』

『くらえ!! サイフラッシュ!!』

ゴウツ!!!

光の風が流れていく。

光が収まると、そこには銀色の戦術機と、死にかけそうだったもう立てない戦術機、ギリギリで味方誤射を盾で防いでいた部隊がいた。

『生きているな？ とりあえずここは俺が受け持つ。外で待機するなりしてくれ』

『さ、サイバスター……？』

Side ホワイトファンクス

突然の光の柱と共に、衝撃波と自信が巻き起こる。

『（ザ…ザザツ…）こちらホワイトファング2、ハイヴモニユメントの陥落……いや、消滅を確認』

『すげーよマサキ!!』

『モニユメントは初めて見たけど、あんなに大きなモノが消滅するなんて』

『中佐……。っ!! ホワイトファング1より各機！ 地下から来るぞー!!』

震源が収まらないどころか更に地震は強まっていた。

センサーに反応があるのは100体以上のBETA群だった。

『ホワイトファング4・5・6番機！ 1時の方向から4時の方向

に向けてOPパーツを付けてオロチを放て！ その後ブーストジャンプ、モグラ共を焼き払え！！』

『『『了解！！』』』

ステラ、タリサ、ツイの不知火、ストライクイーグル、殲撃の各機が、オロチを構え砲身から粒子の光を流していく。

津波のように押し寄せるBETA群はその場にいなかったように溶け消えていく。射線上にいた光線級も消えていく。

ドドドドドドドドドドドドドドドドッ！！！！

震源が急接近してくる。

『来るぞ！ 各機ブーストジャンプ！！』

ドゴオッ！！！！

打ち上げられたロケットのように戦車級が飛び出してくる。しかし、その先には光がある。待ち構えていた蛇は獲物を捉えていた。

しかし、蛇に噛まれずに飛び出したモグラもいる。

『ハアッ！！』

それでも、逃げ道は無い。

山吹色の武御雷が長刀を振り下ろしている。その牙に2匹同時に喰われる。

僅かな間隔を空けて、もう3匹飛び出してくる。

それすらも冷静に対処される。武御雷は左手を離し、甲部分を露出

させ銃器を見せた。マサキに改造されたガトリングガンが火を吹く。
ズシャシャンツ！！

『チツ、砲身が溶けちまった』

『こつちは冷却剤切れ』

『エネルギー切れだ』

各機が使っていたオロチが不良だったり燃料切れだったり、捨てられて行く。

その分、タンクを背負わなくて良くなったため軽量化されたが、火力が極端に減った。

それでも

『一匹残らず殺してやるよお！！』

突撃級の殻の上から高周波ブレードで斬りつける。

『いやあ〜苦勞してそうですね〜手伝いしましょうか？』

『結構です中尉殿。誤って斬りそうなんで下がっててもらえます？』

そこにやってきたのはA-01部隊だった。

『速瀬、こつちも補給が必要だ』

『分かっていますよ〜大尉』

『全く、やはり貴様等は何も変わっていないな』

『神宮寺大尉、そう怒らないでくださいよ』

『怒ってなどいない。呆れているだけだ。速瀬、補給なしで戦える

か？』

『怒ってるじゃないですか！？』

『白銀大尉はどうしたんだ？ A - 01部隊からは独立したと聞いたが……』

『白銀なら光線級を潰してるハズですよ』

『それは終わりましたよ。速瀬中尉』

キイイイ……ズシャツ！

『白銀か』

目の前に舞い降りた黒い戦術機は、傷一つなく、汚れも無く、ただ深い黒を鈍く輝かせていた。

『タケル、レーザー照射を受けたのは全く問題がないのか！？』

『冥夜か、問題ない。色々と凄い機体だな』

『ヴァルキリーマムよりヴァルキリーズ、及びホワイトファンクス各機へ。海堂中佐はハイヴ内を侵攻中、中佐からの伝言です。「地上は任せた」だそうです。地上に新たな光線級が大量に出現しました。急ぎ排除してください』

『『『『『了解！』『』『』『』』』』』

補給地点まで残り4キロ少々、しかし、目の前には要塞級が30体以上は仲良く並んでいた。足元にも当然のようにBETA群がいる。

『ここは俺が引き受けますよ。穴が開いたら突破してください』

『1日しか一緒に部隊にいなかったけど生意気言っわね』

『速瀬、お前より若い相手は大尉だぞ？』

天照はアーマードからのミサイルランチャーを撃ち尽くし、それを
パージする。

ビームサーベルを抜き、天照は高速機動で要塞級を切裂いていく。

『す、凄い……』

『なんてデタラメな……』

『呆けている場合か！ 穴は十分に開いた！ 全機光線級を喰らい
つくせ！』

『『『『『り、了解！』』』』』

『我々も行くぞ！ 中佐が任せてくれたんだ一匹残らず逃がすな！

ホワイトフアングの牙を染め上げる！！』

『『『『『了解！』』』』』

S i d e o u t

そして、

キュゴンツッ……！！

2度目の光の柱が立ち上る。

その光の柱から銀色の機体はその姿を現す。

『（ザ…ザザザ……ザ）こちら、国連軍横浜基地所属、海堂マサキ

中佐だ』

全軍が静まり返った。その銀色の戦術機はコードネームぐらいしか知られていない。

AGX-05【サイバスター】。衛士は横浜基地の18歳の中佐。各国に現れては消え、カザフスタンのハイヴを落としたとされる戦術機。

その衛士はやはり子供の声で、それでも力強く声を上げた。

『勝ち鬨を上げるーッ！！ 人類の勝利だーッ！！』

オオオオオオオオオオオオオオーッ！！！！

天照は地上を制圧に多大な戦果を上げ、サイバスターはハイヴを落とした。

その日、人類は反撃の狼煙を上げた。

19 反撃の光（後書き）

感想は随時受付中だニヤ

・【天照】^{アマテラス} って名前にしました！ 真つ黒い戦術機なんだぜ？
まだ実力出し切ってないんだぜ？ でもこれで誰が乗るのか分かつたね。霞と純夏でリーディングだ。必要ないかもだけど、マサキには必要なんだぜ？

・大丈夫だ問題ない。

神は言っている。もう少し面白く書けと。

・もうね、テストパイロットってめんどいからホワイトファンクス部隊にしたよ。

・もっとまりもちゃんの描写とかするべきだったかとも思う。でも無理だった。コレが実力つてもんよ。

てな感じのお話でした。

20 KISS(前書き)

マブラヴ。

久しぶりの投稿。

暗い室内にプロジェクターによる光だけが漏れている。

映し出されるのは銀色の空飛ぶ機体、サイバスターと、漆黒の戦術機、アマテラスだった。サイバスターはモニュメントを消すとハイヴ内へと消えて行った。

アマテラスは地上に這い出てくるBETA群、光線級を遠・中・近どのレンジからも対応している。

そして、サイバスターが数十分後に空高く舞い上がり映像は途切れた。

「全く化け物だな横浜基地は」

「この二人ともが18歳か……実に若い」

「A-01部隊と言いましたか、この衛士達だけでも驚きだと言うのに」

「ホワイトファンクスというのは元帝国斯衛のコールサインだったな」

プロジェクターは電源を落とされ、部屋の明かりが付けられた。

「被害報告は本当にこれで合っているのですか？」

一人の軍人が資料を掲げて質問をする。

「はっ、間違いありません。死者28名、負傷者257名。艦隊は損耗率13%となっております、大破した艦はありません」

「自然災害の方が被害が大きいな」

「いや、全く」

「どうだ巖谷よ、何か問題があるか？」

「……一つ、正式配備されているビーム兵器ですが、いつ破損・不良を起こすかが問題でしょう」

そう、高出力なビーム兵器。通称【オロチ】は現状存在する兵器の中で、BETA群を相手にするには最も有効と言えるだろう。巖谷の言つとおり問題はその高出力による異常発生の頻度だ。

先の佐渡島奪還作戦である【甲21号作戦】では50ものオロチが配備されたが、綺麗なまま持ち帰れたのは5本にも満たない。片道切符を持たされているようなモノだ。壊れれば死。正常動作を続ければ栄光。網渡りな兵器とも言える。

「ふむ……海堂のお嬢ちゃんはこれを改修出来るものか……？」

「神野中将。海堂中佐は男子になります」

「……そうだったのか？」

「……（分かってなかったのか……）」

「殿下も最近落ち着きがないから……巖谷よ、少し横浜基地に行ってみてくれぬか？」

「願っても無い事です紅蓮大将」

甲21号作戦から2日後。俺は夕呼先生に呼び出されていた。

「巖谷中佐？　どっかで聞いた事があるな。ふあゝ……っと失礼しました」

「寝むそうね、すっかり寝ておかないといざって時に死ぬわよ？

話を戻すわよ？　巖谷榮二。帝国陸軍の技術廠・第壱開発局副部長よ。

名前は、整備兵からでも聞いたのかしら？」

はて、そんな気もするし、違う気もする。誰だったっけ？

「巖谷の叔父様が横浜基地にいらっしゃるんですか」

ああ、少し思い出した。唯依姫の叔父さんで、顔に傷がある人だったか。

「その人が何しに来るんです？」

「ビーム兵器の改修についてって言ってたわ。で？」

「でって？」

でっていう？

「もう通しても良いかしら？」

来てんのかよ！

俺は「別に良いですけど」と答えた。すると背後の自動ドアが開いた。

「どいつも初めまして海堂まさ……おわっ！」

「マサキ！ 先日の活躍は聞いております。怪我は無かったですか？ ああこんな眼下にクマが出来て、寝てないのですか？ 寝られないのですか？ 差し支えが無ければ添い寝を……！」

「で、殿下!？」

「ああ言つの忘れてたわ。煌武院悠陽殿下の護衛も兼任してるらしいわ」

嘘付け！ 忘れてたわけがない！

「殿下、どうか落ち着いてください」

「お、叔父様」

後から現れた顔に傷のある男、巖谷に唯依姫は視線を向ける。

「よお唯依ちゃん。元気だったか？ 手紙もよこさないから心配してたんだぞ？」

「検閲されてしまいますから、手紙では話せない事がありました…」

…

「おい、とりあえずコレを引っぺがしてくれ」

「「殿下をコレ呼ばわり!？」」「」

「さて、挨拶が遅れたかな。巖谷榮二中佐だ。よろしくな噂のエース」

「ども、海堂マサキ中佐です」

「今回来たのは他でもありません。【オロチ】の改修についてです」

「はあ、どのようにすれば？」

「異常加熱により砲身が溶けてしまったり、冷却材の供給が止まってしまうたり、エネルギー自体の供給が止まってしまったりする。これを改善してもらいたい。まあ要するにその戦闘時、帰る時までオロチも万全な状態のまま帰って来させたいわけだ」

「……他には？」

「他に？ いや、急ぐ点ではオロチの件だけだな……難しいかな？」
「あ、難しいって言うか……さっき終わりましたケド」

「……流石はマサキですね」

「だから欠伸してたのねアンタ」

「また部屋にいないと思ったら格納庫に泊まったんですね？」

「2日しか経っていないと言うのに……まさか本当に化け物だったか」

「まあテストはこれからですから。ついでに見て行きます？ 1分間連続照射耐久テスト・4時間ランダム照射耐久テスト」

「見せて貰おう」

そう言つて、俺達は格納庫に向かった。

先頭に唯依姫がいる事に巖谷中佐は疑問を持った。

案内とは言え巖谷との距離がありすぎるのだ。

「唯依ちゃんは、叔父さんの事が嫌いになったか、親離れみたいなものか」

「違います。海堂中佐が迷子になるから先導しているだけです」

「ま、迷子なあ？」

「いやあ、軽い方向音痴でして、格納庫に向かおうとするとPXへ出てしまったり、PXへ向かおうとすると博士の執務室に着いたりするんです」

「訂正しとくわね。重度の方向音痴よ。もう不治の病ね」

そこまで言うか……。

俺達は格納庫からオロチと、戦術機一機を外に出し、テストを始めた。

『残り10秒……5・4・3・2・1……異常なし。砲身過熱予想範囲内です』

「お疲れ様。そのまま行こうか。タリサ」

『聞こえてるよ。アタシに任せときな』

吹雪に乗るタリサはそのオロチを装備して、演習場を飛び回った。狭いが推進剤の補給地点も設置しての演習だ。

Side out

Side 巖谷

「良い衛士だ。XM3を巧く使いこなしている」

バルーンタイプの的が次々に溶けて消えて行く。
撃ち漏らしは無い。反応に迷いが無い。演習とは言え、大したものだ。

「タリサ、オロチの出力上げて、もう少し過熱させて欲しい」
『了解!』

「……問題なさそうですね」
「うん。残業した甲斐があったよ」

「いえ、残業しなくても日にちをかければ……」
「あ、うん。ごめん」

「気をつけて下さいね？ 中佐が寝込んだりしたら……」
「き、気をつけるよ」

しかし、この二人……。

「ふふふふ」
「香月博士？」

「子供はいつの間にか大人になってるモノですわ」
「……なるほど。唯依ちゃんや」

「は、はい」
「結婚式の際は盛大にやろうや」

「は、はい!？」

そうか、そうか。

幸せが見つかったか。

『状況終了。タリサ・マナンドル少尉、お疲れ様でした』

『あいよ。どうだった？』

「問題ない。大成功！」

この少年が、幸せにしてくれるか。

Side out

Side マサキ

「ではマサキ。寂しいと思いますが、これを私だと思って」

と、差し出されたのは四角い少し大きめの印鑑みたいなものだった。

「で、殿下！ 何てものを持って来てるんですか！！ いけません

！！！」

「これが駄目だと言うなら、私は帰りません！！ マサキの部屋に泊まります！！」

「よし帰れ」

何て將軍だよ。

俺は車で騒いでいる悠陽を見送りながら、印鑑は何だったんだと考
えていた。

「驚いたわね」

「何だったんですかアレ？」

「ん〜簡単に言えば最終決定の判子よ」

「最終決定の判子？」

「あの判子が押してある書類なら、どんな無理も通るのよ、道理が全て引っ込んでね。例えば、『核兵器を扱うようにして、アメリカを総攻撃します』って書類にあの判子が押されてたら、この国は明日にでも核兵器の製造を始める事になるのよ」

「アホか。さてと、眠いから俺はこれで失礼します」

俺は部屋に戻り、即座に眠りにつこうとした。

しかし、違和感が残る。机の配置などが少し違う気がする。というか部屋自体が狭い気がする。更に言うと置いてあったものが無い気がするし、良い匂いがする。

「……誰かが掃除してくれたんだな」

「部屋を間違えてるだけニヤ」

部屋を間違えてる？ この俺が？

「方向音痴ニヤろうがマサキは」

「篁さんは夕呼先生とはニヤしてるから、案ニヤい役がいニヤくて迷い込んだんじゃない」

するつてえと……誰の部屋？

しかし、眠気には勝てない。少しだけ寝て、出て行こう。そうしよう。

「「寝るニヤ！ 起きろ！」」

グウ……zzz

「駄目ニヤ。怒られるニヤ。ここ誰の部屋かニヤ？」

「私達は部屋に戻りましょう。とぼっちりはごめんだニヤ」

まだ部屋のドアの隙間が開いている事が幸いし、白と黒の猫2匹は出て行く。

Side out

Side 唯依

10分ほど香月副司令と話し込んでしまった。
部屋に戻ると、問題が発生していると気づく。ドアが……

「あ、開いてる？ ……」

キイイイ……

恐る恐る中を覗くと、そこには自室に戻ったはずの中佐が寝息を立てていた。

「ちゅ、中佐！？」

「う？ ううん……zzz」

落ち着け、恋人同士になったのだ。私の部屋で寝ている事は何ら不

思議では……いや、おかしいでしょう!? 何で私の部屋で寝ているのですか!?

「……ああ部屋を間違えたのですか。自分の部屋には自分の力で戻れるようにして欲しいものですが……」

冷静になり、私はベッドで眠る中佐を気にしながら国連軍のスーツを脱ぎ、軽装になり、椅子に座った。

「……どうしろと?」

(襲いなさい。そのためのシチュエーションじゃない? これを逃しては駄目!)

私の中の悪魔がそう囁く。

いやいやいや、駄目だろう。ま、まだ、き、キ……口付けすらしていないのだぞ? 段階を飛ばし過ぎだ。出て来い私の理性。私の中の天使。

(起こしたり、追い出すなんてかわいそうでしょ? でも襲うのも駄目! なら間を取って、添い寝で行きましょう!)

駄目だ。私の中の天使と悪魔は二人きりになる考えしかないようだ。私は意を決して!!

「……失礼します」

添い寝をした。

Side out

Side マサキ

ゴソゴソ

「んう？ ……むう？」

何か良い匂いがする。それに温かい。シロとクロが添い寝してくれているのだろうか？

「あ、あわ……お、起き……ましたか？」

人の声がする。すぐ近くで、というか目と鼻の先で。俺は目を開けた。そこには赤い顔がある。目に、鼻、口がある……。

「うわっ！？ 唯依姫！？」

ガンツ！

「だ、大丈夫ですか！？」

「のおう……」

頭を壁に痛打し、俺は寝ころんだまま頭を抱える。唯依姫はそんな俺を撫でるように心配している。つまり、そう！ 密着状態！

「だ、大丈夫、何でここに唯依姫が……？」

「それはこちらの話です。ここは私の部屋です。間違えたんですね？」

「……多分」

いや、確実にそうだろうな。

「で、でも何で一緒に寝て……」

「そ、その……！ こ、恋人同士ですし！！ それに、何かからしたらいいのかわかりませんし！ それから……！！」

俺と同様に唯依姫はパニックっているようだ。

「と、とりあえず。起きようか」

ギョッ

「唯依姫！？」

「……も、もう少しこのままでいいですか？」

……駄目なんて言えないでしょうが！！

それから、何を話すでもなく、行動するわけでもなく。数分間見つめ合ったり、恥ずかしかがって目を逸らしたり、でも起き上がったりはしなかったり、そんな事をしてしていると……。

コンコン

「中尉いるか？ マサキ知らないか？ 今日のテストの報告書持って来たんだけどよぉ」

二人揃ってノックの音にビクツとし、タリサの声に冷や汗を流す。

「中尉くいないのか？　ったく、どこ行っちゃまったんだ二人して？」

やがて、足音は遠退いていき、ホツとしてしまう。

「お、起きようか」

「は、はい」

「じゃ、じゃあ俺、部屋で寝てるよ」

ぐいっ

部屋を出ようとする俺の身体は、引き寄せられていた。そして、口と口が重なっていた。

「……………っ！？」

「お疲れでしょうが、気を引き締めて頑張ってくださいね」

パタンッ

「マサキどつしちゃったのよ？　かニヤリ怒られたのかしら？」
「ずっと放心状態の上の空だニヤ。あ、笑った」

……………頑張ろっ。

二へへへ

Side out

Side 唯依

キスしちゃったーっ！！

おかしくなかっただろうか？

いきなりキスなんてして、はしたないと思われていないだろうか？

巖谷の叔父様が結婚とか言うから……あゝもうっ！！！！

私はベッドの上で足をバタつかせ、枕を握りしめていた。

Side out

20 KISS (後書き)

感想は随時受付中。

……うん。今回はグダグダすぎて何も言えないかな。他の作者の方々もあると思う、スランプ的なモノが。というわけで、好きに言っして下さい。

では、また次回でお会いしましょう。

あ、そうそう。ここでも宣伝しておきますかね。以下は活動報告と同じ内容です。

次の作品の原案が出来てしまったのです。しかし、ネギま！にするか、完全オリジナルにするか迷うところがあります。

というわけで！！

1週間のオーディエンスタイム！！ 活動報告の最新記事に書いて頂きたい！！

次はネギま！か、またはオリジナルか！！

【ネギま！】ならヒロインを一人だけ選んで頂きたい。今のところ

フリスタの頭の中では【千雨ちゃん】と【雪広あやか】のどちらかです。他に案があればどうぞ。

1・ネギま！ + 『ヒロイン名』

2・完全オリジナル

で、ご記入ください。

ちなみに、ネギま！編だとしたら、開始はネギが教師を始める頃からです。また、内容はバトルものではありません。ジャンル的には今のところ……恋愛なのか？ ほのぼのなのか？ って感じですよ。それ以外は一切伏せます。「それじゃあ、投票しようがない」と思う方もいるかと思いますが、そこを何とかお願いします。

それと、長編にはならない気がします。10話行くか？ 何て思っているところですよ。

もちろん、処女作【夢無き者は夢を見る】が予想外の長編になっているので断言はできませんがね。

では、1月22日、深夜12時までまでの投票をお願いします。結果は作品を投稿する直前の活動報告の場にて、発表するかと思います。

21 未来への咆哮（前書き）

……待つてた人いる？ だとしたら長らくお待たせいたしました。
すみません。

あ、100万PVも越えてたんですね。ありがたいことです。
テンション低くてすみません。

ひっそり投稿しておきます。

もう、この作品を投稿するのが怖い作者のフリスタであります。

ダンゴ虫みたいなもんですよ。

ええ、突っつかれたり虐められれば丸まっちまっわけですよ。

では桜花作戦だ。このスピードについて来れるか？

21 未来への咆哮

Side マサキ

12月30日。

歴史は変わっている。

準備万端で待ち構えていたのだが、
一向にBETAが、ここ横浜基地を強襲して来ないのだ。

まあ死者が出なくて助かるけど、BETAを殺しすぎたか？
BETAは今や絶滅危惧種か！？

「そんなモノ絶滅した方が良いに決まってるでしょ？」
「ごもつともで」

「じゃあ……頼んだわよ？」
「……はい」

明日行われる作戦。名前を【桜花作戦】

タケルはもういない。純夏と霞と共に再突入リエントリースェル殻で今は打ち上げられる準備をしてる頃だろう。

「白銀も危ないけど。アンタの方が危ないのよ？」
「まあ何とかかりますよ」

「自信があるのね？」
「ん〜過信ですかね？」

「過信……?」

「信頼されているからそういう作戦になったんでしようし、可能だとも思います。データ上から見ても不可能じゃない。体調もばっちり、ご飯も美味しかったし、遺書も書いた」

「帰ってきなさいよ? 篋が泣くだけじゃ済まないわよ?」

「大丈夫ですって、死に行くんじゃない。取り戻しに行くんですから」

執務室を出ると、いつものように唯依姫が待っていた。何気ない会話を始めると共に唯依姫はいつものようにほんの少しだけ前を歩き、俺を先導する。

「最近さらに寒くなってない?」

「ええ、明日は雪が降るそうですよ?」

「マジか。そりゃ楽しみだ」

「何言ってるんですか。除雪も大変なんですよ?」

「雪合戦とかさ、雪ダルマとかさ、雪で唯依姫の雪像を作ったりや」

「もう子供なんですから……中佐?」

「ん?」

「……博士に何を言われたんです?」

「ん……明日の天気だったかな?」

「……雪だつて知らなかったじゃないですか」

唯依姫の足は止まる。

俺の足も止まる。

まるで時が止まる様に、会話も止まる。

「……記念日になるんだ」

「記念日……ですか？」

「そう。最高のお祝いしなくちゃなく人類が全てを取り戻す日だ」

「そこに中佐はいますよね？」

「多分いるんじゃないかな？」

「いますよね!？」

「……いる」

「私の隣にいてくれますよね？」

「いる」

「……うん。行きましようか。最後まで補佐しますので」

唯依姫はまた歩き出す。作戦内容はまだ知らないだろう。でも何となくは分かる。そんな感じだった。

Side out

12月31日

『先の佐渡島奪還作戦で見せた光。彼らこそが人類の光である。
同じ戦場へ立てぬ者よ、見渡してみるがいい

この死せる大地に在っても尚、逞しく花咲かせし正門の桜のごとく、
甦りつつある我等が寄る辺を、傍らに立つ戦友を見るがいい。

この危局に際して尚、その眼に激しく燃え立つ気焔を
我等を突き動かすものは何か。

全てを失ったかに思えた我等が何故再び立ちあがったのか

それは、全身全霊を捧げ絶望に立ち向かう事こそが、生ある者に課
せられた責務であり、

人類の勝利に殉じた輩への礼儀であると心得ているからに他ならな
い

大地に眠る者達の声を聞け

海に果てた者達の声を聞け

空に散った者達の声を聞け

彼らの悲願に報いる刻が来た

そして今、若者達が旅立つ

鬼籍に入った輩と、我等の悲願を一身に背負い、孤立無援の敵地に
赴こうとしているのだ

歴史が彼等に脚光を浴びせる事が無くとも

我等は刻みつけよう

名を明かす事すら許されぬ彼等の高潔を、我等の魂に刻み付けるの
だ

旅立つ若者たちよ

諸君に戦う術しか教えられなかった我等を許すな

諸君を戦場に送り出す我等の無能を許すな

願わくば、諸君の挺身が、若者を戦場に送る事無き世の礎とならん
事を』

Side マサキ

俺は敬礼してシャトルを見送った。

あれにタケル達が乗っている。アレが再び地上に降りてくるまでに掃除しておかなければならない。躓かない様に更地しておくべきだろうか。

「相変わらず良い演説だこと。さて、行ってくる。後は頼んだ」

「何言ってるんですか。帰ってきたらまた一緒に整備しましょうや」

「そうですよ。主任がいないとてんやわんやなんですから」

「行ってらっしゃい。待ってますね」

先日ホワイトファンクスは解隊された。タリサ・ステラ・イーフェイ・ラトロワ・ターシャ・イーニア・クリスカ。彼女達は自国は無くとも各国戦線に戻った。何とも呆気ないお別れだった。まあ優秀な戦力が欲しいのだろう。仕方のないことだ。

唯依姫も帝国軍に戻っていた。

巖谷中佐からの連絡で、強制的に戻らされたのだ。

国連軍からの引き抜きとは強引だが、まあ良かったと思っている。だから昨日で補佐は終わり。

でも良かった。帰る場所がないと寂しいからな。

ピーッ

『海堂中佐。準備はよろしいですか?』

「ピアティフさん。本日もお美しい、今度一緒にお茶でもどうですか?」

『ふふふ、何ですかそのキャラは? 海堂中佐には似合いませんよ?』

「ありや残念。状況は?」

『ユーラシア大陸に向け、各国、国連軍が包囲を始めました。間もなく作戦開始となります。お気をつけて』

「了解。遅れないようにしないと……サイバスター、海堂マサキ行きます!!」

精神コマンドつてのがある。使った事なかったけど、【奇跡】を見せてやって、鼓舞するのも大切なことだ。ビビってたら死ぬからな

誰かは死ぬだろう。

ただ。イケない考え方なんだろうけど……。

どうか、俺が知ってる人は死なないでくれ。

S i d e o u t

S i d e 戦場

サイバスターは加速する。それは風を超え、音を超える速さで飛ぶ。奇跡の銀色はユーラシア大陸へと姿を現した。

『あれはサイバスター！？』

『どこから来た！？ レーダーに突然現れたぞ！？』

ところが、サイバスターはハイヴを通り過ぎる。

『どこに行く気だ！？』

『待て、……止まったぞ？』

ゴウツ！！！！

一陣の風。突風。疾風。

いや熱風だ。少なくとも上陸した衛士はそう感じた。

しかし、目の前に広がり攻めよせるBETA群はその風に亡骸へとその姿を変えていく。

『これが、サイバスター……極東の噂は本当だったのか……』

風が止み、目の前に広がるのは更地。BETA群はどこにもいない。

サイバスターは転進して戻ってくる。そして、ハイヴへと入って行った。

そして、数分後、火の鳥が空へと大きく舞い上がる。

『残り19！！』

その声は強く響く。

子供の声だが、決意の籠った声だった。

それは落としたハイヴをカウントする勝利へのカウントダウンだった。

サイバスターは飛んで行ってしまった。

衛士達はその声に震えていた。

何をしているんだ俺はと、何故ここに来たんだと、何故子供が戦い、自分はみているだけなのだと。

そして、波のように、押し寄せるように、BETAはその姿を地上に現す。

反応炉が破壊された以上、死を待つばかりの最後の絞り粕だろう。放っておけば勝手に死ぬ。しかし、待ち受けるは自らを恥じる勇者達の姿。

『俺達は地球を取り返しに来たんだ!!』

オオオオオオオオオオオオオオツ!!!!!!

群衆が心に火を灯す。消える事なく、見せる事なく生きてきた心の火、それは無数の火で、小さな火だ。それは今、一つになり消えない炎となってゆく。今まで歴史上でいくつの火が消えたであろうか？ 消されて来たであろうか？ 自分も消えるのか？ 愛する者を残し、守るべき人にさよならも言えずに。ワケの分からない化け物に蹂躪されて？

『俺達は死なない!! 俺が死んでも、後ろには仲間がいる!!』

俺の命が1000人の仲間を救う!!』

それこそ、未来への咆哮だったに違いない。

……人類は負けない。

Side out

Side 戦場2

『マサキの造った兵装をくらいやがれー!!』

戦術機のイーグルやアクティブイーグルが立ち並ぶ中、2機だけ場にそぐわない戦術機がいる。

『タリサ、少し下がって！ 薙ぎ払うから!!』

『ステラか？ 避けるから撃てよ!!』

その2機は不知火式型だった。

『あら、【八岐大蛇】よ？ 避けられるの？』

『ぐ、それは無理だ……分かったよ!!』

『報告！ チヨルウォン 鉄原ハイヴ落ちました!!』

『……マサキね』

『ああ、負けてられないな……!!』

Side out

『うっ、マサキどこ?!?!』

『イーニア、落ち着いて』

『大尉、右翼が薄い。2個小隊を連れ援護してくれ』
『ラトロワ中佐は? こちらも手薄ですが?』

ピーッ

『全軍に告ぐ!ブラゴエスチェンスクハイヴにサイバスターが侵入』
『!』

『海堂中佐!? そんな、データより早い!! まだ出力が上がるの?!?!』

『酒の借りを返したい。一つぐらいは此方で落としてやりたいだろっ?』

チエルミナートルはモーターブレードで突撃級を仕留め、腰元にある高周波ブレードを抜き取る。

『……分かりました。2個小隊ついてこい!! 右翼のバックアップ
プ……いや、獲物を横取りするぞ!!』

『イーニア・クリスカ!! お前らはハイヴに突っ込め! 道は開いてやる。そこにマサキもいるぞ』

『マサキ!? 行く!!』

『イーニア! 右!! ……あ、心配いらなかったね』

右のBETA群が突然道を開いた。
それはレーザーの来る合図だ。
逆を言えば、その射線上にレーザー属種がいる。

複座型のチエルミナートルは横浜基地から貰って来た【オロチ】を
そのガラ空きの道に向け引き金を引いた。

『マサキに会うまで死なないもん！』
『会ったら死ぬの？』

『……結婚してお爺ちゃんとお婆ちゃんになるまで死なないもん！』
『！』

Side out

Side マサキ

「4つ！！」

「マサキ、ちょっとペース落とさなきゃ」
「疲労が見えるニヤ」

「早いに越したことは無いだろう？ カロリックミサイル！！」
爆炎と硝煙が立ち上る。行く先々で無数に現れるBETA。
殺しても殺しても現れる。

『見つけたー！！ って邪魔よこの化け物ー！！』
「イーフェイか？」

『不味いですよ中尉！隊と離れすぎです！！』

『すぐ戻るわよ！ マサキ！ 何を急いでいるか知らないけど死んだりしたら唯依が悲しむんだからね！？ 分かってる！？』

「分かってるよ。俺はただ。早く唯依姫に会いたいただけだ」

『そ、そう。それなら良いわ。……私も悲しむんだからね？』

「何か言ったか？」

『何でもないわよ！ 右翼バックアップに回るわ！！』

『了解！』

「回線はかニヤリクリアに聞こえてたけど？」

「聞こえニヤいふり、いけニヤいんだ」

「うっせ。アアカシツク……バスター！！」

Side out

Side タケル

これが、地球。地球は青かったとか聞いた事はあるけど、自分の目で見るのは違う。青いだけじゃない。これが俺達が守らなきゃいけない星なんだ。

ピーッ

『こちらは第3艦隊旗艦ネウストラシムイ。最終ブリーフィングを開始する。まず現在の地上の状況を伝える。ユーラシアの各戦線では、最外縁部のハイヴに対し、全軍が一斉に侵攻中だ。作戦

は現在第二段階。国連軍と米軍の軌道降下部隊がSW115周辺を制圧中。そして、ハイヴが4つ落とされている』

っ！？ ハイヴが4つも！？ ……マサキか。
本当に化け物だぜ。

この下のどこかで暴れてるんだろうな。

『 以上だ。全艦減速開始！ 再突入回廊へ進入せよ！！』

俺達が地上に降りる頃にはどこまで潰しているのだろう……。

ピーッ

『ヴァルキリー0よりA小队』

まりもちゃん。

『SW115だぞ？ 寝ぼけて落とされたハイヴに行くな？』

『『『『了解！！』』』』

『ヴァルキリー1よりB小队』

伊隅大尉。

『死力を尽くして任務にあたれ。生ある限り最善を尽くせ。決して犬死にするな。以上だ』

『『『『了解！！』』』』

こんなところで隊規かよ。伊隅大尉らしい。

<タケル。お前はBETAの親玉。あ号標的と話して来い>
<話す？ BETAと？>

<純夏と霞が話せるようにしてくれる>

<ああ、そんなこと出来るのか？>

<あゝ酷いよタケルちゃん！ 私達って凄いなだよ？ ねゝ霞ちゃんゝ>

<はい、私達はゴイスーです>

<霞、また何を吹きこまれたんだ？>

<ゴイスーです>

<ゴイスーだろ？>

何言ってるんだか……でも、マサキのおかげでこの世界も救えるかもしれないんだ

「再突入開始します」

行くしかないだろ！！

S i d e o u t

S i d e 帝都

ガチャ

「唯依ちゃん？ あら、ここにもいない。おーい唯依ちゃん？
……まさかな？ 唯依ちゃん」

S i d e o u t

全ての機体が出撃したかと思われた。

しかし、艦隊から一機の戦術機が出撃しようとしていた。

それは山吹色の戦術機。

インベリアル・ロイヤルガード
帝国ス衛軍

武御雷だった。

『お待たせしましたミス・タカムラ。発進どうぞ』

「ありがとうございます！ スウー……ハア……行きます！！」

21 未来への咆哮（後書き）

感想はやさしめをお願いします。

胃とか胸が痛くなり死んじまうだ。

何て言いうかね、辛辣な感想送って、少ししたら削除するとか止めてくれ。マジ辛い。あ、送れってわけじゃないのよ？ 気に入らないなら何も言わずに閉じてくれと……お願いします。

では……あ、もうすぐ最終回か……大体外れる作者の予想だけど。外伝含めて、恐らく……あと4話ぐらいかな？
ふぐう……パタリ

22 ハイヴ落とし(前書き)

もうちょっと、あと少し……頑張れ自分。

22 ハイヴ落とし

12月30日。

執務室に呼ばれたマサキはソファーに座り香月夕呼を待っていた。この待ち時間と言う暇な時間に遺書を書き、昨日一昨日の事を思い出す。

『じゃあなマサキ』

『中佐それだけですか？』

素っ気ない別れの挨拶にターシャはラトロワさんを見やる。

『今生の別れと言うわけでもないだろう？』

『そうですね……また一緒に仕事しましょう』

『マサキ、私ねマサキの事好きだよ？』

『ああ、ありがとう。イーニアの事俺も好きだ。元気だな？』

握手だけで済まそうとするがイーニアは抱きついてくる。

クリスカがいつ引き剥がそうかタイミングを見計らっている。

『イーニアそろそろ行かないと』

『……うん……マサキ！ 危なくなったら助けてね？』

『任せとけ』

同じ車両にイーフェイも荷物を載せる。

『アタシも行くわ。唯依に飽きたらいつでも言って』

『希望的観測だと思っぞ?』

『それでも、諦めてないからね?』

『分かったよ。じゃまたな』

チユツ

『じゃあね〜』

『ツイ! 戦場で会ったら撃ち抜くぞ!』

『……唯依姫落ち着いて』

車両を見送ると次の車両がやってくるのが見える。

『行っちまったな〜』

『私達の乗る車も来たわよ』

『タリサにステラもいなくなると寂しくなるな』

『ああ、それより良いのか? 不知火貰っちゃって』

『ただで持ってたって良いなんて……』

『どうせ、次の作戦が終わったら必要無くなる兵器だ。平和になればいらないだろ?』

『……』

そして、テストパイロットたちは全員自国付近の国で国連軍衛士として派遣されて行った。

シューーン

後ろの方のドアが開く。

「夕呼先生遅……先生？」

「……ふう……」

溜息と共に椅子に座る。額を支える様に夕呼は何かを悩んでいるように見えた。そして、沈黙は作った本人から崩した。

「……海棠。アンタ、単独でハイヴを落としたわよね？」

「はい」

「……今回もハイヴを落とさない」

「オリジナルハイヴ……カシュガルですか？」

「いいえ……それ以外よ」

それ以外のハイヴ。その数は20になる。そこに生息しているであろうBETAの数をカウントするのは難しいだろう。

「作戦はね……アンタが周りのハイヴを落とし、オリジナルハイヴに最大戦力を投入する」

「……まあ一番被害が少ない様な……でもカシュガルが一番出来あがってるハイヴでもあるし……」

そう、フェイズ6という膨大・巨大・広域のハイヴだ。このハイヴに挑んで人類は過去に二度、無力さを味わった。

「私もね、逆の方が良いと思ったのよ。でもサイバスターの機動力だとか数字でしか確認しない奴らでね……オリジナルハイヴは白銀を先頭にA-01部隊に突入してもらったわ。白銀達ももう再突入殻に行つて貰つてるから」

「どつりで待たされたわけだ。おかげで遺書書く時間にあてられましたけどね……分かりました。海堂マサキ、オリジナルハイヴ以外を落とします」

夕呼先生は苦虫を噛み潰したような表情を崩さない。

「えっと……まだ何か？」

「篁中尉にはもう伝えてあるけど……篁中尉もアンタの補佐から外れるわ」

「……え？」

「巖谷中佐から……正確にはその上の紅蓮大将や、殿下も絡んでるみたいだけど……篁中尉を帝国軍に緊急で戻したいと言ってきたわ。今日の17時を以つて、帝国軍に戻るわ」

「……良かった」

「え？」

「だって死んじゃったら会えないじゃないですか。後は俺が帰つて

くるだけで良いんでしょう？」

「海堂……」

同日、午後5時。

「……じゃあ」

「……はい」

言葉は少ない。言いたい事は沢山あるはずなのに、出てくる言葉は無い。

「篁中尉、どつぞ」

運転手は後部座席のドアを開けて待つ。

「俺は……」

乗り込もうとする唯依姫は後ろ姿のまま止まる。

「必ず帰ってくるから待ってて欲しい……」

「……どれ位待つんですか？ タリサ少尉とステラ少尉に不知火をあげた時に言っていましたね。もう戦術機は必要ないって……それって、宇宙にいるBETAはどうするんですか？」

「……どうにかするぞ」

「……待ってるだけじゃいられませんからね？」

バタンッ

1月1日。

桜花作戦展開中。

Side 唯依

どこに向かってもBETAの死骸と、予想以上に少ない戦術機の残骸。

砂煙と黒煙が立ち昇り、近くのハイヴは全て落とされている。

「早すぎる……このままじゃ間に合わない」

武御雷のブースト噴射量を大きくする。

見たところ補給地点は破壊される事なく等間隔に配置されている。

本当にBETAとの決戦の舞台なのだろうか？

補給地点の確保は命がけ、攻め込む事は無謀な特攻とも言える。BETAとの戦い。

ここまで維持……いや、維持どころではない。大いに攻勢に出てい
るのは不思議だ。

夢でも見ているのかと錯覚する中佐と出会ってからの日々。

取り返しているモノ。手に入って行くモノは多く、大きい。

だから、もし、もしも

その道を作ってくれた中佐を失うとしたら私は生きていられないだ
ろう。

S i d e o u t

S i d e イーニア・クリスカ

チエルミナートル。ソビエト連邦陸軍の第3世代仕様の戦術機だ。
複座型の管制ユニットには縦に並ぶように2人が着座して戦術機を
操縦している。周りに仲間はいない。部隊はいない。嫌われている
から孤立している？ そうではない。

彼女たちの動きに、速さについて来れないのだ。

その二人を知る者は彼女たちをこう呼ぶ【スカーレットツイン紅の姉妹】

しかし、中のパイロットは少し前から心拍数が上がり続けていた。

「ハアーハアーハアー……どこ！ マサキどこ！」
「イーニア落ち着いて」

彼女達がいるのはハイヴ内。それも半分以上進んだ辺りにいる。一機でここまで進めると言うのも異常と言える域だ。何故、単機でこんなところにいるかと言うと、ラトロワ中佐の発言によるものだった。

<イーニア・クリスカ！！ お前らはハイヴに突っ込め！ 道は開いてやる。そこにマサキもいるぞ>

彼女達がいるのはノギンスクハイヴ。
マサキがいるのはまだ南の方のハイヴだ。

数時間を経つハイヴ内で、
一機だけの戦術機のパイロットは限界間近になっていた。

「マサキ！マサキ！マサキ！」
「イーニア！……落ち着いて、ね？」

バゴツ！！

突如、横の壁が崩れる。先ほどから震源センサーに反応があったものの、イーニアが落ち着かず反応しきれなかったのだ。それでもイーニアは反応する。遅れていても関係ない。そう言わんばかりに出来た穴に向けてオロチを放つ。

しかし、震源センサーは大きくなって行く一方だ。どこから来るのか？ それを予測するのはパイロットの動物的な勘？ 運？ どちらでもない。それは経験からだ。

とりあえず後方にブースト噴射。予想通りだったのか、先ほどまでビームを放たれていた壁とは反対側の壁。そして、上。そこが崩れた。無数の戦車級が這い出て来る。

しかし、後ろにまで出てくるとは予想の範疇には無かった。

何とか反応するものの、モーターブレードは動かなくなってしまふ。チェーンにベータの死骸の堅い部位が入ってしまったのだろう。そうなると、BETAに突き付けられているのはただの腕だ。一匹、また一匹と腕に、足に、体に、頭部にまわりついてくる。

「あつ……………!!」

「つ!!」

赤い化け物に取り付かれるチェルミナートル。
鈍い衝撃音だけが管制ユニットに響く。

「あああ……………やだ……………やだ！ マサキ！ 死にたくない！！ マサキ！！」
「……………つ。……………ここまでか……………もう少し……………もう少しだけ生きたかったな」

ゴウツ……………!!

風が吹く。

風？ ハイヴ内で？ いや、確かに風が無いわけではない。

しかし、これほどの突風を感じることは無い。

その正体は、チエルミナートルの前にあった。

「マサキ!? マサキ!!! マサキ!!!」

『ああ分かってるよ。いつけえ!!! サイフラーッシュ!!!』

「マサキ……いつの間に……?」

『ついさっきこのハイヴの反応炉も落とした。動けるか?』

「……動けるよ!」

『そろそろ空の上からプレゼントも届くだろう。もう少しだからな』

S i d e o u t

531

S i d e タケル

リエントリーシエルが開く。それに伴い地上が肉眼で見える。

背面のブーストを利かせてバランスを整えると共に素早く地上に降りる。

降りるが止まらない。止まればレーザー属種に撃ち落とされてしまうからだ。

しかし、ブリーフィングで話されていた危険性が、一つも起きなかった。レーザー属種による撃墜だ。殻から出る前に撃ち落とされては、本当に棺桶になってしまう。その危険性が起こらなかつたのは……。

ピーッ

『こちらA-00。全員無事だな？ 御覧の通り、レーザー属種がいない……仕事がいやなくなっているぞ喜べ』

ドンッ！！！

火の鳥が地上から撃ち上げられた。

「マサキ……神宮寺大尉、伊隅大尉。お願いします！！」

『そうだな。このままではオリジナルハイヴまで喰われてしまうな』

『天照を中心にサークルワンの陣形でブースト！ 遅れるなよ？』

『『『『『『了解！！』』』』』』

そして、俺達はカシユガルに侵入して行った。

少し日は遡り、
12月28日。

「タケル！」

「ああ、マサキか」

漆黒の戦術機、天照の前で整備服のマサキと久しぶりに会話をしていた。

「これ、教えておく……必要な時だけ使ってくれ」

「必要な時？ リミッター解除のパスコード？ 天照のか？」

「前に言ってただろ？ もう少し出力上がらないかって」

「ああ、言ったけど……あ、おい！ 行っちゃった……」

「よう！ 武御雷に乗る気になったか？ 悠陽がく乗ってくれない
>って嘆いてたぞ」

「海堂中佐……ですが……」

すでに冥夜と話しているマサキは、忙しそうに歩き回り、衛士を見つけては話し掛けている。マサキと話した結果、冥夜は横浜基地にずっと置いてあった武御雷に乗るようだ。

「主任！ この設定なんですけど……！」

「あいよ〜！ あ、そっちは後で見に行くからな〜」

マサキがいるだけで空気が違って行く。

人類の命運をかけた戦争をしているとは忘れてしまいそうになる。

「リミッターか……」

『白銀、何か問題があるのか？』

「あ、いえ、大丈夫です。失礼しました」

『そうか、しっかりしろよ？ 海堂中佐の造ったその機体に全てが掛ってると言っても過言ではないんだからな』

「はい」

このコードを入力すれば全開放される。

俺はそのコードと入力画面を見比べ続けていた。

『全機、止まれ。A小隊は周囲警戒策敵怠るな』

『『『『『了解』』』』』』

『鎧衣、築地はS - 111の用意をしろ』

『『『了解』』』』

ここに来るまでに広間で3個のS - 111を使った。まだ全然進んでないじゃないか……足りるのか？

「純夏さんは大丈夫だと言っています」

「そうか……負担掛けちまってるな……」

慎重な行軍は何時間もかかっていた。

これがオリジナルハイヴ……ヴォールク・データも目じゃない。フェイス6というハイヴがこれほどとは思わなかった。データで見ると潜るのでは全然違う。

ピーッ

『ヴァルキリーマムより各機。オリジナルハイヴ以外のハイヴの反応炉、残り3つとなっています。現在落ちたハイヴの17個の内、13個が海堂中佐によって落とされたそうです』

「す、すげえ……」

『モタモタしているとココまで喰われるぞ、恥を曝したいのか？ 急げ』

『了解』

Side out

Side ????

ふう……地上が終わったら宇宙にねえ……。

もう今のサイバスターに上位種は対応できてしまっ……死ぬわねア
イツ。

最初は死ぬ気満々だったけど……今じゃ大切な人もいるみたいだし。
死なせられないじゃない……でも、アレやると、私がヤバいのよね
。

でもBETAとか言う奴等が相手だし……許してくれるかしらね？

まあやるだけやってみましようか。

S i d e o u t

22 ハイヴ落とし（後書き）

感想は随時受付中。

フリスタでございます。

次回で……ゲーム原作風景は終わりかな？

次回で終わるかな……？

あと番外編じみたEfsストーリーで終わりかなと思います。

23 あなたの瞳が映し出す未来。ふたりの想いがつくりだす世界。あなたの

『転生？ どうでもいいよ、すぐ死ぬような世界に行くか』

最初はそう考えてた男は、いつしか戦術機弄りの楽しみを覚え、

いつしか守るべきものを手に入れていた。

そして、男は明日の為に最後の戦いに飛んだ。

【MUV - LUV ALTERNATIVE 救世主になれる男】

最終話 始まります。

23 あなたの瞳が映し出す未来。ふたりの想いがつくりだす世界。あなたの

これは愛と勇気のおとぎ話である。

『反応炉消滅を確認！ 残りはオリジナルハイヴのみとなりました』

「ハアーハアーハアーツ！」

「マサキ、休まニヤきゃ」

「そうだけ？ オイラ達だって疲れるニヤ」

「まだまだ……終わらせるんだ」

「唯依さんに言ってからでも遅くニヤいんじゃ……」

「万全の状態で行けば良いんじゃニヤいか？」

「今日で終わらせるんだ！

またコイツ等がいつ宇宙から降ってくるか分からないんだ！」

銀色の機体は永久機関で稼働し、武器弾薬も、倒したBETAの数によって自動で回復して行く。

しかし、パイロットはそうも行かない。日を跨ぎ乗り続ける上に、オリジナルハイヴ以外の8割沈めた男、海堂マサキはそれでも空に向けて飛んだ。

『中佐！！ 待って中佐！！』

「唯依さんだ。……良いのかニヤ？」

「ニヤいてるみたいだニヤ？」

「……帰ったら謝る」

Side タケル

これはいくつ目の広間だろうか。

その場所に辿り着くたびに大中小のBETAが無数に存在する。BETAの大津波を見る。突撃級の反転などが遅れ、小回りの利く戦車級などが上に乗り上げ積み重なり山が築き上げられて行くようなものだった。門級がその戸を開けばまた溢れる様に暴れ出てくる化物たち。

ズガシャンッ！！

『築地！！』

『だ、大丈夫です……！！』

無理だ。これ以上進めば誰かは死ぬ。このままでは誰もかもが死ぬ。
これ以上先へ進むのは、俺の役目だ。

誰も死なずにここまで来れた。ここまで来れば。

『来るな！ 来るな！！ 来ないでよーっ！！』

『彩峰！ チェックシックス！！ 何をやってるの！？ 周りを良

く……！！』

『後ろはアンタに任せてある！！ だから……安心！！』

『鎧衣！ そなたは第2隔壁爆破作業にかかれ！ ここは私が引き
受ける！！』

『S-11はもう設置したよ、終わってる！！』

『そっだ落ち着いて対処しろ白銀の機体が再起動を終えるまでカバ
ーするんだ』

『宗像！ 左翼！』

『了解！』

『涼宮ついてきなさい！ 突撃前衛の仕事するわよ！』

『はい！！』

俺は、マサキから貰っていたパスコードを入力していた。

【Alternative
オルタネイティヴ】

このコードが、サイバスターを意味しているのか、この機体の名前を意味しているのかは分からない。そして、再起動が終わる。

モニターされていた推進剤やエネルギー容量が目に見えて2倍以上になっていた。

『し、白銀……その機体は……』

各部のパーツの外層が外れたわけでもないのだが、色が変わった。殻を破る雛鳥の様に。

さなぎから蝶になり羽ばたく様に。

日の光が東から出ように。

その機体は

『綺麗……』

白銀の戦術機。暗いハイヴ内であっても輝く粒子を放ち、自らが輝き、全てを照らし続ける。

『サイバスターの銀色みたい』

そう、この機体の名は【天照^{アマテラス}】

この世界で最高の天才整備兵が作った戦術機だ。

『……っ！！ 不味い！！ 白銀の機体にBETAが反応しているぞー！！』

そして、この機体の特性。ムアコックレヒテ機関が000ユニット、純夏によって発動している。BETAからすれば極上の輝きに映るソレに押し寄せてくる。

「システム、オールグリーンです。タケルさん」

「ああ、……こちら【天照】白銀武。各機作戦通り脱出してください」

『白銀大丈夫なのか？』

俺は背に装備されている砲身を左右の腰元に回し構える。

「くらえ！ マサキ特製の拡散ビーム砲だ！！」

オロチよりも少し威力が劣るそのビームは拡散しBETAの波を消して行く。

「御覧の通りです。……横浜基地で会いましょう！」

『ふっ、分かった。全機撤退！ 誰も死ぬなよ？ 死んだら海堂中』

佐が悲しむぞ』

『『『『『了解！』』』』』

<海堂がね。アンタの事こう言ってたわ>

<え？>

<世界最高の衛士だって、アイツ以外に世界を救える奴はいないって>

< そんな……マサキにはサイバスターが…… >

< 言っても聞かなかったわ。自分よりアンタの方が優れているって妄信してるんですもの……この世界に救世主っていうのがいるなんて考えた事も無いけど、アイツは救世主になれる男だった。その男がアンタの事を自分の事みたいに楽しそうに嬉しそうに評価してたわ >

< ……マサキが >

< だから白銀。アンタはアイツの期待に答えなさい。A - 01部隊の連中は誰も死なせずに、カシユガルを落としなさい >

< 俺が…… >

< 大丈夫大丈夫！ 心配しないで、タケルちゃんっ！ タケルちゃんは今私が守るから！ >

< 私も守ります。マサキさんが言ってました。私と純夏さんは…… >

< < ゴイスーだから（ですから） > >

純夏と霞はピースサインをしてアピールしてくる。

< ……分かった。白銀武。天照に搭乗し、【あ号標的】を倒します >

辿り着いた広間に卵の様な物体が鎮座している。モニターを拡大表示させ映ったのはあ号標的だった。そして、繰り返される押し問答。

何故、人類を襲うのか？ 殺すのか？

資源回収時に発生する災害だとぬかしやがった。

命だとも思っていないし。殺しているとも感じていないようだ。

そして、宇宙にはコイツと同じような上位存在と言うモノがいるのだと言う。

触手が伸びてくる。俺はそれを撃ち落とす、切り落として行く。

マサキに報告するほどでもない情報かもしれないが、データをバツクアップした。

『肯定。この惑星に干渉し続ける』

「ふざけんな！！ お前らがこの地球を……！！」

俺は腰元に装備してあった砲身を取り外し繋ぎ合わせ、一つの砲身にして、その銃口をあ号標的に向けて放出した。これで、終わりだ。

「消えるーっ！！」

Side out

Side 唯依

『反応炉消滅を確認！ 残りはオリジナルハイヴのみとなりました』

OPEN回線で近況報告が入る。作戦通りならば、中佐の任務はこ

れで終わり。

でも中佐の言っていた事。

<……………どうにかするさ>

行かせたら帰って来ない……………。今帰って来ないなら中佐は……………。

私は悪戯で改造されていた武御雷の背面バックパックのブースターを始動させた。

想像以上のGがかかる。

でもそんな事は気にしている余裕はない。

あの人、私の全てが行ってしまう。

行かないで……………！

「中佐！！ 待って中佐！！」

やっと見つけたと思ったなら超高速で空をかける銀色の光。間に合わなかった。

先ほどの通信を聞く限り、ハイヴは全て落ちた。

しかし、一息もつけなかった。

何かが引っ掛かっていたのだ。

どこかに行ってしまうのではないかと……………

海堂マサキは帰って来ないのではないかと。

「……………ないで……………行かないで」

あの日、人類が見た希望の光は、私の眼には遠ざかって行くように見えた。

S i d e o u t

S i d e マサキ

タケルの天照から送られて来たデータを確認し、宇宙にいるBETAの数を想像する。

月と火星以外にもいるってことだ。だけど、地球を襲ってくるBETAは恐らく月と火星ぐらいだろう。いたとしてもその近くの惑星。しかし……記憶していた数とはかなり開きがある。確か10の37乗とかアホなくらい存在してなかったか？

最大戦速で月に到着するが、BETAがいない。

「シロ、クロ」

「どこにも反応がニヤいよ」

「逃げたんじゃニヤいか？」

BETAに逃げる様な知力はない気がするが。

そして、火星で極端な差を見ることになった。

BETAしか見えない。地表全部BETAだ。地面が見えない。更にBETA自体も何層もあるかのように積み重なっているようだ。

『海堂マサキ……横浜基地……人類……サイバスター……危険』

「何だ!？」

「アレだニヤ!! 岩山かと思つたニヤ!」

「バカでかいやつニヤ!!」

そこにいたのは上位存在。

地球での事がもう情報として手に入れていたと言う事か。リーディングも出来ない俺達に話し掛けてきやがる。そのデカさ故にハイヴ内にすら収まらず、モニュメントすらも凌駕し火星自体が上位存在に思えてくる。

「お前を殺したら次の上位存在が出てくるのか？」

『否定。他の上位存在は消えた。残りはこの惑星の存在のみ』

それを聞いた俺は即座にコスモノヴァを放った。信じ難いことではあるが、この惑星で終わりと云うのが本当ならばもう人類はBETAという化け物に脅えずにやっていける。

直撃した上位存在はその身を大幅に削り取られ、苦しむかのように揺れ動く。しかし、削り取られたはずのその身体は元に戻って行く。

「……おかしいニヤ」

「ああ……再生してやがる」

「っ! BETA個体数が減少しているニヤ!」

「BETAを……喰つてるのか？」

『海堂マサキ。個体を消すことで無限に起こる災害。個体を消されぬように自然消滅するのを待つのが得策』

人を自然災害呼ばわりかよ……。

「シロ、クロ!!」

「行ってくるニャ!」

「猫使い荒いんだから……」

ハイファミリアが飛んで行く。周辺のBETAを消し、その間に吹き飛ばし続けられ再生も出来ないだろうと思った。しかし……。

「避けられてる!? ……対応したのかよ……ハイファミリアの速さに。」

それなら……これはどうだ!! サイフレーション!!」

瞬間。レーザー属種が前衛に俺を囲むように並び、そしてレーザー照射をバリアの様に展開していく。見事に防ぎ切るBETA達。

これにも対応したかよ……。

「マサキ!!」

「不味いニャ……」

「なら、あのデカブツを倒すしかねーな……回復なしで、今あるエネルギーだけで……!! アアカシツクバスター!!」

『危険。海堂マサキ。消費するのを待つ以外の対応不可。計測……。海堂マサキの停止が先になる。……続行』

BETAの親玉である上位存在はその醜い身体を吹っ飛ばされては、地上のBETAを喰らう。そして、すぐさま再生。【奇跡】をかけたコスモノヴァでも80%強を吹っ飛ばすぐらいしか出来ない。

Side out

【地球】

勝利に酔いしれる人類。

泣き崩れている者。

笑いあう者。

立ち尽くす者。

そして、救世主に祀りあげられる男は、世界を照らす輝きを放つ戦術機から降りてくる。

その頃、横浜基地の香月夕呼の執務室には2人の女性がいた。一人は部屋の住人香月夕呼だ。もう一人は強化装備のままにいる篁唯依だった。

「……これ、宇宙の船から中継してるデータ何だけどね。凄い勢いでBETAが減ってるわ。1分間に最低でも100体以上。多い時は1000体以上」

「中佐……どうにかして帰って来させられないんですか!? そう！ 迎えに行くとか！ 迷子になっちゃいますから私が行かないと……!!」

「落ち着きなさい！ 私もびっくりしたわよ……ハイヴを落とし終わったと思ったら空に飛ぶんですもの……まさか火星にいるなんて

……いつの間に月のBETAを消したかは分からないけど……あの
バカ。未来永劫地球を平和にする気ね」

「そんなの……いいんです。生きて帰ってくれば良いです。あんなに強いんだから、また来たらまた倒せばいいじゃないですか……
どうして……どうして……」

簗に寄り添うように、夕呼は空になっているコーヒーカップを握りしめていた。

Side マサキ

宇宙に上がってここまで来るのに何日かかった？

火星に来て何時間戦ってる？

コスモノヴァ・カロリックミサイル・ハイファミアは空になった。

アカシツクバスター・サイフラッシュは

エネルギー切れを起こしているためもう撃てない。

残っているのはディスクッターのみ、

地上に降り高速機動で戦車級から要塞級までを斬り伏せるが、
数が多く囲まれてしまったため、多くを切る事が出来ない。

少し溜まったエネルギーでアカシツクバスターを上位存在に放つが、

再生は止まらない。再生にはBETAを喰らうため底はあるのだから……

「くそっ何てデカさだよ……！ くっ！！ また掠ったか……集中しろ……！」

レーザー属種の攻撃が徐々に触れるようになってくる。

こちらが先に底を尽きそうだが、それでも……

「全て殺してやる……！」

「ボロボロのくせに、面白そうな事考えてるわね」

「フレイヤ……久しぶりだな。でも悪いな今は……」

「BETAを滅ぼすんでしょ？ まあ聞きなさいよ。あいつ等、上位存在の件だけだね。目の前のアレ以外は消し去ったわ……あ、私の上司がね」

「は？」

「残りはこの火星だけ、まあ正確に言うと、この火星に押し込んだり、融合させたり、あぶれたのだけ削除したみたいね。だからBETA自体も凄く強くなって対応できるようになってる。だから……あなたは勝てない」

「それでも……俺は勝って」

「あのお姫様と幸せになる？ この世界に来る前のアンタと大違い

に成長したわね〜お姉さん嬉しいわ〜。そこで、御褒美あげようと思つのよ」

「何だよ？」

「このサイバスターね。よく出来たレプリカなの。ほとんど本物のね」

「……………どういう事だ？」

「精霊憑依が出来ないのよ。契約する精霊がないから。それ以外は本物。でもソレが出来ないから本物未満」

ポゼッション無しで今までの性能だったのか！？

「それで？ マサキ、かなり疲れてるしプラーナも限界。武器弾薬も限界。一気に回復しようにもBETAに広範囲攻撃が当たらない。うん、あなたが勝てる確率は万に一つも無いわね。それでもアレを倒すつて言つつの？」

「確かにそうかもしれないねえ……………けど、それじゃあ人類は本当の平和を手に入れられないんだ……………！ いつかまたコイツ等は地球に降つてくる」

「すぐには降つて来ないでしょ？ アンタは唯依とか言う恋人と仲良く幸せに暮らしてればいいんじゃない？ アンタが寿命で死ぬまでは面倒見てあげるけど？」

「それじゃあ俺が納得出来ねえんだよ！！」

「どうしても戦うのね？ アレを倒せるなら、BETAをこの世界から消し尽くせるとしたら命も賭けられる？ 大事な人にはもう会えなくなるわよ？」

「……唯依姫には悪いけど、BETAは1匹も生かしちゃおけない！！ 俺が……最初から無理矢理にでもサイバスターでBETAを地球から消し去ってあげれば……XM3の評価演習の時も佐渡島でも死ななくて良い命があったんだ！ 俺はもう後悔したくない……もし、次に襲われた時に死ぬのは俺の大事な人かもしれないんだ！！」

俺はこの世界に来る前の自分が死んだ時の事をいつも考えていた。トラックと電柱に挟まれ、原形を留めているのは首から下だけの姿。ほとんどこの世界で死体を見た事がないけど、BETAに襲われて死んだ人間は、もっと無残な姿だろう。そんな愛する人の姿を見たくない。

「……アンタ……自分が死んだ時の事まだ……背負いすぎよ」

「それでも……だから……！ 俺は全身全霊をかけて！ BETAを倒す！！」

「待ちなさい。言ったでしょ？ 御褒美あげるわよ。あなたをサイバスターの操者と認める。あなたに力を……【精霊憑依ホスピション！！】」

フレイヤ自身は光の泡沫となり消える。

しかし、その光は消えずにコクピット内を、サイバスター自身を輝かせている。

全ての機能が正常値。エネルギー武器弾薬が全て回復した。

『危険増大。海堂マサキ。記録よりも数値が大幅に増大』

【奇跡】をかける。

「まとめて片付けてやるぜえ！ 行つけええ！ サイフレーザーシュー
！！」

崩れて行くBATA群。レーザー属種のバリアも紙切れの様に吹っ
飛ばす熱風。

火星の裏側まで飛び、敵を吹き飛ばし続ける。

【奇跡】を起こす。

「おらおらおらおら！！」

これが！ 秘剣、ディスクッター乱舞の太刀！！」

上位存在の周りを斬り崩す疾風。

ハイヴ内にも侵入しBETAという存在を否定する。

【奇跡】が起きる。

「アカシック・バスターツ！！」

最後の戦いの時。駆け抜けるはサイバスター。

ディスクッターを火の鳥に変え、火の鳥を纏い撃ち貫く。

真っ直ぐ飛ぶだけで地上のBETAを焼き尽くして行く炎。

上位存在には掠る程度。それだけでも20%が崩れている。

すぐさま再生をして行くが……。

「もう喰えないだろう?。」

喰えるBETAはもういない。

【奇跡】が終わる。

「こいつでとどめだ……!!」
「コスモ・ノヴァ!!」

S i d e
o u t

そつ、こねは寝と野良のまじり話である。

カタカタカタ……
パサッ

資料が床に落ちる。

白衣の女性は落ちた資料は無視するが、上にあつた資料が落ちた事によって姿を現した過去の資料が目についた。

「火星が無くなって、もう3年経つのね……」

香月夕呼はコーヒーを啜りながら資料の写真を眺める。

白銀武が救世主になって帰って来たあの日。鑑純夏は安らかに眠りについた。

そして、社震はこう報告する。

白銀武を因果導体にしていたのは鑑純夏だと。

縛るモノが無くなった時、白銀はこの世界から去った。

規格外の戦術機。天照はサイバスターと同様に封印指定になった。

あの機体に核エンジンが使われていた事を知るのは製作者と香月夕呼と煌武院悠陽ぐらいだろう。S-11もエネルギーに転用されたりしていたし、BETAも骨格として使用された機体は地下深くに封印されている。

シューーン

「失礼します。ども」

「あら、まだいたの？」

「最後の書類の提出に来ましてね」

「あらそう、そこに置いといて」

「はいはい。ありゃ、桜花作戦の時の……懐かしい」

「BETAを滅ぼして帰ってくるとはね……今考えてみても意味不明だわ。他のBETAはブラックホールに飲みこまれたって……実際は神様の仕業ですって……何の宗教よ……。それに火星を塵一つ残さずに消滅させるなんてね。ああ思い出すだけで頭痛くなるわ」

「……」

「何よ？」

「いや、何か、初めてあった頃もそんな感じで頭抱えてたな〜って思ってた……」

「誰のせいよ……全く。あら？ まだ帰らなくて大丈夫なの？ 待ってるんじゃない？」

「5時まで仕事はありますから。それに今日は椿姫も唯依と出てるから大丈夫っす」

「何歳になったの？ あ、2歳か」

「ええ、また連れてきますよ。あ、もう無理か」

「見学って事で良いわよ。元気過ぎて書類を紙飛行機にしてくれると気が晴れるわ。いつでも連れてきなさい」

3年前、火星は最後のコスモノヴァで消滅した。
BETAも一匹残らず消えていた。星が消えてどれほどの被害があるのか一時期騒がれたが、いくら経つても何も起こらない。何かが起こる兆しも無い。専門家は『不可解』としかコメントできずに研究を続けている。

先の大戦の世間一般には知られざる真の救世主は、最後の書類にハンコを押した。

「これでお終い……」

「お疲れさまでした……篁中佐」

そこには伸びびつと腕を高く伸ばす青年がいた。

長かった髪はバツサリと切られ、小さかった身長は伸びに伸びて170センチちょっと、20歳を超えて一気に来た成長期と共に篁マサキは軍を抜けることにした。成長したのには理由もあるが。

「ピアティフさん。俺はもう中佐じゃないよ。ほら、もう5時だ。これで、晴れて軍人生活とはおさらばだ。定時で帰れるとは夢の様だ」

「ふふふ、いつも机に突っ伏して寝てたじゃないですか。あ、手紙忘れずに持って行って下さいね？ イーニアちゃんのが凄い量ですけど……」

「ははは、相変わらずだな……へへ明日来るんだ……明日!？」

ガチャ

「ただいま。ふいふ、あれ？ 唯依？ 出かけてるのか……」

ガチャ

「わつとと、帰ってたんですか。これから夕飯作りますからね？」

「おあえり〜!」

「あ、うん。ただいま。今日は何かなあ？」

「たまお焼き〜」

「玉子焼きか」

篁マサキは旧姓『海堂』だ。

先の大戦後、篁家に婿入りし、篁を名乗る事になった。

篁唯依は1年前に軍属から退いた。

今では立派な専業主婦だ。

「ああ！ 焦げて……！ あ、ご飯炊いてない！」

……そう、立派な専業主婦だ。

マサキは無言で手伝いに入る。

「きよ、今日はですね！」

京塚さんから新しい味付け方法を教えてもらいました！」

「それは楽しみだ」

マサキは笑顔で、少し焦げた合成玉子焼きを皿に盛り付けている。

「あれから3年が経つんですね……」

「うん……そこまで経ってないけど。長い夢を見てるみたいだ」

「あ〜い……！」

「にやにやにや！」

「椿姫ちゃん疲れニヤいわね〜……こっちはもうへとへと……」

元気良く走り回っているのは元気な女の子。

当人たちは気付いていないかもしれないが【元】フレイヤだ。

サイバスターの精霊憑依をした結果。契約という形でマサキと一緒にいるようになってしまった。何でも精霊憑依を許可無しでやった罰として神様をクビになり、記憶を消されて人間として人生を歩む様だ。

それに伴い、マサキの呪いとも言えるような男の娘の姿も維持できなくなり、急激に成長した。本人は全く気付いていないが……。

「そう言えば、サイバスターに女の人を乗せて帰って来た時は驚きましたね……」

少し過去を振り返る様に唯依はオタマで味噌汁の味見をする。

「あの時は俺も殺されるかと思ったよ……くいつから乗せてたんですか!？>つて鬼の形相で……ははは、その後すぐに緊張の糸が切れて二人して泣いたっけ」

そう、その時点でフレイヤは姿を消していた。その時に消されたのかもしれない。去年、唯依とマサキの間に子供が産まれた。それがこの子。第二の人生を歩むことになった【元】フレイヤ。現在の名前を……。

「あーよく見たら泥だらけだね」

「あい!」

「転んだかな? 泣かなかったか?」

「あい!」

「先にお風呂入るうな【椿姫】」

「あい！」

見事なまでに椿の花を思わせた赤い髪の色。姫は唯依姫と呼ばなくなったから入れた。そういう安直なネーミングセンスだった。

マサキが真っ白な髪。唯依が真っ黒な髪。そこから赤い髪の子が産まれるか？ と思うところもあるが、この子は産まれた。

「アナタ……お勤め御苦労さまでした」

「あ、うん。ありがとうございます」

今日付けでマサキも軍から足を洗った。
頭を下げ合って、軽く笑う二人。
その傍らで眠る娘。

これからは不要になった戦術機を再利用してモノ造りをしたり、農業をしたりと幅広くやる会社をやるようだ。

「え、おはようございます。」

本日からこの会社の社長になりました篁マサキです」

パチパチパチパチパチッ！！

目の前に並ぶのは懐かしい顔ぶれ。

と言うか、目の前の人達から手紙を数日前に受け取ったばかりだ。

「迷子になるから社長室から出るなよ？」

「はい、タリサ減給」

「私は何をすればいいの!？」

「私は社長秘書よね!？」

「じゃあ私は社長の美人秘書!！」

「あ、それズルイ!！」

「私は愛人でもやろうかしら?」

「真面目に働けーっ!！」

「主任ッ！俺達も雇って下さーい!！」

「会長ッ!！」

「店長ッ!！」

「ここでは社長と呼べ!！」

空は快晴。

「んっ！生きてて良かったっ！！」

まだまだ戦いの傷跡は残っているし、

復興作業に苦勞が絶えない世界だが、

焦る必要はない。

時間はゆっくり流れて行く。

「ぽっぽっおんっっー！」

「お弁当だよ椿姫。ああ、走らないで」

「どくどく？ 私達の娘だぞ〜カワイイだろ〜」

「目はイーニアに似てるよね!？」

「じゃあ口元は私ね」

「あ、ほら！ 立ち振る舞いとか私そっくりよね?」

「誰がお前らの娘だ！ マサキと私の娘だー!!」

「あらあら、では第二子は私に任せて下さい」

デレーンッ!!

「で、殿下だー！ 殿下が出たぞー!!」

「そんな呂布じゃあるまいし……わあ!! 殿下だー!!」
「社長を差し出せー!!」

「おわっ！ 止めるお前ら!! 俺は生贄じゃねー!!」

「ふふふ、真那さん」

「はっ！ 海棠……いや、篁マサキ……今度は外さんぞ……!!」

「いやああああ！！ また鎖に手錠！！？ そして首輪付き！！？」

人類は再び生きて行く。

この地球^{ほし}で。

愛と勇気を心に。

f i n .

23 あなたの瞳が映し出す未来。ふたりの想いがつくりだす世界。あなたの

感想は随時受付中ですな。

精霊憑依について。

気付いてた人いてはるかわかりませんが、設定で書いてなかったよ。と言う訳で精霊憑依させてませんでした！

さらばフレイヤさん。娘として頑張れ。

記憶も無いけどw 今度はタバコ吸わずに育ってくれw

とりあえず、ここまで皆様、お疲れさまでした〜！！

ではまた機会があればお会いしましょう。

p v 150万ヒットでした。

本当に沢山の読了ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8910n/>

【完結】MUV-LUV ALTERNATIVE 救世主になれる男

2011年5月23日19時49分発行